

“要塞空母デスピ
ナ”スターティン
グオペレーション！

SAIFA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲームが好きで、二次元の女の子が好きで、カツコイイのも無双も大好きな、どこにでもいそうな現代に生きる男子高校生「山本裕一」。

彼はある朝、何の因果か「神の使い（自称）」の猫を助けた結果、異世界に転生する。そこは喜ばしい事に、彼の”嫁”が存在する「艦隊これくしょん」の世界。

しかもよりによって、彼は艦装を操る”艦娘”ならぬ「艦息」として転生。

艦種は”要塞空母”。名前は”デスピナ”。

裕一がよく遊んでいたアクションシューティングゲーム、「地球防衛軍4. 1」に登場した、EDF海軍の海上移動要塞である。彼はそれに生まれ変わった。

大きな身体に巨大な艦装を身に纏った彼は、嫁艦と運命の出会いを果たすため、艦娘たちの笑顔を守るため、世界の未来を救うため、そしてもう一人の”彼”のために……。その強力な艦装で無双し、深海棲艦との戦いに身を投じていく。

——以下いくつか注意点——

※本作品は、まはまは様の艦これ二次小説「要塞空母デスピナ出撃す。」のリメイク作品、つまり艦これ三次創作です。

8月15日より、本家「要塞空母デスピナ出撃す。」が第2篇を迎えましたが、今のところ、当作品は本家様の展開なされている第2篇部分のリメイクは考えておりません。また、本家作品第1篇とは、展開をある程度変更、または拡張する事になると思います。本作品の元となった「要塞空母デスピナ出撃す。」も、是非ご鼻唄くださいませ。また本作品は本家様第1篇の書き方にのっとり、台本形式に近い文章構成となっております。

※時折、誤字修正等により編集が入ります。

誤字脱字等ありましたら、指摘して頂けると助かります。

※当作品は、S A I F Aの趣味によりEDFシリーズを始めとしたネタで物語を展開

していく事があると思います。

作中に登場する兵器や実際の軍事行動等は、現実のものを調べた上で、物語性を優先しあえて崩した描写をします。

目次

第零章：転生

第1話：憧れのシチユエーション

1

第一章：新しい人生《ふなで》

第2話：転生空母―デスピナ―

14

第3話：異世界の冒険はいつだって戦

闘から（偏見）

29

第4話：モノがデカいと説明も長い

44

第5話：〜太平洋横断記〜「蛇の足」

編

62

第二章：遭遇、そして邂逅

第6話：〜太平洋横断記〜「遭遇」編

83

第7話：発進！デスピナ航空隊（前

編）

102

第8話：発進！デスピナ航空隊（中

編）

125

第9話：発進！デスピナ航空隊（後

編）

156

第10話：墳式の救済者

182

第11話：邂逅【艦娘視点】

204

第12話：邂逅【デスピナ視点】

229

第二・五章：めぎせヨコスカ

第13話：自己紹介

269

命の取り留め

346

第三章：横須賀鎮守府

第14話：ホウ・レン・ソウは大事。

第16・5話 夢の中、久しぶりの再開

282

361

余談：14話時点での設定等

【用語集】”デスピナ艦装” 関連

第17話：まともな寢床とちゃんとした食事、そして給仕さん。

298

368

【用語集】”デスピナ航空隊” 関連

310

第二・五章：(引き続き)めぎせヨコスカ

第15話：航空参謀(クウ)と愉快な仲間たち

間たち【艦娘視点】

326

第16話：早起きは三文の得、早寝は一

第零章：転生

第1話：憧れのシチュエーション

「行つてきますー！」

6月下旬のある朝。

スズメが鳴いている曇り空の中、いつも通りに俺は自宅を飛び出し、最寄り駅に走る。指定制服のブレザーのボタンも締めず、ネクタイをぶらつかせながら通学路を駆けていく俺は山本裕一。

裕一「何で毎度毎度、夜更かししちゃうかなあ……」

走りながらぼやく。

高校3年生で、大学受験を控えた俺の生活といたら、相変わらずだろがないと自分でも思う。

昨夜は艦これを少し遊んで、さらに夜遅くまで地球防衛軍^E4^D・1をプレイしていたため非常に眠い。

ちなみに、艦これにおける嫁艦は翔鶴で、EDF4^F・1でよく使う兵科はエアレイダーである。

裕一（空爆万歳だ！ 学校も空爆で消し飛んだらいいのに……）

学校や仕事に行きたくないEDF隊員なら誰だって思うよね。

裕一（「150 m m砲、ファイヤ！」でズガン!! ……やめよう、虚しくなるだけだ）
普通の受験生なら、1日の活動時間の内に勉強時間を長めに取って趣味や娯楽は控え
ると言うのに、俺は勉強を頑張った分趣味の時間も多く欲しいと言うワガママな性格ゆ
え、つい睡眠時間を削ってしまう事が多い。

家での宿題や勉強は頑張っているから内申点に影響は無いが、授業中の居眠りは偶に
やらかすので、1学期の成績通知表は授業態度の項目に悪い点を付けられていないか少
し不安である。

裕一（うう…：EDFならまだしも、艦これのほうはそろそろ夏イベに備えて色々やら
なきゃだからなあ……）

艦これに限らず、ソーシャルゲームか何かのイベント開催時間が授業中だったり、数
量限定のグッズの発売開始日が平日だったり、何かと学校や会社と言うのは現在人達
に厳しい気がする。

裕一「ん……？」

あの猫、何故車道で欠伸垂らして呑気に日向ぼっこしてるのよ。間違っても”ひゆう
がぼっこ”じゃねーよってか——

ブオオーン!

急いでいるのだろうか。ごく一般的なワンボックスカーが猫のいる車線を結構なスピードで走っていた。

上手い事レッド——タイヤとタイヤの距離——の間をすり抜けてくれないかと猫と乗用車のタイヤの位置関係を予想するが…。

裕一(ダメだ、直撃コースだこれは)

やばいこのままじゃ朝からゲロ必至のゲロ映像を見る事になる。それは出来れば避けたい。

そもそも猫は生きている状態だからこそテレビ局がしよっちゅう放送するくらいに心が癒されるのであって車に轢かれる映像とか誰得だよってかホントやばいやばいやばい!

このままじゃ「猫の日向ぼっこ↓猫フルボッコ」になっちまう!

大声を出して驚かして逃がす方法も一瞬考えたが、ただでさえ警戒心の強いと言われるあの猫様が、朝っぱらから道路の真ん中で雑魚寝である。

よほどの事がない限り動くことはまずないだろう。

もつともその「よっぼど」が、おそらく猫の反応速度を上回る形で迫ってきているのだが。

裕一（全国のネコ好きのため、ここは山本裕一が命を賭けて体を張ろうではないか！）
——なんて事を思ったときには、もう車が迫る車道に飛び出していった。

本音はまあ俺の胃袋のためである。だがいずれにせよ猫を見捨てる理由にはなら
ない。

寝ている猫を両手で拾い、反対側に飛び出す。乗用車は回避出来た。

裕一（カツコつけた甲斐があつたモンだぜ！）

なんて思ったのもつかの間。

——ブロロオオオオオ!!!

反対車線から、運送用の大型トラックが猛スピードでやってきていた。

裕一（カツコつけるモンじゃないな）

おかげで二車線道路の構造どころか、近所の道は交通量が多いって事すら忘れる始末である。

小さい頃母親にしつこく言われた言いつけを思い出すが、今となっては手遅れ。

せめて、今抱えている猫だけでもと、ぶつかった衝撃から守るために懐に抱き締め、衝撃に備える。

備えると言つても、大型トラックの質量と運動エネルギーに人体が耐えられるはずも

ないため、死への覚悟を決めると言ったほうが良いだろうか。

トラックの吸気口とヘッドライトが迫る中、短くも楽しかった人生の思い出に浸り、成人すら出来ずに旅立ってしまう事を心の中で両親に謝罪し、同時に17年以上も育ててくれた事への感謝の念を抱きつつ、俺は目を閉じ、来るべき衝撃にその運命を委ねた。

裕一（——ッ!! ……あれ?）

——はずなのだが。

そつと目を開けてみる。

目の前にはトラックのフロント部がドアップで映っている。

周りを見渡すと、自動車や通行人など、周りにあるすべての物体の動きが止まっていた。

あれだけ元気に鳴いていたスズメの声も聞こえない。

あたりは静止した時間と同じく静まり返っていた。

裕一「なんだ? 何が起きて——」

??? 「少し時間を止めたのですよ」

裕一「えっ」

声のした方に振り向くと、帽子を被った女の子が歩道にいた。

女の子「はじめまして。まずは、その猫を助けてくださりありがとうございます」
テク、テクと、ゆったりとした足取りでこちらに歩いてくる。

すると俺の懐からミャーと一声、抱きかかえていた猫が腕をすり抜け女の子の方へスタスタと向かっていった。

女の子は一度屈んで猫を抱き上げ、再び背を伸ばして俺に向かつて一言。

女の子「山本裕一さん。ふふっ」

小さく笑うときに目を細め、首をかしげて愛嬌を振ってきた。

服装からして、中学生だろうか。

淡黄色の生地に青竹色の襟という配色のセーラー服を着ていて、服と似たようなデザインの帽子を被っている。

前からでもチラリチラリと見える二つのお下げが年相応で可愛らしい。

裕一「なんで、俺の名前知ってるの？　と言うか、これは君がやったの？」

女の子「はい。単刀直入に言いますと、私はある世界で神様の補佐を務めている者です。訳あつてこちらの世界に来ていたのですが、この子が迷子になっちゃって。ようやく見つけたと思ったら車に轢かれそうになっていて、それを貴方に助けていだいた所、今度はあなたがトラックに轢かれそうになっていたので、時間を止めた。と言う訳

です」

女の子は下半身がぶら下がるように猫を抱きながらそう答えた。

女の子が神様に仕える存在なら、その猫も神聖なお方なんだろうか。尻尾割れてないし、どこにでも居る雑種猫にしか見えんが。

裕一（あれ、この子どつかで見た事あるような……）

少し記憶の海を泳いでいると、また声がかかった。

女の子「さて、改めて裕一さん。良いお知らせと悪いお知らせがありますが、どちらからお聞きになりますか？」

裕一「じゃあ、良いお知らせから」

どっちも聞いて良いのなら、良い知らせを聞いてテンション上げてから、悪い知らせへの対策を考えるのが俺流。

裕一（助けてくれるんだろうか）

俺は立ち上がりつつ、彼女が天国からの使者でもなく、地獄からの死神でもない事を期待した。

しかし、女の子の口からは俺の予想を超える言葉が出た。

女の子「裕一さん、異世界転生に興味はありますか？」

裕一「……ん？」

俺の聞き間違いだろうか、なんて事を思うのはそこいらのラノベや二次小説だけで十分だ。

聞き間違えたんじゃないやなくて「ナニ言ってるんだこの娘」と言う感じに近い。これも良く見るか…。

裕一「えーとじゃあ、悪い方の知らせは？」

女の子「残念ながら、山本裕一と言う男性はこちらの世界では死ぬ事になってしまいました」

裕一「はい!？」

異なる切り口から女の子の意図を掴もうとしたが、ダメだった。

女の子「裕一さんの魂を、記憶を引き継いだまま生を伸ばすには、もはや魂をこの世界から移動させ、異世界の住人として第二の生を送るほかありません」

裕一「このまま助けてはくれないの？ 時間は止めてる訳だし、俺がここから動いてから時間を進めれば……て、あれ!？」

俺は移動して歩道に向かおうとするが、どうしてもトラックの前以外の場所に向かう事が出来ない。

トラックの直撃コースから大きくずれようとしたが、透明な壁のようなものに阻まれて動けなかった。

女の子」走っているトラックに衝突する」と言う未来は、裕一さんに私の猫を助けていただいた時点で確定してしまったのです。多少衝突位置を調節することは出来るかも知れませんが、このまま時間を再開しても多分あなたは死ぬか、運が良くても重症を負ってしまうでしょうね。なにせトラックはあのスピードで走っていたわけですから、いずれにせよ悲しい結末にしかならないでしょう」

話を聞きつつ、俺は女の子の話を冷静にまとめた。

今ここで重要なのは、「異世界で生きる」か「この世界で死ぬか」を天秤にかけて、どちらが俺にとって得かを勘定する事である。

どこの転生もののSSの主人公たちみたく呆然とする暇はない。

俺は現実主義者なのだ。目の前でペラペラ喋っている女の子は、現実の論理では到底証明出来ない悪魔そのものだが。

だって、この娘の言っている事をまとめると

「猫助けてくれてありがとう♪ お礼に異世界に生まれ変わらせてあげよう。あ、断ったらあの世へお陀仏よろうふう」

て事じゃないか。

少し考え込み、したたかな計算を済ませたところで、俺は口を開く。

裕一「……一つ確認させてくれ」

女の子「なんですか？」

だが、悪魔つ娘と言う女の子の属性が一定の人気を集めている理由も、今となつては分からなくもない。

裕一「本当に、異世界に転生したら記憶も引き継がれるのか？ 赤ん坊になつて産まれたら、脳の発達具合の影響で記憶どころじゃないと思うんだけど」

何故なら、俺は今最高にワクワクしているからだ。

女の子「そこはご心配なく。裕一さんに転生していただくのは、体だけです。裕一さんと同じくらいまで育ちきつてますので、記憶の引継ぎに関しては問題ありませんよ。なにより、私神様の御使いですから、そこら辺の調整は朝飯前です」

悪魔とは本来、契約を交わして願いを叶えてあげるかわりに契約者から大切な物を奪つてしまう存在で、人間の敵とされている。

裕一「転生したら俺は何か、能力的なものとか貰えたりする？」

これでも一応二次元ファンの男として、これは是非確認しておきたいものである。

女の子「はい！ もちろん用意してありますよ！ 裕一さんにピッタリの代物です！」

何か都合の良いと言うか、ハナから俺を転生させる気だったと言うかそれしか考えられないが、今の俺にとっては些細な問題である。

この女の子のやり方は悪魔じみているが、一人の夢見る少年である俺からして見れば、彼女はまたとないビッグチャンスを与えてくれている幸運の女神様なのではないか。

裕一「なら……」

戦隊モノベルトを買ってもらい、ヒーローになった気分でカッコつけていた幼稚園時代。

射撃系ゲームの主人公に憧れて、なけなしの小遣いで安いエアソフトガンを買い、ポケットに忍ばせて遊びまわった小学生時代。

ラノベやアニメにハマり、邪気眼を発動させては痛々しい事をひたすらノートに綴り、拙い知識で作られた異世界に思いを馳せた中学生時代。

そして――

裕一「是非、転生させてくれ。俺はまだ死にたくは無い」

――ついにやってきたこの時。

「夢にまで見た異世界転生。」

一生一度の覚悟を決め、俺はこの時、神様がくれた最高の贈り物……第二の人生への片道切符を手にしたのだ。

女の子「——！ 分かりました。では、これよりあなたの魂を、ある世界に送ります。そこは、こちらの世界で”艦これ”と言うものが現実となった世界です」

女の子の表情が一瞬だけパアッと明るくなった。

やはり俺を転生させる必要があつたと言う事か。

だが、悪い気分ではない。むしろ最高だ。

ん？ 今艦これって言った？ 言ったよね、確実にいったよね!? KANKOREっ

て！

ヤッター!! それってあの翔鶴さんに会えるってことじゃないですか！

神様マジであります！

誰か知らん女の子あります！

今までの俺よ、夢を捨てないでくれてありがとうございます！

お陰で俺は最高の第二の人生を送れそうだよ！

いや、転生者は俺の知る限り俺一人だけだから、仮に上手くいったとしても本当に最

高の人生になりえるのかは確かめようがないのだが。

女の子「では、いってらっしゃい」

女の子は、パチンツと指を鳴らした。

女の子「裕一さん——」

周りの景色が、女の子が、自分の体が、白く、淡く、霞んでいく。

やがて視界が完全に真っ白になり、自分の体も見えなくなる中最後に聞いたのは——

女の子「——どうか、私達の世界を、救ってください……」

——悪魔のような邪気など全く無い、一人の異世界^女の御使^子いの純粋な願いだった。

第一章：新しい人生 《ふなで》

第2話：転生空母―デスピナー―

ハツと我に帰る。

撤回する。帰れない。

気がついたらとんでもない重さの物を背負って大海原のど真ん中とか、明らかに迷子の次元を超えている。

そして、何故水面に二本脚で立つて……いや四本脚の動物でもそうそう液体の水の上になんて立てたものではないのだが。

ここは落ち着いて、状況の確認だ。パニックになるなどもつてのほかである。まず、

裕一「ここどこだよ？」

いくら異世界に転移させると言っても、もう少し転移先の立地くらい選べない物なのか。

しかも海の上で……。折角異世界転生と言う全国の二次元好き憧れのシチュエーションなのに、人に見つけて貰えず終いだったら最悪孤独死、バッドエンド確定。現実

は非情である。さてはあの女の子は鬼か。

現在どこの海域にいるのか全く検討がつかないため、闇雲に動いてすぐ事が進展するとも思えない。と言うか動き方すら分からない。

とりあえず、自分の格好を確認する。

まず服装が、ブレザーとネクタイで構成される高校指定の制服ではなく、紺色の学ランのようなもの変わっており、頭には帽子を被っていた。

左耳のスピーカーからマイクが伸びたような形のヘッドセットをつけていた。

被っている帽子を取りデザインを確認する。全体的に色は服と同じく紺色で、正面に金色で錨をあしらった装飾が施されていた。帽子との組み合わせと、階級を表す肩章が無い事から、着ている学ランは大方、旧日本海軍の下士官用第一種軍装モチーフと見た。

左腕には1mはゆうに超えるであろう分厚い長い板のような物があり、右腕の前腕には手首から肘くらいの長さの直方体の箱のような物、中指には赤色の宝石がセットされた青みがかった銀色の指輪を嵌めている。どこかで見たようなデザインだな……。

背中には、とても大きいゴチャゴチャしたメカニカルな物を背負っており、その左右には軍艦の船体のように一部が赤色で塗装されたデザインの装甲版のような物をこしらえていた。艦橋らしき物も延びている。

自分の体より一回りほど大きいであろうそれは、腰から腹回りにガッチリと固定され

ている。しかし、大きさの割には随分軽いようにも感じた。

そして両足の腿の前後にはプロテクターのようなものが装着されていて、右腕についている物と同じ箱のような物が、横に一つずつ装着されていた。前腕のそれと腿のそれには、先のほうに2つずつハッチのような物がついている。

脛の前後にも腿と同じくプロテクターのような物が装着されている。

自分の格好といい、身につけているものといい、まるで艦娘の艦装だな。そういえば、確かあの女の子は艦これの世界に転生させると言っていた。自分の置かれている状況と格好から察するに、どうやら俺は艦娘として転生したらしい。

裕一（俺、男のままなんですけど……？）

艦娘ならぬ艦息つてか。ハハツ笑えねえ。

艦種はなんだろうか？ 艦装の大きさと、左腕に飛行甲板らしきものをこしらえている事から、おそらく大型の空母系だとは思うのだが、艦これのそれ以上にやたら重武装な気がする。

——まあ、そうでなきゃ納得は出来ないがな。

裕一（あれ…？ 何だろうこの感覚）

それはそうとして、

裕一（あつついなあもう……）

こつちに転移してくる前は6月下旬。日本全国の学生諸君が「あと半月ほどで夏休みだ！」と浮かれているのに対して、梅雨前線による独特のじめつた嫌な空気と、いつ来るか分からない雨のせいでも、洗濯籠を抱えたお母様方が天気予報から目が離せなくなる時期でもある。

重ねて言うが、とにかく暑い。梅雨だと言うのに雲が少なく晴れていて……いやここが日本近海とは限らないんだけど、服の生地が厚い上に色が黒に近いため熱が籠る籠る。

上着のボタンを外して前を開けたいが、背負っている艤装のせいでもういかない。?? 「すみません、ちよつといいですか？」

裕一「うおっ」

突然肩の方から声が聞こえた。右肩を見やると、そこには5cmほどの小人がいた。考え事しているところに耳元で急に喋りだすものだから、声に出してビックリした。

裕一「君は？」

?? 「申し遅れました。私はデスピナ艤装の副長妖精です。これより貴方の補佐を務めさせて頂きます」

ちんまりとした体でピシッと敬礼をする。
なるほど。ちまっついコイツが俺の船務長か。

裕一「あ、それはどうも。俺は山本裕一って言います」(デスピナ……)

副長「……なるほど。あなたが……」

何か含みのある事を呟く。

副長「で、こちらがデスピナ兵装の指揮官、砲雷長妖精です」

砲雷長「よろしくお願いします」

あ、もう一体出てきた。丁寧にお辞儀をしている。

簡単な自己紹介を済ませ、改めて副長妖精、砲雷長妖精と名乗った小人を見る。

体躯が圧倒的に小さく、デフォルメしたイラストみたいに等身が低い事を除けば、姿形は人間の女性のそれとあまり変わりない。

艦これの兵装や艦載機と一緒に描かれている、いわゆる「妖精さん」と呼ばれるアレらと雰囲気がよく似ていた。

服装は、海軍に用いられているような、副長が半袖の白い略服に白い帽子、砲雷長も服は同じだが、帽子の色が青色である。

裕一(あ、ずるいぞお前は夏服とか。でもコイツら何だ？ ホムンクルス？ コロポツクル？ 日本語は通じるみたいだけ)

そして、今チラツと名前が出たデスピナなんて名前の艦は――

――いや……デスピナとは俺の――

副長「この艦装についてと、扱い方を説明したいと思いますので、『コマンド』と思いつかべて下さい」

裕一「っ、わかった」(コマンド)

我に帰り、とりあえず言われた通りにする。

さつきからチラチラと頭によぎるものは、どうやらデジヤヴのそれでは無さそうだ。

目の前に長方形のホログラムのような何かの画面が出てきた。

すこぶるどうでも良いが、コマンドーとかでも反応しただろうか。

裕一(今度やってみよ)

副長「この画面では主に、レーダーやソナーによる位置情報、船体情報、海図などを確認するのに使います。兵装を使用するのも、この画面からです」

裕一「ふむふむ」

画面の左半分ほどが、円形のレーダーのようなものと方位計で占められている。右半分には、上から2分の1くらいのところ項目メニューが二列と、残りの2分の1は艦

装（船体）の状況を示す見取り図が表示されている。

項目メニューは、左列上から”兵装一覧” ”艦載機管理” ”航空管制” ”レーダー／ソナー表示切替”、右列上から”海図表示” ”システムリンク” ”船体情報” ”戦績確認”の8つがある。

軽く弄ってみる。レーダーやソナーによる索敵結果を表示したり、片方だけ非表示にしたり。全画面表示にしたり。

海図表示の項目をタッチすると、別ウインドウで自分のいる位置を中心に海図が表示された。

現在地をちよつと探ってみたり、人差し指と親指で拡大縮小したり。レーダーも同様に操作出来た。

裕一（おーこれは分かりやすい）

まるでタブレット端末を操作しているみたいだ。現代かそれ以上の技術でなければ実現出来ない代物だなこれは。

兵装一覧と艦載機管理は、自分の艦装の規模から察するに面倒くさそうなので後回し。

——違う、見るまでも無いだけだ。艦載機なんて殆ど——

なんだが頭痛がしてきた。

とんでもなく嫌な事を思い出しているような……。

裕一「……なるほど……。そうだ、俺の艦装について詳しく知りたいんだけど」

副長「わかりました。では説明いたします」

頭の痛みを紛らわすため、そしてきつきから気になっている事を確かめるため、正直考える意味も薄いと思えるほどの仮説を立てる事にする。

副長がチョイチョイと肩の上で動くと、ホログラムの画面が切り替わった。そこには、

デスピナ級要塞航空母艦デスピナ

機関

・重力制御式熱核融合炉

電探

・広域多機能レーダー 探知半径 約500km (半球状空間)

・射撃管制用レーダー 探知半径 約130km 探知高度 約600m

音探

・アクティブ／パッシブソナー 探知深度600m以上
 対水上／対地兵装

・スーパームナス電磁投射砲（レールガン） 単装砲4基

・ライオニツク巡航ミサイル 即応弾150発／総弾数600発

・N5巡航ミサイル 即応弾40発／総弾数120発

・NX大型巡航ミサイル 即応弾Ⅱ総弾数6発

対潜兵装

・ASROC対潜ミサイル 即応弾40発 総弾数120発

対空兵装

・スタンダードミサイル 即応弾200発 総弾数800発

・対空ミサイル 即応弾100発 総弾数450発

・CIWS レーザー対空迎撃システム 4基

・CIWS パルスビームフラックス 4基

艦載機

・戦闘機 EJ24 12機

・戦闘機 ファイター 180機

・戦術爆撃機 カロン 72機

・戦術爆撃機 ミッドナイト 36機

・制圧攻撃機 アルテミス 36機

・大型攻撃機 ホエール 4機

・大型輸送ヘリ ヒドラ 12機

(現在搭載機合計：352機)

艀装固有設備

・エレメンタル戦術情報演算システム

・弾薬製造設備

支援兵器：衛星軌道兵器ノートウング

・サテライトブラスター

・スプライトフォール

・ラグナブラスター

と表示されていた。いやいや……。

裕一「……は？ 何だこのチート性能!? いや嬉しいけど、俺に使いこなせるのか

なあ」

いくら強力な武器や防具を持っていても、基本的な扱い方すら分からずに性能に頼り

きりとかただの恥晒しである。実際にもう一人の俺は、航空隊が全滅した時に生き恥さらしてきたらしい。

いや、それよりも航空機が、全て生き残っている!?

しかも格納庫の容量一杯だと？ ああ、戦いの時すらこんなに沢山は積んでいなかった……と思う。多分。

”一応”空母として建造された事がある者としてこれ以上の贅沢はないが、良いのだろうか、俺だけがこんなに持っていて。

オマケにに弾薬製造施設？ そんな贅沢なモン、どここの創作物でも訊いた事も無いぞ。

ええい、さつきから何なんだ！ この、懐かしいような気持ち悪いような、何とも言えないこの感じは！

副長「だいじょうぶ！ そのための私ですから。これからいろいろ覚えてくださいね！」

裕一「…よろしくお願いします」

副長の声を聞き、また我に帰る。

そうだった。この子がサポートしてくれるんだ。ひとまずは安心である。

転生させられた時は、全て独りで全てやっていかねばならないのかと少し不安だった

が、こういう時にやるべき事や出来る事を示してくれる人がいるのはとてもありがたい。

ここで、ようやく頭痛が治まり、さつきから頭によぎる感覚についての仮説も、ほぼ事実になった。

思い出した……いや、分かったのだ。『もう一人の俺自身』について。

裕一（——俺は、連合地球軍……EDF海軍所属……）

《要塞空母デスピナ、スターティングオペレーション》

デスピナ（——デスピナ級要塞航空母艦一番艦、”デスピナ”……だった、のか……）
《要塞空母デスピナ、起動》

デスピナ「——俺は、デスピナ……？」

副長「!? まさか……!？」

デスピナ「ん、どうした？」

副長「い、いえ、何でもありません。コホン…では、早速——」

そこから、艦装の扱い方に関する講義兼実地演習が始まった。

まずは機関の動かし方と、前進・後進、舵取りの方法を教えてもらう。少々ばかりエンジンスタート機関始動に梃子摺ったが、やり方さえ覚えてしまえば意外と簡単で、実際に航行してみると水上スキーに似ていて結構楽しい。

デスピナ「おお、すげー！ 海の上走ってる！ 俺！」

少しの間、適当に動いてみる。舵の効きが若干重い気がするが、意外に小回りは利く。潮風が全身に当たるとの感覚は、人型である艦息ならではの醍醐味ではないだろうか。

顔面が涼しくて気持ちがいい。

なんだろう、初めての感覚な筈なのに、どこか懐かしさも感じる。

やはりデスピナも、図体がバカみたいにデカいとは言え、曲がりなりにも艦だからだろう。

ところで、さつきから自分の足に装着されている主機以外に駆動音がすると思っただら、背負っている艦装から二本の“脚”が伸びていた。脚先は水面についていて、自分の主機と同じく推力を生み出している。艦装の大ききの割りになんか軽いと思っただら、艦装の足先には“浮き”があるようだ。

旋回時、曲がる方向に少し体を傾けてみると、内側の艤装の脚が縮んで、外側の脚は伸びて、スクリュウの回転エネルギーを無駄にしないためだろう、自動で制御される事を確認した。

” 機関を動かして船体を進める”。文に書き起こせばたったこれだけで終わってしまいう事でも、俺は一々驚き、喜んでいた。

そんな矢先、開きっぱなしだったレーダーにいくつか赤い点が……。これはまさか……。

デスピナ「なあ副長、レーダーに赤い点があるんだけど」

副長「!? それは敵、深海棲艦です！ 総員戦闘配置！」

デスピナ「敵!？」

デスピナ（まさか、こっちの世界にもフォーリナーが!? て違うよな、流石に）

深海棲艦。裕一としての俺の前世でよく遊んでいたブラウザゲームに登場する、敵キャラクターの総称である。

流石にフォーリナーは居るわけじゃないよな。……居ないよね？

何はともあれ、この世界で初の戦闘が、訓練でもなんでもなく実戦である。まだ艦息としての兵装の使い方にも聞いてないのに……。

こうして、副長の講義は実戦と言う名の中間試験を迎えた。

そして今この瞬間から、俺の艦息としての長い長い第二の航海（じんせい）が始まった。

……の割には、いきなり命がけでハードな気もするが、もう一つの前世で要塞空母として産まれた代償では無い事を祈ろう。

デスピナ（頑張ろう。先は長い）

第3話：異世界の冒険はいつだって戦闘から（偏見）

副長「方位と距離は!? 何隻ですか!？」

CDC妖精「方位0―7―4、距離450km、数6! 本艦に向けて接近中!」

副長妖精が小さい体から声を張り上げ、状況を確認する。

俺はリーダーを確認しつつ、敵のいる方角の水平線を見つめる。

450kmも離れた所にある目標が目視で確認できる筈がない。

しかし今、俺の命を狙いに來ている明確な敵が、確かに水平線の影にいるのだ。

副長「敵艦隊の編成は!？」

CDC妖精「戦艦2、重巡2、駆逐2。いずれもeliteクラス!」

待つて、初の戦闘がいきなりelite艦隊つて、え?」

副長「Des:裕一さん」

Desピナ「Desピナで良い。どうやらこれが、俺の名前らしいからな」

副長「:了解です。では、Desピナさん、早速ですみませんが、敵艦隊に補足されま
したので、これより迎撃にあたります。今から説明する通りに操作してください」

Desピナ「了解」

俺は気持ちが悪く感じて来るのを感じつつ、心を落ち着けるため呼吸を一回。

デスピナ（落ち着け、落ち着け。初めてでも、焦らず急ぎつつ、確実に対処すれば間違いは無いはずだ）

デスピナとしてだけでなく、裕一としての俺も強く出てきているためか、どうにも緊張する。

副長「まずは、コマンドから兵装一覧を選択してください」

選択する。艦装に搭載されている兵装一覧が別ウインドウで出てくる。その中に、対艦兵装の項目に分類された兵装が4つ表示されている。

副長「今回はミサイルを使います。ライオニックを選択して、レーダーから目標を指定してください」

ミサイルのカテゴリからライオニック巡航ミサイルを選択。レーダー上の赤い点が緩やかに明滅する。

副長「目標をタッチすれば、撃ち込む弾数を指定できます。今回は戦艦と重巡に2発ずつ、駆逐艦には1発指定してください。あとは、レーダー下の発射ボタンをタッチすれば攻撃します」

デスピナ（ええと、戦艦と重巡に2発2発、2発2発……。駆逐艦に1発、1発つと）
ターゲットを指定し終え、発射ボタンをタッチする。

砲雷長「ライオニツク、ファイア！」

砲雷長妖精の号令で、背負っている艦装のミサイルハッチから、左右に計10発のミサイルが発射され、白い噴射煙を吐き出しながら深海棲艦のほうへ飛んでいく。レーダーにも、ミサイルを示しているのだろう、高速で敵に向けて移動している細長い三角形が10本表示されていた。

背中の方から、ガシヤガシヤウイーンと艦装の機構が動く音がする。おそらくミサイルを再装填しているのだろう。

その後、敵にミサイルが当たったのか、レーダーから敵の反応が全て消失する。

デスピナ（まるでゲームのチュートリアルだな、この艦装からしてみれば）

あっさり勝利してしまった。何も問題なく敵を仕留められたに越したことは無いのだが、戦いがあまりに一方的過ぎたために勝ったという実感が沸かなかった。

さらに言えば、深海棲艦を生で見ること叶わなかった。

なんて事を思っている間にレーダーに新たな反応が現れる。

CDC妖精「敵艦隊を多数発見！ 本艦を包囲する布陣で展開していた模様！」

デスピナ「なにつ!？」

包囲された？ 何それ危なくない？ これチュートリアルじゃなかったっけ？ あ、実戦でしたそうでした。

CDC妖精「方位0―1―0、距離80km、深度45に潜水艦6！ 方位2―4―5、距離420kmより12！ 方位1―8―5、距離350kmより42！ 方位3―0―2、距離410kmより36！ 全てflagshipクラス！ 戦艦と空母と重巡洋艦により主力が構成されている模様！」

副長「どうやら、潜水艦が周囲の深海棲艦を呼び寄せたみたいです。先ほど一艦隊撃破したので、退路の確保が出来ているのが幸いですね」

eliteの次はflagship？ 当然かも知れないが、向こうさんは本気で俺を殺しに掛かって来ているらしい。

さつき海図見たときに詳しく確認し損ねたが、俺はホントに一体どこの海域にいるんだ？

水上の敵の布陣の中央である方位2―4―5――おおそ西南西の方向――へ回頭しつつ、ややキレ気味に敵状を整理する。

デスピナ「えーい、すべて撃沈する！ 方位2―4―5をa群、方位1―8―5をb群、方位3―0―2をc群、方位0―1―0をd群とする！」

今度は自分で指示を出す。攻撃の要領は分かった。

まずはd群の潜水艦隊にアスロックを2発ずつ指定。

砲雷長妖精「アスロック、ファイア！」

艦装から12発のアスロックが発射される。

リーダーでも12発の飛翔体を確認した。

次はa、b、c群の目標90隻に向けてライオニックを2発ずつ発射しようと思うのだが、目標がやたら多いため一発一発指定するのはいささか面倒くさい。

そう言えば、リーダーをはじめとして、コマンド画面の操作はすべてタブレット端末やパソコンのマウス操作のそれとよく似ている。

デスピナ（と言うことは……）

裕一としての記憶を頼りに、艦装の操作に一工夫を試してみる。

ライオニックを選択する前に、リーダー上の敵陣bの左上をダブルタップ&ホールドし、敵陣abc全てを囲うように、右下にスワイプする。

やはり左上を起点として長方形のフレームが現れ、水上の敵表示すべてが明滅する。ロックを掛けることができたようだ。

すると、リーダー上に兵装ボタンが2つ現れた。「ライオニック」「N5ミサイル」と書いてある。

デスピナ（なるほど、あらかじめロック対象を決めたら兵装が自動選定されるんだな）
総弾数の都合上NX大型ミサイルは使えないのだろう。

デスピナ（あ、そう言えばN6とN7ミサイルが無いのは何故だ？ 別に無くてもそ

こまで困ることは無いと思うが)

指で操作し頭で分析・思考しつつ、手早くミサイルの発射指示を進める。

あ、テンペストも無い。

再びライオニックを選択する。

今度は数字と、プラスマークの三角形と——^{マイナス}マークの逆三角形が描かれたものが現れる。

数字の表れる入力欄のようなどころには“1”と表示されていたが、プラスの三角形をタッチした事で数字が“2”に変わった。

再び発射ボタンをタッチ。

砲雷長「ライオニック、ファイア！」

艦装からまずライオニックの即応弾150発が全て飛び立つ。飛び立つと言っても、艦装の構造上左右に水平発射なのは、凄く違和感を覚えるぞ……。

発射された物から順次再装填され、追加の30発も続けざまに飛翔する。

デスピナ「けほっけほっ……」

ミサイルの噴射煙が物凄く煙たく少し咳き込んだ。これも艦息として転生した故か。

背中と左右が真っ白である。

かまわず俺はレーダーを見続ける。親父の吸っていたタバコの副流煙と同じだこん

なもん。

CDC妖精「d群の潜水艦隊より魚雷24！ a群、c群より艦載機発艦中！」

リーダー画面に魚雷の形をした小さいマーカーが沢山映っていた。大分前にこちらに向けて扇状に撃ってきたらしい。

a、c群のほうには飛行機の形をしたマーカーが少しずつ出現していた。

副長「魚雷の予測進路を出せ！」

デスピナ「え、そんな機能あんの？」

またまた驚きの新機能である。

リーダー画面上の魚雷の先に細長い三角形が連なり、波打つように明滅して進路を教えてくれる。

俺はスクリーンを高速で動かし、魚雷の予測進路から外れる。

情報は逐次更新され、魚雷の進むであろう道のりも少しずつ修正されていた。

デスピナ（実戦でこんな事は気にしちやいけないんだろうけど、流石にちとズルすぎやしないか）

是非とも活用させていただけようじゃないか。

使える物は何でも使う。それが俺のポリシーだ。

魚雷の直撃コースから確実に外れたのを確認し、次は対空戦闘に移る。

デスピナ「敵の航空機の数は!？」

CDC妖精「128機です！」

デスピナ「そっちで兵装の操作は出来るか!？」

CDC妖精「指示さえ頂ければいつでも！」

デスピナ「スタンダードミサイルで迎撃せよ！　トラックナンバーの割り振りはそっちに任せる！」

CDC妖精「了解っ！」

せっかく艦装の着用者になったので、艦長の気分で指示を出してみる。実際にこんなやりとりはしないだろうけど。

しかし俺は、

デスピナ（うーん、我ながらカツコ良かったぞ今）

別になんでもないことで悦に入っていた。裕一として。

砲雷長「スタンダードミサイル、ファイア！」

再び艦装のミサイルハッチが口を開け、艦隊空兵装の代表格——スタンダードミサイルが煙を噴出して飛び立つ。

またしても噴射煙が艦装を包み込む。

指示を出しておいてなんだが、もう少し煙少なくならないだろうか。

やがて、先ほどd群に向けて放ったアスロックが目標物のいる地点に到達したようで、レーダー上での動きが止まる。パラシュートを開いたのだろう。その後着水したと思われるタイミングで、コマンド画面上からは消えた。後は、短魚雷のアクティブソナーがしっかりと動作してくれる事を祈るだけだ。

CDCC妖精「ソナーよりd群の反応消失！」

無事、潜水艦は撃沈出来た。

敵航空機にも次々とミサイルが着弾し、レーダー上の飛行機のマーカーが全て消えた。

デスピナ（そう言えば、「スタンダードミサイル」で名前の割には随分と射程が長いよ
うな……）

絶対別物だろこれ。ブースター部が延長でもされているのだろうか？

あと「対空ミサイル」でナンだ？ いやさつき撃つたやつじゃなくて、搭載されている兵装の名前ね。

さしずめサイドワインダーかシースパローあたりだとは思うのだが、正体や如何に。

更に水上の深海棲艦たちにもライオニックが着弾し、次々に反応がレーダーから消えていく。

敵艦隊のいる方角に黒煙が昇っているのが見えた。

CDC妖精「abc群、大半を撃沈。残りは戦艦と空母と思われる固体のみです」
デスピナ「なら、最後の仕上げだ」

残りの標的にライオニツクを1発ずつお見舞いしてやる。

砲雷長「ライオニツク——ゲボツゲホ……！」

これまで通り号令を飛ばそうとした砲雷長がむせ返った。

デスピナ（大声出す前に茶なんか飲むな、砲雷長）

でもライオニツクはちゃんと飛び出していった。

少しして、目標にライオニツクが着弾。レーダー画面上からすべての深海棲艦の反応が消失した。

CDC「レーダー、ソナーに敵影反応無し」

デスピナ「終わったのか」

妖精達「大勝利だ！ EDFッ！ EDFッ！」

ふうと一息、安堵の溜息。艦装内からは妖精たちの勝ちどきの叫び声。

副長「やりましたね。大勝利です！ 初陣には見事な操艦でした！」

デスピナ「ありがとう。でも少し疲れたよ」

最初の戦闘がeliteとflagshipクラスなんて精神的に疲れるわ。

EDFシリーズで言えば、いきなりハードやハードレストに挑戦するような物である。

が、デスピナに掛ければこんな物か。

戦艦と空母の flagshipなんてライオニック2発かましてもまだ沈まないんだもん。

次の瞬間頭上から砲弾降って来たらどうしようとか思ったぞ。まあ、距離が距離だし、敵の艦砲射撃が届く事はまず無いだろう。何より要塞空母の装甲と耐久力は多分伊達ではないから、いずれにせよ大丈夫だとは思うのだが。

砲雷長「要塞空母デスピナにはミサイルがある。敵には誤算だったな！」

副長「あつ、そのセリフが言いたかったのに——」

砲雷長はデスピナの乗組員だったのだろうか。

あと副長はそんな事で拗ねるな。次の戦いが終わったら言えば良いじゃないか。

砲雷長の言ったセリフは、EDF4（≠4.1）でデスピナの艦長を務めていた人のものである。ゲーム中に登場した時の声は、とても頼もしさを感じさせられた。

実際のデスピナの前世の艦長は、果たして生きているのだろうか。

確か、フォーリナーとの最終決戦で——

ズキイイイ……！

デスピナ（——つ、くそつままた頭痛が！）

無理に思い出そうとするのはやめておこう。あまりボサツとしている訳にもいかな

い。

デスピナ「さて、喜ぶのも程々にして、改めて対水上・対空・対潜警戒を厳となせ。まだ敵海の中央にいる事を忘れるな」

副長「ふふっ、すっかり艦長気分ですね。カッコイイですよ♪」

突然おだてたれられ、ちよつとだけ気分が昂ぶる。

が、初心者の慣れと言う言葉があるとおり、最初に調子がいい時ほど後々その経験に足を取られぬよう気をつけなければならない。

改めて気を引き締める。

副長「さて、ミサイルの使用法はもうバッチリですね。次はレールガンを用いた艦砲

射撃訓練ですよ！」

デスピナ「あ、やっぱりまだ続く？」

副長「あたりまえです！ まだまだ教えることはたくさんあるんですから、移動しながら覚えてもらいますよ！」

デスピナ「はい」

ですよ。さらに後には一番のお楽しみである艦載機運用の講義もあるだろうし、まだまだ長そうだ。

デスピナ「……て副長、結局俺たちは、今どこにいるんだ？ 当ても無く現在地も分

からず動き回るのは、それはそれでどうかと思うんだが」

副長「デスピナさん、海図」

デスピナ「あつ……」

すっかり忘れていた。この艤装には色々な便利機能が盛り沢山じゃないか。

俺はコマンドから海図を開く。現在自分のいる場所から遠ざかるように、ピンチインの操作で表示範囲を広げていくと、大体の位置は掴めた。おおよそ、ハワイ諸島の南の方だ。

ついでにコマンド画面の右下に小さく表示されている時刻も確認する。このあたりの現地時間は真つ昼間だ。

デスピナ「太平洋のど真ん中、か」

副長「いちばん近い港は、ハワイのパールハーバー海軍基地でしょうか」

デスピナ「俺英語話せないんだけど」

副長「学校で習わなかったんですか？」

デスピナ「リスニングとスピーチはニガテだったんだよ……」

ごめんなさい盛りました。ホントは英語全般苦手です。

どう言うわけか、ここは裕一としての面が強く反映されてしまっている。今の俺は多重人格と言うより、双方の記憶を同時に引き継いでいる状態のようだ。

さらに厳密に言えば、裕一の魂にデスピナの記憶がやってきたような……何だろうね。

抜け落ちている部分も多いとは言え、デスピナとしての記憶が多少はあるんだし、英語くらい覚えていても良いモンだと思っただが、そう都合よくもいかないか。

こんな事になるならもつとちゃんと英語の勉強しておけば良かった。

いやある日突然太平洋のアメリカ領近くに放り出されるとか誰も想定出来ないだろうけど。

副長「仕方ないですね。では大分遠くなりますが、日本の横須賀鎮守府に向かうのはどうでしょう？ 艦娘たちも大勢いるでしょうから、身を置くにもちようどいいとおもいますよ」

デスピナ「そうだな。よし、進路を西へ！ 本艦はこれより、横須賀に向けて出発する！」

再び主機を回し、方位をおおよそ270からもう少し北寄りに舵を取る。長い航海の始まりだ。

副長「では、目的地も決まった所で、艦砲射撃演習を実施します。対艦戦闘よーい！」
コマンド画面を見れば、リーダーには再び赤い点が現れ始めていた。

デスピナ（休む暇なし、か）

と云うか全然演習じゃないよこれ。
誰がどう見ても実戦だよ。

習うより慣れろってか。仕方ない。

第4話：モノがデカいと説明も長い

ミサイルを使った初戦闘の後、今度は初の砲撃戦である。しかも事前の講義抜きで。CDC「目標群、方位304、距離43km!」

副長「いいですか。砲撃戦では直進しつづけたらダメですよ。敵にとっては狙いやすい以外のなにもものでもありませんから」

今回はあえて敵に接近し、砲撃によって対処に当たる。

敵艦隊の編成は、軽巡elite、駆逐flagship5である。

副長「レールガンの使い方は、ぶっちゃけミサイルとあまりかわりません」

デスクピナ「変わらないのか」

副長「兵装一覧からレールガンを選んで、ターゲットと打ち込む弾数を指定して、射撃ボタンをタツチ。以上です」

兵装一覧を選ぶ。

別ウインドウの対艦兵装からレールガンを選択。

レーダー画面上の敵にタツチ。とりあえず敵駆逐艦4隻に1発ずつ指定する。

レールガンが単装砲4基なので、同時に狙えるのは4隻までである。すると、左右か

らウイイーーンガシャンと稼動音が聞こえてきた。

後ろの艀装の、俺の肩よりも少し外側斜め上に左右1基ずつ。さらに外側に降ろしてあつた装甲が起き、サイドアームのように旋回、それに1基ずつ取り付けられている細長い砲身も合わせて合計4門、ターゲットにした深海棲艦の方向に砲塔も旋回する。

裕一にとってはEDF4シリーズでの馴染みが深く、デスピナにとっては陸軍のビークルとして認知していたタンクである「イプシロン装甲レールガン」の砲塔部分によく似たそれは、太陽の光が照りつける海面に黒い橋を渡しつつ照準を終え、動きを止めて発射指示待つ。

デスピナが実際に使つてたものとデザインが違うのかどうかは、この際気にしないでおく。

なお、副砲にマシンガンが付いていたりはしない。残念。
デスピナ（そして発射……と）

この操作にも、早くも慣れ始めていた。かつて本当に要塞空母デスピナとして産まれたからだろうか。

砲雷長「主砲斉射！ てえっ!!」

発射ボタンをタッチ。砲雷長もほぼ同時に叫ぶ。

バシユンバシユンバシユンバシユウウンツ!!

4門のレールガンから極超音速の弾頭が打ち出される。

砲身内で発生した摩擦熱の影響で、砲口からは一瞬だけ炎が噴出した。

砲雷長「砲身冷却！ 次弾装填急げ！」

20秒とたたない内に着弾したようで、レーダーの反応が3つ消えた。

残りの一隻は当て所が悪かったのか、大破で耐えられない。

デスピナ（flagshipクラスとは言え、駆逐艦でも一撃で沈められない時があるとは、ちよつとパンチに欠けるんじゃないかこの兵装）

しかし、精度と発射速度にかけては艦砲として申し分ない。数十km程度の距離なら撃つてから当たるころには、再装填と砲身冷却を終えて発射準備を整えている。

デスピナの前世ではあんまり使う機会が無かったらしいので正直威力の程は未知数だが、かの史上最大の超ド級戦艦、大和型の46cm主砲の最大射程と同じくらいの距離から直撃弾を確実に出せるのは、決してコンピュータによる高度な計算だけの賜物では無いだろう。

超長射程と精度を売りにしての精密狙撃が、基本的な運用法になりそうだ。

砲雷長「砲身冷却、次弾装填完了！」

デスピナ「よし、残りも沈めるぞ」

軽巡1隻と駆逐2隻に主砲照準して、発射。

再び左右から3発の発砲音がする。

数十秒後、リーダーから全ての反応が消え失せた。

CDC「リーダーから目標消失。戦闘終了です」

副長「砲撃戦も、大丈夫そうですね」

小さいクリップボードに挟まれた紙——おそらく成績表——に何かを書き込みつつ、副長が言った。

副長「あ、そろそろ弾の材料を補充したいので、いま撃沈した敵の残骸の回収をおねがいします」

デスピナ「ん、分かった」

当然の事だが、いくら弾薬製造施設なんて立派なモノを持っているからと言って、材料も要らないなんて質量保存の法則を無視する事は出来ない。

いや、それを言っちゃったら半永久機関仕様の熱核融合炉はなんなんだって話だけども……。

ミサイル、魚雷^{アスロック}、レールガンと、裕一が元居た世界では見る事すら無かったであろう兵器群を連続で使いこなし、さつき沈めた深海棲艦の残骸を拾ったりして早3時間。

改めて俺は進路を西に向けて航行していた。

転生したり戦闘したり本当にデスピナとしての記憶が混ざったりなど、初めてだったりそうじゃなかったりのことだらけであまり気が回らなかったが、ここで改めて、身に着けている艦装の外観を詳しく確認する。

副長「さて今度は——」

??「待ちに待った航空隊の出番だぜ！ イエエーイー!!」

副長「……と言わわけで、がんばってください」

ただしこの、俺の左肩に飛び出てきた五月蠅い航空参謀妖精の講義を受けながら、である。

今度は空母の醍醐味、待ちに待った航空機運用の講義であるはずのだが、コイツの話は7割方余計な事で構成されていると言う事が直感で分かった。

よくいるよね。学校とかでさ、聞いている俺たち生徒にとつては面白くもなんともない余計な無駄話をめつちや長々と言い聞かせてきた挙句さ、授業の終了を遅らせたり休み時間を削ったりする教師。

え、いない？ いいなあ。交換しようぜ、うちのとそつちの。嫌？ ああ、そう……。

俺は一体誰に語っているのだ。そもそも俺はもうデスピナとして転生して学校には行かなくて済むようになったんだし余計な事は思い出さなくていいってのに。

それに俺は元軍艦の艦息として産まれたのだ。ある程度の教養は既にある。なに、英語？ 君にはライオニックをお見舞いしよう。

航空参謀「くーうぜんつぜつごのおおー！ 最強無敵の航空参謀！（中略）」

まあコイツの場合は今のところ、余計な事は余計な事と言う事が非常に分かりやすそうなのでまだマシだろうか。

ただし自己紹介がメチャメチャ長そうなので、コマンドから船体情報を選択し、聞き流しながら艀装の詳細を見る。

背負っている艀装のサイズがデカ過ぎる都合上、目視で見渡す事が出来ないためだ。

航空参謀「じゅうたんばくげき地獄絵図！ 空域海域絶対制圧！（中略）」

無視。

航空参謀「そうっ！ 我こそはあ！！ 例え主翼が朽ち果てようと！ 空を求めて発動機を燃やしっ！（中略）」

そろそろ弾き飛ばしてやろうか。

いやダメだ。コイツが居なくなったら航空機の飛ばし方が分からない。

でもウザイ……。本当どうしてやろうか。

航空参謀「みんなご存知！ そう！ この私こそグエツ！！」

副長「航空参謀だろ。わかったからしばらくだまれ」ゴスツ

航空参謀「チーン

副長が航空参謀にボダイブローを食らわせて気絶させ、後ろの艀装のドアの中に放り込む。

暫く講義は延期だな。でも余計な事で五月蠅いのがいなくなったのは素直にありがたい。

ありがとな副長。でもちよつと怖いこの娘…。

気を取り直して、今度こそ身に着けている艀装の外観を詳しく確認する。

まず俺の足には、妙にゴツイ主機がある。

艦これに登場する空母娘の翔鶴姉妹のように、船体を模した装甲が取り付けられている。ただし、片足につき左右から挟むように2枚。艀装の”脚”も同様である。巨大なデスピナ艀装の重量を支えるためだろうか、結構長い。

更にスクリューが片足に4基、両足あわせて8基。

後ろの艀装から伸びている脚についている物も、左右合わせて8基。

合計16基……てスクリュー多いなあ!?

全長1400mの要塞空母なら、妥当といえば妥当な数なんだろうか。

両腿のプロテクターの外側と右腕の前腕に取り付けられている箱状の物は、なんとな

く予想はついていたのだが、やはりNX大型巡航ミサイルの発射機だった。

箱一つにつき2発装弾されているため、ハッチが2つずつ設置されている。なので計6発だ。

流石は大型ミサイル。艦息の身体には少し重いぜ。

そして空母と言ったらこれ。左腕にある全通型の飛行甲板は、艦これに登場した空母娘のそれよりも大分厚い。と言うより、甲板そのものは薄いのだが、その裏側にある船体を潰したような構造物が結構な厚みを持っている。

その全長はなんと140cm！ 横幅もそれなりにある。

また、甲板の材質が、彼女達の殆どが付けていた（或いは持っていた）ような木製甲板では無く、金属かコンクリートかアスファルトか……何だこの材料は。とにかく堅く、重い。現用空母の甲板材料と同じってことだよ。うん。

甲板には、後方に右後ろから左へ斜めに抜けるように3本、前方に左から右前へ斜めに抜けるように2本、計5本のアングルドデッキが描かれている。そして、舷側エレベーターを模したのであろう模様だが、右側後方に2基、右側前方に2基、左側中腹のあたりに間隔を広めにとって3基と、合計7基も描かれている。

大体左の拳が来る位置の、おおよそ甲板中央の位置にグリッブがあり、トリガー式のボタンが人差し指で押せる所にある。グリッブは、普段は甲板裏に畳み、妙に厚い構造

物の裏に隠して収納が可能である。

グリップを握って持ち上げると、左の二の腕に取り付けられているジョイントが稼動する事によって水平に持ち上げることが出来た。イメージとしては、日本空母娘の装備しているタイプの飛行甲板を長く広くして、サラトガのそれみたくグリップもついている感じが近いだろうか。

飛行甲板を持ち上げたときの位置は、やや下げ気味に真つ直ぐに伸ばした左二の腕のすぐ左隣に甲板後方が、グリップを握った拳の上に甲板中腹が乗っかって来る形である。

しつこいようだが、持ち上げる時には甲板中腹を持つ関係で、やっぱり重い。まあ、流石に持ち上げるのがやっとならぬ程でもないけど。

ここら辺を弄るのは、航空参謀が起きてからにするか。
さて、一番大きい背中の艀装は、大きく分けて”中央司令塔ブロック”、その下に位置する”ジェネレーターブロック”、右側の”弾薬製造ブロック”、左側の”航空機格納ブロック”、そして後方から4ブロックに重なる形で”ミサイル発射台集積ブロック”があり、合計5ブロックから構成されている。

更に”弾薬製造ブロック”と”航空機格納ブロック”の外側にはロボットアームのようなものが付いていて、先にはデカイ装甲板がある。

”中央司令塔ブロック”は、大雑把に分けると指揮所本体と艦橋部(?)の2つに分かれる。

腰あたりから肩までの高さまで、俺の胴体と同じくらいの幅の指揮所がある。ここでC D C妖精は艦装の装備各種を操作したり制御したり、居住したりするんだそうな。

んで、指揮所本体の上、艦橋(?)に続く柱の根元。俺の肩から顎くらいの高さには左右の別ブロックと司令塔ブロックを繋ぐ連絡通路があり、前にドアが2つ、俺の両肩が前に来るように設置されている。

なるほど、ウチの妖精さんたちはそこから出入りするのね。どうりでいつの間にか副長や砲雷長に航空参謀まで、俺の肩に乗っかってたわけだ。あと、通路の右寄りの所から、これまたE D F 4シリーズに登場した兵科であり、空軍の航空爆撃だけでなく、このデスピナのミサイルの誘導まで一手に担っていた地上戦の司令塔、「エアレイダー」のランドセル装備から伸びているアンテナに似たものが伸びていた。ゲームの中では無事生還したようだが、デスピナの世界のあいつは、生きているだろうか……。

連絡通路の中央からは上の方に柱が伸びている。高さとしては俺の頭頂部よりも少し上のあたりに、艦橋だろうか? レールガンの砲塔と同じくE D F 4. 1に登場した、E D F 陸軍が開発した巨大人型ロボット型の決戦兵器である「歩行要塞バラム」の

頭部のようなものに、Tの字寄りのYの字の飾り（アンテナ？）が生えたオブジェがあった。オブジェ艦橋の下には横方向に伸びる板がついていて、左右に1台ずつ丸っこい物体が設置してある。おそらく、補助用のレーダーのドームだろう。

デスピナとしての記憶では、実艦にはもつと他に、レーダーの類は沢山あったらしいのだが、正直ゴチャゴチャし過ぎていて良く分からない。

”ジェネレーターブロック”は、艦装内で使用する動力源、電源、果ては爆薬代わりに使われるエネルギーを発生させるための重力制御式熱核融合炉エネルギーレクターであり、そいつが艦装内のすべてのエネルギーをまかなっている。

こいつは、デスピナのいた世界における2017年から2018年に渡って続いた戦いの結果、マザーシップを初めとして異邦人フォーリナーからからもたらされた大量の超技術を応用して造られた、宇宙技術と人類の英知の結晶……らしい。まあ、流石に全長1400mのデカブツを石油で動かそうなんて事を考えるほど、EDFもバカではないからこんな代物が使われたんだろう。あ、現用空母はどうの昔に全部原子力化してるんだっけか。

話を艦息の艦装に戻そう。このジェネレーターは、デスピナ艦装の心臓部であるためか、前方は俺自身に、左右と後方と上方は他のブロックに守られるように囲まれる形で存在している。

また、俺の両足に履いている主機にはケーブルのようにしなやかに曲がるパイプ（主

機のスクリューは電気駆動ではないため、ケーブルではない)がジェネレーターがら伸びていて、両足の脛と腿に装着されているプロテクターの後ろ部分の中を通っている。

なるほど、このパイプはジェネレーターで発生させたエネルギーを主機に送るための通り道で、必然的に弱点となる部位だから保護しているんだな。

ちなみに、背負っている艤装の2本の“脚”も、このブロックから後方斜め下に向かって海面に伸びている。

次に、右側の“弾薬製造ブロック”。

読んで字の如く、ミサイルやレールガンの弾頭、航空機の兵装を製造をするブロックが、腿と膝の間あたりの高さまで伸びている。前後の厚みは、指揮所よりもやや厚い。(と言うか指揮所が薄めなのかな)

弾薬製造ブロックの大きさは、司令塔ブロック連絡通路よりも少し隆起して高くなっており、幅は司令塔ブロックよりもやや太いため、右肩よりも大きく存在している。

また、前側に資材の投入口がある。

その上の、俺の目線の高さくらいにレールガンの回転砲塔が1基鎮座していて、砲塔の下、やや外側に張り出た台座右前と右後ろがやや斜め上向きにカットされ、それらの面に大小一組ずつ、フェーズドアレイレーダーの板状のアレが貼り付いている。イージス艦の特徴的なレーダー周りの見た目をモチーフとしているようだ。

ちなみに、デスピナの主なレーダーも、船体の左右の縁のあたりにメインレーダー塔が設置されていたようだ。流石の上にレールガンが乗っていたりはしない。

あと砲台座の根元から内側には、探照灯が2つ付いている。

また、弾薬製造ブロックと指揮所下のジェネレーターは隣り合っており、弾薬の製造や爆薬の代わりに必要なエネルギーを、通常の電力とは別に引いている。

司令塔ブロックを挟んで反対側、左側の”航空機格納ブロック”は、大まかな形や大きさは弾薬製造ブロックと同じだが、あつちはダストシユートの入り口みたいな資材投入口だったのに対し、こちらはエレベーターの入り口であるシャッターが下りている。

左腕についている飛行甲板を持ち上げると、甲板の後部がこのシャッターの前に来るようになっていて、そこから甲板のカタパルトを使って滑走・離陸させるようだ。

エレベーターは下の各種航空機の整備施設兼格納庫へと繋がっていて、格納庫の一番下からはジェネレーターの下を通る形で、弾薬製造ブロックと運搬通路で繋がっている。製造された航空機用の弾薬は、この通路を通じて格納庫へ運ばれるのだ。

シャッターがある隆起した部分の上には、反対側のブロックと同じくレールガンの砲塔が1基、外側に張り出た砲台座の左前と左後ろがやや斜め上向きにカットされた面に、フェーズドアレイレーダーのアレが大小一組ずつ存在した。反対側のレーダーと合わせて、探知距離500kmの半球状の全周囲索敵が可能となるわけだ。

砲台座の根元内側も、反対側と同じく探照灯が2つ。

おまけに左右のブロックの外側、レールガンの台座の下からはサイドアームが一对伸びており、対空レーザー発射機が1本ずつ載っている装甲で覆われた間接や、ジョイントを幾つか挟んだ先にはこれまた大きな装甲版があった。

船体のデザインをモチーフにしたのだろうか、喫水線を描きたかつたのであろう赤色で3分の1くらい塗装されていて少し湾曲している。普段は喫水線と海面が垂直になるよう、装甲は頭を垂れるように下ろし、ジョイントは畳むように曲げきっている。

そして、装甲板のジョイントが付く場所の少し前方に、レールガンの回転砲塔が左右1基ずつ取り付けられていた。砲座は前後を軸にして左右に回転するようになっていて、普段は横倒しにして”若干”格納出来るようになっていて。艦娘で例えるなら、大和型姉妹の艀装の左右の主砲部分をイメージすると分かりやすいだろうか。アレの装甲部は下向きに下ろせるのか知らんけど。

装甲と左右のブロックを繋ぐサイドアームの動きと回転砲塔によつて照準を合わせているらしく、さつきレールガンを撃った時にも動いていた。

最後に”ミサイル発射台集積ブロック”。

これがまた……なんとも説明しづらい形をしているんだよなあ。

まず上から見た形は、司令塔ブロックが左右のブロックよりも薄い事もあり、そこに

嵌まる位置だけ出っ張る形をしていて（凸↑こんな感じだろうか）、NX大型巡航ミサイル以外のすべてのミサイルの垂直発射装置が所狭しと並んでいる。

実際には、垂直に発射されるようにハッチが取り付けられているのはスタンダードミサイルだけで、対空ミサイルは左右斜め上に、アスロックは後方斜め上に、ライオニツクとN5ミサイルに至ってはもはや水平発射としか言いようが無くなっており、左右に水平に撃ち出されてから追尾に入る構造になっている。

軽量化のためか、発射台集積ブロック自体が大きく斜めにカットされている部分が多い。そこに無理やり発射台を並べたり、内側にミサイル格納庫をこしらえたりと、色々無理あるんじゃないかこれ？

設計滅茶苦茶大変だったのではないだろうか。

一斉に発射したらクジャクの上尾筒みたいな形になりそうだな。でもアピールする艦娘が居ねえよ畜生。

いずれにせよ俺にとっては煙たいだけなので多分やらないだろうけど。綺麗でもなさそうだし。

対空ミサイル発射機群とアスロック発射機群の間、つまり発射台集積ブロックの左右後方の斜めにカットされた隅の部分には、フランクスのように短いビームを連射する近接防空火器である”パルスビームフランクス”が左右1基ずつ搭載されている。

背負っている艀装だけで大分掛かってしまったが、本当に最後に少しだけ。背負っている艀装は、不幸姉妹……じゃなかった扶桑姉妹の艀装のように、俺の腰から腹回りにガツチリと固定されている。

両腿の付け根前方の辺りには、腰の後ろのジエネレーターブロックから伸びている2本の金具に、対空レーザー発射機とビームファランクスがそれぞれ1基ずつ搭載されていた。金具は左右に開くようになっていたため、着脱の際に邪魔になる事も無さそう

だ。
ここに設置されているビームファランクスとレーザー発射機は、固定されているのかと思いきや、取り外す事が出来た。

成る程、金具は設置用の器具としてだけじゃなく、ホルスターとしての役割もあるって事か。

べらぼうに長くなってしまったが、以上が俺こと、

”要塞空母デスピナ”の詳細である。

デスピナ（こいつは中々、転生して良かったぜ）

ひとしきり確認したり遊んだり弄ったりを終えた俺は、初めて機関を動かした時と同じくらいにウキウキしていた。

背中中の艤装も中々面白いデザインしてるし（なによりサイドアーム付きだし）、結構いろいろ楽しめた。

戦闘面での単艦でのサバイバリティは十分に確保されているし、今のところ、艦息に転生して良いことづくめである。

それにしてもこの艤装、使い方を極めればかなりカッコイイ戦い方が出来るかも知れない。

デスピナ（転生させてくれたあの子には感謝しないとな。作ったのアンタか知らんけど）

転生させてくれた女の子に改めて心の中でお礼を言いつつ、俺は軽やかな気持ちで西に増速し

航空参謀「二富士っ二鷹っサン、ボオオオオオウ !!」

副長「フンツッ！」ドゴオ

航空参謀「ぐはあ!？」

……あの副長、そのネタそろそろ終盤だろうから、別に殴らなくても良かったんだけど。

砲雷長「はあ……」

砲雷長は頭に片手をやりヤレヤレと首を振っている。彼女はデスピナの乗組員妖精

の中で一番落ち着きがある分、悩む事も多いのだろう。

同情するぜ、砲雷長。

こんなチームで果たして大丈夫なのか、俺も今から不安になってきた。

そしていつになったら艦娘に会えるのかも、そろそろ気になってきた。

特に、日本の空母娘達と会うのが特に楽しみに思っている。

裕一としては、嫁艦（と俺は思っている）の翔鶴に会いたいと言うのが大きいけど、デスピナとして、そして一人の兵器好きの男の子としては、要塞空母の遠い親戚であり、空母の大先輩であり、歴戦の勇士も多い彼女たちに、是非とも手合わせをお願いしたい。

歴史が勝つか技術が勝つか。

シミュレーション
空想でしか実現出来なかったこの問いかけの、一つの答えを出したいのだ。

……目の前に妙にデカイ雲があるが、不吉なことの前触れでない事を祈ろう。

り、空のプロでもある。言う事は素直に聞いておいたほうが良いだろう。

五月蠅い時もあるしウザい時もあるが。

つーかコイツら妖精って、本当に女なのか？ 声は女の子のそれに近いけど。

それはそうとして……

バゴオオオオオオーン!!

デスピナ「!!?」

副長「きやあ!!」

砲雷長「ひッ……!!」

航空参謀「うわあっ!!」

さつきから雷がかみなり凄^い。裕一として日本で良く経験した「ピカッと光ってから何秒後に

ゴロゴロ」なんて生易しいものではない。「光った瞬間に即ズドン」である。

デスピナ（落雷地点は大分近いな。どうか俺に直撃しませんように……）

さつきのはマジでビビツたぞ……全く心臓が悪い。

サンダーボウとかイズナーとか持っていたウイングダイバーのそばで戦っていたエ

アレイダー達も、こんな思いしながら戦場に居たのだろうか。

この艦装に避雷針あったっけ？ あるなら立てておきたい。何せこの真つ平らな大

海原で一番高いモノと言え、俺の背中の艦装から伸びるバラムの頭部みたいな形の艦

橋だけだ。雷の気持ちになつて考えれば絶対ここに落ちるはずだ。

デスピナ「副長！ この艦装に避雷針は無いのか!？」

副長「今立ってます！ 艦橋、避雷針よーい！」

頭上からわちやわちやと声と物音が聞こえた。

やっぱりそこ艦橋だったのね。妖精もちゃんと居るし。

今更だが服もグショ濡れで気持ち悪い。着替えるのは叶わなくても、せめて乾かしたい。

横須賀に着く1日前くらいまでには天候回復していると良いのだが。

ピシヤアアアー!!

デスピナ「…!! ええい、さつきから鬱陶しい」

副長「裕一さん、右手の指輪を」

デスピナ「ん？」

副長「上に掲げて、「遮音フィールド展開」みたいな事を念じてみてください」

雷が来たから金属物の装飾具は捨てろとでも言うのかと思つたが、違った。

デスピナ「そんなものもあるのか」（遮音フィールド展開）

言われたとおりに右手を掲げ、心の中で念じてみると、自分の身体と艦装をすつぱり包むように半透明な半球状のバリアのようなものが形成された。

EDF4に登場した、「シールドベアラー」が発生させる防御スクリーンに似ていた。デスピナにとっては、自慢の巡航ミサイルの全てが無効化されてしまう、忌々しく憎きアイツだ。

裕一にとつても、空爆を含めたあらゆる攻撃を防がれ、ミッション攻略を難しくしたウザつたいアイツである。

フィールドを展開すると、さつきから鬱陶しかつた雷鳴に、絶え間なく降り続けているせいで最早すっかり耳に慣れてきた雨音が嘘のように、あたりはシーンと静まり返つた。

デスピナ「おー、すつかり静かだ」

副長「外側の音は内側に、内側の音は外側にもれないようにするフィールドです。まあ、百パーセント遮断出来る訳ではないんですけどね」

確かに、耳を済ませたらまだ雨音が聞こえる。でも、建物の中で大雨を聞いている時の音よりもずっと小さい。

しかも、ある程度は本当にバリアとしての機能もあるようで、幾何学模様の描かれた半球状のフィールドを雨が伝っている。

先に教えてくれよこういう事は。

これなら、航海しながらある程度は服も乾燥させる事が出来そうだ。

湿度が高いなんてもんじゃなければ、すごく生乾き臭くなるだろうが、ずぶ濡れで鎮守府の門を叩くよりはマシである。

デスピナ「こう言うバリアみたいな物って、他にも何かあるのか？」

副長「ええ、ありますよ。防御スクリーンとか、電磁フィールドとか、色々」

デスピナ「マジかい……」

右手の指輪のデザイン、遮音フィールドを展開したときにも思ったが、「赤い宝石に青みがかかった銀色」って、明らかにシールドベアラーの特徴的な外見を表したものじゃないか。

デスピナ（おいしい、便利すぎだろ幾らなんでも……）

まあ、最大限利用させて頂きますけどね。便利だし。

フォーリナーの卑怯な技術も、味方につけてしまえば非常に頼もしいものだ。感謝してやる。

……まさか本当にフォーリナーの技術な訳無いよな。

暫く雨が続くとなると、偶にある深海棲艦の襲撃に対処する以外は、とたんにやる事が無くなる。

え？ 晴れの時でも特になにもしてないじゃないかって？

逆に訊くが、何かすることあると思うのか？

相変わらず俺は誰に質問しているんだ……。

と、今度は、

航空参謀「いよおっし！ んじゃ暇つぶしにしりとりでもしよーぜ！」

唐突に、航空参謀がそんな事を言い出した。

今更だが、航空参謀の服装は副長や砲雷長の着ているような白い略服とは大分違い、カーキ色のジャケツトを着ていて、頭には帽子ではなくヘッドセットを付けている。

副長「んー……まあ、暇ですし、敵襲が無い間は良いですよ」

デスピナ「そうだな。特に話し合わないといけないような事も無さそうだし」

航海をする船の上とは、戦闘や訓練が無いときには途端に暇になるものだ。

裕一が前に居た世界の事を話しても良いのだが、そうしたら平和な一般市民の生活に未練が出てきそうな気がするのでやめておく。

デスピナとしては……覚えていない事も多いし、機会があったら、な。

デスピナ「ところで、さっきから砲雷長の声が聞こえないけど、誰か知らない？」

副長「艦装の中でガタガタ震えています」

砲雷長、かみなり雷怖いのね。

そんな事で大丈夫なのか？ この先悪天候の中航海する事も多くなるだろうと言うのに。

副長が砲雷長を慰め再び兵装の指揮を執らせつつ、しりとりが開始される。

さて、しりとりをしながら航海をしつつ、敵の反応がレーダーに映る度にライオニツクで沈めてを繰り返しているのだが、いい加減面倒くさくなってきた。

その内、

航空参謀 『『ジャギユア』』

デスピナ 『『アクイラ』』

砲雷長 『『ライオニツク』』

CDC妖精 「……」ポチ

バシユウウー

ライオニツクが発射され、敵に向かっていく。

副長 「えと……えつと……あつ、『クルージング』！」

航空参謀 『『グラインドバスター』』

デスピナ 『『高雄』』

砲雷長 『『オート・メララ』』

副長 「うーん……『ラッコ』！」

航空参謀 『『コマンチ』』

デスピナ 『鳥海』

砲雷長 『イージスシステム』

副長 「む!?! むー、『麦めし』!」

ライオニックが敵に着弾する。

こんな具合で、しりとりしながらコマンドを操作して敵を沈めている。CDCには暫くの間艦装の管理をまかせつきりだ。俺も怠け者になったものだ。

雨と雷はかみなり静まるどころか勢力を増している。まだまだ抜けられなさそうだ。

航空参謀 『シーホーク』

デスピナ 『駆逐イ級』

砲雷長 『ウエポンベイ』

副長 「い……い……」

CDC妖精 「……」ポチ

バシユウウウー

N5ミサイル発射。もう敵を見つけた瞬間に独断で発射しちやつてるよCDC妖精たち。

後で労いつつ、もう任せつきりになる事が無いようにしないとな。

ところで、N5系列のミサイルってトマホークミサイルに似てるよな。それをベース

にしたのだろうか。

副長 「『口』！」

デスピナ 「『千歳』」

もうかれこれ30分くらい続いている。一回、砲雷長の『レールガン』で終わってしまった。

別に誰が決めたというわけでもなく、副長以外は各々一定のジャンルに沿って答えているため、流れによってはそろそろ他のジャンルの単語も使わないとかもしれない。

砲雷長 「せ……、せ……」

おや？ 砲雷長の様子が……。

砲雷長 「セントリー……ガン……キャノン……、…砲」

デスピナ 「流石に無理ありません」

副長 「またライちゃんの負けだね」

砲雷長 「うう……」

砲雷長の“雷”で「ライちゃん」か。仲良いのね君ら。

副長は何だろう。フクちゃん？ 安直すぎか。

その内、誰が宣言する事も無く不毛なしりとりは終わり、艦装の主はCDCから俺に

戻った。

いやね、いい加減飽きるのよ。しりとりみたいな単調すぎる遊びつて。

ネタは尽きるしだるくなるし。更に言えば飽きるし。

あ、N5ミサイルが着弾した。

重巡3隻と雷巡3隻をワンパンで沈めたらしい。それも全てeliteクラスを。

やはり、それなりに威力は高いな。

にしても、この辺りの海域でeliteとは随分弱いな。さては逸れ艦隊か？

.....

転生3日目の終わり頃。

この世界に転生してから、もうかれこれ2日と半日ほどの時間が経過した。

かれこれと言えるような日数では無いかもしれないが、とにかく暇なのだ。そのせいで時間の流れが非常に長く感じるのだから、もうかれこれと言っても良いじゃないか。そう言えば、俺が転生した辺りの時間が昼間と言う事から時差を計算すると、その時

の日本の時刻は朝。裕一として過ごしていた世界との時刻は大体合っているようだ。

CDCに年月日を確認した所、西暦は2024年。裕一として生きていた世界の20

17年から7年進んでいて、デスピナとして存在していた世界からは、覚えている限りでは1年ほど早い。

月日は、本日6月15日。つまり中旬か。

何とも中途半端に、元いた世界からは暦がズレている。

相変わらず、雨粒が遮音フィールドにたたきつけられては、それを伝い海面に流れ落ちていく。

今日も太陽を見ることなく日が暮れ、時折鳴る雷かみなりと手元のコマンド画面以外に、辺りには明るい物がすっかり無くなった。

濃い灰色をしていた雲もすっかり夜陰に紛れ、水平線の彼方まで暗く沈ませていた。

一目見ただけでは本当に雲なのか判らないが、時折落ちる稲光によって影の正体が映し出される。少し綺麗だ。

コマンドから時間を確認した所、この場所はそろそろ深夜0時を廻るらしい。

ずっとリーダーを眺めっぱなしだと変な風に眼が慣れてしまい、肩にある探照灯の存在を忘れてしまっていた。

電気を消した部屋でPCやスマホの画面を見続けたり、夕方ごろから携帯ゲームを始めたらいつの間にか日が沈んで部屋の中が真っ暗になってたとか、そんな感じである。

海図にある程度航路と現在地が示されているとは言え、真っ暗闇の大海原を進み続け

るのは少し怖いので、いい加減後ろの艀装の肩辺りに位置している探照灯を付ける事にする。

デスピナ「副長、探照灯つけてくれるか？」

副長「了解です」

よじよじと艀装の連絡通路の右側を登り、反対側に声を掛ける。

ちなみに、現在砲雷長と航空参謀は艀装の中で仮眠をとっている。妖精さんにも睡眠が必要らしいので、交代で見張りをさせる事にしたからだ。

副長「誰かー、そっちの探照灯つけてー」

連絡通路左ドアから誰かが出てきた。

妖精「探照灯つけるよー」

妖精さんだ。羅針盤まわすよーみたいなノリで言葉を発したコイツは、さしずめ照明係だろう。

カチツ ブオオーン――

左右二基ずつ、計4基の探照灯が自動車のヘッドライトのように海面を遠くまで照らす。

心理的に不安を煽ると言われる暗闇の中で、その光は一種の安らぎをもたらしてくれだ。安らぐには少々眩し過ぎる気もするが。

警戒のためレーダー／ソナーを全画面表示で開きっぱなしだったコマンド画面を切り替え、海図を使い現在地を確認する。

現在地は、まだまだ日本列島から遠い。

途中、またまた教えてもらった便利機能の一つ、コマンドメニューの”システムリンク”から

「衛星軌道兵器ノートウング」による画像を傍受し、ハリケーン的位置と海図を照らし合わせる。偵察衛星としての役割もあるのかソレは。

一体何時の間にあんな戦略兵器を打ち上げたんだ？　すぐにバレて撃ち落とされそうなものだが……。

後で副長から聞いておかねば。

夜通しで西に向けて2日半も航海し続けたので、経度180度線は越えたようだ。当のハリケーンは俺が目指す方向とは逆の東に移動していたようで、いつのまにか大分外側の辺りにいる。

日本に辿り着くよりもずっと早くに、太陽と再開出来るはずだ。未だに乾ききつていない服を乾燥させるためにも、晴れてくれたほうが都合が良い。

デスピナ（それにしても、本当に艦これの世界なのか？　ここは）

今更ながら、疑い半分にと考える。

艦これでは確か、戦艦娘アイオワがいた場所が、俺が転生した場所から一番近いハワイだったはずだ。

デスピナ（こつちの時系列はどうなっているやら）

ゲームと同じ進み方をしているのなら、ハワイはまだ敵の手中に落ちたままだよな。

デスピナ（いや待てよ？　ハワイにアイオワを助けに行つたあのイベント戦では、作戦の前段階で近くの島に航空基地を建設したんだつた。そつちには寄つてみても良かったかも知れないな……今更だけど）

だが遭遇した深海棲艦隊の中に、艦これフアンの間で改flagshipクラスと呼ばれていたであろう固体が見当たらないあたり、時系列はいくらか前とも考えられる。

いずれにせよ、初めから横須賀に航海を開始して正解だったかも知れない。

そう言えば、転生した直後に遭つた戦闘以外、深海棲艦の大規模な襲撃は無い。

散発的なのが1時間に1回か2回あるくらいである。ただし全部flagshipかeliteだけど。

案外、深海棲艦の数はそこまで多くないのではないか？　いや、今そんな事を考えたって正確な答えが得られるわけないけどな。散発的とはいえ、さつきから襲撃自体はあるんだし。

少し考え事をしては中断してを繰り返して数十分。突然コマンド画面に小さい別ウインドウが出現した。

それにはこう書かれている。

【注意：着用者の身体より過度の空腹状態を検知。食事などの栄養摂取を推奨】との事。

副長「ん…：デスピナさん、おなかすきませんか？」

デスピナ「別に、ハラ減った感じはしないんだけどなあ……」

副長「艦娘は、艦装の燃料と弾薬の減りぐあいで空腹感が起きるんですよ。もちろん、それらの有無に関わらず身体のほうに栄養補給が必要なので、頃合いを見て軽く食事は必要なんですけどね。まあ、このデスピナ艦装に搭載されている機関は燃料いらすの核融合炉ですし、弾薬も自分で生産出来るので空腹感はそう起きない筈です」

デスピナ「なるほ…：ん？　じゃ何で今お腹空いてるか訊いたんだ？」

これくらい矛盾に気づかないほど、俺はバカではない。

副長「それは——う…：…」 キュウウ

右肩から、なにやら可愛らしい音が聞こえる。

デスピナ「…：腹、減ったのね」

副長「はい……」

睡眠だけでなく食事まで必要らしい。

まあ、それは俺も一緒らしいので、食べられるものの有無を確認する。

デスピナ「何か携帯食料みたいな、軽く食べられる物とか積んで無いか？」

副長「確認してきます」

艀装の中に入り、後ろから小さくガチャガチャゴソゴソと物音が聞こえた。

背負ってる艀装の中全体から物音が聞こえたので、おそらく起きている妖精を総動員して食料在庫の有無を確認しているらしい。

デスピナ（何もそこまでしなくても……と言うか、流石にこの大きさの艀装でも食料庫は無いのか）

そう言えば、この2日間何も飲んでいないが、水分の方は大丈夫だろうか……。

1分とかからずに、副長が再び俺の右肩に戻ってきた。

副長「すみません、艀装の隅々まで確認したのですが、米粒一つありませんでした」
デスピナ「マジですかい……」

横須賀に着くころにガリガリになってたりしないだろうか。

副長「でもご安心ください！ 航空機格納庫の中から、こんな物を発見しました。

航空参謀！」

艀装左の格納庫へと続くエレベーター入り口のシャッターが開く。

航空参謀「あいよー。ふわあく……」

欠伸を垂れた航空参謀がシャッターを上げて出てきた。

妖精——航空兵だろうか——を1名引き連れて、ある物を引きずって入り口から少し覗かせる。

デスピナ「……釣り竿？」

リール付きの釣り竿が短く縮められたものを受け取る。

航空参謀「んじゃ、ウチはまた寝るゾグエ！」

副長「だーめですよ。もう4時間経ったんだから、私と交代です」

航空参謀「えー……」

副長「えーじゃないです。私だつて眠い中仕事してたんですから、次はクウちゃんの番ですよ」

格納庫エレベーター入り口から中央連絡通路を通り、俺の左肩に航空参謀が放り出される。

副長「では、頑張ってくださいねー……くあく……」

そう言つて副長は、欠伸と共に中央ブロックの居住スペースに入つていった。

航空参謀のあだ名はクウちゃんね。覚えた。

デスピナ（なんかいいな。こう言うの）

彼女達のやりとりを聞き流し、素直にそう思った。

思い返せばたった一人、裕一の世界で転生した初の人間となって以来、誰かと会話しなかつた事が全く無い。

俺はこの小さくもやかましく、そして頼りになるデスピナ艦装の乗組員たちに、早くも家族のような温かみを感じ始めていた。

この2日間を、まるで昔のことにように回想する。

もし副長がいなかったら、砲雷長がいなかったら、ついでに航空参謀もいなかったら、要するに会話の出来る妖精、やるべき事をはつきりと指し示してくれたり話し相手となつてくれたりする存在が、誰一人としていなかったら……。

俺は転生したばかりで、右も左も分からぬまま深海棲艦に殺されたかも知れない。

上手い事コマンドを扱えて、海図の表示の仕方も分かり、己の英語力の無さを嘆きながら横須賀に向かつていったとしても、何時止むか分からない雨を鬱陶しがり、突然の落雷と何時あるか分からない敵襲に脅えながら、遮音フィールドの張り方も分からずに風邪を拗らせ、そのまま飢えと体温低下で衰弱死したかも知れない。

この広い広い太平洋に抱かれながら、己の無力さに嘆き苦しみながら、せつかく転生させてくれたあの女の子の願いを叶えてやる事も出来ないまま、念願だった艦娘に会う

ことさえ叶わないまま、むぎむぎと死を受け入れていたかもしれない。

……ん？　ちよつと待て。そもそもコイツら妖精つて、いつから俺の艤装にいたんだ？

まあ良い。後で詳しく訊いておこう。

たとえ俺と副長たちが会おうのが必然だったとしても、彼女達には本当に感謝している。

あいも変わらず降り続けている雨は、いつの間にか若干弱まっていた。雷かみなりもすっかり鳴らなくなっている。

どうかこれが、俺の不安を一気に吹き飛ばす、希望の朝日ひかりへと繋がってくれますように。

あ、方角真逆だわ。

——で、だ。

デスピナ「この釣り竿は……」

航空参謀「魚釣って食えて事じやないっすか？」

デスピナ「だろうな……ておい。生で食えてるか」

急に冷たい仕打ちである。現在気温9℃だけに。

航空参謀「艤装の中に、簡易的だけど厨房があるんで、そこで加熱すれば良いっすよ」
デスピナ「おお、何だかんだで設備は充実してるのな。中途半端だけど」

厨房はあるのに食料庫が無いとか、とんだ欠陥空母だよ。そんな艦じゃねーからつて？
じゃあ何のために厨房あるのかつて話だよこの野郎。

でも良かった。腹下せとでも言い出すのかと思った。あ、魚の餌が無い。

デスピナ「とりあえず、ダメ元でなんか釣るか」

航空参謀「そうした方が良さそうっす…と言うかしてくださいます腹へりました…」

デスピナ「まあ待て。それより餌か疑似餌は？」

航空参謀「あー忘れてました。取って来やす」

デスピナ「……」

段取りの悪いことで。

本当にこんなのがデスピナの航空参謀で大丈夫なのだろうか。

艤装内に戻ったクウちゃんこと航空参謀は、両手で魚の玩具みたいな疑似餌を抱えて
すぐに戻ってきた。

デスピナ「ところで、クウ。そろそろハリケーンは抜けられそうか？」

航空参謀「お、あだ名で呼んでくれるたあ嬉しいっすねえ。…そうだなあ」

再びコマンドでノートウングからの画像を呼び出し、海図と照らし合わせる。思った

よりも早く抜けられそうだ。

航空参謀「あと3く4時間もすれば、お月様も見えてくると思いまっせ」

デスピナ「んじゃ、その時になったら釣り始めるか」

航空参謀「夜の釣りデートと洒落込みましようや旦那！」

デスピナ「デートって……新しいジュークだな。まあ良い。小魚の一匹や二匹、すぐに釣ってやるよ」

ちよつと言い回しに格好をつけてみる。

航空参謀「楽しみに待ってまつすよーつ。て、まだ気は早いっすね」

彼女は軽く聞き流す。

コマンドから時間を確認すれば、そろそろ深夜1時を廻る頃だ。ハリケーンを抜けたら、遮音フィールドを解除するか。今夜の月は綺麗な事を祈ろう。

転生4日目のスタートだ。

第二章：遭遇、そして邂逅

第6話：く太平洋横断記く「遭遇」編

つい今朝まで自分が突破してきた東の空は、まるで別世界への出入り口のように分厚い雲が広がっている。

一応自分は、転生してからあのハリケーンの中を突破してきたため、本当に異世界との境目のようにも感じた。

6月16日、転生して4日目の昼。

ようやく、待ちに待った青空を拝む事が出来た。

朝日までは見られなかったが、明け方のお月様を眺めながら、「変な魚、釣ったぞー!! (With 航空参謀)」して手に入れた、名前の分からん魚を焼いて食べるのは格別だった。

元々使っていた疑似餌ではどうにも調子が悪かったので、途中、疑似餌を魚の飾りから、俺と航空参謀の悪ノリで彼女に換装してみたら、何故か大物が釣れた。

航空参謀「し、死ぬかと思っただぜ……」

それも、30cmくらいのやつが連続で。

寄ってきたところを体張って捕まえてくれたのだ。お礼に彼女には沢山食べさせて、航空兵達への土産も持たせてあげた。

その疲れかどつと出たのだろう。航空参謀は、東の空に広がる雲の上から太陽が顔を覗かせる前に、床についてしまった。今俺の肩には副長と砲雷長が乗っかっている。

副長「わあ、すっかり晴れましたねー！」

砲雷長「ふあーあ……いい天気」

おかげで、グシヨ濡れだった学ランも大分乾いてきた。でもちよつと暑いよやっぱ
…。

さて、太陽が昇り空は晴れ、服も気分も晴れた所で、副長に今まで気になった事を訊いておく。

訊くべき事は、以下の2つだ。

訊くべき事その1：衛星軌道兵器ノートウングについて

これは絶対に訊いておかねばなるまい。いつのまに軌道上に乗せたとか、バレー撃ち落されないのかとか、何機あるのかとか。

特に後者は重要だ。滅多に使うことは無いかもしれないが、本当に必要なときに真上に無いとかだったら最悪である。

訊くべき事その2：副長を初めとするデスピナ艦装の妖精達はいつから艦装にいるのか

これも、この世界においては割と重要だと思う。

俺の艦装に居る以上、他の艦装にもほぼ確実に居ると予想は出来る。ならば妖精達は、艦娘が”造られた”後で艦装の乗組員になったと考えるのが妥当だろう。

問題は、俺の場合は艦息として転生したのが太平洋のド真ん中と言う事である。

ノートウングについても言える事だが、この世界の俺がいつ、どこで造られたのかを知る手がかりを得るためにも、そしてこの世界における妖精の素性を少しでも知るためにも、是非訊いておきたい。

さて、まずは1つ目から片付ける。

デスピナ「なあ、副長」

副長「はい。なんでしよう？」

デスピナ「昨日の夜、ノートウングからの衛星画像見たけど、アレって何機あるんだ？」

副長「12機はありますよ」

デスピナ「12機？ マジで？」

副長「マジです。正20面体の配置を起点として、12機の攻撃衛星が、衛星軌道上で攻撃指示を待っています」

デスピナ「そうか…」

結構多いな。まあ、発射される光学兵器は大気による減衰で威力が若干下がるから、大気の層が厚くなる斜め下方には発射したくないんだな。機数が多いのは、出来るだけ真上から発射出来るようにするためだろう。

デスピナ「いつの間に、あんな物騒なモン12機も打ち上げたんだ？」

副長「うーん…いや、実はわからないんです」

デスピナ「分からない？」

副長「はい。私たち妖精は、艦艇が艦娘として転生した直後に、艦装の扱いをサポートするために派遣されるんです。デスピナさんに限らず、艦娘がこの世界に生まれるまでは、私たちデスピナ妖精を含め艦装の妖精はみな、この世界に存在しませんでした。なので、艦装についてどれだけ非常識なことがあつたとしても、私達には”それが現実だから”と割り切ることにしか言えないのですよ」

意図せず、訊くべき事その2に片足踏み込んでしまった。

彼女達には、ちまっこい図体に見合わずちよつとした事情がある存在らしい。

何はともあれ、少なくとも12機もあれば、いざ必要になった時に使えないなんて事

は無さそうだな。

デスピナ「つまり、ノートブックがいつ打ち上げられて、何故平然と周回軌道を回っているのかは、副長にも分からないって事か」

副長「はい。お答えできず申しわけありません」

そう言つて、副長はペコリとお辞儀をする。

デスピナ「別に、副長が謝ることじゃあない。追々、俺のほうで調べてみるさ」
さて、次は2つ目だ。

デスピナ「話は変わるけど、さつき副長、妖精は艦娘が生まれた時に派遣されるって言つたけど、どこから派遣されるんだ？」

副長「この世界には、世界を管理する”神様”のようなものが存在しているんです。その補佐であり、私たち妖精のまとめ役である”大妖精”から、役割を与えられてこの世に降り立ちます」

なにやら、想像以上に規模がデカイ事情があるらしいな、妖精つて。

デスピナ「異次元からやって来るって解釈でおk？」

副長「おk」

デスピナ「ところで、”大妖精”って誰？」

「異次元」「神様の補佐」と言う単語から、一人の人物を想像する。

副長「猫をぶら下げた、人間とほぼ同じ大きさの女の子です」

やっぱりかー。あの悪魔っ子（仮称）かー。

俺を裕一からデスピナに生まれ変わらせてくれたのは素直にありがたいけど、太平洋の真っ只中に放り出すのは流石にどうよ。やっぱアンタ鬼だろ。

誰か他の艦娘が通りかかった所で拾って貰えってか？ ドロップ待ちしろってか？ 略してドロ待ち。ラノベのタイトルか。

デスピナ「じゃあ、副長たちが俺の艦装の妖精としてやって来たのは、いつの話？」

副長「裕一さん——いえデスピナさんの魂がこの世にやって来た時ですよ」

なるほど、どうりで転生した直後には見当たらなかったのに、突然声をかけてきたのね。

デスピナ（収穫ナシ、か）

結局、俺の生まれについては何も分からなかった。

副長の言っている事が真実なのかは分からないが、疑った所で、同じ問答が繰り返されるだけだろうから、問い詰めるのはやめておく。

そもそも俺は、すでに魂だけ現実と創作物の壁を超えてしまった。

艦これをはじめとした二次元の世界なんて、根本的には「絵（イラスト）」や「マンガ」「ゲーム」と言った、“人や世界に似ているもの”でしか無いのだ。

二次元世界とは元より、”紙に塗られたインクの薄い膜”や、”モニター画面を構成する無数の素子の発光の仕方をプログラム制御する事によって表現しているもの”

と言う認識を思い出せば、元居た世界の裕一の魂が艦これの世界に転生した時点で、どれだけ現実の物理の常識を超えてしまっているのかは明白である。

だがその「超常的な現実」が起こってしまった以上、

”この世界で艦息として生まれたのだから、必ず俺は誰かに造られた筈だ”との先入観は、持っている時点で無駄なかも知れない。

何故なら、俺がこの世界で目覚める直前を目撃していた者は、何処にもいないからだ。やはり、本当に大海原に完成した”俺”が召還されたと見るのが、妥当だろうか。

いずれにせよ、現時点で分かっている事は一つ。

確かに俺は、太平洋のど真ん中で目覚めた。それだけは確固たる事実だ。

デスピナ（しかし今は……）

CDC妖精「！ レーダーに反応あり！ 敵機動艦隊が本艦に向けて接近中！」

デスピナ「こつちでも確認した。総員、戦闘態勢！」

考えるのを中断し、目の前の障害を取り除く事に専念する。

何事も、まずは横須賀に到着してからだ。

楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまうが、つまらない事や面倒くさい事をしている時間はかなり長く感じる。

でも航空参謀を餌にして釣りをするのは結構楽しい。

昨日は良く晴れていたため、夜には改めて、月が昇った中での釣りに勤しむ事が出来た。

6月17日、転生5日目の昼前。

だんだん、出現する深海凄艦の主力艦も、eliteの割合が高く、flagshipの割合は低くなってきた。

海図によると、そろそろ日本の最東端である南鳥島が見える頃だ。見えると言っても、厳密には広域レーダーの探知範囲内に入るっただけだから、まだ遠いことには変わらないけどな。

そこを起点に北西へ進路を向ければ、少なくとも日本列島最大の島、本州のどこかに、確実にぶつかるとは思われる。

副長「横須賀まであと少しですね」

デスクピナ「つつつても、あと2日以上動き続けないとね……」

まあ、大分目的地に近づいた事には変わりあるまい。

今までは主機に余計な負担を掛けぬよう20ノット前後で航海をしていたが、どうせ永久機関なんだし、もう少しスピード上げてても良いよね。

デスピナ「副長、この主機つて最速どれくらい？」

副長「現用艦船にはついて行けませんから、30ノットは固いですよ」

デスピナ「お、図体の割には速いな。それじゃ、最大船速！」

機関出力を上げ、スクリュウの回転数を上げる。

南鳥島までは、直線距離で残り約500km。南鳥島から横須賀までは、約1800km。

合計2300km。遠っ。

小中学校でさんざん習わされた、いわゆる「み・は・じ」の法則に当てはめて、30ノットで全力航行した時に掛かる時間を計算してみる。

「距離(km) ÷ 速度(km/h) = 時間(h)」の公式に、各数値を当てはめると、以下の通り。

※30ノット = 55.56 km/hとして計算

2300 km ÷ 55.56 km/h = 約41.4時間

41.4時間…

41・4時間……

つまり2日かかることには変わりねーって事だよ畜生。

10分後……。

航空参謀「グッモーニンっジャステイリース!!」

副長「意味分からん」バキヤ

航空参謀「ぶべらっ!?!」

おはよう。

まだまだ掛かりすぎる時間に、心の中で悪態をつきながら航行し続けて30分弱。

突然、リーダーに一際大きな反応が現れた。

デスピナ「なんだこれ、赤い上にデカイ……」

副長「!? これはまさか、鬼の反応!?!」

デスピナ「鬼? ……て、鬼!?!」

副長「鬼です! 総員、警戒態勢!」

速度を再び20ノット近くまで落とし、コマンドから海図を開く。現在地をリーダーの中心と合わせる。

なんと、太平洋から日本列島へ向かうチェックポイントである（と俺が勝手に思い込んでいた）南鳥島と反応が一致した。

通称「鬼」。この世界でもこの呼称なのかは分からないが、少なくとも裕一の世界の前世で遊んでいたブラウザゲームには、通常の敵艦船とは一線を画す強さを誇る、いわゆる「ボスキャラ」に該当する者が存在した。

「鬼」や「姫」と分類されたそれらは、特定の海域やイベント戦にて、その圧倒的な性能を以て猛威を振るい、全国の提督諸氏を苦しめた。

その一角が今、目と鼻の先に迫った……いやだから500km近く離れている目標なんて水平線の遥か彼方に隠れて見える訳ないっつーの。

それだけ遠くの南鳥島に、その鬼が巣くっているらしい。

俺はコマンド画面から、既に2度はお世話になっているノートウングからの衛星写真を傍受する。

デスピナ「コイツは……」

副長「これは……!」

砲雷長「……」

航空参謀「おう!? なんすかコイツ!」

何とも形容しがたいモノが、ホログラムで構成される画面に映っていた。

島の北端を頂点として、三角形の左辺に沿うように伸びる滑走路は、通常 of 空港のそれに見られるように太陽光を反射したアスファルトの色はしておらず、黒く沈んでいる。

それを滑走路だと分かるようにしているのは、赤白い色で発光する中央の白線である。

更に異質なのは、南鳥島そのものだ。

南鳥島に限らず、離島と言うものはその立地も相まって開発が進まず、青々とした自然が見えているのが普通だろう。

衛星写真に写るそれは、生い茂っている植物の息は殆ど感じさせないほど赤黒く染まっている。

島を一周する砂浜と思いき縁ふちも赤々と不気味に光り、周辺5 kmほどの海域は、まるで意思を持ってそれらの色に合わせているかのように真っ黒である。

画像を拡大してみると、沿岸には複数の黒い構造物が確認でき、形状から大小さまざまな砲台であると確認出来た。

一言で表すなら、“南鳥島そのもの”が、絶海の孤島を利用した、一つの巨大な要塞と化していたのだ。

デスピナ（……形容出来てるじゃねえか。”形容”の意味合ってるか覚えてないけど）

一人ノリツツコミをしながら、敵の正体を推測する。

飛行場そのものの規模はそこまで大きいものでも無さそうだし、南鳥島は”離島”である。

もう一度繰り返す。”離島”である。

これらの状況から予測するに、恐らく敵の正体は――

デスピナ「離島棲鬼、だな」

副長「……そのようですね。どうします？ 無理に戦う必要も無いとは思いますが」

デスピナ「うーん……」

こりやまた、攻略難易度高い奴を見つけちゃったなあ……ハーデストくらいか？

右手を顎にやり、左手を右肘に添えて考える。彼^{ひが}我の戦力差を比較し、被害を最小限に抑えるためだ。

そのためならば、敵との接触を避け、時間が掛かっても大回りで横須賀を目指す事も選択肢に入れねばならない。

敵の性能も総数も未知数な以上、下手に手を出して轟沈とかしたら最悪である。

デスピナ（ミサイルでアウトレンジを決めるか、ノートウングで消し炭にするか……早速衛星兵器は大人気ないか？ いや健在の敵に慈悲とか掛けるのはおかしいだろうに）

だが下手に使うのも、それはそれでマズい。他の観測衛星に見らたりしたら、ノートウングの存在が早速モロバレしてしまう。下手に他国に知れたら、破壊…されるならまだ良いが、最悪乗っ取られて諸外国の重要施設を消し炭にされてもおかしくは無い。試しに、リーダー上の離島棲鬼の赤い反応をタッチしてみた。

しかし、コマンド画面の大きな赤い反応は、いつも敵にロックを掛けたときみたいに明滅せず、兵装選択メニューも出現しない。

目標物が密集しすぎていて上手く打ち込めないのか、ECMの類でも使用しているのか、何故かリーダーロックが出来ないのだ。

CDC「！ 敵航空基地から、航空機多数発進中！」

まさか……

デスピナ「感づかれたか？」

衛星からの画像の更新速度をうんと速め、映像と呼べる状態にする。

嫌な汗が背中を流れる。手先と顔がほんの少しだけ痺れたような気がした。

しかし、忘れかけていたが敵との距離は約500km（今は490kmくらいか）。広

域レーダーや偵察衛星でも持つていなければ、相手の存在を確認出来ないのは向こうも同じなようで。

CDC「敵機総数、およそ70機！」

副長「……いや、逆ですね。北西の方向に飛んで行きます」

現在、俺たちのいる所は南鳥島から見て東南東の方向であるため、敵の航空機の目標は俺たちでは無いようだ。

念のため、自身の周辺もレーダーとソナーで見渡すが、反応はナシ。つまり……

航空参謀「コイツら、さては日本を空襲するつもりか、あるいは……」

副長「味方の艦娘が、この海域に接近しているとも考えられますね」

方角的には、どちらの意見も一致する。

デスクピナ「いずれにせよ、ここで落としておいた方が良さそうだな」

副長「ええ。せめて航空機だけでもなんとかできれば」

今ここで、完全に無視を決め込むと言う選択肢は捨てられた。

機関の出力をさらに落とし、レーダー／ソナー画面を見つめる。

さつきまでまばらとは言え、eliteやflagshipクラスの艦で構成される艦隊はしよつちゅうレーダーの中に現れたが、今は全く見当たらない。

もう一度、ノートウングから受け取った南鳥島周辺海域の衛星画像を見る。島の周辺

には居ない……。

航空参謀「旦那！ 我ら航空隊の発進許可を！ 敵基地の偵察がてら、航空隊を追撃しやす！」

デスピナ「……出来そうか？」

一瞬考えて、衛星画像では粗くて敵陣の詳細が判りづらい事や、今なら敵航空隊や離島棲鬼に後ろから奇襲を掛ける事が可能な事も考慮する。

航空参謀「衛星からの映像を見る限り、敵の速度はマツハ1程度も無い。マツハ2越えのジェット戦闘機を扱う我々なら、高高度から敵の真後ろに奇襲をかけるくらい朝飯まえつすよ！」

デスピナ「ふむ……」

もう少しだけ、敵の航空機のみ追撃する場合と、離島棲鬼攻略も視野に入れる場合の両方のケースを天秤に掛ける。

ケース1。

制空権の確保だけを考えるのなら、戦闘機だけ出撃させれば良い。敵の航空機に最も効率的に対処できる兵器は、戦闘機しかない。これは第一次大戦からの鉄則だ。

ただ、南島島から放たれた航空隊が全滅すれば、いくら俺の戦闘機隊を見つからない

ように行動させたとしても離島棲鬼がこのあたりの敵性存在に気付かない事はあるまい。

デスピナ（俺の最大船速と敵航空隊追撃の緊急性、敵の偵察機の速さを考慮すれば、母艦である俺が発見されるのは確実……と）

ケース2

敵基地を効率よく破壊出来るのは、対地ミサイルを積んだ攻撃機や爆装を施した航空機である……多分ね。

陸戦隊を載せた発動艇は俺の艦装には居ない（と言うよりこの世界にあるのか分からない）から何とも言えないが、少なくとも艦このゲーム内では三式弾等で大ダメージを与えられたから、爆撃機で空爆させるのが一番良さそうだ。

何より、要塞空母^{デスピナ}には1個艦隊に匹敵する”力”がある。転生直後にelite・flagship艦隊の包囲網を、相手が俺を射程内どころか、航空機の接近さえ許す間もなく一瞬で殲滅した事も考慮すれば、勝算は大いにある。

デスピナ（あつ、でもミサイルロック出来ないんだよな……まあ、デスピナ航空隊で背後から空爆に成功すれば、十分勝機はある……か？）

以上2つの要素で作戦を詰めていく。

デスピナ（あ、そう言えば……）

更に、前世で遊んだ艦これの記憶では、離島棲鬼の航空機はすべて艦載機だった事を思い出した。

日本列島本土から1700kmも離れている南鳥島からは、大型爆撃機なら兎も角、中型の爆撃機や艦載使用の戦闘機／爆撃機／攻撃機程度の航続距離では行って帰ってくる事自体が難しい。

また、やはり離島棲鬼の周辺海域には、ノートウングからの画像を見る限りでは何処にも見当たらない。

北西方向にいくつも向かっている黒い点々を除けば、だが。

まとめると、

「離島棲鬼が戦闘状態＋近くに随伴艦なし〓この海域に深海棲艦側にとっての”敵”が接近中」

と言う図式が成り立つ事になる。

なので、俺の決断は……。

デスピナ「……よし。これより本艦は、日本列島への航路確保のため、敵航空隊追撃及び離島棲鬼攻略作戦を発動する！ 総員、戦闘配置！」

妖精達「「サーイエツサー!!」」

デスピナ「クウ、戦闘隊と爆撃隊の出撃準備を進めてくれ！」

航空参謀「アイサー！ さあ待ちに待った仕事だぞお前らあ!!」

航空妖精達「オオオオオオーーー!!!」

頼もしい声だ。実艦だった頃のデスピナも、この声を聞いたのだろう。ちまっこい妖精の声帯の都合上、やたら声は高いけど。

彼らに任せておけば絶対に負けない。心からそう思えた。

デスピナ（さあ、転生初のイベント戦のスタートだッ!!）

第7話：発進!デスピナ航空隊 (前編)

副長「では、航空隊の発艦について説明いたします」

デスピナ「あれ、副長がやるのか？ クウは？」

副長「なんか、「久しぶりに航空隊の活躍が出来るから」って、航空兵達に激励して
てそれどころではないようです」

デスピナ「そうか」

副長「では、説明いたします。まず、コマンド画面から”航空管制”を選択してくだ
さい」

ボタンをタッチする。

別の小窓ウィンドウに、上から”戦闘隊” ”爆撃隊” ”攻撃隊” ”輸送隊”

”全航空隊一覧”の、5つのボタンが表示される。

今回の作戦はまず、南鳥島に巢食う離島棲鬼の偵察と、北西に発進した航空隊の追撃
のため、戦闘隊をタッチする。

副長「次に——あ、それで合ってます。はい」

あ、ゴメン勝手に進めちゃった。

タッチすると、各種戦闘機で編成された、1種類につき36機で1個大隊を編成する航空隊が、以下の順番で並んでいる。

戦闘隊一覽【部隊表示切替】〔一括解隊〕

戦闘機一	EJ24	—	12機	—	第零中隊	—	【出撃準備】	【攻撃指示】	【解隊】	
戦闘機	—	ファイター	—	36機	—	第1大隊	—	【出撃準備】	【攻撃指示】	【解隊】
戦闘機	—	ファイター	—	36機	—	第2大隊	—	【出撃準備】	【攻撃指示】	【解隊】
戦闘機	—	ファイター	—	36機	—	第3大隊	—	【出撃準備】	【攻撃指示】	【解隊】
戦闘機	—	ファイター	—	36機	—	第4大隊	—	【出撃準備】	【攻撃指示】	【解隊】
戦闘機	—	ファイター	—	36機	—	第5大隊	—	【出撃準備】	【攻撃指示】	【解隊】

〔一〕で括られている単語はタッチボタン)

【部隊表示切替】を押してみると、EJ24を含め12機で1個隊を編成する合計16個もの戦闘機中隊が、「○大隊隷下」と言う分類で表示された。

デスピナ(うわ…気持ちわる)

「戦闘機」「ファイター」「第○中隊」の字がゲシユタルト崩壊を起こしそうなので、もう何回かタッチして大隊規模の表示に戻す。

例外として、総数12機しかないEJ24は、中隊規模でも大隊規模表示の一覧の中にもいる。

デスピナ「さて、飛び立った敵は、確認出来ただけでも70機。艦娘がこの向こうにいると仮定した場合、すでに同じ規模の航空隊は、俺たちが補足する前に飛び立ったと踏んだほうが良さそうだな」

副長「不測の自体に備えて、第零中隊と第1から第4大隊を発艦させるのが良いのでは無いでしょうか」

素早く暗算する。：156機、加賀さん改の1.5人分ちよいか。何だこの例え。

デスピナ「そうだな：クウ！ 戦闘機の兵装で対空戦用の物は何がある!？」

ガラガラと格納ブロックのシャッターを上げて、航空参謀が顔を出して答える。

航空参謀「EJ24は20mmバルカン1基、対空ミサイルはステルス捨てていいんなら、中短距離合わせて満載で12発！ ファイターは27mmリボルバーカノン1基と中距離レーザー砲1基、対空ミサイルは最大8発っす！」

EJ24でステルス戦闘機だったのか。少なくともデスピナがいたマジモンの「EDF」では。

それよりファイターにレーザー砲!？ やっぱすげえよEDF。

デスピナ「分かった。第零中隊と第1から第4大隊の兵装を、対空戦使用に換装して

出撃準備を急げ！」

航空参謀「そう言うと思って、既に予備の第5大隊込みで換装も準備も終わってまっせ旦那！ あとはそのビッグでドデカい飛行甲板デッキに誘導してくれば、いつでも出れまっすぜ！」

流石はデスピナ航空隊参謀、仕事が早い。

デスピナ「よし。ならあまり時間がないから手短かに言うぞ。第零中隊の任務は、南島・離島棲鬼上空を通過して地上目標を偵察、その後は北西の敵航空隊の素敵と追撃だ。第1と第2戦闘大隊は、南島北側を迂回して別ルートから敵航空隊を追撃し、その後は北西方向に居る深海棲艦の観測機・偵察機含めたすべての航空機を撃墜、制空権を確保してくれ」

航空参謀「りょーかいつ！ しっかり伝えておきませア！」

そう言つて、彼女は格納庫へ降りるシャッターに再び身を隠した。

航空参謀「あ、あともう一つ！」

デスピナ「なんだ？」

シャッターの中に戻りかけた航空参謀が、再び顔を出して話しかけてきた。

航空参謀「今後からは、戦闘大隊のことは“ファイター”にナンバーをつけて呼んでやってください。これがあいつらの名前なんでね！」

デスピナ「了解、今後はそう呼ばさせてもらうよ」

航空参謀「編成の名称についてはまた後でくわしくお話しやす。んじゃ!」

今度こそ戻っていった。

デスピナ(よし、では)

深呼吸を一回。

デスピナ「でも、流石に10発以上ミサイル積んだジェット機を150とか飛ばすのはやりすぎだろうし、敵機追撃に出撃させるのは第2大隊^{ファイター2}までにするか」

まあ、これでも84機はいるんだけどさ…。

副長「それもそうですね。航空参謀! 第3、第4は出撃準備だけすませて待機させて!」

航空参謀「ちえつ、りよーかい…:第3大隊^{ファイター3}と第4大隊^{ファイター4}各機! わりいけど、お前ら

は今しばらく待機だ!」

そして、第零中隊から第2大隊の計3つの航空隊の「出撃準備」ボタンをタッチ。

するとタッチした順番にボタンが「出撃中止」に変わり、背負っている艀装の左後ろからエレベーターの駆動音がする。戦闘機をエレベーターに載せて、出口に運んでいるようだ。

副長「デスピナさん、飛行甲板を」

デスピナ「持ち上げるんだな？」

副長「そうですね。あとは、航空隊が甲板前方に乗ったら、トリガーを引いて、カタパルトで発艦させてください！」

デスピナ「了解！」

ようやく、この時が来た。

なんの運命の悪戯のせいかわ分遅れての初使用となる、左腕の140cm長の飛行甲板の中腹のあたりから、収納式のグリップを引っ張り出し、握って持ち上げる。

二の腕上部に取り付けられているジョイントが動き、前方を水平にするとそれに合わせて後方も水平になる。

飛行甲板後部をシャッター入り口の下に持っていくと、磁力か何かでロックが掛かる。

再びシャッターが開き、中からミニチュアサイズの戦闘機が2種類、F-22似のやつが2機と、F-22とSu-27^{スホーイ}系の相の子にカナード翼がついたようなやつが12機、合計14機のミニチュア戦闘機が、小さくエンジン音を立てながら出てきた。

F-22似のやつは、ミニチュアの数からして多分EJ24で、残りの12機は消去法でファイターだろう。航空参謀の言っていた「レーザー砲一基」とは、前輪の後ろの、左右のエアインタークに挟まれたビッグでぶつといソレだな。

なお、全ての機には航続距離確保の為の増槽タンクが2個ずつ装備されていた。

ミニチュアの数から計算して、コイツら1機につき6機で一つ編成される小隊となるに違いない。前世で見た艦これアニメでも、空母娘の弓から放たれた矢が複数の航空機に分裂してたし、合ってる筈だ：と思う。

最後に航空参謀が、両手に赤いパドルを持って飛行甲板に出てきた。どうやら、部下達の記念すべき初任務の見送りにきたらしい。

航空参謀「オーライ！ オーライ！」

航空参謀の誘導に従い、まずEJ24が2機、横に並び甲板前方に滑るように移動して止まる。それに続くファイターは3列縦隊で続く。

ファイターの最前列はEJ24から1機分ほど間隔を空けて止まる。

すると、EJ24のすぐ後ろの甲板の一部がめくれ上がってプラスチックデフレクターとなり、エンジン音が高く大きくなった。

デフレクターの上には、逃げたジェット排気の高温で蜃気楼が立っている。

キイイイーン!!

EJ24 (ファイターゼロ) 妖精ファイターゼロ《こちら第零中隊、隸下の2小隊とも発艦位置につきました。出撃準備完了しています!》

航空妖精から、左耳に装着しているヘッドセットに通信が入る。

「デイレクターは後続のファイターを発艦させるべく、再び甲板の一部に溶け込んだ。」

すぐにミニチュアファイター3機が移動を開始する。残りの9機も後ろに続く。

3機のうち2機は前方のカタパルトで、もう1機は飛行甲板の前方に描かれている2本のアングルドデッキの内、前方にあるもう1基のカタパルトで、それぞれ発艦準備を完了させる。スペース的に、カタパルトは全部で3基ね。覚えた。

再びデイレクターが起き上がり、航空妖精から無線が入る。

「ファイター妖精《こちらファイター1。隷下の1中隊と1小隊の発艦準備完了!》」

「デスピナ」よし。ファイター1所属の機は、続けて発艦せよ。ファイター1、発進!」
再び戦闘機から轟音が鳴り響き、俺はグリップのトリガーを引く。

シューーンシューウーン!!

12機で編成される1中隊と6機で編成される1小隊の、計18機のファイターが上がり、続く18機で第1戦闘大隊全機の発艦を終えた。

「デスピナ」ファイター2、続け!」

この調子で、戦闘隊を上げて行く。

おおよそ2分ほどで、第零中隊から第2大隊、機数に直すと合計84機もの大航空団

が、6月の太平洋の日差しを機体背面（せな）に受け、大空に向けて雄々しく舞い上がった。左腕の飛行甲板を下ろし、肩を休める。

デスピナ「ファイターゼロは、まず低高度で南鳥島に接近し、目標を視認次第上昇、高度から離島偵察を敢行せよ。その後は北西へ進路を変更し敵航空隊を追跡、位置と目的を探れ。発見次第ファイター1・2に位置を伝え、敵航空戦力を撃墜せよ」

ファイターゼロ《了解》

離島棲鬼の偵察機によって補足されて母艦である俺が交戦状態になったり、増援を呼ばれたりする場合の事も考慮し、出来るだけ無駄無く少ない手数で情報を集め、後の奇襲作戦を素早く、かつ有利に運ぶ道を選択する。

今回の場合、EJ24で構成される第零中隊は偵察隊、ファイター1・2の72機は制空隊と言った所である。

空中管制機（AWACS）が無いのが不満と言えば不満だが、無い以上贅沢は言えないので、初歩的な偵察飛行を敢行する訳だ。……大型攻撃機ホエール（Howler）って空中管制には使えないのかしら。

デスピナ「ファイター1・2は水平線の影に隠れながら、あまり速度は出さずに出来るだけ狭い半径で南鳥島を東から北に迂回し、北西方向へ向かいファイターゼロからの索敵結果報告を待て。ファイター2は間隔を十分に取り、ファイター1に続け」

フアイター1・2 《エイエツサー》

「デスピナ」なお、離島棲鬼への直接攻撃は後続の爆撃隊が行う。無理に南鳥島には接近するな。撃墜される恐れがある」

念のため釘をさしておく。

さて、続いて爆撃隊の選定に入る。

航空参謀「島の空爆なら、通常弾沢山積めるカロンで数にモノ言わせるか、”クラスター弾”搭載のミッドナイトかアルテミス、対艦戦闘なら精密爆撃が出来るミッドナイトがお勧めつすね。制空権が取れてるなら大型攻撃機ホエールを出してもいいつすよ」

「デスピナ」ふむ……」

「フアイターズ戦闘機隊を出撃させるのにも利用したコマンドの”航空管制画面”から、今度は”爆撃隊”を選択する。」

今度の編成は以下の通り。

爆撃隊一覧【部隊表示切替】【一括解隊】

戦術爆撃機一カロン一36機一第1大隊一【出撃準備】【攻撃指示】【解隊】

戦術爆撃機一カロン一36機一第2大隊一【出撃準備】【攻撃指示】【解隊】

戦術爆撃機—ミッドナイト—36機—第3大隊—【出撃準備】【攻撃指示】【解隊】
 制圧攻撃機—アルテミス—36機—第4大隊—【出撃準備】【攻撃指示】【解隊】

デスピナ「えーと、第3爆撃大隊ミッドナイト隊のことは、ボマー3つて呼べば良いか？」

航空参謀「いや、あいつらの事は、是非「アタッカー」とでも呼んでくたせえ」

ゲーム中でよく「攻撃機」呼ばわりされていたせいでだろうか？ いや自分でも呼んでたなそう言えば。

”爆撃隊”の括りの中にくせに攻撃者アタッカーとは紛らわしい。

デスピナ「第4爆撃大隊アルテミスの方は？」

航空参謀「制圧者」の英語読みで、suppressorサプレッサーです」

デスピナ「了解」と

南鳥島の攻略には、滑走路を効率よく潰して砲台の頭数を減らす為にも、クラスター弾を使うのが良いと思われる。

今回は先行したファイターゼロからの偵察結果が来次第すぐの空爆になるだろうか、いざって時に高高度に退避させる事が出来る”戦術爆撃機ミッドナイト”を出撃させるのが妥当であろう。

デスピナ「ミッドナイトの武装には、何がある？」

航空参謀「通常爆弾とクラスター弾、後は、あまり数はありやせんが、”新型貫通弾 グラインドバスター”のいずれかを搭載できまっせ」

話は脱線するが、EDF4シリーズに登場するカロン戦術爆撃機が使う爆弾って、本当に従来型の爆弾なのか？ 光球が煙出しながら真っ直ぐ落ちてくる所しか、前世で遊んだゲーム中では見たこと無いんだけど……。

話は戻り南鳥島は、1辺およそ2kmの三角形である。裕一の前世で遊んだEDF 4. 1のマップの1辺が1, 000mの四角形だった事、ミッドナイトを要請した時に投下していたクラスター弾の爆撃範囲を考慮すれば、1中隊もいけば十分だろう。高速で飛行させて、1機あたりの攻撃範囲がある程度引き伸ばせば何とかなりそうだ。滑走路を潰せば、後はカロンなりアルテムスなりホエールなりでいたぶり放題だ。

残りの2中隊は、通常爆弾と……。

デスピナ「クウ、第3^ア爆撃^{タツ}大隊^{カイ}隷下の1・2中隊は、北西に向かった深海棲艦攻撃用に通常爆弾とグラインドバスターをそれぞれ換装させてくれ。3中隊は、離島棲鬼攻略用にクラスター弾を」

航空参謀「とつくに済ませてありますぞ旦那！ 何が起こっても良いように、武装は常に複数のミッションに対応出来るようにするのがウチのやり方ですんでね！ まあクラスター弾を搭載しているのはアタッカーA…いや第1中隊で、グラインドバスター

は第3中隊つすけど」

おー…流石は航空参謀。本当に仕事がお早いようで。なら…

デスピナ「後、ミッドナイトの撃ち漏らした砲陣地の一掃に、カロンかアルテミスを使いみたいだけd」

カロン妖精「はいはいはい！ 私が、いや我々が出ます!!」

アルテミス妖精「いいや！ ここは”制圧”の名に相応しい我々が!!」

デスピナ「……航空参謀」

航空参謀「おう！ カロンにアルテミス、通常爆弾もクラスター弾も満載でいつでも発進出来ますぜ！」

ちと有能すぎやしないだろうか。それとも俺が抜かっているだけか？

何にせよ、もう出撃できるならそれに越したことはない。

ところで、大隊隷下の中隊単位の呼称には、アルファベットをつけて呼ぶって事でOK?

デスピナ「護衛戦闘機は、敵棲鬼攻撃隊アマツカにファイター3を、北西に向かうアタッカーB・Cにはファイター4を随伴させる」

航空参謀「！ なーるほど、粋なことしますねえ旦那ア…喜べお前らあ!! 次は我らデスピナ航空隊の花形、爆撃機隊の出撃だー!!」

カロン隊／ミッドナイト隊／アルテミス隊 「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

また航空参謀による激励が始まった。

航空参謀 「最初の出撃は……ミッドナイト・アタツカース！ フル装備での出撃命令

だあぁーッ!!」

ミッドナイト隊 「イヤッホオオオオオオ!!!」

カロン隊 「こええええええ!!?」

アルテミス隊 「そんなぁー!!」

喜びの歓声の中に、落胆の声が混じる。

航空参謀 「更にもう一丁!」

その声を聞いて、一同は静まり返る。

航空参謀 「島の残敵掃討には……カロン隊準備は良いかぁーッ!!!」

カロン隊 「オオオオオオオオ!!!」

アルテミス隊 「チクシヨオオ!!!」

ごめんね。その内君達にも活躍してもらおうから。……多分。

航空参謀 「護衛は、第3戦^{フアイター3}闘大隊と第4戦^{フアイター4}闘大隊!! こんときのためにお前らを残し

ておいたッ! ミッド^{真夜中の死神}ナイトと一緒に、思う存分ぶっ放せッ!!」

フアイター3・4妖精 「イエエエエエエ!!!」

その後、ミッドナイト隊の更なる後続として投入される、戦術爆撃機カロンで構成される第1爆撃大隊ことボマー1には、予備として備えておいた第5戦闘大隊^{ファイター5}を出す事を決定した。

航空妖精達の士気が再び高まった所で、もう一度発艦作業に入る。

航空管制メニューの”爆撃隊”内、ミッドナイトで構成される第3爆撃大隊、通称”アタッカー”の項目にある【出撃準備】を押す。【出撃中止】に変わる。

ファイター3・4も同様に操作する。

左腕の飛行甲板を持ち上げ、艀装左の航空機格納ブロックのエレベーターから上がってきた航空機たちを迎え入れる。

まずはミッドナイトのミニチュアが6個、次に護衛戦闘隊としてファイター3・4所属の小隊^{ミニチュア}が12個、飛行甲板に3列縦隊で並ぶ。

”戦術爆撃機ミッドナイト”。EDF4シリーズでは、圧倒的な防御力を誇るフォーリナー最大の地上戦力である「四足歩行要塞^{よっあしほこうようさい}」や低速で飛行する敵の輸送船を、地上部隊（IIプレイヤー）に見えない程の高空から”新型貫通弾グラインドバスター”で破壊してみせた。エアレイダーの支援要請の一つである「クラスター弾」の要請時のみその勇姿を拝む事が出来る、全翼機型の爆撃機である。

尚、今回登場しないカロンとアルテミスも、実は全く同じ形をしていたりする。こいつ等の違いや如何に。

ミニチュアミッドナイト3機が、甲板前方3箇所のカタパルトについたのを確認すると、通信が入る。

ミッドナイト(アタッカー)妖精《こちらアタッカーズ! 発艦準備完了!》

デスピナ「了解。アタッカーA・B・C各機へ。上がり次第巡航速度で目標へ向かえ。護衛のファイターは到着までに合流させる」

アタッカー妖精《サイエツサー!》

デスピナ「では、発艦を許可する」

デイレクターが上がると同時に、ミッドナイトのエンジンが最大出力になったのを音で確認し、発艦させる。

デスピナ「アタッカーズ、発進!」

ギユウウウーッ!!

アタッカー妖精《イヤッホー!!》

ミッドナイト3個小隊118機を発艦させ、続く18機でアタッカー全機の出撃が完了した。

続く護衛のファイター3・4も全機発艦させ、合計3分程で発艦作業が完了した。

アタッカー（爆撃機ミッドナイト）発艦から約15分後。

巡航速度一杯のマツハ1（≠1224km/h）越えて西北西に向けて先行した、EJ24・第零中隊ことファイターゼロは、南鳥島との距離おおよそ50kmに迫ったところで所で件の離島棲鬼を視認した。

事前に航空参謀から聞いた通り、周辺の海域は黒く染まり、水平線の上に薄く乗っかるように見える島は全体的に赤黒い。

そこへ中隊長機であるファイターゼロの航空妖精から、中隊内の無線封止を解除する意味合いを兼ねる通信が入った。

ファイターゼロ《ファイターゼロ各機へ。レーダー起動、ECMオン。これより離島棲鬼の偵察に入る。中隊を4機編隊に分散せよ。ゼロ5、ゼロ9、2・3小隊を指揮しろ》

ファイターゼロ5・9 《《了解》》

ファイターゼロ1《これより1小隊をアルファフライトとし、2小隊はブラボー、3小隊はチャーリーと呼称する。アルファ1よりゼロ中隊各機、高度3万ftフット（≠9,0

00m)まで上昇せよ。アルファ全機、上昇!」

中隊長機の指示により、一時的に彼らの呼称は3種類に分けられた。

ファイターゼロ5 《ブラボーフライト、上昇開始!》

ファイターゼロ9 《チャーリー各機、エンジン出力上げろ! 上にあがるぞ!》

少し時間を空けて、残りの2小隊も続く。

全12機のEJ24がアフターバーナーを点火して出力を上げ、水平尾翼とフラップを動かして急上昇を開始した。

ファイターゼロは、先述した通りEJ24戦闘機12機で編成される戦闘中隊である。

12と言う数字は、複数の小隊や分隊に分けるのに便利だ。

例えば、敵戦闘機1機に対する戦闘機同士の格闘戦において基本となる2機編隊なら、6つの分隊を作る事が出来るし、4機編隊の小隊なら3つ出来る。

他にも、現代の各国軍が保有する航空機同士で使う機会があるかは不明だが、3機編隊なら4個、6機編隊なら2個の分隊や小隊を作る事も出来る。今回の、と言うより今後しばらくの敵は深海棲艦側の航空戦力なので、どの編成がどこまで役に立つかなど、(艦娘用のジェット戦闘機を持っている提督なら兎も角) 誰にも判りはしないのだが。

ファイターゼロの隊長機である「ファイターゼロ1ワン(ゼロ1)」は4機編隊を選択。南

鳥島を3段階に渡って通過し、1回の目視偵察では掴みきれない情報を3小隊で視察し中隊内で把握、最終的にアタッカーAに偵察結果を傳達する仕組みだ。

今回当戦闘隊に宛てられた任務、「離島棲鬼偵察」と「敵航空隊追撃」の2つの内前者は、ある意味軍用航空機の本質と言っても過言ではないであろう、偵察。

後続の敵離島棲鬼攻撃隊である「アタッカーA」こと「第3^{ミッド}爆撃^{ナイ}大隊^ト隷下 第1中隊」に、南鳥島に布陣された砲台群と飛行場施設の配置情報を送る事が、彼らの役目である。

数十km離れているとは言え、相手からも視認出来る位置に来てしまった以上、そう遅くない内に離島棲鬼に補足されるだろう。仮に、今更母艦であるデスピナから作戦中止や帰還命令が言い渡された所で、逃げることは出来ない。

実際、EJ24のエンジン全開で敵戦闘機の速度は振り切れても、機体の燃料には限りがある上、母艦であるデスピナが敵航空機の速度から逃げ延びる事は難しい。発見されて機動艦隊の増援でも呼ばれば、敵の親玉である離島棲鬼を潰さない限り厄介なことになる。

やがて高度3万ftに到達し、機首を水平に戻す。

ゼロー《アルファからブラボー・チャーリーへ。小隊間の間隔を広く取れ。間もなく目標直上だ》

ブラボーフライトとチャーリーフライトから了解を意味する通信が入る。

EJ24全機はアフターバーナーを切り、再び巡航速度のマッハ1で飛行を続けた。

そして2分後。

突然、ファイターゼロ所属のEJ24戦闘機全機の無線が、謎のノイズに見舞われる。

〔BGM：EDF4「侵略」〕

ザザザツ…ザザツザザツ…

すぐに、同じ中隊所属の味方機から通信が入る。

ゼロ5《こち…：（ザザザ）ファイ（ザザツ）——『ソコカラ…：クルトハ…ネ

…：』応と——よ！》

ゼロ9《こ——（ザザ、ザツ）——『…：イイ…：デシヨウ…：』——クソツ——（ザ

ザザツ）——ジャミン——はげし——》

しかし、内容はノイズだらけの上、まるで心霊番組で紹介される怨霊の声のようなモノが混じる。

本当に怨霊か何かの仕業なのかは、霊媒師や呪術師が搭乗する電子戦機なら判別がついたかも知れないが、空戦が専門（今回の任務は偵察だが）の戦闘機のコクピットに座るパイロットには何が正体だろうとさしたる問題ではない。

少なくとも戦闘機乗りにとって重要なのは、”何者かに白昼堂々通信妨害を仕掛けられた”と言う事実が、自らに課せられた任務に支障をきたすのか、自分や味方によって対処出来るのかの2つだけだ。

ゼロ1《ECCM作動！ 通信を回復せよ！》

中隊長がECCM——対電子妨害装置——を作動させ、ファイターゼロ全機の確認を取る。

ゼロ1のECCMによってある程度ノイズが軽減されたようで、他の味方機も隊長に習って作動させると、通信が回復した。

ゼロ5《こちらブラボーフライト、全機無線クリア》

ゼロ9《チャーリーフライト、通信回復しました》

ここでアルファフライト隊長であるゼロ1から、先のノイズについての見解と、次の行動が示される。

ゼロ1《こちらアルファフライト。どうやら敵に補足されたいらしい。全機、これよりファイターゼロは南鳥島の南西側を旋回しながら通過し、偵察を敢行する。迎撃機が上がってきた場合は、一先ず速度で振り切り別ルートを飛行中のファイター1・2に後ろから叩いてもらう。いいな？》

ゼロ妖精《《イエッサー!!》》

隼下のパイロット達から威勢の良い返事を聞くと、隊長機は加速し南鳥島を南側から右手に捉える形でアルファ小隊を先導する。ブラボーとチャーリーも、1と2 km 間隔を開けて続いた。

丁度南鳥島が右に見えるまで西に直進を続けてから、ゼローが宣言した。

ゼロー《アルファ、偵察開始！ 我々は島の東側を重点的に視察する！》

同時に、機体を大きく右側にバンクさせ、パイロットの妖精の右上に目標を捉えた。

こちらを迎撃するためであろう敵戦闘機も上がり始めている。

ゼロー《全機加速しつつ大回りで旋回せよ！ 追いつかれるなよ！》

ゼロ妖精《《サーイエツサー!!》》

ファイターゼロを補足した時からだろうか。離島棲鬼の周囲の黒々とした海面は赤い絵の具をこれでもかと溶かし込んだような暗い紅あかに染まり変わり、南鳥島上空は重苦しい空気に包まれていた。

第8話：発進！デスピナ航空隊（中編）

EJ24第零戦闘機中隊が偵察を開始して1分も経たない内に、燃料消費を抑えるために高高度を飛行していたミッドナイト第3爆撃大隊隷下第1中隊アタッカーAに通信が入った。

ファイターゼロ《こちらファイターゼロ！ 敵離島棲鬼のおおよその視察は成功しました！ 敵の迎撃機に補足されているため再度の偵察は不可能です。よく聞いてください！》

アタッカーA（ミッドナイト1番機から12番機）に通信が入る。マイクスイッチをONにしたのは隊長機のアタッカー1だ。

アタッカー1《おう、しつかり聞いてるぜ。で、敵はどうなってやがる？》

ファイターゼロ《まず、島の3辺を一周するように沿岸砲台が築かれています。凄いです！ 特に北西側には大型の砲台座を少なくとも5基、間を埋めるように小型の砲台が2・3基ずつ計10基は見えます。滑走路はおおよそ方位2―2―5から0―4―5に向かって1km以上の長さです。南側と東側にも、大型砲台3基ずつと小型砲台5・6基ずつ確認しました！ 正直、ミッドナイトの1中隊だけで片付けられる規模なのか不明です！》

アタツカー1 《後でカロンの増援も来る! 波状攻撃で一氣にカタをつける手筈だッ!
んなことより、迎撃機の対処は出来そうか!?》

通信が始まってからの心配事をアタツカー1は訊いた。

実際、爆撃隊の心配するべき事項ではないのだが、ファイターゼロは全く意に介さない様子で返答した。

ファイターゼロ 《別働のファイター1・2に後ろから落として貫う手筈になっていま
す。既に了承は得たので、あとは全力で北西に急行するだけです! そもそも俺たち
には、北西に飛んでいった”蚊トンボ共”を追撃する任務があります。こんな所で油
売ってられません!》

アタツカー1 《あいよっ! 全く頼りになる奴らだけ。ゼロ中隊、幸運を祈る!》

ファイターゼロ 《お互い生きて帰りましょう。以上、通信終わり!》

ファイターゼロからの通信が切られると、次はアタツカーB中隊の長機であるミッド
ナイト13番機と、C中隊長機の25番機からの通信が入った。

アタツカー13 《アタツカーBよりアタツカーAへ、そろそろ我々は北西に進路を変
更します。ご武運を。》

アタツカー25 《アタツカーC全機、続くぞ!》

ファイター4 《ファイター3、また後でな》

ファイター3 《おうよ!》

第3爆撃大隊隷下、アタッカーB・Cの24機とファイター4の36機は、南鳥島が見えるよりも手前で進路を北寄りに変更した。

南鳥島までの距離は残り約180km。巡航速度一杯のマツハ0.8(≠979km/h)で飛行し続ければ10分程で到達する筈なので、それまでに爆撃ルートを決めなければならぬ。

南鳥島の地図をコクピットのモニターに映し、ファイターゼロが危険を顧みずにもたらしてくれた敵配置の情報を頭の中で丁寧を重ね、爆撃機の進入ルートと必要機数を割り振っていく。

アタッカー1(ファイターゼロを追っかけた迎撃機が南鳥島を中心に右回りに北西に行つたんなら、こっちは南から進入するのが良さそうだな。北西の砲陣地と滑走路を潰すには……さしずめ3機ずつで空爆地点を前後させるしかねえか。東と南の砲陣地は……)

数十秒ほどで考えをまとめ、隷下のミッドナイト全機と、”戦闘機ファイター”で構成される護衛の第3戦闘大隊に指示を出す。

アタッカー1 《アタッカーA全機へ! もうすぐ攻撃目標が見える。アタッカー2か

ら6はウチについてこい！ 二列に並んで島の南西から侵入、滑走路と砲陣地を同時に潰すぞっ！》

アタツカー2と6 《《了解ッ！》》

アタツカー1 《アタツカー10から12はそのまま直進して南側を叩け！ アタツカー7から9は一度ウチらに追従してから、適当なタイミングで右に旋回して東側だ！

いいな!？》

アタツカー2と12 《《サーイエスサーッ!!》》

爆撃隊の割り振りは完了した。

アタツカー1 《アタツカーAよりファイター3！ ウチらはこれから9機と3機の二手に分かれるから、こっちにいくらか護衛寄越してくれ！ ウチが率いる9機の内の3機は早めに攻撃に入るから、ちょっとばかし多めに頼むぜ!》

ファイター3 《了解。割り振りはこちらで行いますので、いつでも爆撃ルートに入ってください》

あいよ！ と最後に一言返し、アタツカー1はマイクスイッチを切った。

空爆直前の最後の通信に、アタツカー1は7番機に追従指示の無線を掛け、10-12の小隊を残して隊を分離し、一度西よりに進路を変更した。南鳥島の南西から北東に頭を向けて進入しながら、離島棲鬼の滑走路と主力となる砲陣地を爆撃するためであ

る。

護衛戦闘機隊のファイター3も、アタッカーAが3：1の割合で分かれたのに従い、ミッドナイト隊1番機から9番機の9機中隊には“戦闘機ファイター”27機が、10〜12番機の3機小隊には9機のファイターが護衛についた。

10分後、直進を続けて南側の砲台を叩く事になっているアタッカー10から12のミッドナイト3機小隊が、満載していたクラスター爆弾の投下を開始。前後に分かれて投下タイミングをずらしつつ空爆を実施した。

同時に護衛戦闘機隊であるファイター3隷下の9機が離島棲鬼から迎撃に上がった敵の航空機を撃ち落とし、航空優勢を確保。

ズガガガガガooooooooooooッ!!

ダダooooooooooooッ!!

ゴゴゴゴゴゴ……!!

南島島南側に設けられた離島棲鬼の多数の砲台は、並べたドミノが連続で倒れ続けていく用に大量の爆発に晒され、砲陣地が息絶える直前に放たれた決死の対空砲火も、高速で飛行するジェットエンジンを搭載した爆撃機ミッドナイトには命中することなく、無駄に役目を終えた。

そして、今までアタツカー1から6について来ていた7から9が散開し、離島棲鬼東側の砲陣地の爆撃ルートに入る。

ファイター3隸下の9機も随伴する。

南側の砲陣地が粗方消し飛んだのをレーダーで確認すると、アタツカーA全機とファイター3全機に、以前偵察に来ては情報を集め、現在は北西の深海棲艦上空の制空を確保しに向かっているはずのファイターゼロも聞いた、ノイズ雑^まじりの「声」が無線のスピーカーから流れ出した。

《ザザザツ》——(ザーザー)『クツ……!? ……イイ…デシヨウ……! オトシテ…アゲル……!』(ザツザザー)——》

衛星画像で見た時のソレとは違い、海面は紅くなり一層重々しさを増した離島棲鬼を見やり、ECCMを作動させつつノイズだらけの無線に向かってマイクスイッチを押し続けた。

アタツカー1《上等だっ! お前は我らがデスピナ航空隊、第3爆撃大隊^{ミッドナイトチーム}がじきじきにかたづけしてやる! せいぜい冥土の土産に、ウチらの強さを身を以て刻んでおきなアツ!!》

やられた事への復讐心を多く滲ませた声を聞いても、アタツカー1は怯むどころかむ

しろ、長年待ちわびた好敵手に再開したかのように声を張り上げた。

ECCMによって若干無線が回復したため、アタツカー1からの通信は同空域に居る全ての航空機の受信機に入る。

無線が遮られ一瞬混乱する機もちらほらあつたが、ノイズの海を掻き分けるように聞こえた“彼女”の肉声は、突然の怪奇現象に不安を煽られた航空妖精達を安心させるには丁度良い特效薬となった。

それによつて鼓舞された士気の高さは、デスピナ航空兵妖精達全員の指揮官でありながら自分専用の爆撃機ミッドナイトで直々にチームの指揮と執り、第3爆撃大隊（コールサイン「アタツカーズ」のリーダーも務める“彼女”の人望の高さに比例しているように見えた。

アタツカー1改め

航空参謀《さーてウチらも、派手に暴れるぞ!!》

アタツカー2く6 《ウオオオオオー!!!》

やがて、アタツカーA隷下の7番機から9番機の小隊が南鳥島上空に到達。東側に展開する砲陣地の一掃を開始した。

一方その頃。母艦である俺こと要塞空母デスピナは、仕事を終えて帰ってくる航空隊の燃料の事を考え、自分の位置取りを決めようと数十分前に飛ばしたファイター1・2とほぼ同じルートで移動していた。

デスピナ「そう言えば、さつきからクウが見当たらないけど、副長知らない？」

副長「ミッドナイトに乗り込んで、とつくに空の上です。今頃お祭りに参加してると思います」

デスピナ「え、あいつがアタッカー率いてるの？」

副長「ええもちろん。1番機に」

デスピナ「マジですかい……」

指揮官が直々に攻撃隊に参加して現場の部下と苦楽を共にするとは、上司の鑑じゃないか。

どうりで、あんなに部隊の鼓舞が出来る訳だ。最初ウザイとか思ったり釣竿の餌代わりにしたりしてゴメンよ本当に。

見直したぜ航空参謀。アンタ滅茶苦茶かっけーよ。

デスピナ「副長は、どう思う？ 北西に向かった深海棲艦隊」

副長「いつ交戦状態になってもおかしくありません。もしかしたら横須賀鎮守府の艦娘たちが来ているのかも知れませんが、ここで恩を売っておくためにも、はやく攻撃隊に到着して欲しい所ですね」

デスピナ「だな」

すぐ後には「戦術爆撃機カロン」36機で構成される第1^ボ爆撃大隊と第5^{ファイター}戦闘大隊の発艦も控えている。

デスピナ（今は、信じて送り出したデスピナ航空隊が頑張ってくれる事に期待するしか無いな）

そう思いながらコマンド画面を再び操作し、ボマー1・ファイター5の発艦準備を始めた。

.....

^{ファイター}第零戦闘中隊が偵察飛行を終えてから数分、南鳥島への空爆が敢行される少し前には、最初の航空隊がデスピナから発艦して30分程の時間が経過した。

南鳥島を東から北西にかけて迂回したファイター1・2は、南鳥島沖40km、高度約70mの所をマツハ0・48(≠587km/h)で飛行しつつ、北西に向かったファ

イターゼロからの索敵結果を待っていた。

やがて南鳥島の北側を越えるころには、ファイターゼロから通信が入った。

ファイターゼロ《こちらファイターゼロ。北西の敵航空団を発見した。だが現在、わが隊は敵戦闘機に追われている。悪いが叩いてくれるか? やつら速度は遅い癖に意外としぶとい。連中の機体の燃費がどんなモンかはわからないが、帰りの燃料分を考えると、俺たちの燃料の方が少々心もとないからあまり速度は出せない。今ここで落としておいてくれると助かる》

圧倒的に大きい加速度差を活かしての一撃離脱や、高い速度を活かして大回りで後ろにつけて戦闘する選択肢も、あるにはある。しかし、マツハ1越えやアフターバーナー全開で飛行し続けたEJ24の燃料タンクは、その分燃料小腹の消費が激いしかった。

最初に母艦デスピナからのブリーフィングで聞いた話では、少なくとも70機の航空機が北西に飛び立ったのだ。それらが向かう先であろう北西に居る深海棲艦達の上空も抑えねばならない以上、偵察と言う任務の都合上燃料消費の激しさを気にしていられず高速で飛行し続けていたファイターゼロとしては、先に確認出来た70機だけでも、苦勞してぶら下げてきたミサイルを全弾撃ち放ち、機体を軽くした上で早く帰路につけてしまいたいのだ。

ファイター111《こちら第1戦闘大隊、こつちのレーダーでも確認した。今片付け

る。本命の航空団の位置を教えてください

ファイターゼロ《今送る》

ファイター1は上昇しつつ、必要な情報を請求する。ファイター2もそれにならない上昇した。

ファイター1とファイター2全機のコクピットの海図に、敵航空団の位置が示される。事前に航空参謀からの話にあつた通り、敵にとつての親分が今頃散々クラスター弾に飛ばれている事など意も介さないかの如く、北西から進路を変えていない。どうやら本当に、離島棲鬼にとつて一番の敵が遙か北西の彼方の列島からやって来っていると踏んだほうがよさそうだ。

ファイター1《ファイター1全機、加速せよ。これよりゼロ中隊の後ろの敵を攻撃する。ファイター2は今を撃たないでくれ》

ファイター2《ファイター2、了解》

本命の目標の位置は判つたので、次はファイターゼロの後ろに引きずられるようについて行っている敵戦闘機達の後ろに回りこむ。

右横から眺める形だつた時には正確な機数は判らなかつたが、目標の後ろに回り込んで確認すると、ファイターゼロの迎撃に上がった敵の戦闘機は30機だつた。

ファイター1機につき1機の敵を補足し、ロックオン。中距離ミサイルを発射可能な

状態にした。ファイター1所属の全機のコクピットには、目標に対して誰がロックオンしているのかが示された。

ただし、ファイター1含めデスピナ航空団の戦闘機大隊は36機なため、隷下のA、Cの3中隊の内2機ずつ、発射しない機を決めておく。

ファイター1―1 《全機、ミサイル発射を許可する。各自の目標と交戦せよ》

ファイター1―1 3 《ファイター1B、交戦》

ファイター1―1 2 5 《ファイター1C、エンゲージ》

ファイター1―1 《よし、ファイター1A、フォックススリー!》

第1^{ファイター1}戦闘大隊隷下の各中隊からの宣言を聞き、長機がミサイル発射を宣言。ファイター

1A中隊が攻撃を開始した。

シウウウーーツ!!

シツシウウウーーツ!!

ファイター1―1 3 《ファイター1B、フォックススリー!》

ファイター1―1 2 5 《ファイター1C、フォックススリー、ファイア!》

続けてB中隊、C中隊もミサイルを発射。

マツハ4で飛翔するミサイル群計30発が、真後ろから深海棲艦の艦上戦闘機に殺到する。

1分後、全てのミサイルが敵戦闘機に直撃。

ファイターゼロを追いかける事に夢中になっていた深海棲艦の戦闘機は、避ける間もなく撃ち落され、母なる海に墜落した。

ファイター1-1 《全機撃墜を確認。我が隊はこれよりゼロ中隊に追従する。ファイター2、出番取って悪かったな》

ファイター2-1 《気にするな。つぎは俺たちが活躍するからな》

それぞれの長機が会話している所に、ファイターゼロからの無線が割り込む。

ファイターゼロ 《ファイター1、梅雨払い感謝する。だがあまり話し込んでもらえん。前方の敵航空団が2手に散開した。交戦中の深海棲艦の艦隊も見え始めている》

ファイター1-1 《と言う事は》

ファイター1の隊長妖精は、出撃前に受けた指示とは別に、航空参謀から聞いた予想を思い出していた。

気付けばいつの間にもここまで飛んで来たのかと、レーダーの反応を見ながら思っていた。

ファイターゼロ 《航空参謀組さんの予想通り、前方に人類側の戦力、”艦娘”の反応を6つ確認した。妙にデカイ深海側の戦艦たちの反応も見える。クソ、これなら追われながらも先制しておけば良かったぜ》

EJ24を操る中隊の1番機は少し後悔していた。

EJ24は、1機あたりのミサイル搭載量はファイターに勝る。とは言え、それでも交戦出来る数には制約がある。レーザー砲を搭載し若干程度でも経戦能力に優れ、尚且つ機数も多い戦闘機ファイターのほうに交戦可能数の軍配は上がる。

更に、ファイターゼロの場合は先の偵察行動による燃料の不安もあるため、あまり長く戦場に留まる事は出来ない。さもなくば燃料不足でデスピナに辿り着く前に力尽きてしまう。

敵の航空団をわざわざファイター1・2との合同で同時に対処しようなどと考えなくとも、中距離ミサイルだけでもさっさと全弾撃ちつくして早々に帰路に着き、空域の確保は後続のファイター達に任せてしまう事も出来たのだ。

ファイター1「ま、そう言うなって。ゼロ中隊は程々で戦闘を切り上げて帰路についてもらってかまわない。分散した奴等は俺たちが片付ける。ゼロ中隊は敵の観測機や偵察機を優先的に撃墜してくれ」

ファイターゼロ「ファイターゼロ、了解。気遣い感謝する」

ファイター1の提案に従い、ファイターゼロを初めとした「デスピナ戦闘機隊」は、再び交戦を開始した。

ファイターゼロ「全機、観測機を最優先に狙え！」

艦娘達に砲弾の雨を降らせるな！」

ファイター1―1 《ファイター1各機、中隊ごとに散開。左に分かれた奴等を追うぞ》
ファイター2―1 《ファイター2全機、我々は右だ。全機、交戦せよ!》

デスピナ航空隊が各々戦闘を続けている頃、南鳥島北西約400kmほどの海域では多数の深海棲艦の艦隊と、それらの追撃から逃れるために退却を続ける6つの艦娘の姿があった。

艦娘側の内訳は、正規空母二隻と、戦艦四隻。合計6隻。そして頭数をじりじりと減らされている艦載機たち。

内空母娘二人(隻?)は、和弓を射る際に用いられる弓道着のような衣服を身にまとっている。海に持ち出すには一見違和感がある和弓を構えているあたり、本当に弓道着を模した服のようだ。

実際の弓道着と違う所を見るなら、彼女ら二人の片腕に木製の飛行甲板を模した物をこしらえており、背負っている艦橋部を模した艤装が、甲板と共に彼女達の実艦時代だった頃の面影を垣間見せている。

一人は海面を反射する太陽光に負けないくらいの光沢をもった長い銀髪を潮風にな

びかせ、白い胴着に黒い胸当て(装甲板?)、赤いスカート(袴?)を着こなした和風美人といった風貌の若い女性。飛行甲板は右腕に装備している。

もう一人は、生まれつきの色素の関係かそれとも潮風に晒され続けた結果なのか、やや緑が掛かった黒い頭髪を左右で2つに纏めたいわゆるツインテールの髪型も相まって、まだ少女らしい面影が少しだけ残っている顔立ちの女性だ。藍色の胴着に薄めの茶色のスカートと、迷彩柄の胸当てを着用している。左腕の飛行甲板も、胸当てと同じ迷彩柄だ。

現代の戦闘において陸上は元より、ましてや海での戦いにはとても似つかわしくない和弓を構え、時には敵に直接、時にはやや上に向けて矢を放ち続けていた。

一見、個体差が大きいとはいえ、それでも数十センチの砲弾に耐えられる程度の装甲を持った深海棲艦相手には、一見無力に思える。

しかしそれは、彼女達「空母艦娘」が己の自慢の艦載機を発艦させる際に必須となる、れつきとした「航空艦装」である。断じて個人用武器の枠に収まる代物ではないのだ。

「きやあつ!?!」

「翔鶴姉えつ!!」

突然、「翔鶴」と呼ばれた銀髪の女性を爆発が襲う。

深海棲艦側の戦艦の放った艦砲射撃が直撃したのだ。

翔鶴「うう……飛行甲板をやられました！ 着艦不能！ 瑞鶴、私の攻撃隊の収容お

願い出来る？」

瑞鶴「分かった！ 翔鶴姉は大丈夫!？」

翔鶴「まだ中破だから、まだ……」

瑞鶴「そんな事言つて！ もう中破でしょ！ いくら慣れてるからつて無茶しすぎ
！」

迷彩柄にツインテールの女性は、「瑞鶴」。翔鶴の妹であり、「翔鶴型航空母艦」の2番艦である。

自己犠牲的な部分がある姉を心配する様は、姉思いなよい妹の証拠である。

「シヨーカク、ソーリー！ 私たちの観測機全部墜とされマシタ！ 着弾観測不能デー
ス！」

少し離れた所には、見方によっては翔鶴姉妹よりも少々ばかり年上の雰囲気醸し出している、巫女服装束に似た衣服を着用した女性が4人。

頭には、実艦だった頃に艦橋に搭載されていた、正面から見ると六角形の形をした電探がヘッドギアのように装着されている。背中には物々しく鋼鉄くろがねの鈍い輝きを放つ二連装砲塔を4基も備えた艤装を腰の辺りにマウントしており、華奢な女性の身体に”戦

艦」の堂々とした威容を与えている。

片言で喋った女性を含め、4人共服装に大きな差異はあまりない。強いて言えばスカートの色と、髪型は大きく異なる。

艦娘達をここまで苦戦させているのは、南東の南鳥島に巣食う離島棲鬼周辺の海域からやって来る深海側の艦隊だ。

偵察機で確認出来ただけでも、戦艦ル級elite二隻、空母ヲ級elite二隻、軽母又級elite二隻、重巡リ級flagship一隻、重巡リ級elite四隻、軽巡ト級elite二隻、駆逐ハ級elite五隻、合計18隻。

上空には多数の艦載機。もちろん深海棲艦の空母と軽空母が放ったものである。数はざっと、70機は居る。

更に後方には、南鳥島に巣食う離島棲鬼周辺に控えている防衛艦隊がいる。このまま戦いが膠着し続ければ、痺れを切らしてこちらに向かってくる恐れもある。艦種はまだはつきりしていないが、日本側にとつても敵側にとつても、重要な戦略拠点である南鳥島の防衛艦隊である。相当に強力な戦力を持った艦で構成された艦隊であろうことは想像に難くない。

瑞鶴「翔鶴姉え、左右から雷巡flagship二隻と駆逐二級elite四隻が1組ずつ来てる！」

翔鶴「なんですって……!?!」

続けざまに、艦娘側の艦隊旗艦である翔鶴に悪い知らせが入る。瑞鶴の偵察機が雷巡
 千級flagship二隻と駆逐二級elite四隻の接近を2つ捉えたのだ。

これで敵艦の合計は30隻が増えてしまった。どうやら、左右から魚雷攻撃で圧殺し
 て足止めしつつ、包囲網を形成しようとしているらしい。

翔鶴「金剛さん!! 0-9-0と1-8-0から敵水雷戦隊が接近しています! 相
 手をお願いします!」

「金剛」と呼ばれた艦娘は、6隻の艦娘の内弓道着姿の翔鶴と瑞鶴を除けば、人数の関係
 で巫女装束に砲塔を背負った女性の内の一人である。

長い茶髪と、両サイドに作られたお団子が特徴的な、大学生くらいに成長した見た目
 の女性だ。

金剛「OKデース! ハイ、マイシスターズ! とりあえずは魚雷を積んだ敵を撃つ
 ヨ! 砲撃準備は良いデスカ!」

”シスターズ”、本当に血縁上実の姉妹なのかは不明だが、少なくとも実艦時代には
 本当に「金剛型姉妹艦」として建造された3人が答えた。

榛名「うう……はい! 榛名は大丈夫です!」

艶やかな長い黒髪の、大和撫子と言っても差し支えの無い程に整った容姿と丁寧な口

調が特徴の三番艦「榛名」が答えた。

(もつとも、彼女に限らず艦娘は全員漏れなく魅力的な女性ではあるが)

自分の体の事は自分が一番知っているとはよく言ったものだが、既に彼女は中破している。

艦娘である都合上、一見攻撃を食らった箇所が壊れたり破れたりしているようにしか見えないが、実艦に例えれば航空魚雷と砲撃を数発貫つている上に電探も故障している状態だ。観測機が無くなったのは先に述べた通りであり、本当に”大丈夫”と言える状態なのかは、第三者の目からは正直怪しい。

比叡「はいお姉さま！ 機関が少し不調ですが、砲撃は問題ありません！」

金剛「比叡は私と、ゆっくり後ろに下がりながら0—9—0からの敵をおもてなしシマース！ 榛名は霧島と反対側を頼むネー！」

戦艦「比叡」。艦娘に転生した現世は兎も角、前世では”巡洋戦艦”と言う厳密には所謂戦艦とは別の艦種として建造された金剛型の二番艦である。

長女に似て茶髪だが、髪型はショートに切っており、外側に広がるクセがついている。彼女も榛名と同じく魚雷と艦砲射撃を食らって中破していた。更に脚部の主機が浸水によって出力を落としてしまい、総合的な被害はこちらの方が大きい。

霧島「射撃諸元よし！ 次弾装填完了！」

だからと言って、他の姉妹の被害が軽いかと言うと、そんな訳は無い。

姉妹で唯一のメガネ着用者でもある金剛型の末っ子、戦艦「霧島」の損傷も、決して無視は出来ない。

航空魚雷は何とか回避出来たものの、直後に爆弾を食い二番砲塔が故障、金剛型の艤装の特徴の一つである二連装主砲4基の内、一時的に3基に減らされた状態で戦わねばならなくなっていた。

それでも表情一つ変えず、悪態の一つもつかず、何事も無かったかのように砲撃を続けるられのは、普段から艦隊の頭脳を自称しつつも実艦時代から受け継いだ武闘派な側面がある性格故だろうか。

正直な所、戦況はあまり芳しくない。

敵側の多数の機動艦隊によって制空権が奪われた上に、空母二隻の内一隻が中破。戦艦娘の観測機も撃墜され、金剛型自慢の35.6cm連装砲の射程を活かし切れなくなっていた。

理屈の上では、数十キロ離れた敵の艦船を大火力を以て一方的に爆砕する長距離砲も、観測機による着弾観測射撃がなければ、相当数打ち込んでもまともに着弾してくれない代物である。

それ故、戦艦娘にとって“観測機”とは、単に“狙いをつける為の道具”程度の物で

は無く、狙いを澄まし、より遠くを見渡すための目としての役割が大きいのだ。

今の状況は金剛達にとつて、戦場で視力を大きく削がれたも同然だった。

逆に、敵側が航空優勢な内に敵戦艦が観測機を飛ばしたらどうなるかは、想像に難くない。

つまり、空母二隻の内比較的損傷は軽微な瑞鶴が、翔鶴の分まで制空権を取り戻さねばならぬ以上、敵の艦砲射撃に混じつて続けざまに飛来する艦攻や艦爆も撃ち落さねばならないのだ。さもなくばまともに撤退するのは難しく、現に戦艦四隻の足は、機関部に損傷を受けたものがあるためかなり遅くなっている。彼女らの安全の為に、早く空からの脅威は片付けてしまいたいのだが、いかんせん敵機の数が多すぎる。

そのため金剛姉妹は絶え間なく降り続ける砲弾の雨を、とりあえず全力で回避運動を取りながら避け続けているものの、時折直撃弾、良くて至近弾を食らってしまうのは、決して彼女達の回避能力に起因する物ではない。

先ほども述べたが、今の彼女達には艦載機が無いのだ。

「視力が悪くまともに狙いが定まらない狙撃手 vs 視力が良く精密射撃が出来る狙撃手」の戦いの結果など、火を見るよりも明らかである。

このままでは確実に後続の敵艦隊に追いつかれる。せめて比較的近くに居る敵だけでも片付けようと、金剛たち四隻の戦艦は主砲を撃ちつづける。

金剛「ファイヤー！」

ドドンツッ！ ドドドンツッ！！

比叡「主砲、斉射！ 当たってえ！」

ガガンツッ！ ガガガンツッ！！

方位0—9—0からの敵に、金剛と比叡が発砲する。

榛名「勝手は…榛名が…！ 許しませんツッ！！」

ズダーンツッ！ ズガガーンンツッ！！

霧島「よし！ 斉射あー！！」

ダーンツッダーンツッズダーンツッ！！

けたたましく砲声が鳴り響く。

数分後、主砲弾が着弾。敵艦隊先頭の旗艦である雷巡子級 flagship 二隻の周りに水柱が複数立ち上り、1・2発が命中。一先ず、水雷戦隊の旗艦である雷巡子級と、もう一隻は片付いた。これで敵水雷戦隊の統率力は大きく削ぐ事が出来た。

”この調子で打ち続ければ、駆逐艦の掃除は楽な筈だ”。

今までの状況が状況だったために、目標が視認出来るくらいの近距離での砲撃戦は、金剛四姉妹に若干の精神的余裕を取り戻すことになった。

もう何回砲声が鳴り響き、どれ程の数の艦載機が撃ち落されたのか分からない。

撤退を開始して1時間程しか経っていないと言うのに、水柱が立ち上り続け海面が飛沫で真っ白に染まる海での時間は、まるでこの世の無限地獄のように永く感じられた。

つい先ほども、翔鶴がもう一発、戦艦の主砲を食らってしまい大破したばかりだ。

金剛たち戦艦四隻の艦砲射撃で、接近してきた深海棲艦を一つ一つ潰してはいるが、接近は不味いと判るとなると、再び戦艦や空母を初めとした敵主力艦達はアウトレンジからの攻撃に専念しただけだ。

もつとも、敵である深海棲艦はこの場所を「現世の地獄」等と言うありきたりな比喻では許さず、本当の意味で艦娘たちを“地獄”に送ってやるために猛攻を続けているのだ。

現に、翔鶴の航空隊所属の、かろうじて生き残っている偵察機が、苦戦している翔鶴艦隊全員（艦？）に驚くべき「不都合な未来」の情報をもたらしてくれた。

翔鶴「索敵結果は……え……え……そ、そんな……！」

翔鶴「どうしたの？ 何が見えたの!？」

偵察機からの索敵報告を受けた翔鶴は、驚きで言葉を詰まらせた。

当然、艦隊旗艦である翔鶴は、その情報がどんなものであれ聞かなければならない。

大破し、体中に負った傷に顔をしかめながら口を開く。

姉からの催促に対し、瑞鶴は口元を震わせ涙声になりながらも、それでも出来るだけはつきりと、その”事実”を伝えた。

瑞鶴「ひめ…姫が来てる！ 戦艦棲姫が、…正面から来てる！ 方位1―3―5…距離10万（m）!! あと後ろのほうから、艦攻と艦爆が沢山！ それも今までの比じゃない！ 数え切れないくらい沢山…!! こんな防ぎきれない!!」

方向と距離、そして構成艦種からして、明らかに南鳥島周辺の離島棲鬼防衛に当たっていた筈の艦隊であろう。

最初は70機以上（今は50機程に減少）もいた深海棲艦の艦載機は、敵空母から数機ずつ発艦されて集まった結果だ。一度に数十機…いや、100km以上離れている距離からでも分かるほど”数え切れない”くらいの大規模な航空団が一度に大挙してやって来られれば、艦載機が減少し機装の損傷も大きい今の翔鶴達にはひとたまりも無い。

金剛「ホワツツ!？」

比叡「ひ、ひえー…!」

榛名「流石にちよつと…大丈夫じゃ無さそう…ですね」

霧島「馬鹿な…! 私の計算では、仮に居たとしてもまだその距離には…!」

翔鶴「瑞鶴、落ち着いて。その艦隊の他に随伴艦はいるの?」

金剛姉妹四隻が各々の反応を示す中、艦隊旗艦である翔鶴だけは、なんとか冷静さを保とうとしていた。

内心は、おそらく他の艦娘達と同じくらいに焦っていたであろうが、せめて横須賀に彼女達を連れて帰る義務がある以上、あからさまな動揺は決して顔に出すわけにはいかなかった。

翔鶴「う、うん…、戦艦棲姫と、戦艦ル級のflagshipが二隻と、重巡り級eliteが一隻、あとは駆逐八級flagship二隻…あ！ 敵機が左右に分かれた！」

翔鶴「不味いわ、このままじゃ挟み撃ちね…皆さん、今から機関出力を最大にしたら、何ノットくらい出せますか？」

今から敵に背中を見せてでも、死に物狂いで逃げるしかない。翔鶴は艦隊旗艦として決断を下した。

金剛「私は全力で走れるネ！ でも比叡は多く見積もっても20ノット、榛名も結構なダメージもらっちゃってるから、私か霧島がフォローしてあげないと危ない状況デース！」

幸い、敵の砲撃は幾分か散発的になり、何故か命中率もかなり落ちていた。

リスクはあるが、この状況が続くなら理屈上は離れるほど安全度は増す事になる。

一か八か、この幸運に賭けて逃げるしかない。
翔鶴がそう判断した時だった。

瑞鶴「どうするの、翔鶴ね……!! ええっ!!」

翔鶴「もうっ、今度は何!」

翔鶴は、全く好転するどころか悪化しかしない状況に対する愚痴をぶつけるかの如く、妹に吐き捨てた。

だが瑞鶴からの次の報告を聞いた瞬間、翔鶴は妹にあたりつけた事への申し訳なさが吹き飛ぶくらいに衝撃を覚えた。

瑞鶴「敵の航空隊が、同士討ちしてる!」

翔鶴「ええっ!」

妹と全く同じリアクションを返すあたり、やはり瑞鶴の姉と言う事だろうか。

ある意味驚くべき状況ではあるが、これは彼女達にとって最大のチャンスである。

翔鶴「艦隊、回頭! 全力でこの海域から離脱します! 金剛さんと霧島さんは、比叡さんと榛名さんの援護をお願いします。瑞鶴は、引き続き偵察をお願いします!」

瑞鶴「分かったよ、翔鶴姉え!」

元翔鶴所属の航空隊も瑞鶴所属の航空隊も、もう殆どが撃墜されてしまったが、足の速い偵察機と、練度の高い航空隊はなんとか生き残っていた。それも撃墜されるのは最

早時間の問題だが、引き返させた所で意味はない。

金剛「了解したネー! 霧島、榛名をお願いしマース!」

霧島「分かりました。榛名、動ける?」

榛名「ええ: 何とか、大丈夫:」

金剛「さ、比叡、肩貸してあげるから、一緒に頑張りまシヨウ!」

比叡「お姉様:!! ありがとうございます!」

よく慕う姉に助けて貰える比叡は、このような状況でも照れなら喜んでいる。

撤退しながら翔鶴は、「深海棲艦の航空機同士討ち」について、回避運動を取りつつ簡単に思考した。

深海棲艦には謎が多い。その筆頭が、「鬼”や”姫”と言った、人の言語を操り人並みの知性を持った個体もいれば、いくらでも沸いて出てくる駆逐艦や軽巡のように人語を喋るところか、行動パターンさえ野生の知性が低い個体もいるなど、頭の程度に明確な「差」がある事だ。

しかし、いくら単体での知能指数が低すぎる個体でも、一度強力な深海棲艦、例えば鬼や姫クラスに指揮されれば、他の深海棲艦に引けを取らない位の統率力を発揮する。

それが、図体が更に小さい艦載機ともなれば、尚の事脳の大きさが(あるかは不明だが)制限されてしまい、”母艦からの命令通りに行動する”と言う基本的なこと以外は

出来ない筈だと言う事は、既に何回も言われてきた。

榛名「まさか、味方の増援でしょうか？　でも、それなら何で反対側から来るのでしょうか？」

翔鶴の思考に呼応するかのように、榛名は誰に言うでもなく問うたが、その問いに答える者が現れる間もなく、瑞鶴の偵察機が見ている状況は刻一刻と変化する。

瑞鶴「後ろからついて来てる戦闘機が、何かを使って…あ、また出した！　さつきから白い煙を出す…：…なんだろう、コレ？　とにかくソレで前を飛んでる艦攻と艦爆を撃墜してる！」

霧島「墳進弾かしら？」

自称「艦隊の頭脳」こと霧島は、頭の中に設けたデータベースから、ある兵器についての情報を引つ張り出す。

瑞鶴「見た感じは、確かにそれ。だけど、墳進弾にしてはすごく良く命中してるし、今まで私たちが墜としてきた深海棲艦の戦闘機に、あんなモノ撃つやつはいなかった」

比叡「うーん…敵の空母の数と飛んできてる艦載機の規模からして、どう考えても離島棲鬼から飛んできたやつですよねえ。新型かしら？」

金剛「でも、それならフレンドリーファイアなんて尚の事有り得ないデース。せつかく戦闘機のニュータイプを開発したなら、普通にショーカクとズイカクの戦闘機目掛け

て撃つ筈ネー」

随伴艦達があれやこれやと推測を重ねてはいるが、まだ敵の追撃から逃れた訳ではないためあまり話し込んでもいられない。

そもそも情報が少ないため、今ここで考えても結論など出よう筈も無い。

翔鶴「いずれにせよ、今は逃げ切る事を考えましょう。瑞鶴、敵の航空隊と艦隊の動きはどう？」

瑞鶴「うん：ええと、もう艦攻と艦爆は、居なくなつてて……て、戦闘機増えてる！ わつ、今度は敵戦艦に向かつて攻撃しでした！ なにこれ……？ ほんともう、意味わかんない!!」

瑞鶴は口では驚きまくりながらも、表情は綻びを出し、声色も何だか嬉しそうだ。

何にせよ、敵を攻撃して時間稼ぎしてくれるのなら、頼らない手は無い。

翔鶴「味方の攻撃機かしら？ 深海棲艦を攻撃しているのなら、多少は足止めになりそうね」

敵の艦砲射撃も、さつきまでの猛攻が嘘のようにいつのまにか止み、瑞鶴航空隊の懸命な尽力と翔鶴艦隊の撤退行動によって、航空機による攻撃も戦艦と空母の対空砲火で十分片付けられる数になった。

本当に、今回の海戦は不幸なのか幸運なのか分からない事だらけだ。

もしこの世に幸運の女神とやらがいるのなら、何故もつと早くに降臨なさらなかったのかと、翔鶴艦隊の面々は皆一様に思ったのだった。

第9話：発進!デスピナ航空隊 (後編)

デスピナ「第1爆撃大隊・第5戦闘大隊、発進準備!」

ミッドナイト・アタッカーズ「第3爆撃大隊と第3戦闘大隊・第4戦闘大隊を送り出して30分ちよい。

流石にいつまでも20ノットで移動し続けるのはのろいと感じた俺ことデスピナは、今は30ノットで航行中。

つい先ほど第3爆撃大隊隷下第1中隊が離島棲鬼への空爆を開始したとの報告を受けたので、そろそろ「戦術爆撃機カロン」36機で構成される——これ何回も説明する必要あるかね?——ボマー1とファイター5を飛行甲板のカタパルトに誘導する。

「戦術爆撃機カロン」。この機もEDF4シリーズに登場した全翼型の爆撃機である。様々なミッション内でその勇姿を拝めた他、エアレイダーの支援要請である「爆撃プラン」や「機銃掃射プラン」で呼び出すことが出来た。

ミッドナイトと違い高高度を飛行する事は無く、プレイヤーの視界で十分捉えられる高度から、一機につき一列に絨毯爆撃を敢行していた。

姿は何故かクラスター弾を投下するミッドナイトやアルテミスと全く同じであり、前世で遊んだEDF4-1のダウンロード配信のとあるミッションではついにカロンも

クラスター弾を投下しだした為、”同じ機体を違う名前と呼んで種類を水増ししている説”まで上がる始末。

今度真剣に違いを研究せねば。

カロン（ボマー）妖精《こちらボマー1、発艦準備完了した》

デスピナ「了解。ボマー1全機へ、先行したミッドナイト隊からの情報によれば、島の一边を1列空爆するだけでも3機は必要との情報だ。編隊を3つ以上に分け、あらゆる方向から敵を粉砕せよ」

ボマー妖精《了解》

ミニチュアカロンのエンジン出力が最大になる。

デスピナ《よし。ボマー1発艦始め！》

俺はトリガーを引き、カロンのミニチュア6つ——6機×6小队——を二回に分けて空に打ち出した。

ファイター妖精《ファイター5、発艦準備よし！》

デスピナ「了解。君たちが戦闘隊最後尾だ。他の隊に負けぬよう、しっかりと働いて来い」

ファイター妖精《EDFの誇りにかけて！》

ミニチュアファイター3個がカタパルトに設置されたのを確認し、俺がトリガーを引

いて発艦させる。

何かこう、楽しいね。トリガーボタンを『カチツ』と押して戦闘機飛ばすの。クセになりそうだ。主に人差し指が。

.....

カロン隊とファイター5がデスピナから発艦して南鳥島に急行している頃、離島棲鬼攻略隊であるアタッカーA中隊の内一番機(クウちゃん)から6番機は、島の南で別れたアタッカー7から9が爆撃ルートに入ってから1分後、南鳥島から南西約15kmのところまで北東に向けて急旋回。離島棲鬼北西側の砲陣地と滑走路を機体の直線進路上に捉えた。

航空参謀《よし、アタッカー4から6はウチらの左隣について砲陣地! 2と3はウチと一緒に滑走路潰すぞ!》

アタッカー2と6 《イエスッサー!!》

航空参謀《前後の間隔を100m空けて高速で突っ込め! 一撃でケリをつける! タイミング見誤ンなよ! あとファイター3、直衛機を1小队だけくれ! 残りはこの辺りで少し待ってろ! ウチらのケツに迎撃機が上がって来次第、ミサイルぶつ放せッ

!>>

ファイター3 《イエッサ。お気をつけて》

航空参謀の指示通り、護衛の第3戦闘大隊^{ファイター3}隷下の“戦闘機ファイター”6機がミッドナイト隊の周囲に展開し、残りの12機は6機1小隊で2グループを作りその場で旋回を開始する。常に南鳥島にいずれかの機首を向けておき、いつ敵が迎撃に上がってきてもすぐに撃墜出来るようにするためだ。

ミッドナイト6機が加速する。

何故か攻撃隊^{アタッカー}の名を冠した爆撃小隊は、3機ずつ2列に分かれて間隔を広げながら、空爆目標の離島棲鬼へ接近する。

離島棲鬼北西の砲陣地の内対空砲と思しき砲台が多数、ミッドナイト隊を睨み付ける。

航空参謀乗機と追従する5機のミッドナイトが加速する。

1分ほどで、ついに爆撃目標直上に到達。

航空参謀 《空爆開始イ!!》

ミッドナイト6機はマツハ0.9 (≠1101km/h) に加速し、敵の対空砲火は彼(女?)らを迎えるささやかな花火となる。

ECCMを起動させてもなお無線にはノイズが入り、例の音が聞こえる。

ダダダダダダアアアッ!!

東側と南側でも繰り広げられた破壊の波が、離島棲鬼最大規模の砲陣地と飛行場、そして健気にも離島棲鬼を防衛する為に離陸を開始する敵の航空機達を次々に吹き飛ばす。後ろから迫り来る爆発の連鎖から逃れるように離陸を開始する戦闘機達は、後ろの機から次々と碎け散り、炎の壁に吞まれていった。

砲陣地では大きな爆発が数回起こり、大型の砲台は今までの重々しく猛々しい威容が嘘のようにひしゃげ、飛び上がり、ひっくり返る。

《——(ザッザザ)——『…ヤメテ…ヤメテエ…!! ……ヤメテエエエ——!!』——(ザザザ)——》

最後に3列目のアタッカー3・6が、2と5の投下終わりの場所から最後の攻撃を開始。

アタッカー3の真下では、敵の航空機が未だに発進を諦めていなかった。航空参謀から始まった滑走路の裁断作業から逃れるべく、まるでアクション映画の主人公のように、後ろから迫り来る閃光と轟音、そして滑走速度が上がる前に次々と破壊される同胞の無念を背中に受けながら滑走を続け、ついに数機が離陸した。

ミッドナイト3番機のレーダーにも、当然自身の下から突き上げてくる敵航空機が複数映り込んだ。

アタツカー3は、後ろから迫ってきたクラスタ^{死神}弾の嵐^{追撃}を逃げ切った深海棲艦の”迎撃機”たちに、ひそかに賞賛を送った。敵ながらアツパレな奴らである。

が、深海棲艦の航空機にとっての”真の死神”のレーダーにも、彼らのマヌケな背中
は映っていた。

ファイター3妖精《今だ！ ミサイルファイア！ フォックススリー！！》

ファイター3妖精《フォックススリー！ アタック！ もらったあ！！》

シユウウウツ——！

シユウウツシユウウー——ンツ！

ズガンツ！ ズガガンツ！ ドゴオオン！！

ファイター3妖精《ハハツ、俺たちがいること忘れられちゃ困るぜー！！》

南鳥島南西で控えていた第3^{フアイター}戦闘大隊³隷下の”戦闘機ファイター”から、空対空ミサイルの援護射撃。

せめてもの報いにとアタツカー3の腹を突こうと急上昇した敵の迎撃機達は、叩き落される黒蠅^{クロバエ}の如く失速し、南鳥島の北端近くに墜落した。

爆撃を終えたミッドナイト6機は、一度南鳥島を時計回りに旋回し点呼を取っていた。

航空参謀《おい、全機無事か!》

アタッカー2 《こちらアタッカー2、隣のアタッカー5ともに損害ありません》

アタッカー6 《アタッカー6、3も無事です。》

アタッカー3 《中々にガッツのある”蚊トンボ”でしたね。さっきの》

航空参謀《ハハハ、違いねえ! おい、アタッカー7から12、お前らは大丈夫か?》
別働して砲台を叩きに行った筈のミッドナイト達が見当たらない。もつとも、すぐに通信が入ったため撃墜されたわけでは無いのだが。

アタッカー7 《こちらアタッカー7。我々と護衛機は、補給のため一時帰投中。アタッカー8から12も一緒です》

全弾撃ち尽くしたため、一足先に帰路に着いただけのようだ。

航空参謀《おう! ご苦労だったな。すぐに後続の第1爆撃大隊とすれ違うだろうか、おまえらは着艦次第整備に入って良いぜ》

アタッカー7 《了解。そちらも無事で何よりです。では、これより帰還します》

そう言つて無線が切られた。航空参謀からアタッカー6、そして最後まで護衛についていたファイター18機が、第一次攻撃隊の中で最後だった。

敵の砲台は粗方破壊ないしは沈黙したのをレーダーで確認し、敵の滑走路は使い物にならなくなったのを目視で確認する。

初めてここに訪れて偵察を敢行したファイターゼロの言っていた通り、ミッドナイト12機だけでは完全に破壊しきれていなかった。

現に、敵の対空砲火は数こそ少ないものの今だ南鳥島の所々から上がり続け、まだ生きていのかどうか分からない砲台や敵施設がちらほら見えた。

対空弾が数発掠めたが、航空参謀は気にせず無線で連絡を取った。

航空参謀《アタッカーAから要塞空母デスピナへ、敵は殆ど片付けやした。現在アタッカー7から12と、ファイター3所属の18機が帰還しますんで、収容お願いしますます》

デスピナ《了解。お前達も帰るんだな? 第1爆撃大隊に挨拶しておけ》

航空参謀《おう! 取りあえずは任務完了したんで、これより帰投しやす!》

一度通信を切り、アタッカー2から6と、護衛のファイター3所属機18機に再度通信を掛ける。

航空参謀《アタッカー1より随伴機全機へ、帰投すつぞ》

アタッカー2 《イエスサー》

ファイター3 《了解。追従します》

母艦お家に帰るまでが作戦遠足である。

航空参謀たちは隊形を組み、燃費を考え高度を上げて帰路についた。

追いつがるように離島棲鬼の対空砲火が飛んでくるが、彼らに届く事は無かった。

ミッドナイトチーム隷下第1中隊アタツカーが帰路につき始めて10分後。

南鳥島から東に160kmの所で、第1爆撃大隊ボと第5戦闘大隊ファイターから成る離島棲鬼第二次攻撃隊は、母艦に帰投中のミッドナイト6機と戦闘機ファイター18機を前方に捉えた。

ボマー1《アタツカー、お疲れさん。後は俺たちに任せておけ》

アタツカー《へっ、もう仕事全部取っちゃったもんね。一方的になるぞ》

ボマー1《そいつはいいな。楽なぶん適当に遊んで帰ることにしよう》

アタツカー《間もなくすれ違う。最後にバトンタッチさせてくれ》

ボマー1《おう、ぶつかるなよ》

10秒ほど経ち、ミッドナイト達が前方に見え、やがてカロン隊とすれ違った。

距離20mほどの高度を、ミッドナイト6機が通過。

ファイター18機もそれに続く。

1分後、今度は航空参謀率いるミッドナイト6機とファイター18機も確認する。

航空参謀《アタツカー1よりボマー1、大分吹っ飛ばしたが、対空砲がちよいと残ってる。墜ちないように気いつけるよ》

そう言つて、航空参謀達は上空を通り過ぎて行つた。

カロンチーム・ボマー1
第1爆撃大隊隊長機ボマー11は、目標に到着するまでの時間を確認した。

ボマー111 (あと9分：)

それまでに、爆撃機の進入ルートを決めなければならない。

既に滑走路は破壊されているため、離島棲鬼直轄の迎撃機が上がってくる心配はない。だと言うのに護衛に戦闘機フアイト36機をつけてしまうあたり、やはり母艦デスピナは新米艦娘(息?)と言つた所か。

ボマー111 《ボマー各機へ、目標から十数kmの所で大隊を3つに分ける。島の3辺と中央付近の施設を、完全に叩き潰す》

ボマー11妖精 《《了解》》

9分後、南鳥島東30kmの地点に到達。

隊長機のボマー111が、隸下の中隊各機に散開命令を出す。

ボマー111 《ボマー1Aはこのまま直進して南側の砲台の残りを叩く。1Bは島の南から東を、1Cは北から北西だ。60秒後、各隊は旋回せよ》

ボマー1-13 《ボマー1B、了解》

ボマー1-25 《1C、了解しました》

1分後、目標との距離が14kmに迫った所で、隊長機の指示通りに、カロン13番機から24番機のBチームは、南鳥島東海岸の砲台を南から北に向かつて叩くため一度左に旋回する。25番機から36番機のCチームは、右旋回し島の北側に向かった。

ファイター5も、12機中隊3つに分かれて、それぞれのボマー中隊を追った。

とうとう離島棲鬼への最後の攻撃が始まった。

まずカロン1番機から12番機が横に6機ずつ2列に並び、南鳥島南側に到達。

ミッドナイト隊による先の爆撃を辛うじて生き延びた対空砲たちが、カロン隊の最後の出迎えるために、空中で炸裂する砲弾をばら撒き始める。

12機の”戦術爆撃機カロン”は、1機ずつ前後の位置をずらして列を斜めにし、タイミングを変えて、まずは1列目の6機が南鳥島の端から満載していた通常爆弾(?)を投下する。

裕一にも分かるように言えば、”前後左右の間隔を空けた爆撃プランDの6機×2編隊バージョン”と言った所だろうか。

爆撃機カロンの積載量はミッドナイトのそれよりも多いため、島の一辺の空爆に3機

も割く必要は無さそうだ。

ドガガガガガ——!!

ズゴゴゴゴゴ——!!

ゴガガガガガツ!!

先行した第3^ア爆撃大隊隷下第一中隊^ムのクラスター弾の直撃を運よく免れた僅かな対空砲は、6列の直線状に真つ直ぐ降下してきた多数の爆弾に打たれ、次々と爆発四散した。

1列目が投下し終わったあたりから、2列目の6機も投下を開始、目標を粉碎する。

《——(ザーザー)——『…イヤ……! ……イヤ……! ……イヤアア!!』——(ザッ

ザ)——》

20秒後、南に向かったBチームと北に向かったCチームが、離島棲鬼のそれぞれ東側と北西側の目標を空爆しにかかった。

カロン隊Aチームの時もそうだったが、狭い離島内で6機で横に並んでの空爆であるため、沿岸近くを狙っているとは言え島の内側にも大きな被害が出ていた。

バゴゴオオooooooooooooツ!!

ドゴーンツ! ズゴooooooooooooツ!!

《——(ザーザー)——『…ア……アア……! ……ウアアアア!!』——(ザザザ)——》

爆撃機たちの冷酷無比な空爆の嵐は、烈火の炎を伴って離島棲鬼を焼いた。

《——(ザザツ)——『:イヤア:!! イヤダ:ヤメテ:……!! :ヤメテエエエ!!』——
——(ザツザ)——》

爆撃機カロン36機大隊の投下した大量の爆弾によって、元より紅く染まっていた南島島全域が昼間の太陽の下でもよく分かるくらいに赤々と燃えていた。

《——『アツイ! アツイノオ……! モウ……イヤ……イヤアアアア……!!』——》
もうとつくに空爆は終えている。

爆撃機カロン達は、満載してきた爆弾を高速で飛行しながら数秒で落とし切ったため、発生した“嵐”は一瞬だけだ。

にも関わらず、未だに離島棲鬼が上げ続けている悲鳴は、単純に爆弾の威力が高く深い痛手を負った事と、相次ぐ爆発によって発生した、島全体を覆う大規模な火災である。

《——『うぐウウ……!! カはツ……!!』——》
ガツゴオオオオオオオオオオ……ンツツ!!!

《——『がッアアア ア ア ア……!!』——》
突然、ただ燃え続けているだけだった離島棲鬼を大爆発の閃光と炸裂音が轟いた。

カロン達の爆弾によって引き起こされた火災が、残っていた砲台の弾薬庫と火薬庫に次々と火をつけ出したのだ。

ノイズが消えてしまった無線機のスピーカーからは、もう何も聞こえなかった。

第1爆撃大隊が空爆する様子は衛星から連続で送られてくる画像をコマンド画面で見
ていたが、いやはや流石はEDFの航空機である。

敵の攻撃をもものとも……しないのかは分からないが、少なくとも一機の損失も無く一
方的に敵を火の海にしてしまうとは……。自分で指示を出しておいて何だが、恐ろし
い。

ボマー1「こちらボマー1、目標は完全に沈黙した。これより帰投する」
南鳥島との距離が約440kmちよいになった所で、離島棲鬼第二次攻撃隊”ボマー
1”から通信が入った。

確かにコマンド画面のレーダーからは、例の離島棲鬼の反応は無くなっていた。

目の前の水平線の遙か彼方には、晴天にモクモクと黒煙が昇っているのが見える。

デスピナ「デスピナ、了解。ボマー1・ファイター5は直ちに帰投せよ」

とここで、また通信が。

航空参謀「こちらアタッカーAとファイター3。もうすぐそっちに着きやすんで、着艦の許可お願いします」

デスピナ「了解。アタッカーAチームとファイター3各機へ、貴機の着艦チェックを実施せよ。着艦を許可する」

実は言ってみたかったんだよねこのセリフ。

俺は返答してから、一旦速度を落とす。

コマンドの航空管制画面からアタッカーAとファイター3の項目右の【帰還】ボタンをタッチし、左腕の飛行甲板を持ち上げる。

すると艀装の中から妖精たちがちよこちよこ出てきて、着艦のためのワイヤーを張りました。

ファイター3「我々が先に着艦します」

直ぐにジェット機のエンジン音が聞こえ、任務を終えて帰ってくるミッドナイト12機とファイター36機を視認した。

1分後、まずはファイター3所属の“戦闘機ファイター”36機が6機ずつ1小隊に纏まり、2小隊が俺の左斜め後ろに回る。

高度を落としながら減速する。やがて2つの小隊は一瞬光に包まれ、一回りも二回りも小さなカナード翼つきのミニチュア戦闘機2機に姿を戻す。着陸用の車輪ランディングギアもちやん

と降りている。

そのまま俺の左腕の飛行甲板の、前方に2本描かれているアングルドデッキに着艦した。(後方の3本のデッキは、着艦ルート上の艦装艦が邪魔で実質使用不可)

甲板上のアレステイングワイヤーに機体のフックが引っ掛かり、機体を強制的に制動させる。

最後に艦装の妖精さん達が、ミニチュアを艦装左の格納プロックのエレベータに誘導して、2小隊の収容は完了した。

同じ要領で、ファイター3所属の戦闘機ファイター36機と、アタッカー所属のミッドナイト12機を収容が完了した。

所要時間は約2分。乗組員妖精さん達の手腕がとても良い事がよく分かった。

航空参謀「全機、帰投したつす」

俺は報告を受け、次の行動を考える。

コマンド画面から時間を確認すると、離島棲鬼に遭遇——と言うより発見——してからもう1時間が経つころだ。

一先ずは、目の前の脅威は消えた。これでやっと、全速力で島を通過して日本列島を

目指す事が出来る。

デスピナ（あ、艦娘達の位置探らなきや。あと——）

航空参謀「旦那、ボサつとしてる場合じゃないつすよ。アタッカーBとCチーム、そんでファイター達がずっと向こうで交戦中つす。早いとこ迎えにいつとかないと、艦娘助けるどころかウチの部下がイルカとあそぶことになりやす」

デスピナ「そうだな。急いで向かおう」

再び機関出力を最大まで上昇させ、南鳥島北側を直線的に通過するルートで北西に向かった。

.....

南鳥島では、いまだに離島棲鬼が燃え続けていた。

「ウウ……グ……！……ガハツ……アア……」

デスピナとその航空隊はついにその姿を見ることは無かったが、離島棲鬼にも他の深海棲艦達と同じく”本体”に当たる部分はある。

島の中央付近に鎮座していた、付近の海域の深海棲艦達を束ねるための司令施設に、”彼女”は倒れ、もがき苦しんでいた。

「……ウウ……ひぐツ……グウ……!!」

いや、そもそもそこが本場に”施設だった”のかどうか怪しいくらい徹底的に、かつ一方的に、彼女自慢の離島要塞は破壊されたのだ。

その痛みや苦しき、そしてどれだけ抵抗しても無駄に終わる空しさは、地球上の生き物の中でもっとも賢いとされる人間でも、想像する事は難しい。

「……イツ……カ……」

今や瓦礫と炎が支配する離島棲鬼の惨状をそのまま体現している”彼女”は、ズタズタになった衣服が燃え、全身の火傷や怪我の痛みが激しい状態で、聞いている者などいる筈も無いにも関わらず、最後の言葉を紡ぐ。

せめて、この世に『自分』と言う者が存在した確かな事実を、あの世に旅立つ”自身”が、他の誰よりも憶えているために。

「……イツカ……シズカナ……シズカナ、ジダイで……キツと……」

来世では爆撃の轟音も、燃え盛る炎の雑音にも無縁な生涯を送れば……。最後の願いを一言だけ遺し、離島棲鬼は今度こそ力尽きた。

果たしてデスピナは覚えているだろうか。

全く他の航空隊の話に挙がる事が無かったため恐らく誰もがその存在を忘れていたであろう第3爆撃大隊隷下の第2・第3中隊が、南鳥島から見て東南東の距離180 kmの所で離島棲鬼第一次攻撃隊の第1中隊と分かれてから約30分弱。

第1爆撃大隊が離島棲鬼に最後の攻撃をかけ始める頃、護衛戦闘大隊の第4戦闘大隊と一緒に、南鳥島北西約290 km地点に到達。

戦術爆撃機ミッドナイト24機と護衛戦闘機「ファイター」36機からなる「深海棲艦追撃隊」は、航空参謀率いるアタッカーAとの分岐地点から30分間、ミッドナイトの巡航速度一杯の979 km/hで何事も無く飛び続けていた。

——のもさつきまでの話。

南鳥島から北西300 kmの地点に到達すると、10 km程から80 km程の遠方にかけての空域では、先行した第零戦闘中隊・第1戦闘大隊・第2戦闘大隊が、深海棲艦の艦載機達を相手に大規模な空中戦を催している最中であつた。

”催している”とは言つても、相手は速度・機動力・火力・射程が遥かに劣る相手に、ミサイルを満載した現用のジェット戦闘機を更に強化したモノが、レーダーロックを掛けながら追いかけたり、彼我の圧倒的な速度差によって追い越してしまい不意に追いか

けられたりしているのだ。本人達は格闘戦をしているつもりでも、発射している武装と機体のエンジン性能によって旋回半径が大きいのもあり、一撃離脱戦に見えないことも無かった。

デスピナ航空妖精達にとつては、難易度イージーのフライトシューティングゲームも同様である。

ただ、到着した「深海棲艦追撃隊」達の足元にはかなり強力な敵の艦隊がいるようで、一際大きな反応が1つと5つの戦艦や巡洋艦、駆逐艦からなる水上打撃艦隊が、ミッドナイトと戦闘機ファイターのレーダーと目視で確認出来た。前方60km以上先には、大小様々な深海棲艦の反応が15隻ほど。艦娘達の中には戦艦が四隻いるらしく、彼女らが接近してくる敵艦を蹴散らしていた。

航空優勢はそろそろ確保できそうだが、制海権はいまだ敵の手中にあるようだ。

EJ24戦闘機12機で構成されるファイターゼロこと”ゼロ中隊”は、彼らから見て30数km先で撤退行動を続ける艦娘達——翔鶴艦隊に降りかかる砲弾の雨を止ませるべく、空母艦娘の一人「瑞鶴」の航空隊と示しも無く共闘し、深海棲艦の戦艦達が飛ばした観測機や偵察機を撃墜、敵艦隊の”目”を潰す。ついでに敵空母が追加発艦させた艦載機も落としておく。

国籍も所属も不明なジェット戦闘機達は、初めは艦娘達に訝しげに見られたようだ。

しかし、深海棲艦の航空機を次々に撃墜しつつ、彼女らが操るレシプロ戦闘機には一切攻撃せず、むしろそれらの後ろについた敵戦闘機を的確に撃墜して援護している様子から、どうやらゼロ中隊たち所属不明航空隊を味方と認識してくれたらしい。

その60km程後方で、戦闘機ファイター36機×2大隊からなる“ファイター1・ファイター2”は、艦娘達を左右から叩こうと考えたのか二手に散開した70機の航空機群を、ミサイルで次々と撃墜し大幅に数を減らした。

アタッカー13 《こちら第3爆撃大隊Bチーム、交戦海域に到着した》

アタッカー25 《Cチーム、交戦を開始する!》

ファイター4 《お待ちどうさん。本命の到着だ! あんたら無事か?》

ゼロ中隊とファイター1・2所属の全機に通信が入った。

ファイター2-1 《おお! やつと来たか! 状況はあまり良くない。ゼロ中隊からの報告では、撤退中の艦娘達は中破ないし大破、艦載機達は殆ど全滅して制空権は喪失! おまけにゼロ中隊の燃料がそろそろマズい!》

ファイター2の隊長機は、味方の現状をいち早く通達する。

ファイター4の長機はマイクスイッチを押し返して答えた。

ファイター4-1 《了解。ゼロ中隊はもう引き上げさせていいぜ。ゼロ中隊の仕事は俺達が引き継いで、ミッドナイト隊が敵空母を攻撃する》

ファイター2—1 《OKだ。——ゼロ中隊！ ファイター4とアタッカーB・Cが到着した！ そろそろ帰還せよ！》

ファイターゼロ 《待ちかねたぞ。後は任せた！》

前方のEJ24の12機中隊が旋回し、帰路につき始める。

次に回線を開いたのはアタッカーB中隊の長機である。アタッカー13だ。

後方からは、敵艦隊から放たれた対空砲火と思しき炸裂音が小さく鳴っていた。

アタッカー13 《俺達は通常爆弾を持ってきた。弾数はある程度余裕があるから、艦娘近くの機動艦隊を叩く。Cチームは確かアレを持ってきたんだったな。すぐ下にいる戦艦棲姫にブチかましてやれ》

アタッカー25率いるCチームも行動を開始する。護衛のファイター4は半々に分かれ、それぞれの護衛対象に追従した。

アタッカー25 《よし、全機高度上げろ！ 敵戦艦を“グラインドバスター”で狙い打つぞ！》

アタッカーBチームは直進し、Cチームは加速して高度を上げながら旋回し、先ほど通り過ぎた敵戦艦達に再び向き合う。

アタッカー25 《グラインドバスターは満載でもたったの4発。こいつで貫けないものはない。各機、外すなよ！》

アタッカー26〜36 《イエスサー》

アタッカー25《一番デカイ戦艦が旗艦だ。俺を含めて4機で集中して攻撃する。随伴の戦艦と重巡には2機、駆逐に1機で攻撃に当たれ。照準が合い次第発射しろ》

長機の命令通りに、新型貫通弾“グラインドバスター”搭載の爆撃機ミッドナイト12機は己のターゲットを確認し、狙いを澄ませる。

すぐに照準合わせが終わる。

アタッカー25《デカブツには2発ずつお見舞いする。グラインドバスター、発射!》
長機と僚機3機は1機につき2発ずつ、まずは真下にいる戦艦棲姫に一閃の光を8つ撃ち放った。流石に全弾を一気に放出してしまうのは勿体無いため、まずは搭載量の半数だけ打ち込み様子を見ることにする。

ヒュンツ!! ヒュヒュンツ!! ヒツヒュンツ——!!

——ゴオン! ドゴンツ! ガオーンツ!! ズガオーンツ!! ズガオーンツ!!
全弾直撃。アタッカーCチームの長機の読みは見事的中した。

本体はもちろんの事、^{からだ}艦装(?)の砲塔部分も正確に打ち抜かれた戦艦棲姫は瞬く間に大破……いや撃沈した。

本体の頭部への直撃で、戦艦棲姫自身は一瞬で気絶。更にグラインドバスターの弾頭が砲塔を貫通した際の摩擦熱で、砲塔内部の弾薬を誘爆させたのだ。

続いて、随伴艦を狙うミッドナイトもグラインドバスターを投下。

あらゆる物を貫く光の筋が、ミッドナイト達から再び降り注ぐ。

ヒュウンツ!! ヒュンヒュン!! ヒュヒュヒュウンツツ——!!

——ドゴン!! ズガンツ! ズガガンツ!! バゴオーンツツ!!

ミッドナイトCチームは、次々に深海棲艦達を攻撃、撃沈していった。

その艦隊が、翔鶴艦隊の皆が懸念した最大の脅威であり、今頃別働隊の戦術爆撃機力ロン達に散々なまでに捌られている離島棲鬼の防衛艦隊だった事など露知らず、無遠慮に（当然だが）撃沈して行った。

やがて、Cチームが離島棲鬼からやってきたすべての敵艦隊を殲滅する頃には、通常爆弾を搭載したミッドナイト隊のBチームが、艦娘達やファイター1・2が交戦している深海棲艦隊への攻撃に入った。

第10話：墳式の救済者

「柵から牡丹餅」と言う言葉がある。

思いがけない幸運に遇う事と言う意味のことわざだ。

では不利な戦況が、何処からとも無く現れた国籍不明機によつて次々と覆される目の前の現象は、果たして「思いがけない幸運」の範疇に収まるのだろうか？

戦闘を開始して自艦隊の不利に気付いた旗艦翔鶴が、いち早く撤退を決断した事もあつて何とか逃げ続ける事が出来てはいるものの、途中で力尽きてしまつては決断の遅速ちそくも意味は無い。しかし、現実には正直な所母港まで辿り着けるかどうかも怪しい。

いや、怪しかった。

瑞鶴「——ほんともう、意味わかない!!」

離島棲鬼攻略を断念し、撤退を続ける翔鶴艦隊の一員である空母艦娘瑞鶴は、かの大戦を経験した実艦時代はもちろん、艦娘に転生した現代でもこれ以上に無いくらいの混乱に喜んでいた。

数刻前までは深海棲艦の艦載機と艦砲射撃にあれほど苦しめられていたと言うのに、突然大挙して現れた戦闘機と爆撃機合わせて百数十機の大航空団が、翔鶴艦隊を危険な

状態に追いやった脅威を次々と排除していく。

例えば離島棲鬼から遙々飛び続^{はるばる}けてきた70機の敵の艦攻と艦爆は、翔鶴達を左右から挟み討とうと試みて二手に分かれた所を、後ろから迫ってきたジェット戦闘機の群れに次々と撃墜された。

気がついたらこちらの偵察機の後ろに食らいついてきた敵の戦闘機も、彼らの一員であらう中隊規模の戦闘機達に逆に背中を取られ、あえなく誘導^{対空ミサイル}墳進弾の餌食となる。

それらの70km程後方では全翼機型の不可思議な形をした飛行機が、離島棲鬼の周辺海域からいつの間にかやってきていた戦艦棲姫を中心とする水上打撃艦隊を、たった一回の空爆で粉碎してしまった。

翔鶴「味方の攻撃機かしら？ 深海棲艦を攻撃しているのなら、多少は足止めになりそうね」

航空隊を殆ど撃墜されてしまった翔鶴には、瑞鶴が偵察機を通じて見ている光景の凄さが伝わりきらないらしい。

瑞鶴「足止めどころじゃないよ！ あの航空隊^{ひとたち}、もう戦艦棲姫沈めちゃったよ！ 随

伴艦も、全部!!」

翔鶴「何ですって…!!」

比叡「えっ!? あんな”怪物^{オバケ}”を航空機だけで!!」

金剛の耳元で比叡が騒ぐ。

比叡が怪物と表現した戦艦棲姫は、火力・装甲・耐久の全てが艦娘側の戦艦を大きく上回る。

一応、対空能力は戦艦娘と同等のため、航空機による攻撃は比較的届き易くはあるが、厚過ぎる装甲のお陰でなかなかダメージが通らないので、大規模な航空隊でゴリ押すか、こちららも砲撃を食らうリスクを背負いながら戦艦娘の強力な主砲や水雷戦隊の魚雷（そして時の運）で対処するしかない。

実際に対峙した事がある者達にとっては、非常に厄介な相手なのだ。

実は、比叡を始め戦艦娘の殆どは戦艦棲姫との戦闘を過去に経験しており、既に何隻か撃沈している。

しかし、それはこちら側の艦娘達の性能や錬度、そしてそれらの艦種と頭数を十分に揃え、全艦が万全の状態かつ彼女達はその戦力を存分に発揮出来る状況が作れてこそその話である。

過去に挙げた戦果は兎も角、現在の戦力は彼女達が所属する鎮守府の資材状況も相まって空母二隻に戦艦四隻しかない。内空母一隻が大破・もう一隻は小破、戦艦は中破二隻・小破二隻。航空は劣勢……どころか、つい先刻まで多数の敵機によって喪失寸前、戦艦の観測機も亡くし、彼我の戦力差は水上艦の数だけ単純に見ても3倍以上開いていた

のだ。

その”圧倒的不利な状況”を、数が多いとはいえ航空機だけで覆ってしまった「彼ら」は、一体何者なのだろうか？

金剛「……たぶんですケド、その航空機^{プレイシ}達は艦娘^{私達}のニューフェイスの所属かも知れないネー」

榛名「でも、味方艦隊の支援は今回は見込めないって、提督が……」
突拍子も無い姉からの予想に、榛名は反論(?)した。金剛の無線機のスピーカーからは、三番艦榛名から今作戦の事前報告にあった要項が聞こえてくる。

空母系の艦娘は自身の艤装はもちろん、搭載する艦載機の製造・運用・維持にも資源を多量に消費する。

どうにか正規空母翔鶴と瑞鶴に航空機を満載し、金剛四姉妹を動かすだけの弾薬燃料を確保する事は出来たが、後続の”南鳥島海域奪還艦隊”の本隊メンバー選出が満足に資源が揃わない中では思うようにならず、実質的に翔鶴艦隊の6名が南鳥島(≠離島棲鬼)の攻略も担うことになってしまったのだ。

日本の鎮守府各地がその様な状態だと言うのに何故、ただでさえ製造には価値が高い”ボーキサイト”を消費し、運用する際には艦娘の入渠時にも必要な”鋼材”も大量に消費する上、飛ばすだけでも航空機用の燃料をレシプロ機以上に浪費する墳式^{ジェット}戦闘機・

攻撃機を多数投入出来るのか、少なくとも榛名には全く分からなかった。

金剛「このあたりに航空基地エアベースを建設できる島はナツシング。一応西の方に硫黄島があるケド、味方の増援がスケジュールされていたならブリーフィングで通達されるハズ。何より……」

ここで一度言葉を切り、肩を貸している比叡を抱えなおしてから、後方を見やる。

人間と同じ身長でありながら、実艦時代の艦橋の観測室と同じくらいに遠くの海を見る事が出来る艦娘の目には、先ほど戦艦棲姫を撃沈せしめた全翼機と護衛の戦闘機達が、今だ自分達の追撃を諦めていない深海棲艦達の上空に陣取っているのが小さく見えた。

金剛「…あの航空機プレイン達の大きさ、どう見ても艦娘が使うものと同じくらいしかないネ」
同じタイミングで、偵察機を通じて状況を通達している瑞鶴が再び口を開いた。

瑞鶴「ねえ！ 今度は”墳式攻撃機”がこつちに来て……あつ、やつぱりだ！ 本当に味方なんだわ、あの航空隊人たち!!」

翔鶴「瑞鶴、報告は正確に——いつ……!!」

瑞鶴「翔鶴姉え本当に大丈夫なの!？」

自身は情報収集に夢中になっており、姉も「大丈夫」と言っていたためあまり気にしていなかったが、どうにも様子が変だ。いや、既に大破して衣服（≠装甲）がかなり破

れてしまい、体中には生傷が多く見えるため既に大”変”な状態ではあるのだが。

翔鶴「……さつき攻撃を受けた所が痛むだけ。それより、今度は何があったの？」

姉を心配する物言いのまま、瑞鶴は現状を旗艦に伝えた。

瑞鶴「駄目そうなら無理しないですぐに言つてよ？ ……何だろう、尾翼が無い変な

形の攻撃機……いや爆撃機が、敵の空母たちに爆弾を落としてるの。数は、爆撃機が12機、護衛機が20機くらい。性能もそうだけど、練度もかなり高いみたい。水平に爆撃してるのに爆弾は一発も外してないし、飛び上がる敵機も全部墜としてる。これなら……！」

報告を続けるにつれて、瑞鶴の表情は再び明るい物に変わっていった。

翔鶴も、少しだけ顔を綻ばせる事が出来た。

翔鶴「……そうね。なんとか振り切れそうだわ。誰かは分からないけれど、私達を助けてくれた人たちには、感謝してもしきれないわね」

”あれだけの数の航空隊を率いるのだから、大型の空母艦娘が数隻、どこかに居るのだろう”

助けた理由や発見した方法は兎も角として、危機に陥っていた自分達を援護してくれたのは名前も所属も分からない艦隊の筈だと、翔鶴艦隊の面々は思っていた。

少なくとも、この時は。

——彼女達は、この救援に駆けつけてくれた大規模航空隊が、後に仲間となる”彼”一隻から放たれた、その名も「デスピナ航空隊」に所属するほんの半数にも満たない規模の部隊であった事を、後に知ることになる。

アタツカー13 《堅そうな見た目の割には、随分と柔らかい奴らだ》

ドオン！ ドオン！！ ドドオン！

対空射撃をしつつ、艦娘達の追撃を諦めていない深海棲艦達に連続で爆撃しながら思った。

空母系の者を中心に攻撃し、航空機の追加発艦を完全に防ぐ事に成功した。

60〜70km程後方で、本来の役目を放棄し艦娘達を追撃しだした戦艦棲姫達「離島棲鬼防衛艦隊」を瞬殺した第3爆撃大隊隷下、アタツカーC中隊12機は、Bチームから《出る幕無し》との通信を受けた。

つい先ほどまで空域制圧に徹していた第1・2戦闘大隊所属の72機も、燃料の不安と制空確保の完了した事による役不足のため、共に帰路につき始めた。

ファイター1—1 《なら、俺達も早めに帰らせてもらおう》

ファイター2—1 《無茶して怪我すんなよ!》

アタッカー25 《では、これより帰投する。後は任せたぞ》

計84機のミッドナイトとファイターは、南東数百キロの所を航行しているはずのデスピナの方向に機首を向け、来た時同様に大挙して帰っていった。

ジェット戦闘機の航続力は——燃費や搭載量にもよるが——レシプロ戦闘機のそれよりも遥かに長い。

ただし、それは圧倒的なエンジン性能で無理矢理稼いでいるようなもので、燃料が空になるまでの時間は意外と短い。戦場に長く滞空したりドッグファイトを繰り返そうものなら割と早く燃料が心もとなくなる。アフターバーナーも使用したら尚更だ。

今後はアタッカーBチームと、彼らの護衛としてついて来た第4戦闘大隊^{ファイター4}が任務を引き継ぐ事になる。

と言つても、もう深海棲艦は殆ど片付き、空母ヲ級elite二隻と軽母ヲ級elite二隻は少なくとも無力化し発艦能力は奪ったため航空機も飛んでいない。

駆逐ハ級elite五隻には1〜2発精密爆撃をお見舞いしたら魚雷が爆発して撃沈。

軽巡ト級elite二隻にも同様に攻撃したら意外とあっさり沈んでくれた。

重巡り級のelite一隻とflagship二隻は意外とてこずったが、結局は大破し撤退を開始。

最後に戦艦ル級elite二隻は、堅さが他より一枚上であり中々沈んでくれなかったが、空母と軽母が無力化され随伴艦達が次々とやられているのを確認すると、こちらも撤退を開始した。

仕上げとばかりに、目標の頭上を何度も通過しながら残っている爆弾を投下して、ようやく弾薬庫に誘爆させる事が出来たようだ。

最後の戦艦ル級eliteが海中に没した事で、今回の作戦——デスピナ曰くイベント戦——の山場は越えた。

結果デスピナ航空隊は爆撃機と戦闘機だけで、艦娘達の援護だけでなく離島棲鬼も撃破し、護衛艦隊も全滅させた事で制海権を確保してしまった事になる。

もう敵と呼べるものも居ないが、念のためその場で旋回し警戒にあたる。

アタッカー13 《海域オールクリア。敵影無しだ》

ファイター4-1 《周辺に敵影無し。作戦成功だ！》

M I S S I O N C L E A R E D

【BGM：EDF4「ミッションクリア」】

各隊の隊長が宣言すると、随伴機から勝ちどきの声が上がった。

ファイター4-7 《やったぞー!!》

ファイター4-13 《EDFッ！ EDFッ！》

アタッカー19 《大勝利だ！ イヤッホー!!》

ひとしきり叫び終え、ファイター4の長機がある事を思いついた。

ファイター4-1 《みんな良くやった。ついでに艦娘達を元氣付けてやろうぜ》

アタッカー13 《おいおい、俺達も混ぜてくれよ》

ファイター4-1 《当然だ。あ、でも全員で大挙して向かうのは流石にビビらせるかも知れんから、1小隊ずつだけ向かおう。ファイター2から6、ついて来い。残りは先に帰ってろ》

4-2 & 6 《イエツサーッ!》

ファイター4-7 《ちえー、りよーかい。ファイター4-7から36、帰投するぞ》

まずはファイター4が、4-1から6を残し、30機が帰路につく。

アタッカー13 《19から24、お前ら参加して良いぜ。俺らはちよつくら無茶しすぎたらしい。燃料が不味くなってきた》

アタッカー19 《やったぜ！ んじゃ、後で母艦で会いましょう！》

次にアタッカーB中隊12機の内6機も、ファイター30機の後を追った。

ファイター41 《よし、彼女らの右後方から並行に侵入、反時計回りに旋回しながら、少しの間護衛するぞ》

アタッカー19 《OKだ》

戦闘機ファイター6機と爆撃機ミッドナイト6機は編隊を組み、艦娘達の上空に向かった。

.....

——side 空母艦娘【翔鶴】——

命の恩人——のほんの一部の12機は今、私たちを中心に周囲300mくらいの所を、墳式戦闘機特有の風切り音を立てながら旋回している。

私たち「南鳥島海域攻略艦隊」は、20ノット前後で少しずつ北西——横須賀鎮守府への帰路についていた。無線機で鎮守府と連絡を取る事が出来る距離になるまでもう少しかかる。

さつきまでの戦場で被弾した箇所がズキズキと痛む。旋回を続ける”彼ら”に釣られて周囲を見渡してみる。

翔鶴「……艦影、機影、見受けられません」

瑞鶴「本当に、本当に助かった……！ きつと幸運の女神が助けてくれたんだわ！」

比叡「ああ……よかつたあ……」

瑞鶴は墳式の航空機たちに大きく手を振っている。比叡さんは金剛さんに支えられながら安堵の息を漏らした。

翔鶴「……い——ッ!! つう……!」

私も敬礼くらいはしなげればと思つたけれど、持ち上げようとした右腕に鈍く激しい痛みが走つた。

翔鶴（折れてるかも知れないわね……飛行甲板もズタズタ）

右腕に軽く左手を添えながら、もう一度辺りを確認する。

——何も、居なかつた。居なくなつていた。

ついさつきまで敵の追撃から必死に逃げていたと言うのに、今は深海棲艦が沈んでいった所に黒煙が昇っているくらいしか、ここが戦場だった事を示すものは何も無い。

”彼ら”の持つ火力は、終始私達を呆然とさせ続けた。

数十分前に突如として現れた航空隊は、私たちが危険な状態に晒されている所に駆け

つけ、どうやら空中の敵に向かって誘導してくるらしい墳進弾で、こちらに襲い掛かろうとした敵の航空隊を全滅させた。私たちが苦戦していた深海棲艦たちも水平爆撃のみであつけなく沈め、更にその前には最も危険な脅威であつた、戦艦棲姫たち離島棲鬼防衛艦隊ですら一瞬で撃沈してしまつたのだ。

霧島「何とかなつたわね。でも、本当に誰が……」

金剛「分からないことで悩んでも仕方ないネー。今は助かつたことを喜びまシヨウ」
”彼ら”をどこかから指揮している筈の正体不明の”艦娘”は、何故か私達が危険な状況を知っていた。

そして何も言わずに艦載機を駆けつけさせ、助けてくれた。

私達には”彼ら”や、まだ知らない”艦娘^{かのしよ}たち”の正体も、所属や国籍すらも分からない。

確かな事は、少なくとも私達に対して敵意は無いこと。

——何より、妹の瑞鶴と金剛さん達四人の命を、艦隊旗艦である私に代わつて救つて頂いた恩人であること。

もしかしたら、相手は私達の事を知っているのかしら？

だとしたら、友軍を救援すると言う意味で航空支援くらいは——失礼、航空支援を實施して頂ける事はあるかも知れない。

それでも今だけは、艦隊旗艦としての現実的な視点を忘れていたいと思った。

編隊を組み、綺麗な円を描く12機の航空隊の主は、瑞鶴の言う通り本当に「幸運の女神様」なのかも知れない。

あの「墳式戦闘機たち」はきつと、瑞鶴が前世から持っている幸運が呼んだ「救済者」に違いない。

——私は、この時はそう思って疑わなかった。

榛名「あ、あの戦闘機たち、帰っちゃうみたいです」

5分ほど旋回し続けた12機の戦闘機と爆撃機は、私たちの撤退する進路とは逆の方向に向けて、再び直進していった。

金剛「ヘーイ!! 助けてくれて、センキューベリーマアアーツチ!! バアーニング……ラアアー……!!! ほら比叡も、ちゃんとお礼言うんデスよ」

比叡「は、はい! ええと……ま、またどこかでお会いしましょう!!」

金剛さんと比叡さんは、思い思いの言葉を彼らに向けて、感謝の気持ちを叫んで腕を振る。

榛名「見事な飛行でした! 榛名、感激です!!」

霧島「支援に感謝します! 道中お気をつけてー!!」

もう2人も同様みたい。それに釣られて瑞鶴も口を開く。

瑞鶴「さーんきゅーっ!! そっちの母艦の人たちよろしくねー!!」

元気に腕を振り、航空隊（敵）の後姿を見送る。

私たち艦娘の声が空の飛行機に聞こえるはずは無い。

けれど、彼らには私たちが何かを言っていることは分かったのかしら。

最後に12機の”彼ら”は、素早く編隊を組みなおしてから機体を左右に大きく揺らし、けたたましく発動機（エンジン）の音をたてながら一斉に急上昇する。

沢山の細長い飛行機雲が、6月の晴天に昇っていた。

——これで、”思いがけない幸運”は終わり。

結局、本来の目的である離島棲鬼の破壊は叶わず、旗艦である私は大破し、比叡さんと榛名さん、霧島さんが中破。

離島棲鬼と交戦状態になる前からこの被害状況のため、進撃は不可能と判断せざるを得なかった。

せめて随伴艦のみんなを母港に帰して、提督に任務を達成できなかった事を叱責して頂くまで、私は旗艦としての責務を果たさねばならない。

いつ敵に増援を呼ばれていてもおかしくないため、改めて私たち6人は周囲の警戒を

強めるために陣形を整え――

ズキイツ!

翔鶴「――ツ!! あああ!!」

瑞鶴「っ?! 翔鶴姉え!」

思わず機関を止め、そのまま前のめりに倒れそうになる。

位置取りを決めるために主機を履いている脚を少し動かしたら、先の戦闘で被雷した左脚の膝関節から激痛が走った。

すぐに瑞鶴が私の所に駆け寄り、上体を支えてくれた。

翔鶴（…本当に、少し無茶すぎたかも知れないわね…。結構……痛い……!）

瑞鶴「膝を挫いたのね…。もうっ、無理ならすぐに言っつて言っつたのに! ほら、私の肩に腕まわして…右腕も痛むの?」

翔鶴「うん、少し……」

私のさつきまでの状態から、すぐに症状を見抜いてくれたみたい。

私は無事な左腕を、瑞鶴の首の後ろから左肩に回して体重を半分預ける。瑞鶴も私の背中から腰に右腕を回して、自分の腰を前にしながら、私の左足を海面から少し上げた。

翔鶴「ありがとう…瑞鶴、ごめんね……」

瑞鶴「気にしないで。ゆっくり、ゆっくりで良いから、少しずつ帰ろう」

本当は捻挫や骨折の時には背負ってもらおうほうが良いけれど、お互い艤装を背負っているためそうもいかない。

いずれ鎮守府に着いたらすぐに入渠して治療に入る事になると思うし、すぐに治る筈。

金剛「ショーカク！ 大丈夫デスカ？」

金剛さんたちも、何事かとこちらに寄って来ていた。

翔鶴「すみません、脚を怪我してしまつて……遅くなつてしまいましたね。本当にすみません……」

金剛「No problem! 榛名と霧島は、ショーカクとズイカクの左側で周囲をアテンションしてくだサーイ！ 私と比叡は反対側につくネ！」

榛名「はい、お姉様！」

霧島「了解です！」

翔鶴「皆さん……本当にすみません、お願いします……」

翔鶴（こんなところを敵に、それも潜水艦にでも補足されたら……!）

瑞鶴に支えられながら、私の頭の中は不安で一杯になった。鼓動が早くなり、全身の感覚が張り詰める。

が、しばらく使っていなかった無線機から聞こえた通信で、私は少しだけ久しぶりに

安心できた。

《こちら水雷戦隊旗艦、神通。機動艦隊、応答してください》

瑞鶴「！ 提督さん、護衛艦隊ちゃんと編成してくれたんだ……！」

私は無線機の通話スイッチを押そうとしたけれど、左手は瑞鶴の肩に回しているし、右腕も痛むので動かせない。

それに気づいた瑞鶴は私の無線機を左手で取り、私の代わりに通話スイッチを押して口元に近づけてくれた。

翔鶴「こちら機動艦隊、翔鶴。救援感謝します。現在、離島棲鬼攻略を断念し、撤退中。……作戦は、失敗しました」

神通《そうですね……。被害状況はどうなっていますか？》

翔鶴「比叡さんと榛名さん、霧島さんが中破。瑞鶴、金剛さんが小破。私は大破しました。私は瑞鶴に曳航してもらっています。比叡さんも主機の損傷が酷く、金剛さんに曳航されています」

神通《了解。急いで向かいます》

通信を終えて、瑞鶴にお礼を言った。

少し経つと、水平線の向こうから人影が見え始めた。

翔鶴（助けに来てくれた”あの航空隊”のこと、何て説明しようかしら……）

— s i d e o u t —

.....

— s i d e 要塞空母【デスピナ】 —

他の部隊と比べて少し遅れて帰ってきた、アタッカーBチーム所属機6機とファイター4所属の6機を全速力状態で収容して4時間ほど。

デスピナ「急げ急げ急げ……！」

西の空がオレンジ色に染まる中、俺は主機を動かし続け海面を航行し続けていた。

南鳥島からの距離は220kmを切った。

30ノットよりも更に1ノット程速く、本当の全開出力でひたすら突っ走りながら時間を確認する。もう夕方の5時だ。

何か知らないけど夕方って、なんとなく急いでやらなきゃいけない衝動に駆られるよね、遊びでも仕事でも。

俺も今そんな気分だ。

いや、衝動と言うよりかは、”責任感”と言ったほうが近いかな。

一度首を突っ込んで助けてしまった手前、艦娘たちをこの危険海域で放つて置く訳にも行くまい。

横須賀に限らず日本のどこかの鎮守府に入港させて貰うためにも、最後まできつちりと出来る事をしなければ。

デスピナ（まあ、女の子を助けてカツコつけたらいいっても、あるんだけどね）

転生する前に格好つけた事と言えば、例の”大妖精”さんの猫——しかも仕込まれたやつ——のために命を投げ出した事が唯一だ。

帰ってきた第^フ零^ア戦^イ闘^タ中^タ隊^ロから第^フ1^ア・2^イ戦^タ闘¹大²隊^と、第^フ4^ア戦^イ闘^タ大⁴隊^と第^ミ3^ツ爆^ド撃^ナ大^イ隊^と第^ミ2^ツ中^ド隊^イからの報告では、艦娘達は空母系二隻・戦艦系四隻の、全部でたったの六隻しかおらず、しかも大破者まで出ていると言う。

しかし、そのおかげで速力が大分落ちていってしまうので、今の内に一気に距離を詰めてしまいたい。

まさかもう轟沈者が…とも考えたが、艦娘六隻と言えば、前世で遊んだゲーム内言う”一個艦隊”相当数である。連合艦隊——あるいは支援艦隊——の内の六隻がもう沈んでしまったと言う事でもない限り、まだ轟沈者は出ていない筈だ。

いや、「筈だ」ってのはおかしいか。この世界における1艦隊の隻数なんて不明なんだ

し、彼女達がいつから戦闘状態なんだかは分からないだから。

まあ何はともあれ、結局は急いで合流する事が最優先って事だわな。

副長「デスピナさん、例の艦娘たち、速度が落ちていいるなら、夜の間は潜水艦対策に小笠原諸島のどこかに上陸してじっとしているとおもうんです。わたしたちは高性能なソナーと対潜水装がありますから、夜通しすすみつづけて早く合流しちやいましょう」

デスピナ「そうだな。小笠原諸島が西に来る頃になるまで、このまま直進して様子を見よう」

そこへ、今度はクウちゃんこと航空参謀が再び口を開いた。

航空参謀「旦那、こつから先、方角の分からない目標を漠然と探しても時間の無駄です。航続距離の長い”大型攻撃機ホエール”を2・3機、角度をかえて発進させて捜索したほうがいいと思いまさあ」

なるほど。

デスピナ「ホエールって夜間飛行は大丈夫なのか？」

航空参謀「いまどき夜がニガテなヒコーキなんざおりませんってw」

デスピナ「それもそうか」

EJ24・戦闘機ファイター・爆撃機カロン・爆撃機ミッドナイトに、次は大型攻撃

機ホエールと来た。スーパーキャリア巨大空母もビックリの搭載量である。さすがはEDFの要塞空母だ。

それにしても、今日一日の戦闘だけで数ヶ月分の時間を浪費した気がするのは気のせいだろうか。

この世に神様が本当にいるのであれば、俺はこうお願いしたい。

デスピナ（そろそろ、艦娘達に会わせて貰っても、いいですか？（切実））

あまりにもゆっくりと進んでいる（気がする）時間の流れに辟易としながら、俺はお世話になるのが何度目になるかも忘れてしまったコマンド画面を開いた。

— s i d e o u t —

第11話：邂逅【艦娘視点】

時は少し巻き戻り、昼下がりに。

神通たちと合流した後には、彼女達の所属する横須賀鎮守府の提督に“作戦失敗”の旨を報告した。

両腕が塞がっている翔鶴に代わり、無線機を持って彼女の口元にあてがっているのは妹の瑞鶴だ。

提督は一言、「そうか……」とだけ呟く。

たまらず翔鶴は、自分達に懸けてもらった期待に応えられなかった事を謝罪したが、

提督「気にするな。全員生きているのなら、それで良い」

後は、翔鶴たちが受けた被害の確認と現在の状況を確認したのみで、特に作戦に関する追及は無かった。

提督が一通り話し終え、翔鶴は気になっていることを訊いてみる事にした。

翔鶴「…あの、提督、一つお聞きしたい事が」

提督「へん、どうした？」

翔鶴「今回の作戦、参加予定の艦娘は本当に私たち以外にいなかったのでしょうか？」

提督《その筈だが、それがどうかしたのか？》

翔鶴（やつぱり、本当に”あの人たち”は……）

いずれ、遅くとも鎮守府に帰れば報告はしなければならぬ。

どう説明したものかと悩んでいたが、結局見たままの事実を話すことにしたようだ。

翔鶴「……実は、攻略を断念し撤退中、私たちを追撃しに向かつてきた深海棲艦に、大規模な見たこともない形の墳式の航空機たちが奇襲をかけ、すべて撃沈してしまつたんです」

提督《何？ そんなまさか……》

提督はほんの2秒だけ思案するが、すぐに先ほどまでの調子に戻る。

提督《……その墳式の航空機は、すべて艦娘達が使う艦載機と同じ大きさだったか？》

翔鶴「私たちの扱うものよりは大きかったです、とても人が搭乗できるくらいに大きなものではありませんでした」

提督《ふむ……とりあえずは、そのまま帰って来てくれ。詳しい話は、報告のときにゆつくり聞こう》

翔鶴「了解です」

通信を終え、瑞鶴に無線機を適当な所に引つ掛けてもらう。

神通ら水雷戦隊は、周囲の警戒をしつつ翔鶴たちを護衛しながら、提督と話す翔鶴の

報告を黙って聞いていた。

時は再び現在、デスピナ航空隊所属の“大型攻撃機ホエール”が艦娘達の上空に到達する少し前。

翔鶴「はあ……」

翔鶴は、自身を支えてもらっている瑞鶴の耳に入らないくらいの音量で、人知れず溜息を吐いた。

傾きつつある夕日に比例して、彼女の心は沈んでいくばかりである。

翔鶴と作戦を共にした妹の瑞鶴と、いつも賑やかで艦隊のムードメーカーとして大きな役割を担っている金剛型の長女も、ずっと黙りこくったままだ。

無理もない。

戦路上重要な離島であった南鳥島は、一度取られてしまえばおのずと敵が集中し、深海棲艦の太平洋側の活動拠点として機能してしまう。

故に、今回攻略に失敗した事によって敵は戦力を大幅に強化する事は必至。太平洋側に出没する深海棲艦の掃討と、小笠原諸島近海の哨戒活動が主な任務である横須賀鎮守

府の負担は大きく増す事になる。

翔鶴（このままの状況が続いたら、どうなってしまうのかしら……）

深海棲艦によって陥落させられた島は、南鳥島以外にもいくつかある。

特に、日本列島の西から南西方向にある海域の攻略と哨戒、そして東南アジアからの海上輸送ルートへの護衛が主な任務である。呉」と佐世保の2鎮守府、そして日本海側の哨戒に重点を置いている。舞鶴鎮守府にとって、豊富な資源の入手先であった沖ノ島海域周辺は、圧倒的な物量で迫る深海棲艦達によって占領されてしまった。

一方南鳥島については、呉鎮守府と佐世保鎮守府から「戦力の回復と念を入れた威力偵察実施による空き時間の有効活用」と言う名目で、主力級の艦娘を数隻、燃料と弾薬を満載した状態で横須賀に回航させて貰える事にはなっていた。

しかし、一刻も早く南鳥島に巣食う離島棲鬼と、その周辺海域に終結しつつある深海棲艦に対して打撃を与える必要有りと判断した横須賀の提督の一声により、派遣艦娘の到着も待たないまま、横須賀の正式な所属である翔鶴以下6名を、”南鳥島海域奪還艦隊”と言う位置づけで出撃させてしまったのだった。

翔鶴（「私たちは損傷を負って撤退した上に所属不明機達に助けてもらいました」なんて……先輩方に何て言われるか……）

実は、佐世保鎮守府からの派遣艦隊の中には、翔鶴と瑞鶴——通称”五航戦”——の

先輩空母にあたる”一航戦”こと空母「赤城」と「加賀」の名前もあった。

出来る事なら今回の出撃と成果を機に、日本列島の周囲に形成しつつある深海棲艦達の包囲網突破の先陣を切って皆に希望を与え、未だに手厳しく指導の目を向けてくれる一航戦（特に加賀）に見直して貰えればと言う個人的な希望もあって、翔鶴は今回の作戦を二つ返事です承。姉妹艦の瑞鶴と、横須賀きつての水上打撃戦力である金剛四姉妹を従え、南鳥島に舵を取ったのだった。

だが現実には、先刻の有り様である。

翔鶴（何の成果も得られなかったわね……）

妹の耳に入らないよう、彼女は幾度目かの溜息をついた。

瑞鶴「あつ、ねえ！ アレ！」

翔鶴「……？ ——！」

金剛「Oh my god！ また来てくれました力！」

神通「……どうしました？……え——！？」

神通率いる水雷戦隊6隻が周囲を囲む輪形陣の中心で、翔鶴に肩を4時間近く肩を貸し続けている瑞鶴が、上空に陣取っている大型機”ホエール”に向けて左手で指差す。

他の艦娘達も、周囲の警戒にあたる神通や駆逐艦ら含め、一様に瑞鶴の指に釣られて

空を見る。

流石に、空母系の艦娘達が扱う艦載機の6倍ほどの全長を誇る巨体は、150m程度の高さを飛んでいても十分視認出来た。

瑞鶴の脳裏では、巨体に追従するEJ24の形が、昼間に自身の航空隊と共闘していた“墳式戦闘機”の形と一致していた。現在神通の水雷戦隊に守られている翔鶴艦隊の面々には、飛行している航空機たちの投影面積が高度の割には小さく見える事から、“彼ら”が再び飛来したという事がすぐに分かったようだ。

霧島「でも、もう周囲に敵は見当たりませんし……哨戒機、にしては結構大きいような……」

金剛「どっちでも良いデース！ きつと最後まで私たちをエスコートするために来てくれたに違いないネ！」

霧島と金剛が推測していると、大回りでゆっくり回転するホエールから発光信号が通達される。

内容は以下の事を意味する一文のみ。

『デスピナ航空隊より、撤退中の艦隊へ。信じろ。1—3—0より、味方艦接近中。停船し、回線開け』

榛名「1—3—0って、昼間の戦闘機達が帰っていった方向と同じよね。——！」

いうことは、味方艦って!」

翔鶴「あの航空隊を指揮する」艦娘達ひとが、近づいてきてるの……?」

彼らの名前は、どうやら「デスピナ航空隊」と言うらしい。

「デスピナ」とは恐らく、彼らを発艦させた母艦か、それを含む艦隊の名前と言うことになるのだろう。

神通「すみません、お話についていけないのですが、”また来た、あの人”たち……? 先ほど、翔鶴さんが話していた事と今飛んでいる大型機について、なにかご存知なのですか?」

デスピナ航空隊と行き違いになる形で翔鶴艦隊の護衛についた神通たちにとって、デスピナ航空隊に接触するのはこれが初めての事だ。翔鶴艦隊が神通率いる水雷戦隊と合流してから、不明機達について直接話せないまま早5時間ほども経ってしまっている。

昼間の作戦に失敗し撤退している所に突如現れ、敵を蹴散らす様を終始偵察機越しに見ていた瑞鶴が、詳しく説明を始めた。

瑞鶴「うん。実はね——」

.....

神通「そんな事が……」

瑞鶴が見た”例の航空隊”の話を聞き終えた神通さんは、周囲への警戒を緩める事なく返答した。

金剛「私たちも、最初は目を疑ったネ。でも、敵艦^{エネミー}を全部沈めた後は、私たちに危害を加えてくる事は無かったデース。少なくとも、シーマンシップを持ち合わせた航空大隊な事は間違いないヨー」

私たちの上空を飛んでいる大型機1機と戦闘機2機の小隊はいつのまにか3機と6機が増え、周囲5kmほどのあたりで、最初に来た小隊と同じようにゆるやかな旋回を続けている。

翔鶴（さつっきの発光信号、『回線開け』って、どういう意味かしら……）

少なくとも、昼間の撤退を助けてくれた航空隊の母艦たちが接近している事、彼女らは私たちとコミュニケーションを取ろうとしている意思は分かった。けれど……

霧島「でもさつっきの信号、何か変よね。停船しろって言うのは、向こうが私たちに追いつきたいって事なんでしょうけど、回線開けって言われても向こうの無線機の周波数

が分からないし……」

そう。私が先ほどから懸念している事は、「艦隊の頭脳 霧島さんが代弁してくれ
た。」

話に集中していたからか、私は突然目の前に現れた「それ」に驚いた。

——ピコーンッ

翔鶴「つ——！……？」

瑞鶴「えっ、何コレ？」

私の目の前には、全体的に明るい緑色をした……何かしら、画面のようなものが現れ
た。

榛名「何か書いてありますね」

金剛「えーと、何々……」

金剛さん達が何事かと寄ってきた。

駆逐艦の子達も一度集まりかけたけれど、神通さんに注意され再び周囲の警戒に専念
しました。

目の前の緑色の画面には以下の一文と、その下に【はい】と【いいえ】の二つの選択
肢のみが映っている。

『—艦装システムリンク— C V F — D E S P I N A によるシステム周波数へのアクセ

スを許可しますか？」

『from CVF—DESPINA to CV—SHOKAKU』

瑞鶴「CV…F”?”

何かしら、F…艦隊?

比叡「艦装しすてむ…何ですつて？」

金剛「つまり、あの航空機達を使つてる味方艦娘が、callingしてるつて事

カナー？」

画面を見ているメンバーで文の意味を翻訳していると、上空の大型機達から再び発光信号が。

大型機『こちらデスピナ航空隊。母艦デスピナと貴艦隊の通話許可を願う』

翔鶴（……）

翔鶴「瑞鶴、無線機、また取つてくれる？」

瑞鶴「うん…でも、いいの？ 別に疑つてるわけじゃないけど、本当に出ちやつて大丈夫かな」

翔鶴「もし仮に敵だとしたら、あの時私たちも沈められていたわ。敵意がないことが確かなら、ここは、言う通りに見ましよう」

瑞鶴「わかった。翔鶴姉えがそう言うんなら、出てみようか」

翔鶴「ええ…神通さん、しばらくの間停船願います」

神通「分かりました。全艦、停止！」

神通さんの掛け声に合わせて、私と瑞鶴に金剛さんたち、神通さんと周囲の駆逐艦の子たちは、機関の出力を落とし、停船する。

私たちの動きに合わせて少しずつ旋回円の中心をずらしながら飛び続けていた大型機達も、飛び方を調節しているのが分かった。

神通「周囲の警戒は怠らないように！」

改めて、私は目の前の空中に留まり続けている画面を見つめ、

【はい】

と書かれている所に軽く触れた。

——ザザザザツキュウイイーツ！

画面に触れると、表示されている内容が次々と変わりだし、瑞鶴の左手にある無線機から雑音が聞こえてきた。

『接続中…』

『接続完了』

次に画面に映っている内容が替わる頃には、無線機のスピーカーから声が聞こえてき

た。

『「通話中——DESPINA——」』

「——あーあー。マイクテスマイクテス……こちら、要塞空母デスピナ。撤退中の艦隊へ、応答願います」

この時の私は、少し困惑していた。

何故なら、無線機越しに聞こえてくる声が、聞き間違いようがない男性の声だったからだ。

”救済者の主”こと「幸運の女神」の正体は、艦娘と同じく女性だと言う先入観を、私は今の今まで捨て切れていなかった。

すぐ隣で聞いている瑞鶴や金剛さん達も、概ね似たような気持ちだったと思う。

もしかしたら、扱っている航空機の大きさから”艦娘”だと勘違いしているだけで、本当は従来型の空母が無人機でも飛ばしていただけなのかしら？

けれど、深海棲艦に対してあの巨大な船体はかえって不利になってしまうでしょうし、何故かこの辺りにいることも含めて考えにくい事ではあるけれど……。

翔鶴「こちら日本国防海軍、横須賀鎮守府所属機動艦隊旗艦、空母翔鶴。聞こえています。初めまして」

艦隊旗艦として、接触を図ってきた”彼”が本当に信用できる者か確かめるのも兼ね

て、私も口を開く。

《え——あ、はい、えー…突然すみません。こちらこそ、初めまして。私は、連合地球海軍日本支部、太平洋方面郡所属、デスピナ級要塞空母一番艦、デスピナと申します。現在、訳あってどこの鎮守府にも所属しておりません。急なお願いを聞いて頂き、ありがとうございます》

翔鶴（ようさいい…空母？ デスピナ？）

艦種といい名前といい、それに所属…連合、ちきゆう軍？ 全く聞いた事がない。

けれど、落ち着いた声色と丁寧な口調から、若い好青年を思わせた。第一印象としては、全く信用出来ない事はなさそう。

——「いやそれより、こうも早くに”命の恩人”と話す機会を頂けたのだから、まずはきちんとお礼を申し上げないと…」

翔鶴「あのっ…あなたは昼間、墳式の戦闘機と爆撃機を派遣して頂いた方でお間違いないでしょうか？」

デスピナ《ええ、一応。南鳥島から、敵の航空機が発進して行くのが見えたので、味方が接近していると思って念のため出撃させましたが……もしかして、ご迷惑でしたか？》

翔鶴「いえ、そんな——！ とんでもありません！」

私は、つい先ほどの自身の思考を恥じた。

「一体、彼」を「信用できる者か確かめる」必要がどこにあるのか。いつから私は、「信用出来ない事はなさそう」などと、情けを掛けて頂いた相手を上から見下ろせる立場になったのか。

今私と話している「彼」——要塞空母「デスピナ」さんは、瑞鶴の幸運がもたらした「女神様」でも無ければ、「信憑性に欠ける男」でも無い。

今私と話している「彼」は、私と、私の大切な妹の瑞鶴、そして金剛さんに比叡さん、榛名さんと霧島さんの命を、自らが離島棲鬼に補足される危険も省みずに、何の躊躇もなく救援を駆けつけさせて救って頂いた本当の「救済者」だという確かな事実を、私は忘れてしまっていた。

翔鶴「むしろ、非常に助かりました。おかげで一人も撃沈されず、無事に撤退を続けております。その節は、本当にありがとうございました」

瑞鶴「うんっ！ 私も、大事な艦載機を全滅させずに済んだし、いろいろと助かったわ！ あっ私、正規空母瑞鶴です。よろしく！」

私と瑞鶴は、今出せる限りの言葉を並べ、心から感謝の気持ち伝える。

金剛さん達も、無線機に顔を近づけ、それぞれお礼の言葉を話し出した。

金剛「Hey！ 私は金剛型戦艦一番艦の金剛デース！ エスコート、サンキューベ

リイマーツチ！」

比叡「ええと、二番艦の比叡ですー。ホント、助かりました。どうもありがとうございますー！」

榛名「三番艦、榛名です。あなたが、あの戦闘機達の母艦なのですね。見事な飛行、感激しました！」

霧島「四番艦の霧島です。正直かなり危なかったの。わざわざ哨戒機まで飛ばして頂いて…何から何までありがとうございますー」

デスピナ《！———そ、そうですねか…「いやそれ哨戒機じゃなくて攻撃機つす！」それは、「やってることは対潜哨戒なんだから良いでしょー」…どういたしまして》

近くにいる随伴艦かしら？

訊いた限りでは二人ほど女性の声も小さく聞こえてきた。

デスピナ《あ、でも、家の航空隊からは、空母1隻が大破と戦艦3隻が中破していると報告を受けたのですが、皆さん航行に問題は無さそうですねか？》

ズキズキツ——

…二重の意味で痛い事を訊かれてしまった。

左膝と右腕からじんわりと痛みがぶり返してくる。

翔鶴「実は複数名、機関を損傷して速度を落としてしまつて…。すみません、少し

失礼します——」

一言断りを入れて無線機から意識を離し、目の前で水上と水中の変化に目と聴音機^耳を凝らしている神通さんに声をかける。

私から見て、彼女の左手の方角には、夕日が水平線に沈んでいく様子が良く見える。デスピナさんから放たれた航空機達が夕日の上を通り過ぎて行き、時間は確かに流れている事を思い出させた。

もうそろそろで、日が沈んでしまう。

翔鶴「——神通さん、夜の間も、移動を続けたほうが良いでしょうか？」

神通「まだ危険海域からは抜け出せていませんから本当はそうしたい所ですが、今の状況では難しそうですね。あまり無理して動いても、今出せる最大船速では万一潜水艦の襲撃に遭った時対処出来るか分かりません。母港まではまだまだ掛かりますから、私たちがかばい続けるのも難しいです……」

翔鶴「そうですか……」

この場所で留まり続けて夜を明かすのか、それとも近くに岩礁が無いか探してそこに向かうのか。

後者の場合、一番近いのは小笠原諸島の何処かになるけれど、今から急いでも何時間かかるかしら……。

少しの間黙っていると、通信相手のデスピナさんから提案があった。

デスピナ「あの、もし夜通しの航海が難しいようでしたら、そのまま明日の夜明けまで機関を止めて、停船し続けることは出来ませうでしょうか？ 私の艦装には、高性能な音探^{ソナー}と長射程の対潜兵装を多数備えておりますので、ある程度距離を縮めれば、当艦の兵装による援護が可能です。現在、最大船速30ノット。対潜水艦用の匣^{デコイ}を、そちらの周辺20km圏に飛ばしつつ航行しています。皆さんに留まって頂ければ、明日の午前5時過ぎには、そちらに合流出来る筈です。実は私、訳あって横須賀を目指しているんです。ご迷惑で無ければ、同行させて頂けませんでしょうか？」

神通「…相手の方は何と？」

長々と無線機から声が聞こえ続けている事に、神通さんは何事かと思つたみたい。

翔鶴「…私達と合流して、横須賀に行きたいそうです。あちらの音探と対潜兵装を使用した支援が可能になるまで、全員の機関を止めて停船して欲しい、と言っています」

神通「合流予定時刻はいつごろになるか、聞いていただいてもよろしいですか？」

翔鶴「明日の0500には^{マルゴーマルマル}こちらに着けるとのことです」

神通「分かりました。艦隊、機関停止！ この付近で夜を明かします。水雷戦隊各艦は、爆雷を投射可能状態にして待機、敵艦と遭遇次第即座に機関を再始動、回避運動に移ります。改めて対水上・対潜警戒を厳にせよ！」

駆逐艦の子5隻の内、何人が納得いかない様子だったけれど、他ならぬ神通さんがあつさりと通信相手の要求を呑んでしまった事もあって、特に不満を言ってくるような事は無かった。

翔鶴（……そうだわ、提督に簡単な報告だけでもしておかないと）

翔鶴「あの、デスピナさん」

デスピナ《はい、なんでしょうか？》

翔鶴「艦隊旗艦として、あなたのご希望を受諾いたします」

デスピナ《本当ですか!？》

翔鶴「鎮守府に連絡を取りたいと思いますので、一度無線を遮断していただいてもよろしいでしょうか？」

デスピナ《了解しました。では、また何かあり次第発信しますね。交信終了》

プツンツ——

音を立てて、私の目の前に浮いていた画面が消えた。

.....

昨日の作戦失敗の後、デスピナさんとその航空隊に助けられた日を越し、6月18日。

夜の間、幸いにも敵に遭遇することは一度も無かった。

強いて挙げるなら、夜空の低い所に赤と青の光——おそらく衝突防止灯——が移動しているのが見えたことと、遠くの方でプロペラの音が聞こえたけれど、すぐに入ったデスピナさんからの入電で、対潜水艦用の欺瞞装置を投下してきた彼の持つ回転翼機（ヘリコプター）だと判明した。

マルヒトサンマル
0130には再びデスピナさんから通信が入り、昨日の夕刻よりもずつと離れた所で旋回を続けていた大型機と護衛戦闘機達が南東——つまり、デスピナさんが居る方向へと帰っていった。

流石に、燃料が尽きたのだと思うけれど、夜間に飛び続ける意味はあったのかしら？
マルサンマルマル
0300になると、デスピナさんから《対潜警戒開始》の入電。距離を訊いたところ、なんと100kmもの遠方から音探で対潜警戒を開始し、対潜水艦用魚雷の発射準備を整えたとの事。

昨日の昼間にやってきた墳式戦闘機たちを指揮するくらいだから、相当に高度な技術で“建造”された艦娘（≠艦息）らしい事は想像がついたけれど……何故空母にそこまで強力な対潜艦装を施すのかは、今まで建造されてきた数ある“艦隊空母”の一隻ではない私には、この時は分からなかった。

そして現在、海の真ん中、皆で主機を止めてからもう10時間半が経過しようとしている。

時刻は0430。
マルヨンサンマル

東の空が白み始める。

榛名「……」

霧島「……」

金剛「……」

比叡「……クシユンツ……」

金剛「……」 サスサス

機関を止め、息を殺し、波の音だけがささやかに鳴り続けている海上でも、種類が違う音は良く聞こえる。

6月とは言え、流石に明け方の海上は少し冷え込む。中破している比叡さんは小さくくしやみをし、彼女の主機が故障したために軽く肩を貸している金剛さんが、背中を擦ってあげていた。

翔鶴「……」

瑞鶴「……」

流石に瑞鶴も少し疲れたようで、小声で私に断りを入れてから身を屈めて、時々肩を貸すのを中断して休憩しては、また私の怪我をした左膝を労わって肩を貸してくれている。

逆算して、もう半日以上もこうしている事になる。

翔鶴（本当に、ごめんね…。ありがとう、瑞鶴…）

もし「今回の作戦で一番の功労者は誰か」と訊かれれば、迷わず私は「瑞鶴」の名前を口にするだろう。

もちろん、戦果だけを見るなら、突然とは言え私たちの撤退を支援しに駆けつけて頂いたデスピナさんの活躍は無視できない。

けれど瑞鶴は、私が中破しても艦載機で索敵しながら、空からの敵を防ぎ続けてくれた。

いざと言う時に発揮してくれる頼もしさに、私は何度も助けられているのだ。

これまでも、そして今回も。

艦娘は、元気な子は本当に賑やかで、落ち着いた子はどこまでも大人しかつたりするけれど、一度「静かに」と命令されると、まるでそこには居ないかのように静かになる事が出来る。

神通「……」

駆逐艦達「……」

水雷戦隊率いる神通さんと、彼女の随伴艦であり門下生でもある駆逐艦達には、文字通り夜通しで水上の見張りとお潜警戒を徹底して頂いた。

現在時刻、マルゴーマルマル0500。朝日が昇り、真つ黒だった海面は青い色に戻る。

ついに、デスピナさんが私たちと合流する予定の時刻になった。

私たちの短くて、とても長い夜がついに終わった。

神通「……そろそろ、合流予定時刻ですね」

沈黙を先に終わらせたのは神通さんだった。

私は首だけ後ろに向け、南東の水平線に目を凝らす。

瑞鶴と金剛さんたち、そして神通さんや駆逐艦の子たちも、東の方角から斜めに降り注ぐ日光に目を細めながら、”彼”——”要塞空母デスピナ”さんの到着を待つ。

榛名「あ、あちらに！」

金剛「Oh！ ヒーローのご到着デース！」

瑞鶴「え、どこ!？」

先に”彼”を見つけたのは榛名さんと金剛さんだった。

”彼”を見つけた誰も、長い沈黙から開放された反動でつい大きな声を上げる。

朝日に照らされ、光を反射して輝く境界線の向こうから、いつの間にか黒い影が昇って来ていた。

神通「あの方が…?」

艦娘は、実艦だった頃の艦橋部と同じくらいの視力を持つから、どうしても主砲の射程に合わせて艦橋部が高く設計されていた戦艦系の艦娘が、目視での水上の見通しは良い。

榛名さんと金剛さんが先に見つけたのはそのためだ。

金剛さんが遠くからやってくるデスピナさんに大きく手を振っている間、やはり流石は神通さんと言うべきか、水中の音に聴音器耳を済ましている様子だった。

2分、3分と経つごとに、”彼”の影は大きくなる。

それにつれて、不自然な点が一つ。

翔鶴「あら…一隻ひとりだけ?」

瑞鶴「ん、どしたの? 翔鶴姉え」

翔鶴「昨日、敵の艦隊に奇襲を掛けた航空隊は、確か100機以上は確実にいたのよね?」

瑞鶴「うん。本当はもつと沢山いたけど、多すぎて数え切れなかった」

翔鶴「それだけの数の墳式機を扱うのに、空母一隻は少なすぎると思わない？ 昨日の夕方ごろに来た、あの大型の”哨戒機”も収容できるのなら、なお更」

瑞鶴「あ、そう言えばそうだよ。相当大きい艦なのかな、その、”デスピナ”さんって」

翔鶴（昨日の通信で無線機越しに聞こえた限りでは、あと二隻ふたりはいる筈だけれど……）
少しずつ大きくなるデスピナさんの影は、距離の割には大きく見えていた。

そして、時刻にして0523。
マルゴーフタサン。

「長らくお待たせしてしまい、申し訳ありません」

私たち機動艦隊の撤退を支援した”墳式の航空隊”の主が、その姿を現した。

「改めまして、私は、デスピナ級要塞航空母艦——」

デスピナ「——I番艦の、デスピナと申します」

これが私と……いや、”艦娘私たち”と”要塞空母デスピナ”さんとの邂逅だった。

——この時の私は、デスピナさんの要塞空母と言う艦種の強大さを、全くもって分かっていたいなかった。

|
s
i
d
e

o
u
t
|

第12話：邂逅【デスピナ視点】

——side 要塞空母【デスピナ】——

引き続き、30ノットで全力航行中。

今日一日潜水艦は一度も確認していないが、撤退中の艦娘達が今いるあたりは、俺にとって未知の海域である。出来る限り急ぎたい所ではあるのだが、向こうも動き続けている筈なため追いつくころにはとっくに日が沈んで…いるどころか夜が空けて何時間も経ってしまったているだろう。

ホエールを発艦させる前に、俺はコマンドを開いたまま現在の状況確認を行う。

デスピナ「CDC、6月って日没は何時ごろだっけ？」

CDC「このあたりの海域だと、大体18時30分くらいです」

砲雷長「…まずいです、夜になると潜水艦を発見するのが昼間よりも困難になります。大型艦のみの編成で水雷戦隊の護衛がないのなら、居るのかすら分からない相手に一方的にやられるだけです」

久しぶり砲雷長妖精さん。

デスピナ「タイムリミットはギリギリ1時間半か……クウ、航空隊つて吊つりさげるタイプ下式のソナー持ってたりする？」

航空参謀「生憎つすね。目視か、戦闘機とホエールに搭載されてる暗視装置使つて探すしか無いっす」

流星に何もかも都合良くは行かないか。まあ暗視装置あるなら少しは楽……なのか？
すると、今度はCDCが話しかけてきた。

CDC「みなさん、聞いてください。攻撃イットウング衛星からの観測によると、艦娘達と思われる反応の速度が先に航空隊が接触した時よりも落ちています。それでも、お互いこの船速を維持したままと考えると、追いつくまで17時間以上かかってしまう計算です」

デスピナ「せめて止まってくればなあ……」

俺がそうボヤくと、副長がポンと手を叩いた。

副長「……それです。停船してもらおうよう、艦娘達に無線で呼びかけましょう！」
デスピナ「無線つて、相手の周波数分かるのか？」

副長「システムリンク」をつかいます。機能の特性上、相手が発している電波やレーダー波の周波数の割り出しをおこないますから、相手の正確な位置さえわかれば、システムリンク機能で艦娘が使っている無線周波数にダイレクトアクセスが可能です」
デスピナ「相変わらず便利な艦装です……つまり、レーダーに引つ掛ければ連絡

も取れるって事だな。CDC、艦娘達が最大探知距離に入るまではどのくらい掛かる？」

すると、CDC妖精含め一同が黙り込む。

俺が困惑していると、CDCが話し出した。しかも、前世で浅識だった俺にとっては驚きの情報つきで。

CDC「あの、申し上げにくいのですが、艦娘達は40km近くまで接近しないと、レーダーには反応しません」

デスピナ「え？」

副長「レーダー波はほぼ直進しますので、水平線の向こうの目標は基本的に探知できませんよ」

航空参謀「旦那、前世でマジモンの軍艦やったのに忘れちゃったんすか……？」

デスピナ「でも、初めて戦闘した時とか、今日離島棲鬼を見つけた時には、ちゃんと500kmくらいの所に引っ掛かったぞ」

副長「詳しい事は後で説明しますが、デスピナ艦装のレーダーの最大探知距離に水上の目標が引っ掛かるのは、深海棲艦のeliteとflagshipクラスの通常艦と、鬼・姫クラスだけです」

デスピナ「何だそりや……」

先に言ってくれよそう言う大事な事は！

まあリーダーについて殆ど見識が無かった俺が悪いんだけどさ。

航空参謀「べつにわざわざ直接無線で連絡しなくても、ホエールから発光信号だせば通じると思いまっせ？ 信じてもらえなくても、たどりついたホエールから座標データうけとって、ソレの方角にその…」システムリンク」とやらのリクエスト送れば良いじゃないすか」

デスピナ「結局、やれるだけの事はやってみるしかないって事か。クウ、ホエールの準備は…」

航空参謀「準備ができてないヒコーキを出そうなんてウチが言うわけないっすよ！いつでも出れませ！」

デスピナ「よし」

再びコマンド画面右上の”航空管制”ボタンをタッチ。戦闘隊から輸送隊まで、なんでもござれなメニューが展開される。

爆撃隊一覧の中に大型攻撃機は居なかったの、”攻撃隊一覧”の中にいるだろう。初めて航空隊を発進させた時のように、既に編成されている”大型攻撃機ホエール”の編隊が、4機一個小隊だけ存在した。

メニュー上部にある【部隊表示切替】ボタンを一回タッチし、全4機の内3機の【出

撃準備」ボタンを押す。

護衛には、第零戦闘中隊フアイターゼロ所属の機を、1小队だけ出撃させる事にした。

飛行甲板を持ち上げると、航続距離を延ばすために増槽タンクを4つぶら下げたEJ24と、垂直尾翼の上部に水平尾翼が付いたずんぐりむつくりなシルエットの空中要塞が姿を現した。

— side out —

.....

”大型攻撃機ホエール”3機を中核とした「艦娘隊搜索隊」がデスピナを発艦してから1時間弱、夕方6時ごろ。

夏に向けて少しずつ日が長くなるこの時期でも、日が傾いてくればオレンジ色と青色からなるグラデーションが西の空に演出される。

日が沈むのは、この時期この海域だと大体18時30分。ヤバい、あと30分しかない。

母艦デスピナから少しずつ角度を変えて、高度1,000mで艦娘達の撤退進路方向

に飛び立った3機の”大型攻撃機ホエール”と、2機ずつ護衛について来ている”EJ 24”6機は、発艦してから1時間弱で撤退中の艦娘達を発見。

一度彼女らの上空を通過しながら、艦娘達を発見したホエールの2番機は無線で通話しました。

ホエール2《ホエール2より空母デスピナ及び”捜索隊”各機へ、例の艦娘達と思われる艦隊を発見した。だが事前の報告と数が合わない。12隻いるぞ》

デスピナ《確認できる限り、編成と被害状況を教えてくれ》

先に彼女らに接触した第3爆撃大隊B中隊と第4戦闘大隊隷下の第1小队からの報告では、空母2隻と戦艦4隻の計6隻。しかし、ホエール2の真下でノロノロと航海を続ける艦娘達は12隻。

一応、空母系の艦娘と戦艦系の艦娘の数は合っており、周辺に似たような構成の艦隊——どこか移動する物体自体一つも無い。

ホエール2《空母2と戦艦4に、軽巡1と駆逐5。空母1隻大破・戦艦中破3、残り3は…視認できる限りでは無傷だ》

副長《んしょ…その艦隊でまちがい無さそうですね。おそらく味方の水雷戦隊と合流したのでしょうか》

デスピナ《副長、ヘッドセットのマイク部に乗っかって落っこちるなよ？ ……とり

あえず、位置座標を送信してくれ

ホエール2 《了解。送信する》

ホエールに搭乗する航空妖精は、コクピット内のコンソールを操作し、母艦デスピナに向けて艦娘12隻から成る艦隊の中心座標を送信する。後はデスピナ艦装のコマンド画面の”海図”から、彼我の位置は分かるはずだ。

デスピナ 《受信完了した。ホエール1と3は、ホエール2の所に向かえ》

ホエール1 《ホエール1、了解》

ホエール3 《こちらホエール3、今行くぞ》

ホエール2番機よりも北寄りの方角を搜索していた長機から通信が入る。南寄りの担当である3番機からも聞こえた。

これで、早くも搜索隊の最大の目的の一つは達成した。だが今度は、艦娘達への停船の呼びかけと哨戒任務飛行がある。

だんだん暗くなっていく中、彼女達の周囲を大回りしながら暗視装置のみで、デスピナのソナーと対潜^{アスロック}兵装の射程内に入るまで対水上・対潜警戒を続けなければならない。

”大型攻撃機ホエール”は、その名の通り鯨の如き巨体を誇る大型攻撃機だ。

裕一が前世で遊んだゲームEDF4.1では、エアレイダーの支援要請のカテゴリに当機の武装による支援攻撃が存在していた。その中から確認できるだけでも、機関砲・

105ミリ砲・120ミリ砲・150ミリ砲、更には巡航ミサイルを大小1種類ずつを多数と、まさに”空中要塞”と呼んでも差し支えが無いほどに強力な航空戦力である。裕一が前世で遊んだゲーム中では特に設定されていないが、艦息デスピナのもう一つの前世である「デスピナとしての前世の世界」では、その強力な武装ゆえに機体は大型のものが必要となり、ジェット推進の大型輸送機をベースに造られたらしい。

鯨の尾びれに見えなくも無いT字型の尾翼と太めの胴体から、モデルは恐らく”C-17グローブマスターIII”である。

移動しながら目視で——水上艦は兎も角——潜水艦を索敵するには、ジェット機にしては遅めだとしても動き続けている分見落としの不安は大きい。

せめて水上の艦娘や水中の敵潜水艦を少しでも見やすくするため、高度を一気に150mの低空まで落としはじめる。デスピナ所属の航空機の中ではかなり大型とは言え、艦娘が扱う艦載機と同じ縮尺である。あまり高い所を飛んでも艦娘からは何が飛んでいるのか分からないだろう。

出撃前には、低空でのホバリング性に目をつけた副長が”輸送ヘリ ヒドラ”を捜索に使う事を提案したが、艦娘達を発見した今から飛ばしても、残念ながら行き帰りの航続距離が足りない。せめてデスピナが十分に接近するまでは、攻撃機ホエール3機と護衛のEJ24戦闘機6機で警戒に当たる必要がある。

夜には、艦娘達の存在が敵に露呈しないようホエールも照明を漏らす事は出来ない。投光機で照らすなどもつての他だ。

あまり落下速度が大きくなりすぎないように注意しながら、機首を下げ、高度を落とす。

ホエール2 《こちらホエール2、これより投光機を用いモールス信号にて艦娘達と接触を試みる》

ズラリと武装が並ぶホエールの機体左側に取り付けてある投光機が明滅する。

長短1種類ずつ発光の仕方を組み合わせ、”モールス符号”と呼ばれる文字列を艦娘達の脳裏に打ち込んだ。

『デスピナ航空隊より、撤退中の艦隊へ。信じろ。1—3—0より、味方艦接近中。停船し、回線開け』

— side 要塞空母【デスピナ】 —

現在、夕方6時。ホエールが到着し、こちらの海図に艦娘達の位置情報が送信されて

きた。リーダー画面にも、その座標の方向が方位計に示されている。

今頃、ホエール2が呼びかけを行って接触を図っている頃だろう。

とりあえず、コマンド画面の”システムリンク”をタッチして――

デスピナ「――良いことを思いついた。クウ、”輸送ヘリ ヒドラ”って、輸送用のコンテナ持つてる？」

航空参謀「おう！ 沢山ありまっせ。何に使うんすか？」

デスピナ「艦娘達に停船してもらっても、俺達が追いつく頃は確実に明日の朝だ。夜の間、彼女らには主機を動かさずじっとしながら、居るのか分からない潜水艦に脅えて夜を明かさせる事になる。そこで、”ヒドラ”が使うコンテナを対潜水艦用の”デコイ匣”として使用する。出来れば何か適当なモノを詰め込んでから、彼女らから離れた所にそれを投下。コンテナの着水と、波で揺すられて中の物が立てる物音に、敵の潜水艦はおびき寄せられるって訳だ」

副長「なるほど！ さすがはデスピナさん、もう一人前の艦息ですね！」

航空参謀「はっはあー！ 中々やりますね旦那ア！ わっかりやした、すぐに準備させてきまっす！」

さて、今度こそコマンドの”システムリンク”をタッチ。

すると、円形のリーダー／ソナーが大半を占めていたコマンド画面左半分が、長方形

の海図に切り替わる。右半分は殆どが空白だが、“レーダー／ソナー表示切替”以外に
もう一つ表示されているタッチボタンは、“艦娘搜索隊”のホエール2から送られてき
た座標だ。

海図の中央には、俺を現しているのであろう細長い形の白い三角形が、左上の方向に
向いている。てことは、この海図は上が北として表示されているって事だ。

海図の海を表す色は明るめの青色だが、俺を表す三角形の周囲には、円形の暗い青の
円が広がっている。右下の尺度計を見る限り、暗い青の円の半径は40kmちよい。つ
まりこの円は、俺のレーダーの水上索敵範囲か。

ホエール2から送られてきた座標は、俺の広域レーダーの水上探知距離よりも遥かに
外側である。

大体、1:2:3:4——15個分。

約600km、遠いよ。

まあ、日没前に無線でコミュニケーションが取れるのは、不幸中の幸いって所かな。
デスピナ（あー、緊張してきた。いよいよ艦娘と初電話だよ…何せ前世では女子とま
ともに電話した事なんて一度もないから、変にキョドらないように注意しないと…）
「そんな事を思いながら、俺は」システムリンク画面”右側の、艦娘達がいる座標のボ
タンをタッチし、小ウインドウに現れた「艦装リンク」ボタンをタッチした。

デスピナ「あ、副長、デスピナの所属ってどこ？」

副長「ズルツ

ポチャンツ

副長がマイク部から落ちた。

とりあえず副長は釣竿で引き上げ、俺のデスピナ艦装の前世である”要塞空母デスピナ”の所属を教えてもらう。

何でそんな大事な事は覚えてないんだデスピナ君よ。※7〜8割くらい裕一君

副長「もう一度言いますよ。『連合地球海軍』」

デスピナ「連合地球海軍…」

副長「『日本支部・太平洋方面郡所属』」

デスピナ「日本支部…太平洋方面群所属」

副長「の？」

デスピナ「要塞空母デスピナです」

副長「よし！」

副長はオカンか何かか。甘えている俺も俺だが……。

現在、艦娘達からの”システムリンク”の承諾待ちだ。

「コマンド画面は、”システムリンク画面”に重なるようにもう一つ画面が現れている。」

『「艦装システムリンクー リクエスト発信中……」』

『「from”CVF—DESPINA” to”point A”』

「point A」と言うのは、ホエールから送られてきた座標……の筈なのだが、海図の上ではついさつきまで移動していたものだ。

座標が海流にのって流される、なんてのはありえないから、これは艦隊の位置座標と
言うよりは、艦娘達の中の誰かの位置座標と言う事になる。

「デスピナ……」ソワソワ

副長「……」

砲雷長「……ふわあ……」

航空参謀「ん、ライちゃん眠い？」

砲雷長「……少し」

送信してから10秒程経過するまでの間は、「一体誰が出てくれるのか」とワクワクしていたのだが、もう30秒くらい待っている。

たかが30秒と思うかもしれないが、電話を掛けるとき、コールを延々と鳴らしつ放しにして相手が受話器を取るのをひたすら待っている時は、ほんの10秒程度の短時間

でも長く感じるものだ。

それに今回は初対面、更に（多分）軍属で、おまけに艦娘の女の子を相手にしての通話である。

最初の10秒を引いた残りの20秒はずっと――

デスピナ（中々出ないな……やっぱりいきなり通話してくれて怪しすぎたか？ そう言えば裕一としての前世では「電話は2コール鳴らして出なかつたら切りなさい」って母さんに言われた事あるけど……やっぱ長々とコールするのはウザつたいのだろうか？ 出る相手が居なかつたらこつちから切れば終わりだからそれはそれで気楽で良いんだけど……って艦娘は確実に向こうに居るんだから出て欲しいがいざ出られたら俺の心の準備があばばば……！）

――なんて事が頭の中でぐるぐる。

だが、待った甲斐があつたと言うべきか俺が電話する事に臆病すぎたと言うべきか、”リクエスト発信画面”が何回か切り替わった。

『接続中……』

副長「あ……」

『接続完了』

どうやら、相手の艦娘は俺の事を「無線で連絡を取っても良いくらいには信用出来る」

と判断してくれたらしい。

デスピナ（なら俺も、せっかくの信用を裏切らぬよう、しっかりと誠意をもって接しなければ……あー緊張してきた）

『―通話中― ―〇〇〇〇―』

デスピナ（来た！）

デスピナ「あー……あーあー。マイクテスマイクテス……」

なにしてんだ早く本題に入れよ俺！

デスピナ「こちら、要塞空母デスピナ。撤退中の艦隊へ、応答願います」

《こちら日本国防海軍、横須賀鎮守府所属機動艦隊旗艦、空母“翔鶴”。聞こえています。初めまして》

俺は、この世界に転生して初めて聞く事になった艦娘の透き通るような声色と、その声の主に相對する際の心構えが全く出来ていない状態でのコンタクトとなり、早速――

デスピナ「え――あ、はい、えー……」

このザマである。

しかしあまりキョドリまくつてもいられないので、実際の時間にして1秒で復歸する。

デスピナ「突然すみません。こちらこそ、初めまして。私は、連合地球海軍日本支部、

太平洋方面郡所属、デスピナ級要塞空母一番艦、デスピナと申します。現在、訳あつてどこの鎮守府にも所属しておりません。急なお願いを聞いて頂き、ありがとうございます」

言えたあー…しっかし、「空母系の艦娘も居る」と事前に聞かされてはいたが、まさかこの世界初の艦娘とのトーク相手が、嫁艦である——と俺が勝手に思い込んでいた。あの翔鶴さんだとは思ひもしなかつた。

画面には『—通話中— | S H O K A K U |』とちゃんと表示されている。

デスピナ（ビビツたぜ）

臆病者か。

…て安堵しながら一人ツツコンでる場合じゃねえ！

デスピナ（早く俺の目的と要望を伝えないと！　しかし次は…どう言ったものか…）

最初の挨拶と自己紹介に成功したからと言って安心してはいけない。いや事前に「何をどう言つて伝えるのか」を決めておかなかつたのがそもそもの原因なだけだし…。

翔鶴《あのっ…あなたは昼間、墳式の戦闘機と爆撃機を派遣して頂いた方でお間違いはないでしょうか？》

俺の心のテンパリ具合が相手に伝わらなかつたのかは定かではないが、通話相手の艦娘——空母娘「翔鶴さん」の方から話すきっかけを頂いた。

デスピナ（あー…：そーういや昼間、そんな事もしたな）

もう1〜2ヶ月くらい前の事のような気がするが、時系列で言えば今日の昼間なのだ。

デスピナ（戦闘機に”EJ24”を12機と”ファイター”を百…何十機かと、爆撃機”ミッドナイト”を3じゅ——いや、3つの中隊に分けた内の2中隊だけ向かわせた筈だから——24機を、向かわせたんだったな）

デスピナ「ええ、一応。南鳥島から、敵の航空機が発進して行くのが見えたので、味方が接近していると思って念のため出撃させましたが…：もしかして、ご迷惑でしたか？」

念のため訊いておく。

翔鶴《いえ、そんな——！ とんでもありません！》

お邪魔でないのなら良かった。

翔鶴《むしろ、非常に助かりました。おかげで一人も撃沈されず、無事に撤退を続けております。その節は、本当にありがとうございました》

俺は、転生してから幾日にも及ぶ航海から来る精神的疲労が吹き飛ぶくらいに気分が

高揚していた。

” ありがとう” っつて、本当に良い言葉だ n

《うんっ！ 私も、大事な艦載機を全滅させずに済んだし、いろいろと助かったわ！》

デスピナ（おおう、誰だ？）

翔鶴さんと良く似た声、” 大事な艦載機” との発言から、もう一人の「翔鶴型空母艦娘」を思い浮かべる。

瑞鶴《あつ私、正規空母” 瑞鶴” です。よろしく！》

デスピナ（だろうね、何となく居るんじゃないかとは思ってたよ）

裕一として前世で遊んでいた艦これでは、建造で手に入れるまでに軽く1年は費やしてしまった覚えがある。

しっかし、この時点でもう俺の押しキャラの二人とお話出来た上に感謝されてしまうとは、転生して以来中々幸先良いのではないだろうか。

と、また誰か別のお方が話し始めたようで……

金剛《Hey! 私は金剛型戦艦一番艦の” 金剛” デース！ エスコート、サンキューベリーマツチ！》

比叡《ええと、二番艦の” 比叡” ですー。ホント、助かりました。どうもありがとう（ございます！）》

榛名《三番艦、》榛名》です。あなたが、あの戦闘機達の母艦なのですね。見事な飛行、感激しました!》

霧島《四番艦の》霧島》です。正直かなり危なかつたの。わざわざ哨戒機まで飛ばして頂いて…何から何までありますがとうございます》

デスピナ（ちよ……マジかい!?)

ホエールからの報告にあつた「戦艦四隻」って、金剛姉妹の事だったのか…。

霧島さんの言っている「哨戒機」とは、翔鶴さんたち撤退中の艦娘達を捜すために出撃させた攻撃機ホエールの事だろう。

デスピナ「!———そ、そうですか…。「いやそれ哨戒機じゃなくて攻撃機つす!」

ちよつと航空参謀? クウチャン 今俺大事なお話してるところだから静かにしてね、ね?

副長、お宅の航空参謀、少しの間黙らせて頂けませんかね。

デスピナ「それは、「やつてることは対潜哨戒なんだから良いでしょ!」…どういたしまして」

副長よ、おまえもか!

便乗するなこんにゃろこの野郎。

一通り、撤退していた艦娘達本人である翔鶴姉妹と金剛姉妹からなる機動艦隊の声は聞けた。声を聞く限りでは皆平気そうだが、先刻ホエールからの報告では確か…。

デスピナ「あ、でも、家の航空隊からは、空母1隻が大破と戦艦3隻が中破している
と報告を受けたのですが、皆さん航行に問題は無さそうですね？」

俺が心配なのはそこである。

南鳥島に巣食う離島棲鬼を見つけたあの時、少しでも航空隊を出撃させるのを渋つて
いたら、翔鶴さんたちの誰かが轟沈していたかも知れないのだ。

誰も沈んではいないとの事で良かったが、まだ油断は出来ない。さつき砲雷長が言っ
ていたように、潜水艦が出沈しないとも限らないのだ。

翔鶴《実は複数名、機関を損傷して速度を落としてしまつて……。すみません、少し
失礼します——》

デスピナ（やはりか……）

デスピナ航空隊の発進をもう少し早く決断しておけばと、今更ながら軽く後悔する。

翔鶴《——》神通「さん、夜の間も、移動を続けたほうが良いでしょうか？」

神通さんもおるんかい!?

あ、ホエールからの報告にあつた「軽巡1隻」か。て事は、駆逐艦5隻も同じ場所に
いるんだな。

神通《本当は——したい所——が、今の——では——そうですね。あまり無理して——
ても、今出せる——船速では万1潜水艦——撃に遭つた時対処——るか分かりま——

——まではまだまだ——ますから、私た——かばい続け——も難しい——…》
翔鶴《そうですね…》

デスピナ（ふむ…）

無線機から離れているからか、神通さんが何言っているのかよく聞こえなかった。

ただ、聞こえた部分を並べ、途切れた部分を適当に埋めて考えた所、どうやら夜通しの移動は向こうにとってリスクなようだ。

デスピナ「あの、もし夜通しの航海が難しいようでしたら、そのまま明日の夜明けまで機関を止めて、停船し続けることは出来ませんでしょうか？ 私の艦装には、高性能な

音探^{ソナー}と長射程の対潜水艦装を多数備えておりますので、ある程度距離を縮めれば、当艦の

兵装による援護が可能です。現在、最大船速30ノット。対潜水艦用の^{デコイ}の匣を、そちらの

周辺20km圏に飛ばしつつ航行しています。皆さんに留まって頂ければ、明日の午前

5時過ぎには、そちらに合流出来る筈です。実は私、訳あつて横須賀を指しているんです。ご迷惑で無ければ、同行させて頂けませんでしょうか？」

とりあえず、こちらの要望は言うだけ言ってみた。

出来ればもう少し、相手が相槌を打ったり反芻したりする時間を作った方が良いとは思うのだが、生憎俺はそこまで気の利いた会話術は持ち合わせていない。

神通《…相手——は何と？》

翔鶴《…私達と合流して——》

翔鶴さんは、俺が合流して一緒に日本——とりあえず横須賀に行きたいと言う旨を、俺に代わって神通さんに伝えてくれているようだ。

神通《——改めて——上・対潜——を敵——よ！》

デスピナ（大丈夫だろうか……？）

聞いている限りでは、特に意見が食い違っている所はなさそうだったが、果たして……。

翔鶴《あの、デスピナさん》

デスピナ「はい、なんでしょうか？」

良かった、ちゃんと声出た。

あまり人と喋らないと、喉にたんが引つ掛かって一回「グツヴンツ」とかやらないと声の出し始めが小さくって小さくって……。

翔鶴《艦隊旗艦として、あなたのご希望を受諾いたします》

デスピナ「本当ですか!？」

やったぜ！（定型文）

良かった、意外とあっさり要望が通ってくれた。

翔鶴《鎮守府に連絡を取りたいと思いますので、一度無線を遮断していただいてもよ

ろしいでしょうか?》

デスピナ「了解しました。では、また何かあり次第発信しますね。交信終了」
プツンツ——

そう言つて、俺は画面を閉じ、一旦”システムリンク”を切つた。

副長「やりましたね、交渉成立です!」

デスピナ「ああ。だが、喜ぶにはまだ早い。急ぐぞ」

副長「これ以上スピードは出ませんけどね」

デスピナ「気分の問題だよ。……クウ、輸送ヘリ隊の準備を頼む」

航空参謀「アイサー! あ、そいつらの事は——」

デスピナ「ポーターズか?」

航空参謀「……よくご存知で。んじや、準備してきまつす!」

そんでもつて、

デスピナ「砲雷長ちゃん、ミサイルの予備弾薬ってまだある?」

砲雷長「結構ありますよ」

デスピナ「ミサイルの信管、なにかの弾みで作動しないようにしてから、何発か”ヒドラ”のコンテナに積み込んじゃつて。物音たてたのに使いたいから、固定はしなくて良いよ」

砲雷長「了解」

^{デコイ} 囷の準備は滞りなく進みそうだな。

北西に向かっている俺の左手斜め前方には、真つ赤な太陽が水平線の向こうにお帰りになっていった。

.....

俺の後悔……じゃなかった航海はまだまだ続く。

ただいま時刻は20時30分。真つ暗である。

貨物を搭載した”輸送ヘリ ヒドラ”の作戦行動半径（≠最大往復可能距離）である500kmを切つたため、コマンド画面のメニューから毎度の如く（実際毎度だけど）”航空管制”メニューを開き、その中の”輸送隊一覧”を呼び出す。

デスピナ「クウ、貨物の準備は良いか？」

航空参謀「言われたとおり、砲雷科^砲妖精^精に渡されたブツはちゃんとしてきてくれて、ここまですべて揃った。後は何回もやった通りだ。

ここまですべて揃った。後は何回もやった通りだ。

”輸送隊一覧”のメニューの中から、全部で12機搭載されている輸送ヘリの、まず

は半数を出撃させる。

飛行甲板を持ち上げると、既にコンテナが付いた状態の”ヒドラ”達が、妖精達に台車で運ばれてきた。

6機すべてのローターが回転を始める。

ヘリコプターやオートジャイロの類は、当然カタパルトは使用しない。

なので直接発進を宣言する。

ヒドラー《こちらポーターズ。積み込みよし、出撃準備完了》

デスピナ「了解、”ポーターズ”発艦せよ」

ヒドラー《了解。ポーターズ、出撃！》

宣言すると、サイドバイサイド型のメインローターに、何故か不必要なはずのテールローターが付いた特徴的な外見の大型輸送ヘリ”ヒドラ”の編隊が、夜の海に出撃した。

デスピナ「可能な限り低空飛行し、敵に補足されぬよう注意せよ」

ヒドラー《了解》

一応、ホエールが対潜哨戒を続けている筈だが、燃料が切れるギリギリまで飛ばれた場合には、もう艦装の中の燃料の予備が心もとなくなってしまうため、早めに^{テライ}囷を飛ばしておいたほうが良いだろう。

日付が変わり、6月18日の午前1時30分。北西で停船している艦娘達との距離はそろそろ210kmくらい。

今の今までずっと対潜哨戒飛行を実施していた大型攻撃機ホエール達から通信が入った。

ホエール1《こちらホエール1、EJ24護衛機含め、全機そろそろ燃料がマズイ。これより帰還する》

デスピナ「デスピナ、了解。帰投せよ」

”ポーターズ”に持たせたデコイ砲はとつくに投下し、投下地点の座標も受け取った。

あとは、引き続き適当にその上あたりにヒドラを陣取らせ、敵の潜水艦によってデコイ砲が破壊され次第、艦娘達に到達する仕組みだ。

不安なのは、へりは回転翼で直接自重を持ち上げて飛行する都合上燃料消費が激しい事だから、あまり長く滞空させる事も出来ない事か。

デスピナ（念のため、翔鶴さん達にホエールの帰投伝えておこう）

コマンド画面↓システムリンクから、先には座標が書いてあったボタンをタッチし、

現れた小ウインドウから「無線通信」をタッチ。

既にリンクは終わっているので「艦装リンク」の必要は無し。

『発信中…』

『―通話中― ―SHOKAKU―』

今度はずぐに出てくれた。

翔鶴《こちら翔鶴、何でしょうか？》

敵の潜水艦対策に少しでも音をたてないためだろう、翔鶴さんは小声で話していた。

デスピナ「こちらデスピナ、たった今、哨戒飛行に出していた大型機とその護衛機を
帰投させました」

翔鶴《了解しました。…あの、時々、遠くに何かが、羽音を立てながらゆっくり飛ん
でいるのが見えるのですが……》

デスピナ「対潜用の^{デコイ}囷を投下しに向かわせた、家の輸送^{うち}ヘリです。もし、どこからか
魚雷が着弾した時の音や、何かが爆発する音が聞こえましたら、方角を教えてください。
万一、艦隊の誰かが敵の襲撃を受けたときにも、念のため教えてください」

翔鶴《……分かりました》

何か歯切れが悪……あ、そうか。

デスピナ「そちらの画面は消しておきますが、無線機のリ線は通じておりますので、い

つでも連絡なさってください」

翔鶴《了解しました》

数時間前の副長からの説明によると、システムリンクで通じている相手には、俺が使うコマンド画面と同じように、明るい緑色に発光するホログラム画面が浮かんでいるのだとか。

流石に探照灯ほどの光量は無いとは言え、夜の海で明かりを灯そうものなら、たちまち敵が寄つ来てしまう恐れがある。

今回システムリンクを使った本来の目的である「無線周波数の割り出し」は終えたので、もう一々システムリンク画面を使わずとも、無線機で直接やりとりは出来るのだ。

現在、彼我の距離は約200km強。

30ノット（ $\parallel 55 \cdot 56 \text{ km/h}$ ）で航行し続けて、あと3時間半くらいか。

デスピナ（よし、もう少しの辛抱だ。やっとあの翔鶴さんに、いや夢にまで見た二次元の女の子に会える……!）

「この世界では彼女とか出来るだろうか」とか、「日本に着いたら何しよう」とか、取らぬ狸の皮算用と言うべきなのか自分の頭では分からない事を思い浮かべながら、気持ちだけ増速した。

時刻は午前3時。艦娘達との距離は120km弱。

そろそろ、俺の艦装に搭載されているソナーと対潜水兵装アスロックの射程距離だ。

いや、まだ遠いか…？

仕方ないので、既に即席の対潜デコイを落とし、少しの間の対潜哨戒を終え、一度帰投したヒドラ達にはもう一度出撃してもらい、暗視装置にて潜水艦の位置を探らせ、もし敵の潜水艦や水上艦を発見した場合には座標を送ってもらう事にしよう。

てな訳で、現在翔鶴さんにモーニングコール中。

デスピナ「こちらデスピナ。これより、本艦の艦装による対潜警戒を開始します。そろそろ距離は100kmになりますので、そちらにはほぼ定刻どおりに着けると思います」

翔鶴「え、そんなに離れた距離からですか？」

日の出まではまだ時間があるため、翔鶴さんは相変わらず小声のままだ。

デスピナ「まあ、伊達に要塞やっついでいませんで…それより、本当に長い間お待ちせしてしまって申し訳ありません。今のところ、敵の襲撃はありませんか？」

俺は回答になっていない返事を誤魔化すため、一先ずの謝罪と、現状の確認を行う。

翔鶴「はい。今のところ敵の気配は無く、被害もありません。こちらこそ、いろいろと手を打って頂いて、ありがとうございます」

俺の我が侘を聞き入れて長々と待っていてくれる上に、それでも尚感謝の気持ちあらわを露にしてくれるとは、翔鶴さんは現実でも女神だわー。改めて実感した。

デスピナ（翔鶴さんは女神。異論は認めん）

デスピナ「何も無いのでしたら、良かったです。もう少しだけ、お待ちください。交信終了——ふう……」

副長「お疲れ様です。本当に、良かったですね……」

デスピナ「全くだよ。なんか、ハワイの近くから太平洋を渡ってきた時の方が、時間が早く流れた気がするのには気のせいかな……」

副長「気のせいのはずですが、わたしも同じ気分ですよ……」

全く深海棲艦の野郎、南鳥島に離島棲鬼なんか置くからこんな時間掛かってるんだぞこん畜生。

さて、この後は何事も無ければ向こうと合流するまで若干暇になる。

デスピナ「副長、昨日言ってた事だけどき、俺のレーダーに水平線の向こうの f l a g s h i p やら姫級やらが引つ掛かるのって何でなんだ？」

副長「それはですね、デスピナ艦装に搭載されている、レーダーの仕様によるもので

す」

折角なので、先日聞きそびれた事を改めて聞いてみる。

まずは副長。

副長「深海棲艦は、ある一定以上の力をもった個体のみ、独自の“オーラ”を放出するようになります」

デスピナ「オーラ？」

副長「虚像、といえればよいでしょうか。わたしたちがeliteやflagship、そして鬼や姫と呼んでいる深海棲艦の個体は、自身の体積よりもはるかに巨大な“オーラ”を放出します。その“オーラ”を感知した周囲の深海棲艦が数隻集まることで艦隊を編制し、統制を維持しているものと考えられています」

そう言えば艦これの深海棲艦って、確かに赤かったり黄色かったりする禍々しいオーラ的なものが描かれてはいたが…。

デスピナ「へえ。で、それとリーダーに何の関係があるんだ？」

副長「デスピナ艦装の広域リーダーは、他の艦娘の艦装に搭載されている電探とは微妙に仕様が異なっているんです。艦娘の電探は、実際に存在するリーダーとほぼ同じように、深海棲艦の本体や艦装そのものを探知して索敵しますが、デスピナのリーダーの

場合、まず遙か遠くにたちのぼる深海棲艦の“オーラ”を探知する機能もあって、地球の丸みを考慮しつつエレメンタルシステムで距離を算出、位置を予測しているんです」

デスピナ「……なるほどな」

なにその高度な観測技術と計算処理能力。

しかし、あの揺らめく炎のような“オーラ”とやらを探知するなら、その仕様上どうしても発生してしまうであろう問題が懸念される。

デスピナ「……密集してる敵は探知出来るのか？ 見えない敵集団を気配だけで探るような物なんだろう？ こっちから見て横にびったりくつついてたり、前後に並んで向かって来てる敵には、反応が重なつちやつて実際の数よりも少なくなったりしないのか？」

副長「おなじ elite や flag ship 同士の場合には、それもありえます。ですが、elite と flag ship、鬼と姫など、種類が異なるクラスの個体では“オーラ”の種類がちがいますので、すぐ近くにとりあってもちゃんと識別が可能です。前後にならんでいる場合でも、ほんのすこしでもズレていけば大体は探知可能です」

ならついでに、こんな質問をしてみる。

デスピナ「そう言えば初日の戦闘で、一度に沢山撃ったミサイルは全部、elite

とflagshipがレーダー上では重なっている筈の敵にも命中したみたいだけど、本当に狙った敵に当たったのか？」

副長「はい、あたりました。デスピナ艦装に搭載されている巡航ミサイルは、すべて複数の誘導方式を自動で切り替えるようにつくられています。たとえば、初日に使用したライオニックですが、撃ちはじめは艦装のレーダーによる目標指定と慣性誘導によって飛んでいきますが、ミサイルの誘導装置が探知範囲内に目標をとらえしだい、すぐアクティブ誘導に切り替わって攻撃します。そして、一瞬でも艦装のレーダーにとらえた目標はエレメンタルシステムの計算によって位置が予測され続けますから、それをミサイルのシーカーに記憶させて発射すれば、命中させることが可能です」

デスピナ「おぉー……」

もう何でもアリじゃねえか俺の艦装。高性能にも程があるぞホント。

是非とも有効に使わせて頂きますけども、一体誰がこんな凄い性能の艦装を設定：じやなくて設計したんだろうか。

デスピナ「水平線の向こうの敵がelite以上しか探知出来ないんなら、”オーラが無い深海棲艦と味方の艦娘はどうするんだ？”

副長「”オーラ”が出てない敵なら並の艦娘でもじゅうぶんに対処できますから、本艦が気にする必要はありません。見えてる敵だけ殲滅すればよいのです。味方とは無

線機つかって連絡すればいいですしね」

デスピナ「水平線よりもこっち側にいる場合は？」

副長「それはもちろん、ふつうに探知可能です」

デスピナ「それは良かった」

さて、次は毎度お馴染みのコイツだ。

航空参謀「旦那はもう把握してるとおと思いますが、デスピナ航空隊の編制は36機で1大隊を編制して、それぞれにコールサインが割り振られてるつす。カロンで構成する第1・第2爆撃大隊が『ボマー』、ウチが指揮するミッドナイト隊が『アタッカー』、アルテミス隊が『サブレッサー』、戦闘大隊が『ファイター』で、輸送チームが『ポーターズ』つすね」

こちら辺は、先日の離島棲鬼攻略の際にクウちゃん本人から聞いた通りだ

航空参謀「んで、それを12機ずつ3つに分けると3個中隊が出来上がって、それぞれAチームBチームCチームと、ウチらは呼んでるつす。作戦中は、大きくても大抵は中隊程度しか出番はありやせんし、こんな風な呼び方が定着しちゃったんすよね」

デスピナ「つまり、大隊内での36番機は、Cチームで言う所の12番機って事か」
航空参謀「そつすね。紛らわしくてすみません」

デスピナ「気にするな。俺は好きだぞ、そう言う…」ファイター1A5^{ワンファイブ}”みたいな感じの呼び方。直感的で分かり易い」

裕一として前世で遊んでいたEDF4.1でも、NPC隊員達は”〇〇1-5^{ワンファイブ}”と感じに自分の所属する隊の事呼んでるのをゲーム中で何度も耳にしたし、割と違和感はない。

航空参謀「ははっ、そう言ってもらえると、アイツらを引張る立場としてうれしいすねえ。でも、リーダーとしては兎も角、アイツらと肩を並べる立場としちゃあ中隊内の呼称なんか気にしないで、大隊の総力挙げて全力出撃する方が何かとアイツらも喜ぶから、それはそれで良いんですけどね」

デスピナ「燃料消費はバカにならないが……その気持ちは分かるぜ」

戦術爆撃機カローンの大編隊とかマジ胸熱じゃないか。初めてブルートフォース作戦をプレイした時、空軍の爆撃機がヘクトルの集団に絨毯爆撃を食らわせた時の感動と言ったら、何事にも代え難いモノがあったものだ。

転生してしまった今となつては確かめようも無いが、俺と同じくEDF4シリーズをプレイした隊員の皆なら、俺と航空参謀の気持ちはきつと分かつてくれる筈だ。

航空参謀「旦那が話のわかる空母でよかつたつす。次はアルテミス隊のことも頼みませ。アイツら拗ねてんのなの……」

デスピナ「善処する。と言っても、もうホントに燃料が少ない。せめて横須賀に着くまでは我慢してくれよ」

航空参謀「アイアイサー」

デスピナ「Zzz……——ハッ」

航空参謀「お、お目覚めつすか旦那」

副長「デスピナさん、大丈夫ですか？」

デスピナ「ああ。けどちよつと眠いかも知れん」

転生してからぶつ続けて航海と戦闘の繰り返しだもんなあ、誰だって疲れるよこんなハードスケジュール。

時間を確認したら、もう3時半回るくらいだ。

副長「探照灯、いったん消しましょうか。CDC、レーダーしつかり見といて。あと、もし予定航路からズレちやいそうだったら教えて」

CDC「了解です」

副長「デスピナさん、万一敵襲があつたときと進行方向がへんな方向に向きそうになつたときには容赦なくたたきおこしますから、ほんの短時間くらいなら仮眠を取つても大丈夫ですよ。一応わたしたち妖精だけでも、デスピナ艦装の操作は出来ますので」

デスピナ「世話をかけるね。でも、出来るだけ起きておくようにはするつもりだよ。第一、翔鶴さん達に何かあったときには少しでも早く行動できる方が良いし、そのために輸送ヘリ部隊も出撃させなきゃだからな」

そう、今の俺は”向かう先で停船している筈の翔鶴さん達と合流する”と言う最も大事な約束があるのだ。

そしてその後には横須賀まで……いかん、この先の事想像するだけでもう眠たくなってきた。

デスピナ（そんな時には…）

俺は全画面表示されている海図とは別ウインドウで、レーダー／ソナーによる索敵結果が表示されているコマンド画面から”航空管制”を選択し、”輸送隊一覽”の中にある輸送ヘリヒドラの項目をタッチする。

デスピナ（明るい画面を見つめて手先を動かせば、大抵眠気は吹っ飛ぶ！ ……たぶん）

ソースは前世で夜更かしをしていた俺。電気を消した部屋で煌々と光るスマホ画面を見つめてネットサーフィンしていたら、いつのまにか午前3時回っていたとかさらにあったし。

尚、只今の時刻も午前3時半ごろ。転生して艦息になった身とは言え、何日もホログ

ラム画面を見ながら徹夜とは、とんだダメ人間になったものだ。

デスピナ（どこかの鎮守府に着任できたら、少しは余裕のある生活サイクルを後れますように——）

そんな事を思いながら俺は居眠りしてしまい、輸送ヘリ隊を待たせたため航空参謀に叩き起こされるのであった。

現在、午前5時。

朝日が昇り始めてから30分ほど経ち、真つ暗だった海面は、再び青い色に染まる。いや元から海は青いつつーの。

結局、俺がテキストに用意した即席の対潜デコイは一個も破壊されず、俺も翔鶴さん達も敵に遭遇する事は無かった。

役に立たなかったのはそれはそれでアレだが、後悔先に立たずと言うし、とりあえずは無事を喜ぶ。

そんでついに、翔鶴さん達と合流する予定時刻だ。

俺はポカポカした朝日を右斜め後ろから背中に受け……あ、艀装が邪魔で全然暖かく無え。

俺の右肩には副長と砲雷長が、左肩には航空参謀が乗っかり、正面に広がる北西の水

平線を見つめる。

よく見てみると、人影がぼつりぼつりと見え始めた。

航空参謀「お、アレじゃないすか!?!」

副長「…あ、そうですね！ あの艦娘たちです！」

砲雷長「やつと合流…ふあーっ…」

最近ライちゃんおねむになってばかりね。

副長「デスピナさん、あの人たち手振つてますよ！ おーい!!」ブンブン

航空参謀「よっしゃー！ 任務完了まであと少しっすね！」

デスピナ「そうだな。だが喜ぶにはまだ早い。彼女らを横須賀にエスコートするまで

やらねば」

もう20時間以上機関回しっ放しだが、本当に主機の耐久性は大丈夫だろうか……？
少しずつ大きくなる艦娘達の影は、距離の割にも小さく見えた。

現在時刻、午前5時23分。

——やつと、やつとこの時が来た。

デスピナ「長らくお待たせしてしまい、申し訳ありません」

挨拶はしっかりと行う。

デスピナ「改めまして、私は、デスピナ級要塞航空母艦——」

今俺の目の前には翔鶴さんと、彼女に肩を貸している瑞鶴に、金剛さん達四姉妹、そして、半日はゆうに越えて翔鶴さん達を守り抜いた、神通さん達水雷戦隊の面々がいる。

デスピナ「——1番艦の、デスピナと申します」

——初対面の女性に対する挨拶としては、かなり妥当な方じゃないだろうか。

俺はそんな事を思いながら、5日間に及ぶ長い航海と、昨日の離島棲鬼発見から始まった人生上もつとも長い1日弱のイベント戦を、ようやく完遂したのだ。

デスピナ（さあ、今度は横須賀に彼女達をエスコートする番だツ!!）

まだ終わって無えよ今度は俺自身が艦隊を護衛しなきゃだよ!

俺は頭の中で海図を開き、日本列島までの残りの距離を暗算した。

第二・五章：めぐせヨコスカ

第13話：自己紹介

—— side 要塞空母「デスピナ」——

デスピナ「——1番艦の、デスピナと申します」

挨拶を切り、前世で見よう見まねで覚えた敬礼をする。

6月18日、午前5時23分。

ついに翔鶴さん達と合流出来た。

俺は艦息に生まれ変わった今はもちろん、ただの一高校生である裕一として生きていた前世でも、沢山の女の子達といっぺんに会う事なんて無かった。

しかも相手は初対面で軍人な事も相まって、さつきから心臓がバクバク鳴りっぱなしである。

俺と正面から向き合う艦娘12名の内、昨日の時点で名前が判明したのは、機動艦隊所属の翔鶴姉妹・金剛四姉妹の6名、そして彼女らが撤退する道中に合流したんである水雷戦隊旗艦である神通さん。

神通さんは、服装から改二だと分かる。

残りの5名の艦娘、つまり神通さんが率いてきた駆逐艦は、服装や髪型や髪色から前世の記憶を頼りに当てはめていくと、おそらく、”朝潮””満潮””不知火””黒潮””初風”だと思う。

駆逐艦たちはまだ錬度が足りないのか一人も改二には——あ、陽炎型はいずれにせよ改二実装艦無いんだっけ。

デスピナ「今回は急なご無理をきいて頂き、ありがとうございます」

いやはや、流石は俺の元居た世界の二次元で美少女として描かれていただけあると言うべきか、戦艦・空母から軽巡・駆逐艦まで、皆かなりの美形揃いだ。

前世では好きだと「ガチ」扱いされた朝潮型に属する二人ですら、まだあどけなさが残ってはいるがほとんど”美人”と言っても差し支えない程に整った容姿をしている。

この娘ら本当に小学生か——て艦娘に学校もへったくれもあるかい、多分。

髪の色が本来ありえない色である筈の不知火や初風（あと多分満潮や瑞鶴）も、コスプレイヤー御用達の安っぽいウィッグのような不自然さは——地毛だろうから当然だが——全く無くて、むしろその色が初めつから自然な色かのように、より女の子としての可愛らしさを引き立てている。

おおっと思考がそれ過ぎた。

翔鶴「こちらこそ、この度はお手を煩わせてしまい、申し訳ありません。昨日の事は、本当にありがとうございました。私は、横須賀鎮守府で機動艦隊の旗艦を務めております、翔鶴型航空母艦の翔鶴です」

瑞鶴「翔鶴型2番艦、妹の瑞鶴よ。…本当に、男の人なのね」

頭だけ下げて礼をする翔鶴さんと、彼女に肩を貸している瑞鶴——いや、俺の目の前にいる艦娘全員が、俺とその後ろの艦装を物珍しげに見ている。

無理もない、アホみたいにデカイ艦装を背負っているうえ、何より俺は男だ。この世界には（おそらく）「要塞空母デスピナ」なんて言う艦は過去にも居ないだろうし、外見や性別、名前や艦種も含めて珍しい物の塊だもんな。

所で、昨日翔鶴さんが言っていた「大破した空母1隻」って翔鶴さん本人の事だったのね。

俺からも軽く会釈するついでに盗み見たが、どうりで足の主機がぶつ壊れて焦げてる上に、衣服が全身ボロボロになってる訳だ。

デスピナ（おう、目のやり場に困る……でも体中生傷だらけだ。この世界では被弾したら服だけじゃ済まないのか）

もしかや瑞鶴、「本当に男なのね」ってそういう意味で言った……？

なお、瑞鶴には目立った損傷は無さそうだった。流石幸運の空母。あ、服装が”改”

状態だ。

金剛「H m m : 中々の nice guy ねー。改めて、金剛型一番艦の金剛デース！
Nice to meet you!」

デスピナ「…どうも」コクリ

金剛さんの言葉から、そういう意味では無いと信じたい。

そう言えば、生まれ変わって以来鏡の類を一切見ていないので、自分の外見がどうなっているのか分からない。どんな顔してるんだろ俺、イケメンだったら良いな…。

比叡「わー…艦娘って、男性の方も居るんですねー…あ、私、比叡です」

デスピナ「…」コクリ

金剛さんの腕に掴まっている比叡さんは、「搜索隊」からの報告にあった「中破した戦艦3隻」の内の一隻だろう。良く見ると主機も破損している。上半身は、サラシが少し見える程度にしか破れてはいないようだ。

どうでも良いけど、破れたタイツとニーハイブーツから覗く脚が結構エロい。やっぱ俺は男だ、色んな意味で。

榛名「はじめまして、榛名です。随分と大きな艦装ですね…榛名、納得です」

デスピナ「…?」コクリ

何に？

まあそれは兎も角、榛名さんの被害も相当な物だ。頭に付いてる電探はぶつ壊れて脚まわりも損傷している上、上半身の服はサラシを残して殆ど無くなってしまっている。それにより露出した素肌には、傷や打撲が所々に見えた。

流石に男の前では恥じらいがあるようで、焦げ付いた付け袖で胸元を隠すようにしている。

金剛さんの被害があまり見られない事から、「中破した戦艦3隻」とは妹達の事だ。

注視しないよう視界の隅で盗み見たが、その…何だ、翔鶴さんと言ひ金剛四姉妹と言ひ……デカいな、どこがとは言わんけど。

霧島「霧島です。先日は、救援感謝します」

デスピナ「…いえ、どういたしまして」コクリ

霧島さんの場合は、どちらかと言うと背中の艤装の損傷が目立つかな。

”目立つ”ってだけで、彼女も服が相当目のやり場に困る状態つす、はい。

姉を見習ってちよつとは隠してください…。

神通「横須賀鎮守府所属、軽巡洋艦神通です」

朝潮「朝潮型駆逐艦、ネームシップの朝潮です！」

満潮「…三番艦、満潮よ」

流石お姉ちゃんと言うべきか、朝潮はハキハキと真面目に挨拶してくれた。

満潮は、まあ予想通りだ。初対面だもんね、仕方ないね。

黒潮「うち、陽炎型駆逐艦の三番艦、黒潮や。よろしゅうな！」

不知火「陽炎型二番艦、不知火です。：よろしくです」

初風「七番艦初風よ、まあよろしく」

黒潮、ぬいぬい、ツチ——何でもないっす。

陽炎型の3人からも、それぞれ簡単な挨拶を貰った。

ところで、不知火は前世では「戦艦クラスの眼光」なんてよく言われていたが、今の彼女はそんなに目が鋭くも感じられない。本気モードに入ってないだけかも知らんけど。

デスピナ「初めまして、デスピナです」

既に無線で連絡を取り合っていた翔鶴さん達と違い、水雷戦隊の方々に至っては会話も含め完全に初対面なので、改めて簡単な挨拶をしておく。

神通さんの前と言う事もあり念のため丁寧語は使ったが、相手のぱつと見中学生かそれ以下くらいの駆逐艦たちに対してバカみたいに緊張した挨拶するのは絵面的にアレなので、幾分か落ち着きつつにこやか(?)に、かつ当たり障りのない態度でもって接した。

デスピナ(何で子供相手にこんな緊張してんのよ、俺)

皆、かの大戦で死力を尽くして戦った艦だからじゃないかな。

神通さん以下、水雷戦隊の6名は無傷だ、念のため。

翔鶴「あの、デスピナさん、他にお仲間の方は……？」

今度は翔鶴さんが話しかけてきた。

ん、他の仲間？

デスピナ「いえ、私以外には、誰もおりませんが」

デスピナ艦装の妖精さんならいるよ。

まず副長でしょ、航空参謀でしょ、砲雷長に、後はCDC妖精と航空兵がわらわらわ

ら……。

瑞鶴「え、じゃあ昨日、デスピナさんと一緒に喋ってた女の人は誰なの？」

デスピナ「女の……？ あー……」

俺は左右の肩に乗っかってる3匹の妖精さんに目を向ける。

右肩の副長も左肩の航空参謀も、翔鶴姉妹の誤解に心当たりがあるようだ。いやあつて貰わないと困る。

とりあえず、左手は右肩にやり副長と、ついでに砲雷長を、右手は左肩にやり航空参謀を、それぞれ手のひらに乗つける。手を両肩から離すと、三人とも立ち上がって正面を向く。

デスピナ「…それは、たぶんこの子らの声です」

そう言いながら、俺は副長たち三人を乗つけた両手を翔鶴姉妹に向け、良く見えるよう肘を伸ばして差し出す。

金剛さん達も興味ありげな様子なので、俺の方から機関を微速前進させ少しだけ彼女らに近寄る。

副長と砲雷長は左手のひらの上で気をつけの姿勢を、航空参謀は右手のひらの上で所謂「休め」の姿勢を作り、翔鶴さん達に向き合って口を開いた。

副長「お初にお目にかかります。わたしは、要塞空母デスピナの副長妖精です。デスピナさんのサポートをとめています。この子は砲雷長妖精で、デスピナ兵装の指揮官です」

砲雷長「はじめまして、砲雷長です」ペコリ

航空参謀「ども！ウチはデスピナ航空隊のリーダー、航空参謀つす！気軽に『クウ』とでも呼んでくれるとうれしいつす！」

三人らしい挨拶だ。

金剛「フレンドリーな妖精さんたちネー。ヨロシクデース！」

瑞鶴「てことは、本当に一隻だけであんな沢山飛ばしたの…!？」

デスピナ「そうですか…」

そりや驚くよな。

大型の戦闘機や爆撃機を350機も収容出来る空母なんて艦これには実装されて無かつたもんな、現実にもねーよ。

今更ながら俺の艦装の積載量凄いな…。

翔鶴「…私たちのために、それだけの墳式機をわざわざ…：本当に、この度はなんとお礼を申し上げたら良いか…。横須賀に着きましたら、デスピナさんの艦装と全航空機分の補給の手配を、提督に上申致します」

デスピナ「あ、ありがとうございます」

そんな大げさな…：そうでもないか？

まあ離島棲鬼を破壊した事も考慮すれば、前世の艦これ基準は兎も角、こつちの世界でもそれなりに大きい戦果だとは思うし、貰えるなら貰っておこう。

でもそのご厚意、後で大分断ちちゃう事になりそうだ。

だって俺の艦装、機関は半永久稼動で弾薬は自給自足出来るし、実際にご相伴に預かれるのは艦載機の燃料タンクだけだ。

デスピナ（――て、悠長に話してる場合じゃ無いって）

再び副長³・砲雷長^匹の^妖・航空参謀^精を肩に乗せ、本題を切り出す。

彼女らの外見を軽く眺め、会話するだけでもう“何か”を2分の1以上使ってしまった

た気がするので、早く事を進展させたい。

俺は今一度、翔鶴さんと神通さんに向き直って自身の要求を伝える。

デスピナ「もう一度確認したいのですが、横須賀まで同行させて頂ける、と言う事でよろしいでしょうか？」

翔鶴「はい、昨日横須賀に連絡を取りましたところ、提督が是非に、と申しております」

まさかの提督お墨付きかい!?

やったぜ！（定型文）

デスピナ「それは良かったです。では、本艦でも周囲の対空・対潜警戒を致しますので、横須賀まで、よろしくお願いします」

改めて頼み込み、深めに礼を——ぐうツ：艦装の腹まわりの固定部分が食い込んで苦しい……！

翔鶴「こちらこそ、よろしくお願いしますね」

神通「わざわざすみません、協力感謝致します。——水雷戦隊、陣形を構築せよ」

神通さんの掛け声で、駆逐艦たちは翔鶴さん達を中心に輪形に展開する。陣形の種類としては、敵航空機の襲撃にも対応出来るようにするためであろう、前世で遊んだ艦これゲーム内と言う”連合艦隊”の陣形の一つである「第三警戒航行序列」が一番近い。

俺も一応、広域レーダーとソナーを使って周囲に気を配るため、神通さんと駆逐艦達
 が作る六角形状の輪の最後尾左側に入れてもらった。

同じく最後方の右側には、俺が緊張しすぎないように気を使ってくれたのだろうか、
 はんなりとした関西弁と柔らかい人当たりが特徴の黒潮がついてくれた。

黒潮「ほな、よろしゅうな、デスピナはん」

デスピナ「ああ、よろしく」

そりやもちろん、本当は先頭の方が良いに決まってるけどね。向かう先に潜んでるか
 も知れない潜水艦発見し易くなるし。けど流石に初対面の艦娘達の前に出しゃばるの
 はどうなのよ、て訳で。良いように取れば、皆の背中を眺めていられる最後方で大人し
 く周囲に気を配る事にする。

神通「皆さん、準備はよろしいですか？ では、艦隊、出発！」

護衛艦隊旗艦でもある神通さんの指示で、艦隊はほぼ半日ぶりに動き出した。

現在時刻は、大体5時半。

俺はコマンドの海図を開き、現在地から横須賀までの距離を確認した。

デスピナ（ええと、大体2000：4000：……：8000：10000：12000km）

忘れてた、横須賀まではまだまだ距離あるんだった。

そして、翔鶴さんと比叡さんは機関が損傷しているため曳航されており、速度もあん

まり出ないと……。

コマンド画面右側の、右上のメニューと右下の船体情報に挟まれて表示されている速度計によると、現在船速は10ノット前後。隣にはご丁寧に「km/h」で表示されているものもある。

デスピナ（10ノット \parallel 時速18・52キロみたいだから、1200を18・52で割って、ええと……）

$1200 \div 18 \cdot 52 \parallel 64 \cdot 8$ 時間

※小数点以下第二位を四捨五入

時間が出たので、次に日数を計算してみる。

1日、つまり次の日に今と同じ時刻になるまでの時間が24時間と言うことから、
 $64 \cdot 8 \div 24 \parallel 2 \cdot 7$ 日

※小数点以下（略）

1日の時間を小数含めた日数で表す場合、0・5日が12時間となるから、仮にこのままの速度で夜通しぶっ続けて航行し続けたと考えると……うっげえ2日以上は確実ににかかつちまう計算じゃねえか。

デスピナ（orz）

助けるだけ助けたら、俺だけ先に見つからないように横須賀に急いでも良かったか

……いやそれは本末転倒だ。

自分で合流すると決めたんだから、もう後悔はしない。

デスピナ（良いモノも見れたしね、何がとは言わない——と言うか言えないけど）
そう思いつつ俺は、大破した翔鶴さんのスカートの破れ目を盗み見るのであった。

第14話：ハウ・レン・ソウは大事。

——side 要塞空母【デスピナ】——

月日、6月18日。

現在時刻、午前6時。

別に、日本本州になかなか着けない事はさして問題では無い。いやそろそろ文字通り地に足はつきたいが、それよりもっと大事な事情が浮上してきた。

今俺の目の前には、リーダー／ソナー表示画面とは別に、小さい2つのホログラム画面が現れている。

【注意：着用者の身体より過度の空腹状態を検知。食事などの栄養摂取を推奨】

【警告：着用者の脳内より長期の不眠状態による脳内分泌物の異常値を検出。早期の睡眠を推奨】

そう言えば、俺が転生した日は単純に逆算して6月13日、転生してからもう6日は寝ずに活動し続けていた事になる。

航行の途中、深海棲艦の襲撃が無い間や翔鶴さん達と合流する直前の夜中には、つい

目を瞑ってブーツとしてしまった事はあつたが、流石に疲労を回復する程にはならなかつたようだ。

デスピナ（これが本当の”船を漕ぐ”、つてやかましいわ）

一人ノリツツコミが出来る位には余裕があると信じたいが、果たして大丈夫なのか俺の身体は。

この世界における艦娘がどれほど人間と異なる存在なのかは分からないが、俺自身軍艦の生まれ変わりである艦息として転生したんだし、数日程度は不眠不休での活動も余裕だとは思いたい。

デスピナ「はあー……」ピッピッ

溜息をつきながら、俺は二つの画面を消した。

横須賀に着いたら、適当なビジネスホテルのやつでも良いからまずはシャワーを浴びて、ふかふかの布団で泥のように眠りたいものだ。

一応、正式に横須賀——で無くても日本の鎮守府のどこかには着任させて貰いたいって事は伝えるつもりだが、艦装の性能だけ見るなら兎も角、果たして俺のような味方から分らない奴を置いてくれる提督が居るだろうか……。

デスピナ（ま、横須賀の提督は「是非来い」みたいな事を言ったらしいし、成るように成るだろう）

霧島「あの、デスピナさん」

デスピナ「はい、なんでしょうか？」

布陣中央に位置する複縦陣の、最後尾に並ぶ霧島さんが速度を落とす形で俺に近づき話しかけてきた。

霧島「デスピナさんは、一体どこから艦載機を発艦させていたのですか？ 私たちが戦っていた地点から、少なくとも100km圏内には深海棲艦以外誰も居なかつたはずなのですが」

デスピナ「あー……大体、南鳥島から東の方——東南東の方向500kmくらいのところから、北西に移動しながら飛ばしてましたね」

俺と霧島さんの会話を聞きつけ、複縦陣に並んでいる方々も少しだけ速度を落として近づいてきた。

霧島「そうだったのですか。かなり離れた所から見つけて頂いていたのですね、よくここまでご無事で……。今、南鳥島には陸上型の深海棲艦——私たちは離島棲鬼と呼称している個体が、付近の強力な主力艦を集結させて拠点を築いているんです。それらには捕捉されませんでしたか？」

霧島さんを始め、翔鶴艦隊の方々には首だけ後ろに向けて、俺の返事を待っているようだ。

いや捕捉も何も爆撃しちゃったけど、あの真まつ黒くろな煙けむり見てなかったのか？

ついでにもう一つ訂正する部分を挙げるとすれば、「見つけた」と言うよりは「そこに味方がいるっぽい」かったから出撃させただけなんですけどね。

デスピナ「ええ、なので、南鳥島から飛び立った敵航空隊の追撃と、皆さんを追いかけていた深海棲艦達への奇襲と同時に、離島棲鬼は空爆して破壊しました」

ところで機動艦隊の皆さん、何でそんなビックリしたような顔でこっち見てるのん？俺の右隣では黒潮ちゃんもこっち見てポカンとしてるし、どしちやったの一体。

霧島「なっ——!? 空爆で…破壊!？」

デスピナ「はい、破壊しました」

瑞鶴「ちよつと、そう言う大事な事は早く言つてよ!」

翔鶴「こら、瑞鶴——私たち、離島棲鬼の破壊と南鳥島周辺の奪還を目的に出撃していたんです。結局は、失敗してしまいました…が…デスピナさん、本当に、破壊してしまわれたのですか？ それも、艦載機だけで…?」

俺の話を聞いていた艦娘達は驚き、翔鶴さんに至つては段々語気が呆気にとられたようなものになった。

ん、まさか皆、俺が離島棲鬼を空爆ホコッしてた事知らない…?」

距離的に直接島の確認は出来なくても、ミッドナイト隊とカロン隊が爆撃して結構天

高くに黒煙モクモクあげてたし、何より艦娘達にたかる深海棲艦の航空機を叩きに先行させた第零戦闘中隊^{フアイターゼロ}達曰わく、翔鶴艦隊は偵察機飛ばしていたらしいから見えないことも無いと思うんだけどなあ…。

デスピナ「あれ、皆さんはてつきり、もう存じているものかと思っていたのですが、違いました？」

瑞鶴「知らなかったよ!? 私たち応戦するのに必死だったし——て言うか南鳥島の子なんて遠すぎて分かんないし!」

霧島「私達も、水上機が全て落とされてしまったので、離島棲鬼の様子はあまり…」
フアイター4妖精「戦闘終わってもみーんなおれ達のことぐるぐる見てばかりだったしねー」ヒソヒソ

ミツドナイト妖精「ねー」ヒソヒソ

やっぱり! なんか話が噛み合わないと思ったよこん畜生!

前世で通学していた高校の進路指導担当の教師から聞かされた「ハウ・レン・ソウ」の話の思い出した。初めて聞いたときに「小松菜じゃダメなのか?」と思った当時の俺は色々と抜けていた。

ごめんなさい先生、早速実践出来ませんでした。

デスピナ(…:…もしかして、マズかったか…?)

初めて食べたのは苦くて不味かった、てそうじゃねえよ。

あの時は艦娘の救援と自身の身の安全を優先して勝手に攻撃してしまったが、もし日本側の立てていた戦略を邪魔する形になっているのだとしたら、俺は相当なありがた迷惑をしてしまった事になる。

後で怒られませんように……。

翔鶴「え……そんな……鬼と姫を単艦で……!?!」

デスピナ「姫……ああ、そう言えば居ましたね、一隻だけ。航空隊からは、撃沈したと報告を受けました」

影薄くて忘れてたぜ。たしか、グラインドバスター8発であっさり沈んでくれたんだっけ。

ゴメンね、その内また合間みえると思うから、永久に現れないで下さい。(矛盾)

比叡「ひ……ひええー……!! お……鬼^{オバケ}や姫を二つ同時に……!?!」

榛名「榛名、驚愕です……」

金剛「oh……デスピナ航空^{w i n g s}団は v e r y s t o r o n g n e e……」

霧島「……私の計算では、百数十機の現用墳式機を扱うには大型の装甲空母が二隻は必要な筈……離島棲鬼も同時に攻略するなら、更に必要な母艦の数は多くなる……一体、どうやってそんなに沢山の艦載機を?」

おー、ついに訊いて来たか。

では説明しよう！

航空参謀「要塞空母デスピナは大型の陸上機を収容可能なバケモノです！ ジェット機の200機や300機くらい軽い軽い！」

副長「あーっ！ だから勝手に言っちゃダメー!!」
クウちゃんが。

副長、2回も決め台詞（？）言う機会取られちゃったね。

翔鶴「3びや……!?!」

瑞鶴「離島棲鬼と同じくらいじゃない!? それで、どれくらい向かわせたの?」

デスピナ「ええつと…「ミッドナイト」12+「カロン」36+48で、「ファイター」36×2+72だから…爆撃機を48機、戦闘機を72機、計120機向かわせました」
航空参謀「ウチもその爆撃隊に参加したつすよ!」

瑞鶴「こつちに来たのも合わせたら二百何十機…もの凄いくけど、離島棲鬼を攻撃した爆撃機は48機だけなのよね? 艦載機だけで破壊するにしては随分と少ないような

…?」

確かにね。前世では三式弾を積んだ戦艦の特効も使わないと結構厳しかった記憶があるし。

航空参謀「まあウチらのヒコーキは、ちょいとばかり特殊なもんでして…へへ」
左肩に乗っている航空参謀が再び話し出した。わっかりやすいくらい得意になっている。

副長は右肩でいじけている。砲雷長は副長の隣で背中をよしよししている。

カロン妖精「お、姐さん空母をナンパっすか？ オレらもまぜてくださいよ！」

ミッドナイト妖精「今回一番活躍したのは我々っすからね、ちゃんとそう伝えてくださいよ！」

航空参謀「おうお前ら！ 武勇伝語りたいんなら、ウチに任せず自分で言いな！」

俺の機装の左肩前のドアから、今回の勝利の立役者であるデスピナ航空隊のメンツ（の一部）がちらほらと出てきた。

このままでと肩から妖精さんがこぼれてしまうので、左腕を前に伸ばして肘を折つてやり、航空参謀と航空妖精たちが横向きに並ぶスペースを作ってやった。

しかし、これでは妖精達は兎も角、後ろに首を回さねばならない艦娘達は話しずらそうだ。

デスピナ「すみません、私はそろそろ警戒に戻らねばなりませんので、差し支えなければ、航空妖精らの話し相手をお願い出来ますか？」

翔鶴「ええ、大丈夫ですよ」

デスピナ「では失礼して…」

今俺の腕には、今回の戦闘に参加した航空大隊からは代表格が1〜3人ずつ、合計9体出てきていた。

俺は機関出力を少し上げて翔鶴さんと瑞鶴に接近し、二人の肩に6体乗つける。

折角なので、霧島さんにも残りの3体と、暇してそうな副長と砲雷長、そして航空参謀を持たせてあげた。

全部合わせて12体だな。

この後しばらくは、艦娘達とのコミュニケーションはデスピナ妖精達に任せ、俺は本来の任務である対空・対潜警戒に徹する事にする。

翔鶴「瑞鶴、また無線機取ってくれる？」

瑞鶴「ん、提督さんにだよね」

おそらく、俺と合流した事と離島棲鬼の状況を報告するのだろう。

瑞鶴が翔鶴さんの機装に引っ掛けてある無線機を取った。

翔鶴「ええ。それと、デスピナさん、もう一度所属を教えてくださいますか？」

デスピナ「『連合地球海軍 日本支部』の『太平洋方面群』所属です」

瑞鶴「ねえ、初めて聞いたときにも思ってたけど、その”れん”うちきゆう軍”って何なの？」

デスピナ「あー……」

げえしまった、ついに訊いて来たか。いやむしろ何で今まで深く突っ込んで来なかったのか不思議なくらいだけでも……。

デスピナ「話すと長くなりますが、簡単に言うと『地球防衛軍』ってところです。正式名称は『Earth Defence Force』、頭文字を取って“EDF”」

翔鶴「地球防衛軍……いーでいーえふ……？ すみません、そのような名前の組織は存じ上げないのですが……」

デスピナ「ですよね……」

妖精さん達、今はちよつと黙ってなさいね。翔鶴さん今から大事なお話するから。

君達二人は特にだ。副長と航空参謀、お前らの事だよ。

デスピナ「翔鶴さん、自分の事について詳しく説明したいと思いますので、出来ればそちらの提督にお会いしたいのですが、お話をつけて頂いてもよろしいでしょうか？」

翔鶴「分かりました。少しお待ちください」

横須賀にはすぐに繋がったようで、すぐに翔鶴さんは話し出した。

翔鶴「こちら機動艦隊、横須賀鎮守府、応答願います——」

翔鶴さんの交渉の結果から言うと、横須賀鎮守府に着いたらすぐに、提督と面会する

機会を頂く事が出来た。それも、俺の機装に補給の確約つきで、だ。

俺の前世については、どう話すべきか……裕一としての前世も言っちゃった方が良さ
 だろうか？ 明日考えよう（定型文）

いずれにせよ、これで俺が横須賀所属になる確率が大きくなった。翔鶴さんには感謝
 しなければなるまい。いや、実際にさつきしておいた。

デスピナ（翔鶴さんは女神だ。異論は認めん）

さて話は変わり、翔鶴さんが横須賀に連絡を取り終えてからは、さつき渡したデスピ
 ナ航空妖精達が各隊の活躍おのおのぶりを自慢気に話し始めていた。

俺はと言うと、相変わらず全画面表示のレーダー画面と睨めっこである。何も映らな
 いから暇だ。

EJ24妖精「——んで、無事に離島棲鬼の情報を後続のチームに伝達したおれ達は、つ
ファイターゼロ
そちらさん
 いでに北西に急行して艦娘達の上空に到達、交戦。あとはまあ、そのまま制空とつて後
 続の爆撃隊が——つてかんじだな」

瑞鶴「あ、私の偵察機助けてくれたのつてあんた達なのね、さーんきゅっ」

ゼロ中隊「へへっ、まあな」

ファイター1「こおら、おれらの活躍端折ンな！ 迫ってきた敵機の大群殲滅したの
 はおれらつすよ瑞鶴さん！ ファイター2と二手に分かれて——」

翔鶴さん達の所には、彼女らの上空の空域制圧に向かったゼロ中隊・ファイター1・ファイター2それぞれの代表3体と、戦艦棲姫を初めとする深海棲艦隊の撃滅に向かったミッドナイト隊隷下のB・C中隊から2体、護衛のファイター4から1体の計6体が、作戦中に挙げた戦果や戦闘中の空からの様子などを語り続けていた。

「離島棲鬼航空隊追撃隊」と「深海棲艦隊追撃隊」の隊長たちだ。

アタッカーC妖精「——まつ、なんだかんだ言っても結局のところ、いちばん活躍したのは戦艦^{デカブツ}棲姫どもを沈めた我々、ミッドナイト・アタッカーズだよな」

ファイター2妖精「なあーにしろっと手柄独占してんだよ！ 終始生きるか死ぬかの空中戦やってたのはおれ達戦闘隊だぞ！」

アタッカーB妖精「あんなノロマな蚊トンボ相手に無双されてもなあw 制空とつたつつつても、実際に空母連中たたいて制空完全に取り返したのはミッドナイト隊だし？ おれの目が正しけりやファイターさん達、むしろやつらのノロさに振りまわされたようにしか見えませんでしたなあw」

ファイター2「んだとおー!？」

ファイター4妖精「そーいや今回全然活躍できてないや……」

何だかこちらは、だんだんと身内内の自慢合戦になって来ているようだった。

もう一方、霧島さん達に渡した「離島棲鬼攻略隊」の連中はと言うと、

アタッカーA2「単純な戦果で言えば、完全にわれわれのほうが上のはずなんですけどねー」

航空参謀「ま、そう言うなって。ボマーもお疲れさん」

ボマー「妖精「うっす」

こっちは割と大人しいかな。

内訳は、ミッドナイト隊・アタッカーAチームから隊長機も兼ねて航空参謀と同隊2番機の2体が、カロン隊・ボマーから隊長が1体、その護衛のファイター3から1体。

後はおまけに副長（出番なし）と砲雷長（空気）。

ファイター5？ 知らない子達ですね…。

アタッカーC「ハッ、離島棲鬼なんぞ、目をつむつても当たる固定物じゃないすか！ 我々は敵艦を多数撃沈したんすよ！」

アタッカーB「そーだそーだ！」

ボマー「「ずいぶんと小さい戦果で満足してるのなあおまえ達。実質的に南鳥島っていう戦略級の相手を潰したって意味でも、おれ達の絨毯爆撃の方がいちばん効果あつたぜ」

アタッカーA2「あの、飛行場と砲陣地崩したのおれ達なんだけど…。」

駄目だこりや、霧島さん——といったの間にか榛名さん——の手の上にいる連中と、翔鶴姉妹の肩に乗っている連中の間でも戦果自慢が始まってしまった。

もう機動艦隊の皆、デスピナ航空妖精の誰がどれで何のことを話してるのか、分かってないなきつと。

デスピナ「おーい、自慢話するのは良いけど、あんまり困らせるなよ。その人たち俺の大先輩なんだからなー」

程々の所で止めるよう言っておく。あんまり航空妖精達の長話聞かされても鬱陶しいだけだろうし。

翔鶴「いえ、お気になさらず。皆個性的で、とても強い子達なのですね。良い事だと思います」

デスピナ「…ありがとうございます」

翔鶴さんマジ女神。

しかし、それでも航空妖精達は出しっ放しにする訳にもいかない。

艦装の中に残っている艦載機用の燃料は残り少ないが、万一に備えて戦闘隊だけでも出撃出来るようにしておきたいのだ。

まだ安全な海域に到着したわけでも無いし、気を緩ませっ放しにするのはマズい。今日の午前中には妖精達を全員收容するでしょう。

デスピナ（どうせ日本に着いた後、いくらでも話す機会はあるだろうしね）

その時には、俺も艦娘達とコミュニケーションをしっかりと取っておこう。

え、なら今も妖精に任せず自分で何か話せて？ いや、俺は周辺の警戒しなきゃだし、

第一話すような話題も少ないし。

何？ コミュ障？ うるせえ巡航ミサイルぶつけんぞ。

にしても、あと2日以上はこのスピードで航行し続けなきゃいけないんだよなあ……。

——ピコーンツ

——ピコーンツ

【注意：着用者の身体より過度の空腹状態を検知。食事などの栄養摂取を推奨】

【警告：着用者の脳内より長期の不眠状態による脳内分泌物の異常値を検出。早期の睡眠を推奨】

デスピナ（また出たか……）

確か艦装の装着中は、弾薬と燃料が無くならない限り腹は減らないと副長から聞いたが、裏を返せばそれって艦装外した途端に凄まじい眠気と空腹が襲って来るって事じゃないだろうか……。

さつき翔鶴さんに連絡取って貰った時に、1日分だけでも飯と寝床をお願いしても良

かったかも知れないな。もう遅いけど。

デスピナ（2日……せめて横須賀までは、持ってくれよ俺の身体）ピツピツ
心なしか重くなつた気がする頭を軽く回しながら、もう一度小ウインドウの表示を消
した。

余談：14話時点での設定等

【用語集】”デスピナ艦装” 関連

——《デスピナ艦装全般》——

○要塞空母デスピナ

- ・ E D F 4 シリーズに登場した、E D F 海軍の海上移動要塞。
- ・ その大きさはなんと全長1400mもあるトンデモ空母。

・ 全幅や滑走路の大きさは不明だが、收容されたことのある攻撃機ホエールのパイロット曰わく、「大型攻撃機を收容可能なバケモノ」との事。

・ 大きさの参考として、世界最大の空母であるニミッツ級ですら330m程度。かの史上最大の戦艦と名高い大和型の全長は263m。大和さんを5隻、ニミッツさんでも4隻並べも尚余るほどの全長である。

・ 普通、空母にとって最大の武器は艦載機なため、空母自身の武器と言ったら個艦防空火器であるC I W S や シース パローくらいしかないのだが、デスピナのそれは大中小の巡航ミサイルを大量に搭載しており、ミサイル巡洋艦も真つ青な対地攻撃能力を誇

る。巡航ミサイルはエアレイダーの支援要請で実際に撃つてもらえる。

・ 残念ながら、作中ではその姿を見ることが出来ず、巡航ミサイル以外の武装は不明で、海軍のどこに所属しているのかも不明。

・ ミッション後半、終盤にかけて、壊滅した空軍基地から脱出した航空機達を收容し、拠点として活躍した。

※本作における独自設定

・ モデル艦は、左舷側に飛行甲板、右舷側に巡航ミサイルを多数、両者の間に艦橋と前後二基ずつレーザガンが並び、両舷の端にレーダー塔を装備、全幅は500m前後の巨大な双胴艦として設定。

・ 機関の名称は、本作の元作品である「要塞空母デスピナ出撃す。」の設定に従い、「重力制御式熱核融合炉」とする。本作ではフォーリナーのテクノロジーを応用して造られた設定。

・ 推進には、艦息デスピナ艦装に計16枚のスクリュープペラを暫定的に設定。

○デスピナ艦装

・ 本作と、親作品「要塞空母デスピナ出撃す。」の主人公、「山本裕一」が着用する、上記「要塞空母デスピナ」の艦娘規格(?)の艦装。

・基本的な諸元や搭載兵装は本家「デスピナ出撃す。」設定集や、本作の第2話を参照の事。

※本作における独自設定

・本作第4話にて、本家「デスピナ出撃す。」では詳細に描かれなかった艦装デザインを設定した。

・背中の艦装から左右一对の可動式装甲板や着用者のそれとは別に艦装から伸びる”脚”を追加し、スクリューの数を左右4枚ずつ、裕一君の脚部にも左右4枚ずつの計16枚に暫定的に設定。裕一が脚に装着する主機と背中の艦装を物理的に接続したりなど、本家にはないオリジナルの設定を多数追加。(ただし、現時点のデザインだと不恰好な部分もあるため、後に改造でデザイン変更&修正予定)

・飛行甲板のデザインは、本家の二段式に対し、今のところは全通式の一段とし、アングルドデッキを5本(使用可能なものは2本)、舷側エレベーターを合計7基、カタパルトの数は3基とする。(実艦のカタパルトはもつと多い設定)

○エレメンタル戦術情報演算システム(略:エレメンタルシステム)

・まはまは様の代表作「要塞空母デスピナ出撃す。」の主人公が着用しているデスピナ艦装を運用するための統括演算システム。

・基本的に、本家の同名のシステムとの違いは無いため、詳しい解説は「要塞空母デスピナ出撃す。」の設定集を参照のこと。

※本作における独自設定

・今のところ、本家「デスピナ出撃す。」のそれと基本的には同じ機能を有するものとして設定。

・強いて挙げるならば、主人公の裕一が操作するホログラム画面の構成や動きを詳しく設定し描写した。

○システムリンク（別称：艦装システムリンク）

・”エレメンタルシステム”の機能の一つで、レーダーやソナー、艦載機の集めた索敵情報を一つの画面にまとめて表示したり、それらの情報を他の艦娘と共有する事を可能にする。

・現実で言う所謂データリンクのようなものだが、一番大きな特徴は、本来データリンク機能を有していない筈の艦装を装備する艦娘と情報のやりとりが可能な点。本家「デスピナ出撃す。」ではこの機能を使い、艦載機からの映像をホログラム画面に映し、艦娘に視聴させている事があった。

※本作における独自設定

・システムリンク先の艦娘のレーダー・無線機の周波数の割り出しや、味方艦娘の集めた情報の統合・演算も可能なものとして設定。

○重力制御式熱核融合炉（別称：エネルギージェネレーター 略：ジェネレーター）
 ・まはまは様の代表作「要塞空母デスピナ出撃す。」の主人公が着用しているデスピナ艦装の機関。

・基本的に、本家の同名の機関との違いは無いため、詳しい解説は「要塞空母デスピナ出撃す。」の設定集を参照のこと。

※本作における独自設定

・今のところは、本家「デスピナ出撃す。」のそれと基本的には同じ性能を有するものとして設定。

・本作では、本機関の事を「エネルギージェネレーター」と呼称する場合がある。

・EDF3・EDF4シリーズに登場したマザーシップの動力炉の技術を応用している……らしい。詳細は未設定。

○ライオニック巡航ミサイル（略：ライオニック）

・EDF4シリーズにエアレイダーの支援要請の一つとして登場する、小型の巡航ミサイル。

・要塞空母デスピナから発射され、ゲーム中では一度に20発か30発を連続発射してくれる。

・レーザーポインタの照射地点に誘導される。

※本作における独自設定

・空母艦息デスピナの対艦／対地兵装として設定。

・個体によるが、並の深海棲艦なら大体1〜3発で撃沈可能なものとして設定。

・レーザーポインタによる誘導以外に、多数の敵をレーザーロックしての発射や、慣性誘導による遠距離攻撃が可能なものとする。

○N5巡航ミサイル（略：N5ミサイル）

・EDF4シリーズにエアレイダーの支援要請の一つとして登場する、中型の巡航ミサイル。

・要塞空母デスピナから発射され、ゲーム中では一度に5発を連続発射してくれる。

・レーザーポインタの照射地点に誘導される。

・「N5」と言う名称は、ゲーム中での本来の意味は「N型巡航ミサイル5発」と言うニュアンスになる。これの上位の支援要請に「N6」「N7」があり、数字の数だけ発射する。一発あたりの威力も上がっている。

※本作における独自設定

・空母艦息デスピナの対艦／対地兵装として設定。

・個体によるが、並の深海棲艦なら大体1〜2発で撃沈可能なものとして設定。

・「N5」と言う名前のミサイルとして設定し、一度に発射できる数 \parallel 即応弾数とする。

「N6」「N7」は威力を向上させた強化型として扱う（現在未登場）。

・レーザーポインタによる誘導以外に、多数の敵をレーザーロックしての発射や、慣性誘導による遠距離攻撃が可能なものとする。

○NX大型巡航ミサイル

・EDF4シリーズにエアレイダーの支援要請の一つとして登場する、大型の巡航ミサイル。

・要塞空母デスピナから発射され、ゲーム中では一度に1発のみ、高威力のミサイルを発射する。

・レーザーポインタの照射地点に誘導される。

・ 上位品に「テンペストA1」「テンペストA2」が存在する。

※本作における独自設定

・ 空母艦息デスピナの対艦／対地兵装として設定。

・ 個体によるが、並の深海棲艦なら大概1発で撃沈可能なものとして設定。

・ 総弾数は現時点で6発とする。

・ レーザーポイントによる誘導以外に、複数の敵をレーザーロックしての発射や、慣性誘導による遠距離攻撃が可能なものとする。

○スーパーメナス電磁投射砲（別称：レールガン）

・ 本家「デスピナ出撃す。」における「レールガン砲術システム」の事。

・ 本家作品では、艦装から伸びるアームに搭載されている。

※本作における独自設定

・ 名前の元ネタは、EDF4シリーズに登場する戦闘車両「イプシロン装甲レールガン」シリーズの一部に搭載されている「メナス電磁投射砲」から。艦載向けに大型化したものとして設定。

・ 要塞空母デスピナの主砲であり、艦息デスピナのそれは形のイメージをしやすくするため、イプシロン装甲レールガンの砲塔部分に酷似している設定。

・第4話で初めて使用した際は、SAIFAが数字を見間違えたり計算を間違えたりするせいで弾速が速くなったり遅くなったりしていた。

○ASROC対潜ミサイル（別称・略：アスロック）

・距離が離れた目標付近までロケットで飛翔してからパラシュートで着水し、その後は魚雷として目標目掛けて追尾・攻撃する対潜兵器。

・現実のアスロックの射程距離は本来20kmほどしか無い筈なのだが、本家「デスピナ出撃す。」では180kmの超遠距離に潜行する潜水艦を攻撃した。（アスロックはもちろん、ソナーの性能も凄まじい）

※本作における独自設定

・流石に本家「デスピナ出撃す。」のアスロック（と言うかソナー）の探知距離は遠すぎると感じたため、両方とも最大80km程度に設定。

・ブースターが延長され、射程距離を大幅に伸ばしたものとする。

○スタンダードミサイル

・アメリカで開発された、中々長射程艦対空ミサイル。

・改良が続けられており、現在では最大射程200kmを超えるものもある（らしい）。

・本家「デスピナ出撃す。」では、約400km離れた空母から発艦した航空機を攻撃可能なほどの性能を誇る。(ミサイルはもちろん、遙か水平線の向こうの水上目標を探知出来るレーダーの性能も凄まじい)

※本作における独自設定

・射程距離は、本家「デスピナ出撃す。」と同じくらいとし、ブースターの延長と改良によって射程距離が伸びているものとする。

○対空ミサイル

・読んで字の如く対空ミサイル……なのだが、本家「デスピナ出撃す。」においてはデスピナ艦装の防空火器の一つ。

・型番・名称共に不明。

・少なくとも、高速・高追尾を両立している高性能ミサイル。

※本作における独自設定

・名称から性能までまだ何も設定していないため、EDFシリーズに登場するミサイル系武器のいずれかをモデルにする予定。

○CIWS

・”Close In Weapon System”の略。近接防空火器の総称。
 ・代表的なものは、白い円筒形に丸い頭のレーザードームにM61バルカンを装備したファランクスが有名。

・ファランクスのバルカン部分をRAMと呼ばれる短距離ミサイルランチャーに換装したSeaRAMと言うものもある。

※本作における独自設定

・デスピナ艦装においては、独自のCIWSとして「パルスビームファランクス」と「レーザー対空迎撃システム」を設定した。

・それ以外は、特に注釈が無い場合は現実のそれに順ずる。

——《その他》——

○弾薬製造設備

・本家「デスピナ出撃す。」において、デスピナ艦装に組み込まれている艦装固有設備。
 ・詳しい仕様や性能は、本家作品の設定集を参照のこと。

※本作における独自設定

・艦娘の艦装に補給する弾薬資源のほか、深海棲艦の残骸を弾薬製造の材料に出来る

ものとして設定した。

○右手中指の指輪（略：指輪）

・ 本家「デスピナ出撃す。」において、艦装の格納に使用するための指輪。

※本作における独自設定

・ 本作では、遮音フィールドや防御スクリーン等を展開するためのものとして設定。

・ デザインを、“青みを帯びた銀色の指輪に赤い宝石”に設定した。これは、EDF 4シリーズに登場した“シールドベアラ”のデザインを意識したもの。

【用語集】”デスピナ航空隊” 関連

——《デスピナ航空隊全般》——

○デスピナ航空隊※

・ EDF4シリーズにおける空母デスピナ所属の航空機や航空隊がどのようなものは、名称含め一切不明。

・ ゲーム中では、陸上基地から脱出した航空機を收容していた。

※本作における独自設定

・ 空母艦息、要塞空母デスピナを拠点とする大規模な航空隊。

・ 現在、1個大隊を36機で編成し、戦闘大隊を5個（+12機）、爆撃大隊を4個、輸送ヘリ12機、大型攻撃機4機が所属している。

・ リーダーは航空参謀妖精。第3爆撃大隊『アタッカー』の大隊長を兼任。

・ ”航空隊”と銘打ってはいるが、現実の航空部隊の編成で言えば航空団4〜5個に相当する。（参考：現用空母一隻に搭載される航空機70機程で1個航空団を編成する）

○戦闘機大隊（略：戦闘大隊）

- ・その名の通り、戦闘機で構成される大隊規模の編制

※本作における独自設定

- ・デスピナ航空隊においては1個大隊36機、12機中隊3個で編制するものとする。
- ・デスピナ航空隊においては、1個大隊あたりに『ファイター』のコールサインを振り、番号を付けて呼称する。

○爆撃機大隊（略：爆撃大隊）

- ・その名の通り、爆撃機で構成される大隊規模の編制。

※本作における独自設定

- ・デスピナ航空隊においては1個大隊36機、12機中隊3個で編制するものとする。
- ・デスピナ航空隊においては、カロンで編制される第1・第2爆撃大隊は『ボマー』、ミッドナイトで編制される第3爆撃大隊は『アタッカー』、アルテミスで編制される第4爆撃大隊は『サプレッサー』とコールサインを割り振る。

○攻撃隊

- ・現代戦においては、攻撃機や戦術爆撃機、戦闘爆撃機（又は爆装したマルチロール

機)を中核とした飛行隊。

・艦これ世界においては、一般的に、雷撃機(艦攻)や爆撃機(艦爆)を中核とし、護衛に戦闘機をつけたものを呼ぶ事が多い(たぶん)。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊においては、現在大型攻撃機ホエール4機で構成されるものとする。
・ただし、それ以外の「攻撃隊」の呼称については現実のそれに準ずる。

——《航空隊の編制と呼称》——

デスピナ航空隊における航空機の編制一覧。現実のそれとは乖離している可能性があるため、独自設定のみ記載。

○大隊

※本作における独自設定

・36機で1個大隊を編制し、3個中隊が隷下にあるものとする。

・大隊ごとにコールサインと大隊番号が振られており、隷下の機は更に1〜36の番号が付く。

例・第1戦闘大隊1番機『ファイター1—1』 第2爆撃大隊13番機『ボマー2—1』

○中隊

※本作における独自設定

・12機で1個中隊を編制し、2〜3個小隊が隷下にあるものとする。

・1〜12番機でA中隊（チームとも）、13〜24番機でB中隊、25〜36番機でC中隊を編制する事があり、その場合は

「所属大隊のコールサイン＋所属チームのアルファベット＋チーム内での番号」で所属機を呼称する。

例：第1爆撃大隊隷下Bチーム所属の15番機『ボマー1B3』

○小隊

※本作における独自設定

・4機〜6機で1個小隊を編制し、2〜3機の分隊が2〜3個隷下にあるものとする。

・呼称は特に決めていないが、第零戦闘中隊『ファイターゼロ（略：ゼロ中隊）』が一時上記の中隊呼称の要領で12機を4機編隊3個に分けていたことがある。

——《航空機》——

○EJ24

・EDF3に名前だけ登場した、EDF空軍の戦闘機。

・プレイヤーが目にする事は出来ないため、見た目から搭載兵器まで一切不明。

・作中では、フォーリナー（敵勢力）のマザーシップ（EDF3におけるラスボス）への攻撃に参加するも、敵のガンシップ（空中のザコ敵）と交戦しあっさり全滅した。

※本作における独自設定

・アメリカ空軍のF-22ラプターかF-35ライトニングIIに近い見た目をしており、武装が機体下部に格納されるなど、ステルス性を有している航空機として設定

・主武装はミサイルで、胴体下部に中距離ミサイル6発、エアインターク横の兵装庫に短距離ミサイル1発ずつ搭載できる。

・ステルス性を捨てて搭載量を増やす場合、両主翼に二つずつあるハードポイントの内、外側に短距離ミサイルを2発ずつ、計4発追加装備出来る設定。（短距離ミサイルの代わりに増槽タンクも装備可能。内側のもう一つずつは増槽タンク専用）

・機関砲は20mmバルカンで、現実のM61ガトリングと同じもの。（6銃身が回転して連続発射する）

・デスピナ航空隊においては、第零戦闘中隊『ファイターゼロ』の使用機体として設定。空母で運用可能なように、着艦フックやカタパルト対応の降着装置を備え、相応に頑丈な機体構造をしているものとする。

○戦闘機ファイター（略：ファイター ※又は EJ41）

・EDF4シリーズに名前だけ登場した、EDF空軍の航空機。
 ・プレイヤーが目にする事は出来ないため、見た目から搭載兵器まで一切不明。
 ・EJ24と違い、こちらはフォーリナーの航空戦力にまともに対抗出来るようで、コイツのお陰で空軍が爆撃を敢行したり、輸送ヘリ部隊がビークルを輸送する事が出来る。

※本作における独自設定

・当戦闘機の型番は、「EJ41」とする。詳細は後書きに記載。
 ・ロシアで開発中のPAK FA（Su-57とも）に、カナード翼をつけたような外見として設定。

・主兵装は機体下部の前輪より後ろに取り付けられた、照射型のレーザー砲一门（現在本編中未使用）。プラズマジエネレーターと一体化しており、レーザー砲の寿命の許す限り再装填・再発射が可能な物とする。

・ミサイルは、両翼付け根の兵装格納庫に短距離ミサイル1発ずつ、レーザー砲の後ろの兵装格納庫に中距離ミサイル2発、更に両主翼の2つずつあるハードポイントの内、外側に短距離ミサイルを2発ずつ搭載可能なものとする。(短距離ミサイルの代わりに増槽タンクを装備する事も可能。内側のもう一つずつは増槽タンク用)

・レーザー砲を外せば、中距離ミサイルをもう2発装備可能。

・機関砲は27mmリボルバーカノンを装備。現実では欧州機が良く装備している。(単銃身・回転式多薬室)

・デスピナ航空隊においては、第1〜第5戦闘大隊『ファイター』の使用機体として設定。空母で運用可能なように、着艦フックやカタパルト対応の降着装置を備え、相応に頑丈な機体構造をしているものとする。

○戦術爆撃機カロン(略:カロン)

・EDF4シリーズに登場した、EDF空軍の航空機。

・ゲーム中では多くのミッションで活躍した。登場時のコールサインは”ボマー”。

・ブレイマンに近い形をした全翼機であり、エアレイダーが呼び出せる”爆撃プラン

”系統の支援要請はすべてこの機体が担当する。(爆撃プランによって一機あたりの爆撃の投下数が異なる)

・投下される爆弾は直線状に連続投下される。ゲーム中では爆弾の弾頭が見えず、まるで火の玉が落ちていくかのような見た目をしている。(が、EDF4(≠4.1)のDLCMミッション「最後の激突」「空爆地帯」ではクラスター弾を投下している事もあった)

・同じくエアレイダーの支援要請の一つ「機銃掃射プラン」もこの機が担当。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊所属の艦載機として登場。空母で運用可能なように、着艦フックやカタパルト対応の降着装置を備え、相応に頑丈な機体構造をしているものとする。

・第1・第2爆撃大隊『ボマー』の使用機体。

・1機あたりの爆弾の最大搭載量は、EDF4.1の支援要請における発射数が最大で20発だったため、本作でも通常爆弾20発とする。

・機銃は爆弾と同時に搭載が可能なものとする。

○戦術爆撃機ミッドナイト(略:ミッドナイト)

・EDF4シリーズに登場した、EDF空軍の航空機。

・ゲーム中ではいくつかのミッションに登場。

・”戦術爆撃機”なのに何故か攻撃機呼ばわりされる(自分でも名乗っている)。

・カロンやアルテミスとの明確な違いは、プレイヤーに見えないほどの高高度から”

新型貫通弾グラインドバスター”による攻撃を繰り返す点。その威力は、本来下から弱点を狙わねば破壊できない筈の”四足歩行要塞”や”輸送船”を真上から攻撃して破壊できるほど。

・エアレイダーの支援要請の一つであるクラスター弾のみ、何故かミッドナイトから投下され、その際に勇姿を拝める。が、見た目はカロンやアルテミスとまんま同じ。クラスター弾の投下数は50発。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊所属の艦載機として登場。空母で運用可能なように、着艦フックやカタパルト対応の降着装置を備え、相応に頑丈な機体構造をしているものとする。

・カロンやアルテミスよりも積載量が少な目な反面、エンジンパワーが高く、機動性に優れる設定。

・クラスター弾の積載量は最大50発、グラインドバスターの積載量は最大4発とする。通常爆弾の最大搭載量は未設定。

・第3爆撃大隊『アタッカー』の使用機体。

・航空空参謀妖精の専用機でもある。

○制圧攻撃機アルテミス（略：アルテミス）

- ・EDF4シリーズに登場した、EDF空軍の航空機。
- ・ゲーム中では一度のみ登場し、クラスター弾を投下して地上部隊を支援した。
- ・姿形はカロンやミッドナイトと全く変わらない。
- ・名前こそ「攻撃機」だが、やっていることは爆撃機のそれ。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊所属の艦載機として設定。空母で運用可能なように、着艦フックやカタパルト対応の降着装置を備え、相応に頑丈な機体構造をしているものとする。

- ・カロンと比べて、積載量が多い設定。

・第4爆撃大隊『サブレッツサー』の使用機体。

○大型攻撃機ホエール（略：ホエール）

- ・EDF4シリーズに登場した、EDF空軍の航空機。
- ・ゲーム中では無線で何度も登場するが、エアレイダーが要請する以外に攻撃してく
れる事は非常に少ない。

・機関砲、105ミリ砲、120ミリ砲、150ミリ砲に加え、大小1種類ずつの巡
航ミサイルを多数搭載する空中要塞。

- ・プレイヤーに見えないくらいの高高度から攻撃しているため、実際にどんな姿をし

ているのかは不明。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊所属の艦載機として登場。艦装用の当機の仕様としては、空母で運用可能なように、着艦フックやカタパルト対応の降着装置を備え、相応に頑丈な機体構造をしているものとする。(ただし、実機は通常の陸上機モデルとして扱う)

・モデルは、アメリカ軍の大型輸送機C-17グロームスターⅢとする。理由は以下の3点。

- 1, 大型機にしてはサイズが手頃(矛盾)
 - 2, ずんぐりむっくりなシルエット
 - 3, 尾翼まわりが鯨の尾びれに似ている
- ・巡航ミサイルを除く武装は全て左側に集中配備しており、投光機も備える。
- ・巡航ミサイルは、ゲーム中の支援要請時の発射数に従い、大型の物を4発、小型の物を15発搭載するものとして設定。

○大型輸送ヘリ ヒドラ(略:ヒドラ)

・EDF4シリーズに登場した、EDFの航空機(陸海空の内どこが所有しているのか不明)。

・サイドバイサイド式（大きいローターが左右に一对）の大型ヘリで、機体下部に切り離し可能なコンテナを搭載し、輸送任務に従事する。コールサインは“ポーターズ”。

・不要なはずのテイルローター（機体尾部の小さいプロペラ）が何故か付いている。
 ・エアレイダーでビークルを要請した場合や、EDF4.1において全高50メートルの“歩行要塞バラム”を運搬している時に姿を見られる。

・側車付きバイク”SDL1”や一人乗り戦車”E551ギガンテス”等の比較的軽い車両から、あきらかに輸送重量超過（どころかコンテナに納まりきっていない）の重戦車”E651タイタン”や、全高20メートルのバトルマシン”プロテウス”を1機だけで運んでくるトンデモ輸送ヘリ。

・ただし、流石にバラムは1機だけでは無理があるようで、4機掛かりで運搬してくる。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊所属の艦載機として登場。

・輸送部隊『ポーターズ』の使用機体。

○対空ミサイル（又は対空誘導弾）

・ロケットやジェットエンジンで高速飛翔する細長い物体の先端に、対空戦用の誘導装置と爆薬を取り付けた兵器。

・航空兵装としては、長く短距離のものが多数存在する。

・レーダー波を感知して誘導したり赤外線で熱源に誘導したりするものなどが存在する。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊においては、対空ミサイルに慣性とレーダー波で誘導する中距離ミサイルと、赤外線誘導の短距離ミサイルを所有しているものとする。

○巡航ミサイル

・ロケットやジェットエンジンで長距離飛翔する太く大きめの物体の先端に、対艦・対地戦用の誘導装置と爆薬を取り付けた兵器。

・航空兵器としては、大型爆撃機を発射母機として、2, 000〜3, 000 km以上もの長射程から攻撃出来るものが存在する。

・レーダー波や赤外線、GPS座標や画像誘導や慣性誘導、地上部隊のレーザーポイ

ンターからの反射光などが誘導に利用され、目標を追尾し攻撃する。

※本作における独自設定

・デスピナ航空隊所属の大型攻撃機ホエールは、大小1種類ずつ搭載しているものとする。

・誘導方式は、慣性誘導やレーダー波による誘導、デスピナ艦装のシステムによる座標攻撃、地上部隊のレーザーポイントも使えるものとする。

○通常爆弾※（略：爆弾）

・EDF4シリーズから5に登場した、爆撃機カロン等から投下される爆弾。大抵、直線的に連続で投下され敵を一網打尽にする。

・爆発エフェクトが現実の航空爆弾と比較にならないくらい派手。

※本作における独自設定

・「通常爆弾」の名称はあくまでSAIFAが便宜的に付けたものであり、EDFシリーズの中では特に命名されていない。

・本作では、派手な爆発エフェクトに見合った破壊力を持った高性能爆弾として設定。

・デスピナ航空隊では、主に第1・第2爆撃大隊のカロンによる絨毯爆撃や、たまたま第3爆撃大隊のミッドナイトがピンポイント爆撃に使用する。

○新型貫通弾グラインドバスター（略：グラインドバスター）
 ・EDF4シリーズに登場した、攻撃機爆撃機ミッドナイトから投下（発射？）される兵装。

・非常に堅牢な装甲を持つ”輸送船”や”四足歩行要塞”を、弱点を狙わずとも破壊出来るほどの高い貫通力と威力を持つ。

・投下型爆弾のようなものなのか、航空機に取り付ける砲兵装なのかは不明。

・世界観が異なるEDF5には、「フリーガン砲」と言うよく似た兵装が登場した。

※本作における独自設定

・少なくとも戦艦棲姫の装甲を貫く貫通力と、複数発で破壊する程度の威力はあるものとして設定。

・高性能ゆえに中々数を揃えられないものとする。

○クラスター爆弾（略：クラスター弾）

・EDF4シリーズに登場した、爆撃機ミッドナイトと制圧攻撃機アルテミスから投下される小型の爆弾。

・一度に50発を広い範囲にばら撒くように投下し、通常爆弾よりも広い範囲を攻撃

可能。

・現実のクラスター弾と比べると随分弾頭がデカイ。威力も爆発も凄い。

※本作における独自設定

・一発あたりの威力は通常爆弾に劣るものとして設定。（ただし、ある程度の装甲物はノイマン／モンロー効果によって貫徹できる物とする）

第二・五章：（引き続き）めぎせヨコスカ

第15話：航空参謀（クウ）と愉快な仲間たち【艦娘視点】

— side 空母艦娘【翔鶴】 —

翔鶴「こちら機動艦隊翔鶴、横須賀鎮守府、応答願います」（連合地球海軍——日本支部——EDF——……）

瑞鶴に持つて貰っている無線が繋がるまでの間、デスピナさんの所属していると言う組織の名前を頭の中で反芻する。

しかし、艦だつた頃の前世はもちろん、私が艦娘として生きてきた中で得た記憶にも、何一つ引つ掛かるものは無い。

提督《こちら横須賀。何かあったのか？ 翔鶴》

翔鶴「状況の報告と、それから、いくつか確認して頂きたい事がありますが、よろしいでしょうか？」

提督《ふむ…聞こう》

翔鶴「まず報告ですが、30分ほど前に、私たちは件の”要塞空母デスピナ”と名乗

る男性艦娘と接触。敵意は無いと判断し、彼を同伴して10ノットで航行を続けています。母港への予定帰投時刻は、2日後の23:00頃フタサンマルマルになります」

提督《了解。それで、確認したい事とは?》

私はどうやら、デスピナさんを命の恩人としては信用していても、一隻の艦娘としては——いえ、一隻の艦娘に過ぎないからこそ、彼の挙げた戦果をまだ信用しきれないかつたらしい。

翔鶴「南鳥島の現在の状況は、どうなっていますでしょうか?」

提督《:離島棲鬼が健在の筈だが、それがどうかしたのか?》

翔鶴「つい先ほど、デスピナさんが私たちと合流するまでの事を本人から聞いたのですが、彼は昨日、航空隊を私たちの援護に向かわせると同時に、離島棲鬼への攻撃を敢行した、と言っているんです」

提督《なに?》

翔鶴「そして、そのまま破壊してしまった、と」

提督《単艦で戦艦棲姫と離島棲鬼を? そんなバカな:》

やはり、なかなか信じられる話では無いみたい。

断片的には言え、デスピナさんの持つ“力”を瑞鶴の偵察機を通して知っている私ですら、単艦ひとりで鬼と姫を同時に相手取るなんてとても考えられない。

その話を聞く人が、日本国防海軍の主要鎮守府を一つ預かる提督なら尚更の事。

提督《…分かった。すぐに確認を取る。他には？》

翔鶴「つかぬことをお聞きしますが、彼は自身の所属組織を、『連合地球海軍』や『EDF』などと呼んでいるんです。これらの名前に、お心当たりはございませんか？」

提督《まるで聞いたことが無いな……その艦娘の、国籍は分からないか？》

翔鶴「彼本人は、その組織の『日本支部』の所属である、と述べています」

提督《ふむ……》

日本国にとって、首都防衛の要である横須賀鎮守府の提督ならあるいとは思っただけれど、特に思い当たる節もなさそう。

提督《……いずれにせよ、君達の撤退を支援した事実には変わりはない。その要塞空母デスピナは、君達に同行しているんだな？》

翔鶴「はい、私たちと同じ船速で、横須賀に向かっています」

提督《離島棲鬼の件も含めて、彼からも話を聞きたい。その事を伝えておいてくれな
いか？》

翔鶴「実はデスピナさん本人から、自身の事について提督に説明したいと要望を受けているんです。受諾していただける、ということでしょうか？」

提督《そうか、なら話は早い。君達が帰投次第、すぐに話を聞こう。艦娘、要塞空母

「デスピナ」の、横須賀入港を許可する」

翔鶴「ありがとうございます」

提督《デスピナの所属組織については、過去の文献と資料を少し探ってみるとしよう。もう伝えておく事は無いか？》

そう言われてわずかに沈黙する。伝えるべきことはこれ以上はない筈だけれど…。

翔鶴「…あの、提督、もう一つだけお願いしたい事があるのですが、よろしいでしょうか？」

提督《ん、何だ？》

翔鶴「デスピナさん、離島棲鬼への攻撃と私たちの支援のために、南鳥島を挟んだ反対側から墳式の艦載機を多数動員していただきます。つきましては、彼の艦装と艦載機にも、燃料と弾薬を補給して差し上げることが出来ませんか？」

私たちの上司は、他の鎮守府の提督よりも「危機管理意識が薄い」などと言われている所を、風のうわさで耳にする事が偶にある。

けれどそれは、沢山の艦娘達を指揮する海軍の主要人物の一人としては、心配になるくらいに「お人好し」で「懐が深い」事の裏返しなのだ。

提督《無論、必要な補給は施すつもりでいる。部下が世話になったんだ、入港が済み次第、艦装と艦載機共々彼にはゆっくり休んでもらうとしよう》

翔鶴「はいっ、ありがとうございます」

いくらデスピナさんが私たちを救った恩人だとしても、正確な所属が不明な上に”どこから来たのかすら分からない男性の艦娘”を、現場の艦娘が無線で一言二言報告しただけでどうもあつさり信用することが出来る人は、きつとこの人しかない。

提督の寛大さに改めて感謝しつつ、通信を終える。

瑞鶴「良かったね、翔鶴姉」

翔鶴「ええ。なんとか横須賀には案内出来そう。——デスピナさん」

振り返り、たった今横須賀への招客となった彼に話しかける。

デスピナ「……っ——はい、何でしょうか？」

少し疲れているのか、デスピナさんは頭を回して首の筋肉をほぐしているらしくかった。

翔鶴「横須賀への入港後、すぐに提督がお会いになるそうです」

デスピナ「本当ですか！」

翔鶴「はい。それから、デスピナさんの艀装と艦載機への補給も、実施して頂けることになりました」

デスピナ「あ、ありがとうございます！ すみません、ワガママ聞いてもらって……」

瑞鶴「気にしないで！ 借りが出来たのは私たちの方なんだから、これくらい融通利

かせないとこつちが申し訳ないし」

デスピナさんは自身の挙げた戦果を、終始あつけらかなとした様子で話していた。それは、戦艦棲姫と私たちを襲った深海棲艦の艦隊を沈め、離島棲鬼から飛び立った多数の敵機をすべて撃墜し制空を奪ってしまった艦載機たちの戦闘力に根拠するものなのか。それとも彼自身が、悪く言えば命知らずとも取れるくらいの胆力を持った男性なのか……。

どちらにしろ、私たちはデスピナさんの決断のおかげで命拾いしたことに変わりはない。

彼が先日の海戦をどう思っているかは分からないけれど、少なくとも私たちにとって、彼に大きな借りが出来てしまった戦いなのだ。

離島棲鬼を破壊したと言うデスピナさんの証言も真実ならば、昨日の海戦の結果は私たちだけでなく、横須賀にとつても——ひいては日本にとつても、彼の挙げた戦果はとも無視できるものではない筈。

瑞鶴の言う通り、ほんの僅かなことでもお返しできなければ、私の気は治まりそうにない。

金剛「そうデスよーデスピナ。私と妹たちも、ユーの決断decisionに助けられたんデスから、supply補給くらいバチはあたらなはずネー」

航空参謀「——って話つすよ旦那ア。せつかく受けとつてくれって言ってるんすから、いちばん高いやつ……かはともかく、もらえるモンはもらつときやしよー」

デスピナ「お前つてやつは全く……」

霧島さんが手のひらで転がしていた妖精さんの一人からも声が上がった。

妖精さんにしては打算的な進言に、デスピナさんは釣られて苦笑い。

翔鶴（クウちゃん……だったかしら？ ちゃっかりしてるのね） クスツ

デスピナ「まあ、そこまでおつしやつて頂けるんですたら、是非、お言葉に甘えさせて頂きます……」

少し照れ屋な性格なのか、デスピナさんは頭の後ろを右手で掻きつつはにかんだ。

その仕草を見ていると、彼が二百数十機もの墳式機を一度に操り、遠く離れた海域で交戦している多数の深海棲艦や敵機を、慣れたように沈めることが可能なほどの力を持つていることを忘れそうになった。昨日私たちに披露してくれた果敢さは、今はまったく感じられない。

デスピナ妖精a「いよつしそれじゃ、まだまだ長旅になりそうって話だから、ここらで一発、あらためておれたちデスピナ航空妖精の自己紹介ときますか！」

デスピナ妖精b「つつても、名乗るような名前はないけどな。まあいい」

先ほどデスピナさんが私と瑞鶴の肩に乗せてくれた、クウちゃんとは別の妖精さんが

話しだした。

”デスピナ航空隊”と名乗る妖精さんたちは皆、現代各国の空軍や海軍航空隊で着られている様な、いわゆるフライトジャケットと呼ばれる上着を着こなしていた。

(デスピナ妖精 b 改め)

ゼロー「おれからでいいか?——あー…デスピナ航空隊所属、第零戦闘中隊”ファイターゼロ”の隊長やつてるモンだ。単に”ゼロー”とか、ひとくくりに”ゼロ中隊”とか呼んでくれればいいぜ——零式艦上戦闘機とはなんの関係もないぞ——。先日は南鳥島の偵察と、そちらさんの上空の制空確保に参加したな」

(デスピナ妖精 a 改め)

ファイターー「おつ、その話もしちゃう流れか?——おれは第1戦闘大隊”ファイターー”の長機やつてます。ファイターー2の連中といっしょに、離島棲鬼から発進した蚊トンプの大群蹴散らしました」

翔鶴「か、かとおんぼ…ですか」

深海棲艦が扱う艦載機には、いくつ種類がある。

中でも最も多く確認されているものが、黒色の鋭角的なシルエットの、個体の戦闘力に合わせて緑・橙・青のいずれかの発光部を機体上部に一对、武装に1門の機銃と左右1つずつの懸下装置を搭載し汎用性に優れた『通常型』だ。

昨日の海戦で、撤退する私たちを追撃しにかかった敵空母から放たれた艦載機と離島棲鬼から飛来した航空隊は、すべて発光部の色の違いこそあれ通常型だった。

通常型は深海棲艦の航空機の中では“比較的”弱い部類に属するため、こちらの航空隊の錬度や機体性能がそれなりに高ければ、それほど脅威にはならない。

しかし、裏を返せば“質より数”で勝負を仕掛けてくることが多く、爆装や雷装を施して艦爆や艦攻として運用される場合もあるため、一度数で押し負けて制空権を取られてしまえば、先日の海戦のような醜態を晒すことになってしまう。

今私たちと話しているデスピナ航空隊の妖精さん達は、まさにその”数で圧倒する”空の軍勢を、いとも簡単に取り除いてしまったのだった。

デスピナ妖精c「まあ、敵さんの機体はもう何世代前つてどころじゃないくらいにノロマっすからねえ——あついや、その、別にだからって翔鶴さんや瑞鶴さんたちの戦闘機がよわいってわけじゃないっすよ!? ファイターパイロットならレシプロ機の良さもわかってますし! これはアレです、時代差つてやつつすよ! おれらはホラ、超音速ですつ飛ぶミサイル戦が主体っすから、どうしても相手との速度差が気になっちゃうっただけでして、けつしてノロいからよわいとかジェット機とばす自分たちがつよいとか、そんなことかんがえてるわけじゃあ——」

瑞鶴「ぶつ……くく……! もう、そんなに捲くし立てなくても悪気が無いことぐらい分

かってるから！」

ファイター1 「なあーに長話して気い惹こうとしてんだよっ！w」

デスピナ妖精c 「そうじゃないっ！」

翔鶴 「……ふふっ」

3人目の妖精さんは、その……ふあいたーワン”の隊長妖精が”蚊トンボ”と表現した深海棲艦の航空機に私たちが押されて劣勢に立たされたことを思い出したみたい。敵の艦載機の大群に私と瑞鶴の航空隊が劣勢に立たされていたのは事実だし、この妖精さんの発言に他意は無いことも分かっているけれど、小さい体で身振り手振り、必死になって弁明している様子がちょっと可愛らしい。

瑞鶴 「それで？ その速くて強いあんた達のことは、何て呼んだらいいのかしら？」

(デスピナ妖精c改め)

ファイター2 「ああ、そうでした……ふう——おれは第2戦闘大隊”ファイター2”

の隊長妖精です。さっきファイター1が言ったとおり、みなさんの頭上の制空権確保につとめました」

デスピナ妖精d 「んでんで！ そこに突入して敵艦隊を粉砕したのが！」

デスピナ妖精e 「このおれ達、デスピナ航空隊の主力オブ主力、第3爆撃大隊”ミッ

ドナイト・アタッカーズ”だな」

また別の妖精さんが喋りだした。

（デスピナ妖精d改め）

アタッカー13「おれは、翔鶴さんたちと交戦していた敵空母機動部隊にうしろから爆撃をお見舞いしてやった、ミッドナイト隊13番機”アタッカー13”です。大隊隷下”B中隊”の中隊長つて意味で”アタッカーB1”と呼んでもいいですよ！」

瑞鶴「爆撃つて、あの平べったい変な形のやつ？」

アタッカー13「みんなその全翼型へんな形つすけどね」

瑞鶴「水平爆撃で良くあんなに当てられるわね。凄いじゃない！」

アタッカー13「いやあそれほどでも……へへっ／＼／」

（デスピナ妖精e改め）

アタッカー25「機体の性能ほめられただけでなに照れてんだか——あ、おれはC中隊の長機やってます、”アタッカー25”です。先日はその……”せんかんせいぎ”、でしたっけ？ ようはまあ、戦艦系のデカブツ艦隊を始末したのがおれ達つてことつす」

ファイター4「そして最後に、ゼロ中隊とファイター1, 2が撤収する直前、ミッドナイト隊の護衛もかねてかけつけたのが、われら第4戦闘大隊”ファイター4”です」
瑞鶴「……つまり、私たちの見える所に来てくれたのが、あんだ達つてことね。じゃあ、

あの子らは？」

霧島さんの手のひらの上の妖精さんたちを見やりながら、瑞鶴は誰ともなしに訊いた。

アタツカー113「ああ、あつちは南鳥島であればまくつてた「離島棲鬼攻略隊」の連中つすね——姐あねさあーん！ 昨日そつちの方どうなつてなのか、また話してくださいよー！」

翔鶴（この子は、ええと……誰だったかしら……順番的に、”みつどあたつか”の……？）

”デスピナ航空妖精”と名乗った妖精さんたちは、1人1人頭髮や上着の色など少しずつ違う見た目をしているけれど……ごめんなさい、霧島さんの手のひらに乗っているクウちゃん意外、もう誰が誰だか分からなくなってきたわ……。

航空参謀「ん、おう！そつちでなんかやつてんのかー？」

アタツカー113「簡単にいえば、きのうの自慢話兼自己紹介つすねー。こつちはざつと一巡りしたとこですあー」

私の肩と霧島さんの手のひらの間で、妖精さんたちのやりとりが再び始まった。彼ら——で良いのかしら？——の間で呼ばれる「姐さん」はクウちゃんのことなのね。

航空参謀「ちようどいい、今度は南鳥島こっちがわの話も交えてウチらの番だな！——ウ

チは第3爆撃大隊”アタツカー”の隊長をかねてます、クウこと”デスピナ航空参謀妖精”です。昨日は「離島棲鬼攻略隊 第一次攻撃隊」として、A中隊引き連れて滑走路と砲陣地つぶしやした。んで、コイツはA中隊の2番機で——」

アタツカー2「どうもです」

航空参謀「こっちは護衛の第3戦闘大隊”ファイター3”」

ファイター3「——の、長機だ。そっちは見えなかつたろうが、大活躍したんだぜ」

航空参謀「もうひとりのコイツは、「第二次攻撃隊」として対空砲やら敵施設やらを片づけて、離島棲鬼にトドメをさした第1爆撃大隊”ボマー1”の隊長です」

ボマー1「よろしくな、空母さん方」

南鳥島に向かつていったらしい攻撃隊は2つ、いや3つかしら？ デスピナさんの持つ航空隊の詳しい編成がどうなっているのかは分からないけれど、話を聞いている限りではかなり大規模な組織が存在しているみたい。

翔鶴（それにしても、よく喋る妖精さん達だわ……）

航空参謀「あれ、ファイター5は？」

ファイター3「たぶんまだ寝てるっす」

航空参謀「あらまあ……っわけで、ウチふくめてここにいる隊の連中が、「離島棲鬼

攻略隊」つす。まあ攻略つつつても、テキトーに爆弾バラまいてかえただけつすけどねw」

アタッカー2「いやいや、あの爆撃プランはどうかんがえても姐さんの指揮があつてこそつすよ！ 爆撃機で戦闘機ボコボコにすんのマジ楽しかったつす！」

ファイター3「姐さんの指示は的確だな。間違いはない」

ボマー1「その通りだ。おれたちが駆けつけたときにはすでに滑走路はつぶれて、沿岸砲台もほとんどが壊れていた。12機のミッドナイトであれだけの戦果挙げたのは、お見事ですよ姐さん」

航空参謀「いいこと言うぜおまえら〜！」ウリウリ〜

「うわーっ」

クウちゃん仲間妖精さんからの賞賛に喜んでは、一人ひとりの首を脇で抱きかかえて頭をくしゃくしゃに撫で回す。デスピナ航空隊の妖精さん達は、交情と団らんを重視した集団のように思えた。

航空参謀「だけどおまえら、ウチら爆撃隊が活躍できるのも、ポーターズが輸送へり飛ばせんのも、事前偵察の正確さと制空隊の頑張りのおかげだつてこと、わすれんじやねーぞ」

ボマー1「確かにそうですね」

ファイター3「おれもそう思います」

アタッカー2「名譽にかけて！」

少しばかりわざとらしく聞こえるやりとりも、彼らの結束力を良く表しているのが良く分かる。初めて聞く名前がまた二つ出てきたけれど、きつとクウちゃんや他の妖精さんたちと同じように、お喋りが好きな子たちに違いない。

航空参謀「つーわけで、おーいゼロ中隊にファイターズ！ 昨日のおまえらの活躍、もうちよつくらわしく話してみ。帰ってきたあとバタバタしてて情報共有あんまできなかつたし、簡単な事後報告つーことで！ まず、ゼロ中隊！」

ゼロ1「んあ、おれからすか？ いいすけど——まあさつき言ったとおり、おれたち第零戦闘中隊の昨日の任務は南鳥島の偵察と、そこから離陸した敵航空隊の追跡だ。南鳥島の東南東490kmくらいのところから発艦して、低空で目標に接近。上昇して南側を通過しながら、まずは離島棲鬼偵察を敢行した。そんなとき、そいつから戦闘機の増援があつたが、まあ適当にふりきってファイター1と2にうしろから叩いてもらった」

……本当にお話する事が大好きなのね、この子達。さつき訊いたデスピナさんの所属組織らしい”EDF”と、何か関連性があつたりするのかしら？

ゼロ1「姐さん、いちおう偵察結果の報告書は出しましたが——ああ見てくれました

か——んで、無事に離島棲鬼の情報を後続のチームに伝達したおれ達は、ついでに北西に急行して艦娘達そらっさんの上空に到達、交戦。あとはまあ、そのまま制空とつて後続の爆撃隊が——つてかんじだな」

瑞鶴「あ、私の偵察機助けてくれたのつてあんた達なのね、さーんきゅっ」

ゼロー「へへっ、まあな」

”ゼロ中隊”だったかしら？ そう言えば、私たちの所に飛来した敵航空機の大群を撃墜したデスピナ航空隊の中でも、主力を成していた他の戦闘機たちよりも突出して私と瑞鶴の艦載機の援護に徹していた中隊がいたことを思い出した。

つまり、総勢百数十機いた大規模航空隊の中で、いの一に駆けつけたのが、彼ら”第零中隊”と言う事になる。

ファイター1「こおら、おれらの活躍端折ンな！ 迫ってきた敵機の大群殲滅したのはおれらつすよ瑞鶴さん！ ファイター2と二手に分かれて、散開した敵の航空団から制空とつたのはおれ達つす！」

瑞鶴「分かてるわよ、ずっと見てたから。ありがとねっ」

私たち機動艦隊を挟み撃ちしようと左右に分かれた敵艦爆と艦攻の大群に対し、背後から襲撃を仕掛けた戦闘機隊が”第1大隊”と”第2大隊”とのこと。敵の航空隊に混じって飛来した時、瑞鶴が深海棲艦の新型機と誤認しかけたのも彼らだ。

アタツカー25「まつ、なんだかんだ言っても結局のところ、いちばん活躍したのは戦艦棲姫^{デカブツ}どもを沈めた我々、ミッドナイト・アタツカーズだよな」

ファイター2「なあーにしれっと手柄独占してんだよ！ 終始生きるか死ぬかの空中戦やってたのはおれ達戦闘隊だぞ！」

アタツカー13「あんなノロマな蚊トンボ相手に無双されてもなあw 制空とつたつつつても、実際に空母連中たたいて制空完全に取り返したのはミッドナイト隊だし？ おれの目が正しけりゃファイターさん達、むしろやつらのノロさに振りまわされてたようにしか見えませんでしたなあw」

ファイター2「んだとおー!？」

ファイター4妖精「そういや今回全然活躍できてないや……」

戦艦棲姫を含めた強力な水上打撃艦隊と、私たちを追撃していた空母機動部隊をたった数回の空爆で全滅させたのは、尾翼の無い、胴体と主翼を一体化させたような形の爆撃機を操る”アタツカー”たち。

アタツカー2「単純な戦果で言えば、完全にわれわれのほうが上のはずなんすけどねー」

航空参謀「ま、そう言うなって。ボマーもお疲れさん」

ボマー1「うっす」

そして、同時に動いていた”離島棲鬼攻略隊”の皆。

アタツカー25「ハッ、離島棲鬼なんざ、目をつむつても当たる固定物じゃないすか！ 我々は敵艦を多数撃沈したんすよ！」

アタツカー13「そーだそーだ！」

ボマー1「ずいぶん小さい戦果で満足してるのなあおまえ達。実質的に南鳥島つていう戦略級の相手を潰したつて意味でも、おれ達の絨毯爆撃の方がいちばん効果あつたぜ」

アタツカー2「あの、飛行場と砲陣地崩したのおれ達なんだけど……」

口ではそれぞれ反目し合っているように見えるけれど、彼らの口調や声色に嫌味の類いは感じられない。これもきつと、彼ら特有のじやれ合いの延長なのだろう。

デスピナ「おーい、自慢話するのは良いけど、あんまり困らせるなよ。その人たち俺の大先輩なんだからなー」

周囲の警戒に当たっていたデスピナさんから、私たちの肩口手元に乗っている妖精さんたちに言い聞かせる声が聞こえた。

”大先輩”と思つて貰えるのは嬉しい反面、大破している今の格好が格好なだけに少し恥ずかしい。

翔鶴「いえ、お気になさらず。皆個性的で、とても強い子達なのですね。良い事だと

思っています」

デスピナ「…ありがとうございます」

ほんの数分の会話だったけれど、自然とそう思えた。

もう少しだけ、彼らのお喋りに耳を傾けてみようかしら。

デスピナ「クウ、そろそろお前達の機体の整備と補給作業が終わるから、皆集めて戻ってくれ」

間もなく敵の勢力圏を抜けきる頃だろうかと思いつつ彼の声を聞いた時には、もう1時間が経過しようとしていた。デスピナさん所属の妖精さん達は皆、所属する母艦からの指示に従い、一言二言残してから帰投していく。

航空参謀「アイサー。デスピナ航空隊各員！ 艦載機相棒の整備が終わった！ 機嫌損ねないうちに帰っぞ！ ——んじや霧島さん、ウチらはいちど旦那ところに戻りますんで、つき会うときは地上っすね」

霧島「ええ。横須賀で」

航空参謀「うつつ。おら、ボマーおきろ」ベシベシ

ボマー「んあ…」

アタッカー25「世話になりましたね、翔鶴さん瑞鶴さん」

翔鶴「いえいえ」

アタツカー113「勝利の立役者は爆撃隊つす！　そう記録しといてくださいよ！」

瑞鶴「はいはい、分かったわよ」

副長「すみません、わたし達もこのへんで失礼します」

砲雷長「もしまた戦場で出会ったら、こんどはデスピナ砲雷科もたよりにしてください

いね」

榛名「ええ、その時には是非、よろしくお願いしますね」

デスピナさんが少しだけ増速し、妖精さん達を一体ずつ回収する。

彼らはデスピナさんの艦装の中に見えなくなるまで、短い腕を少し上げて手を振り続

け、数日間の別れを告げた。

横須賀までは、あと2日半以上は掛かる。

——少し気になったのは、妖精さん達を回収するデスピナさんの顔色が、心なしか悪く見える事だった。

第16話：早起きは三文の得、早寝は一命の取り留め

——side 要塞空母「デスピナ」——

現在時刻、6月18日の夕刻6時。漢字を使わない表示方法では^{ヒトハチマルマル}18:00。

今日一日、幸い眠気で意識を飛ばす事は無く、転生してから太平洋を渡ってきたのと同様に航海を続けている。

同様に、と言うのはあくまで第三者視点で見える事実であり、ぶつちやけすごく…だるいですが、体が。あと頭も痛い。

それでもこうして周囲を警戒しながらずっと起きていられたのは、6月のそれとは思えない日差しによって目が冴えてしまった事と、チラリと前方を見れば視界に入る彼女達の存在が大きな理由である。

艦娘。前世ではどれだけ触れようと手を伸ばしても——あるいは実際に伸ばしてみたとしても、液晶画面や紙面と言う形で具体化された”現実と空想の境界”に阻まれ、実物に触れる事は決して不可能だった。

研究途上にあつたVR（ヴァーチャル・リアリティ）なら、将来的には艦これ世界を

より深く楽しむための手段と成り得たかも知れないが、それでも彼女達の手触りや香り等、視覚と聴覚以外の五感を表現するのは、いくらサブカルチャー大国たる日本でもそう出来た事ではあるまい。

しかし、俺は紛れも無く”空想が現実となった世界”にいる。それを再認識させたのは、翔鶴さん達と合流し横須賀に向けて出発した後、少し経ってからデスピナ航空隊の妖精達を翔鶴艦隊の話し相手として預けた時だ。

その次は1時間後の今朝7時ごろ、預けていた航空隊の面々を回収した時。それぞれ一回ずつ、特に、翔鶴さんと瑞鶴の肩で遊んでいた航空妖精を回収する際には、俺の腕の長さと同じ骨格の都合で二人のほぼ真後ろに自分の位置を移動させたのだが……。

デスピナ（いい匂いだった……）

乗って来るんだよ、潮風に混じって彼女達の香りが！

時速20km弱の低速で移動していても、前に進んでいる以上空気の流れは後方に向かって伸びていく。丁度、潮風で形作られたそのゾーンに意図せず突入してしまった俺は、目の前で風に揺られていた瑞鶴のツインテールから発せられる香氣（こうき）に、見事に当てられてしまったのだ。

デスピナ（……ちよつとススみたいな臭いも混じってたけど、まあ戦場で撃ち合い

しているんだから当然か)

だいぶ話——相変わらず誰に話しているんだか——が逸れてしまったが、要するに、
”二次元の女の子の香りを体験できたぜ。イヤッホー！（定型文）”

な状態になり、5日分の疲労が軽減され眠気が吹っ飛んだのである。変態か俺は。

この勢いで残り2日間の航海を乗り切ってしまいたいが、コマンドの海図画面にいつでも表示されている時刻を表す数値と、左斜め前方——つまり西の空——に浮かぶ赤色の玉とオレンジ色の空気によるグラデーションが、今の俺にとつて忘れかけていた最大の”敵”の到来を告げていた。

翔鶴「18:00……もうすぐ日没ですね」
ヒトハチマルマル

そう、夜である。俺は翔鶴さん達と合流する前の、東の空に日が昇るよりも前の早朝真つ暗闇の中で眠りかけてしまったのだ。

デスピナ（ちくしよう！ 眠気と戦うなんて想像したこともなかったぜ！ 経験はいくらでもあるけどな！）

人間をはじめとして、お天道様の加護の下にある生物は皆、周囲の環境が昼と夜を繰り返すのに合わせて活動と睡眠を繰り返すのが本来の有り方である。

人間もその数ある生き物の内の一種族であるため、昼起きていれば夜眠たくなるのは当然である。

俺も——艦息に生まれ変わった身と言えど——身体構造は人間のそれと多分変わりはないため、夜通し起きていたとしてもいざれ睡眠は必須となる。さつきからコマンドの通知のために現れる別ウインドウがピコンピコン五月蠅いからCDCに頼んでオフにしてもらったが、エラー画面を消したからと言ってエラーが無くなった訳ではないように、今の俺は栄養失調気味プラス超睡眠不足な事はこれまで通り蓄積している。夜が来るともなれば、再び目蓋が激重くなりかねない。しかし——。

翔鶴「神通さん、今夜も停船したほうが良さそうですか？」

神通「ここまで来れば、組織立った敵との遭遇は考えにくいですから、今の所はこのまま進んでも大丈夫だと思います。速度が出せませんので、潜水艦への対策が唯一の懸念ではありますが……」

——今の俺は、日本国防海軍・横須賀鎮守府所属の艦隊に随伴する要塞空母デスピナである。

随伴させてくれと頼み込み、艦隊の足を夜通し止めさせてしまった事に対するせめてもの見返りにと、周辺の哨戒をやると言い出した一隻の艦息だ。その責任は、己の健康に多少換えても取らねばなるまい。

俺は無意識の内に陥ってしまった極限状態の頭で、残り約970kmの旅路を乗り切る算段を立てた。

デスピナ「神通さん、差し支えなければ、当艦が前に出て対潜警戒を実施したいと思うのですが、よろしいでしょうか？」

まず今夜は、自分へプレッシャーを掛ける事も兼ねて艦娘達女の子の前で格好をつけ、そのテンションで眠気をふっ飛ばして明日の朝まで持たせる。明日の夜明け以降は、まず太陽の恵みを全身で浴び、時折日差しを目薬代わりにして目を冴えさせる。明後日も同様にして過ごし、横須賀まで気合で持たせる。

——本気でそんな事を”算段”と考えていたあたり、不眠による俺の思考力低下は、この時点で相当に深刻なものだったらしい事を、俺は上陸直後に知る事になる。

デスピナ（と言うか、艦娘の皆どれだけ長く起きてられるんだ？俺はだいぶキツいよパトラツシユ……）

一つだけ自己弁護を付けておくとすれば、「無理をするな！」と定型文でもう一人の自分に突っ込まれる事が想像出来るくらいには、ギリギリ脳は動いていた。

.....

神通さんの許可を貰って艦隊先頭に立ち、前方の広い範囲をレーダーとソナーを駆使して警戒し続ける。

ぶつちやけこの後は眠気との戦いが本格化したこともあって、特に印象的なエピソードも思い出せず記憶がダイジェスト状態だった。

6月18日、日没時刻である18時半以降は、デスピナ艦装の妖精達に見張ってもらいつつ、緑系の縁と青色に輝くコマンド画面を弄って続き続けていた。

転生してからも何度か越えた洋上での晴天の日の夜と言うものは、天然のプラネタリウムと言うべき——逆か、プラネタリウムが紛い物の夜空なのか——巨大な点描画が、空いっぱい描かれる時間帯でもある。

日付が変わって19日も、いつものデスピナ妖精3匹とちよつとした天体観測をした日付が、フオーリナー異邦人の母船が集結しちやいないか」なんて事を考えながら月を眺めたりして時間を潰し、脳を活性化させる。

この時点ではレーダー／ソナー画面には敵影無し。

13万km離れた所から確認する限りでは、月の表側にも物陰は無し。

同日の明け方から午前中、北西に進路を取っている関係で右斜め後ろの方向となる東の水平線から昇った太陽が最も高い位置に来るまでは、正面の海原とコマンド画面を眉間に皺寄せたりしながら眺めて瞼を支える。

前世でたまに飲んでいた、カフェイン多めのエナジードリンクが恋しい。

デスピナ（取り敢えずは昼まで持ち堪えよう。そうすれば俺の“秘策”でお目覚めだ）

正午過ぎに太陽が左手に来るのを見計らい、一瞬だけ注視する秘策（笑）でもって目を覚まそうとしたが、それが大誤算であった。

眩しすぎてかえって目を細めてしまい、そのまま意識がっ……意識がっ……!!

（……）までの時点で相当な無茶をしている事は、夜寝ずに次の日通勤や登校をした経験がある人なら少しは理解して頂けるだろう。なんせ俺は、転生した日からもう一週間ぶつ通しで活動し続けている事になるからだ）

お天道様特製の目薬は目覚めの効果が壊滅的に無い事が発覚したため、眉間の皺をより一層深くする事で瞼の意識を持ち上げ、日没までコマンド画面を永久に見続けたが、やはり敵の気配は現れない。いつそ軽く襲撃（矛盾）でもあってくれた方がギンギンに目は冴えるだろうから、それはそれで有難いのだがなあ……。

19日の終わりから20日の始まりにかけての夜。今夜も天候は晴れだと思われたのだが、梅雨前線に近づいているのか段々と雲が出てきてしまい、夜に見える星空は所々虫食い状態になってしまった。月も隠れ、自分達の主機の駆動音が鳴り続ける海上

はより一層夜の闇に溶け込んだ。

俺は再び重くなり始めた目蓋を持ち上げ、眠気と戦う際の精神的なプレッシャーを和らげるためにも、数時間ぶりに右肩の副長妖精に小さく声を掛けた。

デスピナ「なあ副長」ヒソヒソ

副長「……？ はい、なんでしよう」ヒソヒソ

デスピナ「悪いんだけど、またクウとライと交代しながらで良いからさ、俺が居眠りしそうになったら、こっそり起こしてくれないか？」ヒソヒソ

副長「了解です」ヒソヒソ

この永久に続くかに思われる旅にも、じきに終わりは来る。そう思えば少しは気が楽になると言うものだ。

もう一度だけ太陽を東から西に受け流して夜を迎えれば、もうそこは日本近海。

日付が変わる前には、横須賀に着ける。

大丈夫、必ず休める。そしたらコーヒー飲みたい。

いや、まずは寝たい。

20日、午前6時。

俺の目覚まし要員が副長↓航空参謀↓砲雷長と順繰りに巡る中、俺はこの”太平洋横

断航海^①における最後の朝を迎えた。

久方ぶりに海図を見る。

デスピナ（おお！ 日本列島まであと残り300kmくらいじゃないか！）

コマンドの海図画面は開きつ放しではあったが、進んでいるのかどうか分からない自分達の矢印を永遠に見続けるのは睡魔との戦いが本格化している現状では苦痛以外の何ものでも無いため、適当な別の画面で中途半端に隠していたのだ。

これが精神的に功を成したようで、周回マラソンの「もう半分は走り切ったからあともう半分で終わる！」と言うアレにより、俺の目蓋は一時的に軽くなった。

しかし、やはり眠いモノは眠い。今日のお昼ごろには初めて目蓋を落とすきつてしまい、ライちゃんに首筋の下のほうを思いつき蹴られてしまった。やっぱり寝ておけばよかったぜ。

道中、翔鶴さんがどこかに連絡を入れているのが聞こえてきた。断片的に聞こえてきた内容から、恐らく相手は横須賀鎮守府の提督と推測できる。だとしたら大方定時連絡あたりだろうか。俺にも時報ボイス下さい（懇願）

デスピナ（良かった。あんまりにも静かなもんだからついきり俺だけあらぬ方向に行つて一人になったかと思つた……）

実際そんな事になったらデスピナ艦装妖精が方向修正してくれるだろう。もしかし

たらもうお世話になってるのかもだけどね。自動運転万歳。

そう言えば、俺が睡魔と闘いだしてから主機のほうに全く意識が向いていなかったが、俺に着いて来る形になっている艦娘達との距離がブレていないことから、機関出力のほうも頑張つて制御してくれているようだ。

日本に着いたら——副長たちにはもちろん——、デスピナ艦装の機関長にもお礼と共にお菓子でもあげよう。と言うか俺が食べたい。

デスピナ「……Zzzz」

——せっかく艦これの世界に転生したんだし、間宮アイスとか伊良子最中とか食べてキラキラ状態になってみたいな。あ、でも居るかどうかが分かる

砲雷長「えいっ！」ゲシッ

デスピナ「いてっ……」

あぶねー……。

自動運転中でも、居眠りダメ、ゼツタイ。実現出来るかは兎も角。

.....

昼……。

【脳内BGM：EDF4. 1「エンディング（仮）」】

デスピナ（『勇敢に戦え！ 俺達が勝つ！ 行くぞ!! 分かったか!? EDFツEDF!!』）

なんとか頭の中で、前世でさんざん聞いてきた歌や音楽、印象的な台詞等をひたすら脳内再生しては、一時的に軽い興奮状態に持ち込んで眠気を紛わせ――

副長「……」ゲシツ

デスピナ「――！」ビクツ

――られませんでした。

くつそ頭痛い……本格的に、もう眠気なんてレベルじゃないぞ……これは。

疲労の限界どころか、そろそろ命の危険まで感じてきた。前世でネットサーフィンしていた時に何かの記事で読んだが、人間が睡眠を取らずにマトモに活動できる限界の間は、せいぜい2日程度なのだそう……Zzzz。

――チヨイチヨイ

やべえ本格的に頭ガクンてなるとこだった。で、俺の耳たぶ引つ張つてどうした副長？

副長「デスピナさん、さすがに艦装のCDCでも、脳波コントローラーがむずかしくなつて来ました。ここはほんの少し、ばれないように仮眠をとってください。索敵と哨戒は

われわれ乗組員妖精が行いますから」コシヨコシヨ

デスピナ「りよーかい。敵が来たら起こして」ヒソヒソ

俺は寝不足なんだ！ ぶっ倒れたらどうしてくれる！ いや自分のせいだけど。

これは有り難い。本当に死んでしまったら元も子も無いので、副長の提案に従う事にしよう。

一昨日神通さんが言っていた限りでは、このあたりの海域はもう安全らしいから、多
少は……ね。

.....

夜8時くらい。残り距離……何キロだ？

もう同じ画面がいくつもズレて重なって見えるから何がなんやら……。

航空参謀「ヨーロッパだ！ ヨーロッパの灯だ！」

砲雷長「あれは房総半島。欧州じゃなくて日本」

副長「ついでに例えば大西洋じゃなくて太平洋と……いよいよ、この長旅も終わり
ですね。デスピナさん、あとちよつとですから、がんばってください」

デスピナ「うん、がんばる……」

短い睡眠を何度も繰り返した結果、前世における重度の寝不足程度の眠気でなんとか持ちこたえて……いないか。

しかし流石は艦息と言うべきか、今のところは死なずに持ちこたえてはいる。どつちだ。

久しぶりに後ろから聞こえた声も、誰のものだったかを思い出すのに数秒を要した。

瑞鶴「やつと鎮守府ね。はあ…よかったー」

神通「この辺りは鎮守府所属の駆逐隊の哨戒区域内ですから、ほぼ安全ですね。デスピナさん、あと3時間ほどで横須賀に到着しますので、もう少しだけ、お願い致します」

デスピナ「…了解です」

なけなしの意識で、どうにか返事を済ませる。声が少しだけ高くなってしまったような気がするの、寝ぼけているときの”起きていますよアピール”のアレだ。

——ダメだ、寝なさ過ぎて思考内の語彙力が破綻し始めてるなこれ。

しかし、あと3時間。あと3時間だけだ。

カップ麺があと60個作れる時間で陸に上がれる、すなわち休めるのだ！

《あきらめたら終わりだぞ！》定型文

《こらえろ！ 起き続けるんだ！》定型文？

《気を確かに持て！》定型文

——ドサッ

——ガゴォーン！ ガシャーんツ！！

「!? デスピナさん！」

視界が夜闇に吞まれる中で最後に聞いたのは、誰のものかも忘れてしまった艦娘の
声。

この世界に転生してからのファーストキスは、日本有数の港である横須賀のコンク
リート。

6月20日、23時3分。

累計8日に及んだ生まれ変わってから最初の無茶は、目的地到着と同時に、過労によ
る昏倒と言う案の条な結果になってしまった。

デスピナ（Zzzz……）タヒーン

散々カッコつけておいてひっじょーにみつともないが、ある意味では、俺は任務を果
たしてからようやく休息に入ったのだった。

合流した艦娘達にも轟沈者は出なかったし、初めての無茶振りには上手くやった
んじや無かろうか。いや絶対良くやったよ俺。

なにはともあれ、お疲れ様、俺。おやすみ（定型文）。

第三章：横須賀鎮守府

第16・5話：夢の中、久しぶりの再開

——真つ暗な視界の真つ白な意識の中で、以前聞いたような、懐かしい声が聞こえる。

「ゆ……ちさ……い……ちさん……！」

”ゆきち”さん？ 君一万円札の事をさん付けとか中々にがめついよね。

「裕い……さん——裕一……！」

ゆういち……裕いち……裕一……。

あ、俺の名前か。つー事は、この声は俺を呼んでいるんだな。ゴメンよ銭ゲバ扱いして。

そして、この何回か経験した事のある感覚は、おそらく夢だ。

俺はこの後、1〜2週間干さなかつたお陰で自分の臭いが染み付いている布団に包まれた状態で、ベッドの上で目覚めるのだ。

「裕一さん！ 裕一さん！」

いや、もしかしたら学校の机に突っ伏している可能性も——

「ゆ・う・い・ち・さんツ!!」

裕一（だあもう！ さつきから誰だ鬱陶しいっ！ 俺はこの、”明らかに現実と違う雰囲気だ夢だと分かって起きる”と言う、一番スッキリする目覚めを堪能したいんだよ。頼むから邪魔しないでくれ……）

?? 「あああつ、待って待って！ やつとまた繋がったんだから、まだ目覚めないで！話を聞いて！」

裕一（うん……？ ——あ、君って!?!）

?? 「気づいていただけでしたか。そうです、私です」

裕一（変なおじさん?）

?? 「いやおじさんでは無いです。変わった存在なのは認めますが少なくともおじさんではありません。裕一さん、私ですよ！ ほら、以前裕一さんに助けていただいた、あの猫の！」

……思い出したぞ。俺が転生する直前、車の交通量が多い道路の真ん中に猫を設置すると言う極悪非道な事をやってくれた鬼畜娘だ。

裕一（おお、君か！ ——ゴメン、名前なんだっけ?）

?? 「そう言えば、自己紹介がまだでしたね。と言っても、そう名乗れるような名前は無いのですが、仮に私の事は、”大妖精”とでも呼んでください。そちらの世界の妖精たちの統括を務めています」

裕一（おう、よろしくな。俺は……って、もう知ってるんだよな、俺の事は）

大妖精「あら、結構記憶力いいのですねあなた」

裕一（バカにしてんのかこの野郎。君が俺を死ぬ寸前まで誘導して突然海に放り出したのしつかり覚えてるからな）

大妖精「それに関しては、本当に申し訳ありませんでした。そうせざるを得ない事情があります……」

裕一（事情だあ？）

よほど急ぎの案件だったのだろうか。

大妖精「さて、あまり時間がないので本題に入りますと、裕一さんには4つほど、気をつけて頂きたいことがあります」

裕一（ん、わかった。何？）

大妖精「1つ目は、空母デスピナについて、艦装のシステムに表記されている情報以外のことは一切しゃべらないようにしてください。要塞空母デスピナの所属していた組織の存在する世界に関しては、こちらの世界では極一部の人にしか知られてはならない程の機密らしいのです」

裕一（まあ、そうなる……のか？）

仮に、並行世界が実在する事が公にバレてしまう事が重大な機密漏洩だとしても、事

前知識一切無しに転生させられ、翔鶴さん達からの信頼を取り付ける事に必死だった当時の俺からしてみれば、今更言われてもどうしようもない。

裕一（あ、ごめん、実はもう横須賀鎮守府の翔鶴さん達と提督には、EDF海軍と所属艦隊言っちゃった）

大妖精「でしたら、そこだけは仕方ありませんので、艦娘と、艦娘に深く関わる役職の方にのみ明かすようにしてください。日本国防海軍の艦娘たちは、それなりに秘匿性の高い組織ですので、情報漏洩に繋がる恐れは薄いと思われます。さつき言った”極一部の”人”以外には、遠まわしに伝わった場合であれば、ちよつとした噂話以上の話題にはならないでしょう」

裕一（それは良かった）

大妖精「2つ目は、裕一さんの素性についてです。貴方の魂が別世界の民間人の山本裕一であることは、艦娘を含め、誰にも漏らさぬようにしてください」

裕一（提督にも?）

大妖精「はい。裕一さんの所属するいずれの海軍拠点の指揮官を含め、軍の上層部にも知られぬよう、徹底して秘密にしてください」

裕一（それも、やっぱりさつき言った”機密”とやらに關係してたり?）

大妖精「そうです」

裕一（了解、気を付けとくよ）

大妖精「3つ目が、私の事について。これは1つ目と2つ目にも関係する事ですが、私の存在をほのめかしたり、公にする事は、絶対にしないようお願いします」

裕一（んー、バラしたとこで信じられる事はなさそうだけど……まあ、オーケー）

実際、「強力な艦装持った艦息の中身は異世界の一般人ですー」なんて事も含め、そういう信じられそうもない事ではありそうだが……。まあもしそんなのが居て、前世についてベラベラ喋ったりしたら、何かしら感づかれる事もあるかも知れないので、会話の中でボロを出さぬよう気をつける事にしよう。

大妖精「最後に4つ目。これは、裕一さんが知る世界とその歴史について。たしか、”地球防衛軍”でしたね、貴方が転生した”要塞空母デスピナ”と言う艦は、そのゲームに登場した空母と同一の存在と考えてもらって構いません」

裕一（それに転生させてくれた事だけは、感謝するぜ。おかげで俺みたいな一般人でも、それなりに深海棲艦と戦えるみたいだからな）

大妖精「一般人……そうですね。そして、そのゲームの舞台となった世界と、この世界は時系列がある程度リンクしている事に留意して頂きたいのです」

裕一（時系列……たしか、今のこつちの世界は2024年だから、EDF4.1の頃

——西暦2025年——に新登場した敵は居ないどころか、まだフォーリナー再襲来も

起こってないんだよな。つまりデスピナはまだ……)

大妖精「その世界での実戦は、まだ経験していないと言う事です。もし、1つ目の事項に関して異星文明について説明する必要に迫られた場合は、上手くごまかしてください」

裕一(ん、了解)

正直、前世でいくらでもその手の創作話を聞いた事がある者としては、そこまで秘匿すべき事でも無さそうな内容な気がするが……まあ、転生した艦これ世界ではそこら辺の事象についてどこまで解明・公表されているのか不明だし、大人しく従っておこう。

ところで、段々ところこのやりとりに現実味が無くなってきたと言うか、”感じていいる”と言うよりは頭の中で”考えている”状況に、感覚が近くなっているのだが、これはまさか……。

大妖精「——お目覚めのようですね。ご武運を、お祈りいたします。それから——」
少しずつ、大妖精の声が不明瞭になり始めた。

最後に聞いた一言の意味は、起きてから改めて反芻してみようか。

大妖精「本当に、ありがとうございます。もう——だけ、おね——しま——」

.....

瞼を開くと、目に入ってきたのは白い天井だった。

第17話・まともな寢床とちゃんとした食事、そして給仕さん。

デスピナ「知らない天井だ……」

この上無くはつきりとした意識で、頭脳の覚醒を確かめるように呟いた。

今は何時、いや何日だろうか。

天井の照明は点いておらず、俺の寝ている所の左側に見える窓からは光が差し込んでくる事から、少なくとも夜が明けた事は分かる。

もしかしたら丸一日以上寝てしまい、日付的には2日後になってしまった事も一瞬考えたが、先日の疲労具合を鑑みても24時間越えて寝過ごすなんて事は……あるのか？
どっちにしろ、仰向けに寝転がったままの体勢からは推測が難しく、体内時計を少しでも澄ますためのそのそと上体を起こす。

俺を寝かせるにあたり紺色の学ランと帽子は脱がされており、すぐ左手にハンガーで引っ掛けられていた。ズボンと、学ランの下に着ていたらしいワイシャツは、どうやらそのままだ。ヘッドセットは、おそらく艤装と一緒に外され、保管されているのだろう。手元には無い。

起こしながら、先夜^{せんや}までの事を軽く思い返す。上体が起き上がるに従って、掛ける意味があるのか分からないシーツがずり落ちた。

無茶をしたものだ。振り返れば艦娘達と邂逅するよりも前に夜は5回も訪れたと言うのに、眠くならないのを良い事にぶっ続けで寝ずの航海を続けた。

その結果が、合流後の警戒航行に悪影響を及ぼす程の疲労と寝不足に繋がり、挙句には昏倒し、どこかの施設のベッドで寝かされると言う始末である。

いつだかに副長も言っていたが、デスピナ艦装の妖精だけでも周辺警戒と機関・舵の制御、兵装の操作は出来たのだから、変に気張り過ぎず頃合を見て少しでも寝ておけば良かった。

「デスピナ（まあ、航海……じゃなくて、”後悔先に立たず”とも言出し、最終的には翔鶴さん達と神通さん達の誰にも轟沈者が出なかつたし、初陣にしては頑張つた方だと思いたいけど……）」

良いのかねえ、こんな調子で。

自分の体調管理もマトモに出来ないのに、世界救うとか夢のまた夢だろう。俺の要塞空母デスピナとしての能力を持つ艦装の運用や維持管理をする都合上、やはり俺は日本海軍のいずれかの鎮守府、あるいはどこかの国の軍事組織に身を置くことになるだろうから、先日のような無茶は尚の事出来なくなる。いや二度とやりたくもないけどね。絶

対上官や先輩にひっぱたかれるわ。

デスピナ（いや待てよ、今の俺はEDF海軍と言う近未来の軍隊で建造された要塞空母艦息、やっぱり戦艦や空母あたりの大型艦娘の下に就く事になるだろうから……ワオ、二次元世界の美人に平手打ち食らうとか何それ超俺得じゃ——）

——なんて事考えてる場合じゃ無えよバカ。

上体を起こした状態——なんつって——で部屋を見渡すと、どうやらこの部屋は医務室か、休養を取るための部屋らしい。頭の位置が壁際に来るように、サイドテーブル付きのベッドが間隔を空けて3台並べられており、反対側の壁にも同様に3台並んでいた。艦これ基準で丁度艦隊一つ分だ。

俺が寝ていたベッドから見て左手に、ベッドを2つ挟んだ壁に窓が取り付けられている。右端から左端まで、よくある左右にスライドして開閉するタイプの、クレセント錠つきのガラス窓だ。締め切られているが、カーテンは開けられているので外の景色が見える。

一方窓の正面の、俺から見て右手の壁には、前後でずらして2枚設置するタイプの引き戸で塞がれた出入り口が一つ。ドアの左右には、壁際に丸椅子が3つずつ置いてあった。

窓とドアの造りやパツと見の材質や色合いから、技術レベルは前世と同じくらいだろ

うか。

掛けられていたシーツを取り払って足元で一回だけ畳み、ベッドから降りて靴を捜す。ベッドの足元に揃えて置いてあった。

靴を履いて窓の前に立ち、外を眺めると、そこは一面の木、木、木。海じゃなくて木。更に言えば樹。

この医務室のような部屋（以下便宜的に休養室と呼称する）がある建物自体が内陸部にあるのか、それとも単に敷地内に植えてある幾本もの木が目の前に来る位置に窓があるだけなのかは分からないが、先日到着した場所が横須賀鎮守府であろう事を考慮すれば、ほぼ後者であろう。万が一近海に深海棲艦が現れた場合に——そんな事になったらもう横須賀港一帯が壊滅しそうだが——、休んでいる味方を敵からの砲撃で負傷させないための設計だろうか。この施設の位置が分からないから何とも言えないが。

木々にあたる光具合から時刻を予想してみる。空は雲で真っ白なため、昼らしい事以外は分からない。

振り返ってみると、窓向かいのドアの上部の壁に、アナログ式の時計が設置されていた。耳を済ませると、数メートル離れた窓辺にも、カチツカチツと、秒針が時間を刻む音が聞こえて来た。

その時計によると、現在時刻は12時少し前のようだ。時計が狂っておらず、通り過

ぎた日付変更時間が1回だけだと仮定すると、かれこれ13時間は寝続けていた事になる。

デスピナ（寝過ぎだろ俺、超健康的……なわけあるかい。どう考えても、昨日までの無茶の反動をもろに受けたな）

もう少しだけ部屋を見渡してみるが、ベッドの1つ1つを囲ってカーテンを閉められるように天井に取り付けられたレールと、時計の右隣にある屋内放送用のスピーカーくらいしか、目に止まる物は無かった。

仕方も無いので、大人しく元々寝ていたベッドへ戻り腰掛ける。なんとなく、足も乗せる前に脱いだ靴は元々揃えてあった位置に戻し、さっきの”上体を起こした状態”を再現する。あ、シーツも掛けないと。

改めて、今後について少し……いや、”今後”と言う程先の話では無い事について思案する。

一つは、先日散々カツコつけておいてぶっ倒れた事がとても気まずいため、あと20分くらいは——ここが艦娘の所属する鎮守府であるのなら——誰も来ませんようにと言おうしようもない願ひ。

もう一つは、起きた時から徐々に空腹によってお腹が痛くなり始めたため、誰か、軽食でも良いから、何か食べるものを持ってきてくれないだろうかと言う生理的欲求の解

消。思案と言うには随分と安っぽい、俺の心身の健康上とても大事な事だ。

デスピナ（いっそ、もう一度寝転がって二度寝してしまおうか……）

とも思ったが、最小でも13時間近く眠りこけた俺の頭脳は完全に覚醒しきっており、身体の方も眠りすぎと空腹による倦怠感によつて、これ以上の睡眠を拒否していた。あくまで医学のいの字も分らない俺の推測だが、身体に備蓄してあつたエネルギーの素である、炭水化物やらブドウ糖やらが睡眠によつて脳に回された結果、”頭は起きているが身体は寝ている”かのような今の状況に繋がっているのではないだろうか。

取り合えず、背筋は伸ばさず猫背に、頭は垂れた状態でポーツとして時間を潰してみよう。別に誰も見てないから、少しくらい姿勢悪くたって良いよね。

……ツカツカ——

デスピナ（……ん、誰か来たか？）

暫くの間項垂れていると、廊下から何やら聞こえてきた。音は規則的なリズムで、段々と大きくなり、発生源はこちらに近づいて来ているようだ。

大方人間か、それに類する人型の生命体の足音だと思われるが、ここが高確率で横須賀鎮守府である事を鑑みれば（確証は全く無いが）、ほぼ確実に艦娘の誰かと言う事になる。

ツカツカツカ——

デスピナ（ちよつと待ってちよつと待って待て待て……!）

うわ、本当に誰か来てしまった。まだ心の準備が出来ていな——て時計の短針と長針は12時過ぎを示しているからそろそろ20分は経過した事になるし、変な風に俺の願いが通じてしまったようだ。

それならいつそ、前世では原作艦これゲーム内でプレイヤーの分身として艦娘を指揮する立場であった提督にきて貰えれば……いやいやそんないきなりエライ階級が高い人に来られたら余計に俺の心の準備が不足しているわけであつて……。

ツカツカツカ——

デスピナ（ひえーッ!）

もうすぐ傍におる! ベッドの足元から右手にあるドアから数メートル以内のところに確実におる!

よしOK、いや何がオーケーだよ。そうじゃなくて、アレだ、今近づいて来ている人はきつと……そう、鎮守府の職員だ、それも人間の! 階級そこまで高くない、それでいて俺の昨日の失態について深く知ることも無く、詮索する事も無いであろう普通の人間なんだ。そう言うことにしておこう。でない俺の心が緊張でヤバイ。

ツカツカ……——

ピタリ、と足音が止んだ。しかもこの休養室のドアの前で。

デスピナ（そしてその人間は、鎮守府で勤務するスタッフに配給される、中途半端に冷めた仕出し弁当を持ってきてくれるんだ。あ、でもこの部屋は病室っぽいからプラスチックの容器に配膳された病院食的なものがプラスチックのお盆に載せられて運ばれて来るんだ。きつとそうだ絶対そうだ）

コンコンツ——

ガララツ——

目の前のスライド式のドアがノックされ、開かれる音を聞きながら、俺は半ば現実逃避とも取れる妄想を以下の形に完結させた。

デスピナ（提督以下、艦娘以外の、鎮守府勤務でいて事情に深く関わらない、何て事無いごく普通の一般職員がお昼ご飯を持って、職務以外に他意は無い事務的な感じでお見舞いに来てくれた筈だッ！）

現実主義者じゃ無かつたんかい。思いつきり妄想に逃げてるじゃねえか。

しかし、いくら俺が念じようが思考だけ現実から逃避しようが、いつその事この休養室には何の用も無い清掃員のおじさんのな人が通り過ぎるだけでありますようにと強く願おうが、結局の所この部屋に——つまりは俺に用がある人物や立場が入れ替わる筈も無く、彼女はドアを開け、当人から見て左手のベッドを見やり、上半身を起こして固

まる俺の姿を認めたのだった。

緊張しまくる時と言うのは、大抵、事情が訪れる直前だと、俺の短くてあまり参考に
ならない人生経験は語っている。

具体的には、高校の入試の際とかである。とか、と言っても、俺の前世は高校生の内
に終わってしまったので、それ以外の事情は経験した事は無いのだが。試験開始のチャ
イムが鳴る寸前まで暗記するのに使った蛍光ペン跡だらけのノートや問題集を眺め、心
臓の鼓動が体全体に伝わったりするあの感覚を、俺は今先ほど久しぶりに経験した。

いや、実際には4日前の6月17日にも、翔鶴さん達と通話する時に、艦装のシステ
ムリンク機能を使って通話リクエストを発信して同じ経験をした事があった。

では通話で同行許可を得て、実際に会って会話した事がある相手であれば、少しはそ
の緊張が和らぐのかと言えば、全くもってそんな事は無い。

翔鶴「お口には、合いますでしょうか？」

デスピナ「ムグムグ……はい、美味しいです」

ちゃんと飲み込んでから返事したからね。

結局、俺が寝ていた休養室にやって来たのは、昨日まで同行させて貰った横須賀鎮守
府所属の機動艦隊旗艦である翔鶴さんだった。

しかも、俺が起きる頃合を見計らい、わざわざ鎮守府の食堂で出されていると言う昼食まで賄って頂いたのだ。

それも会社の仕出し弁当のような安っぽいものではなく、プラスチックの四角いトレーの上に、器ごとに盛り付けられた、定食形式のちゃんとした“食事”である。

陶器の茶碗に程よく盛られた白米に、木製に見える塗装を施したプラスチックの丸い容器（ふた付）に注がれた味噌汁、長方形の浅い皿には焼いた鮭の切り身が一つと千切りキャベツの小山、そして、小皿にはお新香が少々。

翔鶴さんが運んで来た時には、ご飯と鮭の皿にはラップフィルムが掛けてあったが、水滴の付き方から、まず作り立てからさほど時間が経っていない事が分かり、いざフィルムを剥がしてみると僅かに湯気が立ち、熱気が感じられた。

そして今俺は、ベッドのすぐ右の丸椅子に腰掛けた、一度限りの給仕さんを視界の隅に捉えつつ、ベッドの上に天板が来る構造のサイドテーブルで、今まで食べた中で最も美味しい鮭の塩焼き定食を夢中で頬張っている。

元々、前世から好き嫌いは無い嗜好ゆえ、出された膳は全て平らげるつもりではいたが、思い返せば、翔鶴さん達と合流するよりも1日前だか2日前だかに口にした、テキトーに釣った変な魚を雑に焼いたモノ以来のちゃんとした“食事”である。

あの時食中毒にならなくて良かったぜ。

何気に転生して以来始めての他人が作った食事でもある。

”空腹は最高のスパイス”とは誰の格言だったか。

どうでも良い。腹が減った時には何食べても美味しいのは誰もが分かりきっている事だ。もちろん俺にも分かる。

一つ、また一つと器の中身を空にする。

全て平らげるのに、さして時間は掛からなかった。

箸をトレイの手前に揃えて置き、食事を用意して頂いた鎮守府の食堂の方と、俺の所まで持ってきて頂いた翔鶴さんに感謝の意を込めて手を合わせる。

両手でトレイを保持しながら一人で歩いて来た事を鑑みるに、どうやら身体の負傷は完治したようだ。服も真新しい。

おっと、食材への感謝も忘れずに…と。

デスピナ「ご馳走様でした。美味しかったです」

翔鶴「お粗末様でした。”いちばん高いやつ”ではありませんが、良かったです」

デスピナ「…? ああ、アイツの言っていた事は気にしないで下さい。——あつ」

忘れてた! 俺にとってはこの世界で生きていく上でのガイドも兼ねる最も大事なデスピナ妖精達の事すっかり忘れてた!

俺は、空になった食器類が乗ったサイドテーブルを壁際に戻す翔鶴さんに向かい、彼

らの所在を尋ねた。

デスピナ「あの、俺と一緒にいた、副長と砲雷長と……あとクウと航空隊の皆は？」

翔鶴「デスピナさんの艤装の保管場所に、一緒にいますよ」

デスピナ「そうですか……すみません、お手数なのですが、あいつらにも何か、その
——」

翔鶴「はい。あの子達もお腹がすいているみたいでしたから、小さめのおにぎりを、いくつかお渡ししました」

何かテキトーに角砂糖でもやってくれ、と言おうとしたのだが、結構な好待遇で良かった。いや、俺のアイツらに対する扱いが雑なのか。

いずれにせよ、今後は——と言うより最初からだが、デスピナ妖精達は皆俺の指揮下で動く事になるわけだから、アイツらの健康管理もしっかりせねば。

デスピナ（小さめの握り飯か、どんなだろう。大方小さい丸型か三角型のやつを2、3個くらい分けさせているのだろうが、もしかしたら、あいつらのサイズに合わせて少ない米粒で妖精さん用のバクダンオニギリでもわざわざ用意したのだろうか。アイツらめ、感謝して食えよ）

改めて給仕さん、もとい翔鶴さんに向かって頭を下げる。食事を持ってきて頂いてから食べ終わるまでの約10分の間、俺の昨日までの“失態”について謝罪出来ずにい

た。

デスピナ「そうですか……色々と、ご迷惑をお掛けしてしまいました」

翔鶴「いいえ、私達の方こそ、終始デスピナさんに頼りきりになってしまつて、ご無理をさせてしまいました。本当に申し訳ありません」

俺に習うように、翔鶴さんも頭を下げた。

頼りきり、と言っているあたり、一応は俺のお節介——ありがた迷惑とも言う——が役に立っていた事にして貰えているようだ。そのお世辞への感謝も兼ね、重ねて俺は詫び台詞を続けた。

デスピナ「ですが、皆さんを戦場で不用意に呼止め、自身の体調の管理もまともに出来ずに、勝手な無理をしたのは私です。挙句には倒れてしまつて、お手数をお掛けしました。こちらこそ、申し訳ありませんでした」

前世では特に何とも思っていないかった全国のサラリーマンのビジネスマナーや、進路指導担当の先生達のご教授が恋しくなつたのは久しぶりだ。

何とか有り合わせの知識で、出来る限りの謝罪の意を表したつもりだが、生憎、コミュニケーションが人並みかそれ以下だった俺には、場面ごとの喋るとき速さだとか、相手の目を真つ直ぐ見つめるべきか足元に落とすべきかとか、細々とした部分をどうしたら良いのかが全く分からなかつた。

仕方が無いので、視線は翔鶴さんの目から少し下の、口元から鼻のあたりに——意図したわけでは無く、緊張で目を泳がせつつ、出来るだけ明朗に、かつ少しでもこちらの謝罪の気持ち伝わるよう、若干発話の速度を落として、噛んだりつかえたりせぬよう、丁寧に声帯を振るわせた。

もう一度だけ深めに頭と上半身を垂れ、戻す。しかし頭と視線だけは、自分が乗っているベッドの縁から更に手前の手元にまで下げてしまった。向きだけはまだ翔鶴さんの方を向いているものの、一度垂れた角度を戻す事が中々出来ず、視界の左下に軽く握り合わせた自身の拳が映りつづけた。

翔鶴さんも似たような心境なのかは定かではない。少なくとも、俺と彼女の間にはしばし無言の空間が出来ていた。

その静寂は長くは続かず、先に沈黙を解いたのは翔鶴さんの方だった。

翔鶴「……提督が、デスピナさんからお話を伺いたいと言っていました」

久しぶりに彼女の口から聞いた肩書きは、俺の背筋に嫌な感触を奔らせた。

先ほどまで俺が述べていた、先日の失態の始末に関してかと思いきや、続けて発せられた事柄はその更に前の時系列上にあつた。

翔鶴「二つは、^連Earth ^合Defence ^地Force ^球 ^軍Force」と言う組織の事について。もう一つは、

離島棲鬼——本来私達が攻略するはずだった目標に関して、南島島周辺で深海棲艦と交戦した際の状況を、詳しく聞きたい、と」

デスピナ「あ……そうでした」(うへえ……)

すっかり忘れてた。先日、翔鶴さんを通して、提督に面会を要求したのは俺のほうがいいか。

多分戦果報告ついでに、横須賀に到着するまでの間の事も追求される流れな気がする。翔鶴さんは直接口にしてはいないが、前世では呼び出されたついでに別件で説教食らったりした事が何度かあったためか、やっぱり怒られそうな予感がするのだ。

翔鶴「その前に、お風呂で汗をお流し下さい」

そう言われて俺は、自身の頭皮から分泌される皮脂と、先日までの長距離航海によって受けた潮風によるべたつきによって頭髮が重たくなっている事を自覚した。

第18話：事情聴取

翔鶴さんの案内で鎮守府庁舎の中を進む。学ランと帽子と、あと翔鶴さんが持つて来てくれた食器は後で回収するらしい為そのままにしてある。

この建物自体が艦娘達の寮舎では無いか、あるいは出撃等で出払っていたのかは定かでは無いが、数歩前を歩く翔鶴さん以外に艦娘、どころか人らしき者は見当たらなかった。

一度、建物の一階部分を出た。

屋外通路を歩いていていた際、歩きながら一瞬振り返って建物の外壁を見た。

内部の床や壁が現代のオフイスや病院などに良く見られるような見た目をしていて、事から、始めはコンクリート造りの構造物を想像していた。しかし実際に外から眺めた様子は、前世で見たアニメ版艦これに登場したような、いわゆる”赤煉瓦”の鎮守府を彷彿とさせるそれだった。

梅雨の薄灰色の曇り空に、深い赤色のコントラストが良く映えている。

視線を前に戻すと、遠目に駆逐艦達を見つけた。先日横須賀に到着する直前に神通さんが言っていた、哨戒に出ている駆逐隊だろうか。艤装をまだ身につけていたが、ここ

からでも見える海から陸側に喋りながら歩いてきた。恐らく任務を完了したのだらう。少し眺めていたが、すぐに別の、先ほど出た建物よりも二回りくらい大きな庁舎に入ったため姿は見えなくなった。

入ってすぐ、気になった事を尋ねてみる。

デスピナ「あの、すみません、少しお訊きしてもよろしいですか？」

翔鶴「はい、何でもしようか」

俺からの問いに翔鶴さんは振り返りつつ、俺の右前あたりまで歩く速度を落としたり。

デスピナ「今鎮守府には、何隻ほど艦娘が所属しているのでしょうか？」

翔鶴「一部の艦種は、任務によつては異動することが良くありますので、正確な数は分かりませんが……ここ横須賀には、今は少なくとも戦艦が5隻、空母が私と軽空母を入れて6隻、工作艦が1隻、重巡洋艦が4隻、軽巡洋艦が3隻、駆逐艦が……確か、今は20隻程だと思います」

デスピナ「そうですか……他の鎮守府も、それくらいで？」

翔鶴「はい。基本的には、鎮守府ごとの管轄海域を考慮して配置されます。半数以上は、海外の港や泊地に派遣されて、現地に出現する深海棲艦の撃退と、それらの拠点の攻略に先立って前哨任務にあたります。……と言つても——」

彼女の声色が、心なしか弱く感じられた。

翔鶴「今は殆どの艦娘が、国内に引き上げている状況なんですけどね……」
デスピナ「……そうでしたか」

なるほど、どうやら戦局は、あまり芳しく無いのかもしれない。

この世界が本当に、前世で俺を始めとした全国の提督諸氏が遊んでいた通りの艦これが現実となった世界なら、やはり大破撤退か、それに近い事はしているのだろうか？

仮に行っているとして、果たして現実の深海棲艦がそんな“攻略法”で海域を明け渡してくれるか、と言う疑問が出てくるが、もし俺が——存在するのは兎も角——深海側の提督だとしたら、せっかく勢力下に入れた海域を簡単には手放さないだろう。

堅牢に防備を固め、布陣を整え、さらに近くの敵拠点からの攻撃による被害を抑え、襲撃してくる艦娘を退けた上で追撃、殲滅に掛かるのが、実際の戦闘と言うものだ……多分。

この世界における深海棲艦は、前世で俺が裕一として遊んでいたゲームの中に登場する一枚絵キャラクターでは無く、実在する脅威だ。

“全体の半数を海外派遣している筈の艦娘が国内に引き上げている”と言う事は、少なくとも「派遣先で艦娘の建造に成功したから日本の支援は不要になりました」とかの理由ではないだろう。現代の国際協調の世の中では早々ありえない話だ……と思う。

デスピナ（いや、こつちの世界の歴史も深海棲艦が現れた時期や経緯も俺には全く分

からないんだけどさ……)

なんかこう、癖なのよね、いちいち余計な事考えて思考の尺とか容量使っちゃうの。あんまり考え事に耽ったところで頭のフケが取れる訳でもないの、黙って翔鶴さんの案内に着いて行く事にした。

翔鶴「こちらです」

あ、もう着いたのね。格子状の木枠に梨地のガラス板が貼り付けられた引き戸、戸枠にはいかにもと言わんばかりに、突っ張り棒で青い暖簾が提げられ、”入浴場”の木札が戸枠の右側に取り付けられている、九分九厘男湯。反対側には赤い暖簾の梨地のガラス戸、十中八九女湯。

翔鶴「お着替えはすぐにお持ちしますので、脱いだ服は脱衣籠の中に入れておいてください」

デスピナ「あ、はい、分かりました。では、失礼します」

翔鶴「はい。しばらくしましたら、声をお掛けしますので、ごゆっくり」

そう言つて、翔鶴さんは丁寧に頭を下げた。彼女、旅館の仲居さんとかめつちや適正ありそうだ。

……でもないか？ なんせ客人をはじめから風呂に入れるつもりだったなら、着替えを持たせるか事前に準備しておくのが普通だろうし。案外抜けてるのかも。かわ

いい。

しかし同時に、自分の脱いだ衣服が、艦娘——高確率で翔鶴さん——に回収されて洗濯場に持っていくなり廃棄なりされる事が少し気恥ずかしくなり、そそくさと引き戸を開けて脱衣所に入った。

”風呂は心の洗濯”とは本当だな全く。頭髮の重つ苦しさが無くなってサツパリした。ついでに前世も恋しくなりはじめた。

洗い場で古くなった皮脂と雑念を落としたり、準備良く沸かされていた広めの湯船に浸かって汗と疲れを流したりしながら、おおよそ20分間、転生して最初の入浴を楽しんだ。

さて、備え付けのバスタオルで体を拭きつつ脱衣所に戻ってみると、確かに服が綺麗な物に交換されている。男物の下着上下と白のワイシャツ、そして黒のスラックスが、畳まれた状態で先ほど脱いだ服を入れた脱衣籠に入れられていた。いずれも、俺が転生した時に着ていたものと同じようなデザインである。俺が気絶している間に急いで調達したのだろうか。

まさか翔鶴さん、交換に脱衣所まで入った時に俺の入浴シーン覗いたり……してるわけなかった。だって何となく見てた入り口は1ミリも動いてなかったし。

下着だけ身につけ、脱衣所備え付けの洗面台の前に立ち、鏡を正面から見ろ。

デスピナ（……うむ、あまり変わって無さそうだ）

入浴時にも鏡を見て思った。とは言えどうにもこの世界の俺は、前世で裕一として過ごしていた頃の身体と比べて、若干の面影を残しつつもいくらか変化しているようだ。た。

顔つきは前世で当時17歳だった頃よりも年を重ねた、有り体な言い方をすればいくらか大人びたような、良い言い方をすれば男らしくなっている。具体的には数年分成長しているようだ。

で、脱衣時や体洗ってる時に一番驚いたのが、随分肉体が鍛え上げられていた事である。あんな大きいデスピナ艤装を扱う都合上当然なのだろうが、これはちよつと嬉しいかも。前世では運動不足きみだったし。

デスピナ（じゃねえよ早く着替えないと）

ワイシャツとストラックスを着用し……。あれ、そう言えば風呂上がった後どうすれば良いのか聞いてなかった。

仕方ないので、廊下に出る出入口の梨地ガラス戸から気配を伺う。ピング、脱衣所と

通路を隔てる引き戸の横に、白い着物と赤いスカートの銀髪女性のシルエットが見えた。

靴を履き——これも、新品の綺麗なスニーカーに交換されていた——、戸を引いて声を掛ける。

デスピナ「すみません、お待たせしてしまつて」

翔鶴「いえ、ほんの少し前に来たところですから」

デスピナ「そうでしたか」

デートの待ち合わせじゃ無いんだから……。本当にデートだったら良かったのに。

いや、待てよ？ 今後横須賀鎮守府で過ごすようになればワンチャンあるよな？

おらワクワクしてきたぞ。

この後提督と対面すると言うのに緊張感の無い事を考えながら、再び翔鶴さんに案内される形で庁舎の中を歩いた。

途中で階段を上がって、二階の廊下を少し歩く。

ドアの前を通りかかるたびにここかここかと考えながら、頭の中で前世で進路指導担当教諭から教わった入室時のマナーを復習する。

何度か思い出している内に、鎮守府内の構造を覚え損ねてしまった。

仕方ないので、生まれたばかりのカルガモの雛のように翔鶴さんに着いていくしかない。

まだ配属させて貰えるかは分からないが、航空機で空を相手取る艦種の後輩と言える立場の俺からして見れば、本当に彼女らは親鳥のような存在と言えそうだ。

やがてやや大きく、今まで通り過ぎてきたそれよりも暗い色で塗られた二枚扉の前で翔鶴さんは止まり、

「こちらが提督の執務室になります」と説明し、そのまま三回ドアをノックした。

部屋の中から「誰だ？」と男性の声が聞こえた。十中八九提督だろう。もし女性だったら若干気が楽だったかも知れない。

翔鶴「翔鶴です。デスピナさんをお連れしました」

「入ってくれ」

翔鶴さんがドアを開け「失礼します」と一言いれてから入室し、ドアノブを持って俺の入室を促した。

デスピナ「失礼します」

俺も彼女に習って一言ことわりを入れ、会釈を挟んでから入室する。

俺と翔鶴さんの姿を確認すると、入り口正面に据え置かれた木製の執務机から、白い半袖の制服を着用した男が被っている帽子の位置を軽く整えつつ立ち上がる。

瑞鶴「あ、翔鶴姉え…と、デスピナさんも一緒ね」

デスピナ「どうも」

「わたしも居ますよー」

デスピナ「あれ、副長」

副長「すっかり体調はよくなったみたいですね」

デスピナ「ん……」

こちらはこちらで情報交換でもしていたのか、瑞鶴と副長妖精が既に執務室にいた。改めて、目の前で軽く咳払いをした提督を正面から見、挨拶してからもう一度お辞儀をする。

デスピナ「お初にお目にかかります。自分は、連合地球海軍日本支部、太平洋方面群隷下、デスピナ級要塞航空母艦一番艦、デスピナと申します。本日はお時間を頂き、ありがとうございます」

やはり、目下の自分から自己紹介するのが妥当だろう。

提督「日本国防海軍、洋上機動隊横須賀方面隊司令兼、同隊横須賀基地司令、中村京介一等海佐だ。艦娘の皆からは、”提督”と呼ばれているよ。ここ横須賀で艦娘達の指揮を取っている者だ」

30代半ば程の、青年と言うにはやや難しく、中年かと言われればそこまで歳くつて

いるわけでも無い様に見えるのは、半袖から露出しているやや引き締まった腕と、更に上部の、白い制服の肩部分に位置している黒基調の階級章の存在ゆえだろうか。

さて、入室したらどうしたら良いんだったか、前世で通っていた高校の進路指導担当教師に教わった面接指導が果たして軍隊で役に立つのかどうか軽く悩んでいると、提督の方から声が掛かった。

中村「翔鶴達から話は聞いているよ。何でも、危なかった所で敵を排除して、撤退を助けてくれたとか。お陰で、出撃していた艦隊は全員無事に帰投出来た。彼女らの指揮を執る者として礼を言いたい」

デスピナ「いえ、ご無事でしたら何よりです」

翔鶴「私も、艦隊を率いていた当事者として、改めてお礼申し上げます」

瑞鶴「本当、あの時は命を拾ったわ。ありがとう、デスピナさん」

デスピナ「あ……どういたしまして」

中村提督の後に続き、俺の隣に立っている翔鶴、提督の傍らで副長と戯れていた瑞鶴からも謝辞が続いた。純粋に複数人から感謝される状況と適当な返しが出来ない事へのもどかしさが、何だかこそばゆい。

どういたしましたして、で一応良かっただろうか。人助けした後言われるお礼に対する返事のボキャブラリーが見つからず、曖昧に返事しては軽くお辞儀するだけになってし

まった。

副長「良かったですね、デスピナさん♪」

デスピナ「副長も、サポートお疲れ様」

副長「ええ。わたしもがんばった甲斐がありました」エツヘン

ありがとう副長。俺の方こそそのドヤ顔のお陰でいくらか気分が落ち着いたよ。

後でライちゃんクウちゃんこと砲雷長と航空参謀にも伝えておかねば。疲労でぶつ倒れたお陰で、あいつらに対する労いがまだ出来ていない。

中村「さて、客人を立ち放しにさせる訳にも行くまい。そこに掛けくれ」

そう言つて、執務室入り口から向かつて左側にある、テーブルを挟んで向かい合つて
いる二つのソファを指し、座るよう促した。

失礼します、と一言断りを入れ下座のソファに腰を下ろす。提督も上座側のソファ
に、何枚かの書類を持つて移動し腰掛けた。

翔鶴さんは執務室備え付けの設備で茶の準備をしているようだった。

一方瑞鶴は、入り口から見て右側の資料棚の所で副長と小声で話を続けている。

中村「君の艦装妖精：副長だったね、彼女から、艦装の使用履歴を見させてもらつたよ。一応、ここに辿り着くまでの経緯は粗方把握しているが、念のため、君の口からも話を聞いておきたい」

南鳥島での一件は特に、と付け加えた。

中村「覚えている限りで構わない。こちらの所属する艦娘達に合流するまでにあつた事と、君が行つた事を話して欲しい。良いかな？」

デスピナ「はい……、まず私は、気がついた時には大体、ハワイから何百キロか西の海域にいました。日時は確か、単純に計算して6月13日だったと思います。その日から4日程西に向かつて日本を目指しました。17日の午前11時頃には、南鳥島から東南東500km沖の海域に辿り着きました。その時に——」

ここまで話して俺は、何百キロも離れた所から、南鳥島に巢食つていた離島棲鬼と北西に向かう深海棲艦達を観測出来た理由が、簡単に説明出来る代物ではない事を思い出した。

しかし、既に艦装を使った操作履歴は全て提督に見られてしまっているらしいため、衛星画像で状況を確認した事は隠しようが無い。

ここはノートウングを攻撃衛星ではなく、単に“衛星”として誤魔化しにかかつてみる。

デスピナ「——その時に、自分の正確な位置を把握するため、衛星から画像を受信して南鳥島周辺の様子を確認したところ、島に築かれた離島要塞と、北西に向かう深海棲艦多数を発見しました」

中村「君がうちの艦隊が戦闘している最中に南鳥島に居合わせたのは、偶然と言う事かな？」

デスピナ「そうです」

中村「ふむ」

手元の薄い書類の束を一枚捲り、また問いかける。

中村「君が確か、こちらに来ようとしていた事は聞いている。それなら、多少時間が掛かってでも南鳥島を安全に迂回する事も出来たと思うんだが、何故介入したんだい？」

デスピナ「急いでいる訳でもありませんでしたが、出来るだけ早く横須賀には着きたかったの、南鳥島の近くを通って直線的に目指そうと思いましたが。離島棲鬼から飛び立った敵機の進路と、先に展開していた深海棲艦達の位置から味方が接近していると判断して、その時なら島の防御も手薄でしょうから、自分が保有する戦力で離島棲鬼に打撃を与えれば安全に通過出来ると考え、攻撃しました」

中村「なるほど。攻撃タイミングとしてはベストだったと言う訳か……」

俺に対する質問なのか、それともただの独り言なのか判断がつかず黙っていると、再び中村提督が口を開いた。

中村「次の質問に移ろう。翔鶴たちには、”EDF”や、”連合地球軍”所属と名乗っ

たそうだが、日本どころか、世界中どの国、いつの時代にも、そのような軍隊や名前に該当するような軍事組織は見つからなかった。どのような軍隊なのか教えて欲しい」
やっぱり、ものすごく疑われている。

が、俺が着用していた艦装各部には、俺が前世でEDF4シリーズを遊んだ事のある者にしか分からない名前やデザインが散見されていたのも事実。

仕方が無いので、前世のEDF3から4.1で設定されていた世界観を思い出し、その通りに説明する。

デスピナ「2015年に、攻撃的な地球外文明との接触到に備えて設立された世界規模の軍隊です。北米に総司令部を、世界各国に支部を設置した国際的な軍事組織として機能しています」

中村「地球外文明と？ 宇宙戦争に備えていたのか？」

デスピナ「はい。実際に、2017年から18年まで、地球に降下してきた異星文明の侵略兵器たちと交戦しています」

中村「2017年……」

提督は少しだけ目線を俺から外し、西暦を反芻しているように見えた。

中村「君、”要塞空母デスピナ”も、その軍隊の所属なんだね？」

デスピナ「はい、日本支部に所属していました。と言っても、2017年の戦いの時

点ではまだ自分はいなかったもので、実戦経験はありません」

中村「進水日はいつだい？」

デスピナ「正確には分かりません。船体が大きすぎるので、通常のドックでは建造出来ないのです」

中村「戦いが起こった時は、建造途中だったのか？」

デスピナ「はつきりとした記憶はありませんが、おそらく。ただ知識として知っている程度です」

中村「そうか……EDFには、艦娘は所属しているのかな？」

デスピナ「いえ、艦娘やそれに該当する人は一人も居ません。自分も、一隻の超大型艦船として建造されました」

中村「ふむ……」

取り敢えず一通り、前世で遊んだEDFシリーズの設定と夢の中で大妖精から聞いた情報をまとめて、話せる事は話したと思う。

中村「質問を変えよう。君が元居た場所について、何か覚えている事はあるかい？」

非現実的な事に対して人は自然と疑り深くなる事を差し引けば、この提督は中々柔軟な質問をしてくれた。俺としてはむしろ、お陰で話すべき事が整理出来てありがたい。

デスピナ「いえそれが、ここに来る前、ハワイ近くの海域で気が付いた時より前の記

憶があまり無いのです」

中村「所属していた組織についての知識はあるのに？」

デスピナ「はい。自分がどのような目的で作られ、所属する組織の事も知ってはいるのですが、何故あの海域にいたのか、何故人間のような身体を持っているのか、全く分からないうです」

流石に記憶喪失を装うには無理がある説明な気がしてきたが、中村提督はもう一度、ただ一言「そうか……」と返しただけだった。

提督は手に持っていた書類の何枚目かを束に戻し、ソファに座った自身の膝ほどの高さもない机に置いた。

提督がそのまま背もたれへ倒れきる前に、お茶汲みを終えた翔鶴さんが湯飲みを二つ、盆に載せて運んできた。

翔鶴「お茶が入りました」

中村「ああ、ありがとうございます」

翔鶴「デスピナさんも。緑茶でよろしかったですか？」

デスピナ「はい、大丈夫です。頂きます」

低めのテーブルに置かれた湯呑みをどちらからともなく取り、淹れたての熱い茶を一口啜る。

そろそろ、俺が初めに当鎮守府の提督に要求した事について切り出す頃合か。湯呑みをテーブルに置いて姿勢を正してから改めて口を開く。

デスピナ「あの、中村一佐」

中村「何かな？」

デスピナ「自分は今、実質どこの組織にも所属していません。もちろんEDFの所属ではありませんが、少なくとも自分の知っているEDFが無いようですので行く当てもありません。なので改めてお願い申し上げたいのですが、当面の間、自分と、自分が見に着けていた艦装の妖精達をここ横須賀に置いては頂けないでしょうか」

中村「それが、君がウチを目指していた理由？」

デスピナ「はい」

中村「今後は兎も角、君が装着していた艦装に関してまだ訊いておきたい事がいくらかあるから、しばらくは此処で過ごして貰う事になると思うよ。その後の事は、洋機隊に属してもらう事も含めて、色々検討するつもりだ」

デスピナ「ご厚意、感謝致します」

良し、これで俺のひとまずの目的は果たした。

長かったあ……。